14.5-799
1200501218686
14.5
799

世界年鑑
1941

始

世界年鑑

1941

14.5-799
1200501218686
14.5
799

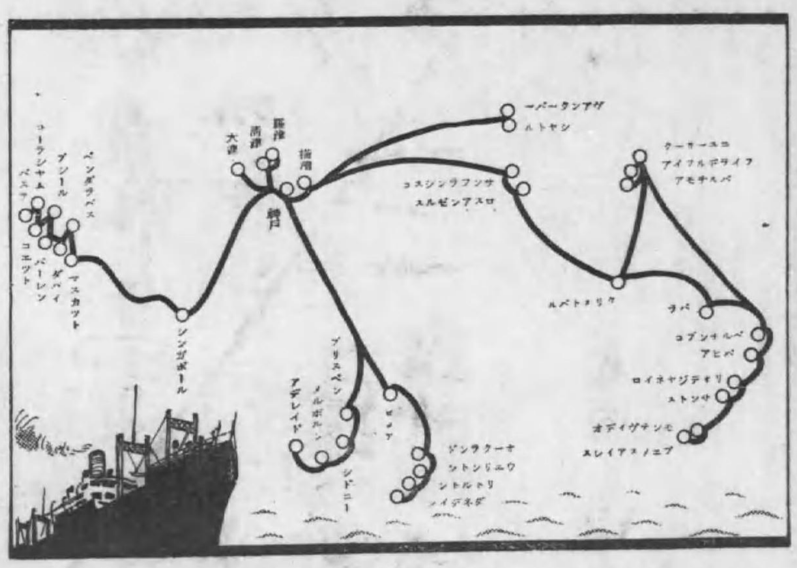
資本金　壹億七百貳拾萬圓

株式會社

三和銀行

大阪市東區今橋三丁目

頭取　中根貞彦

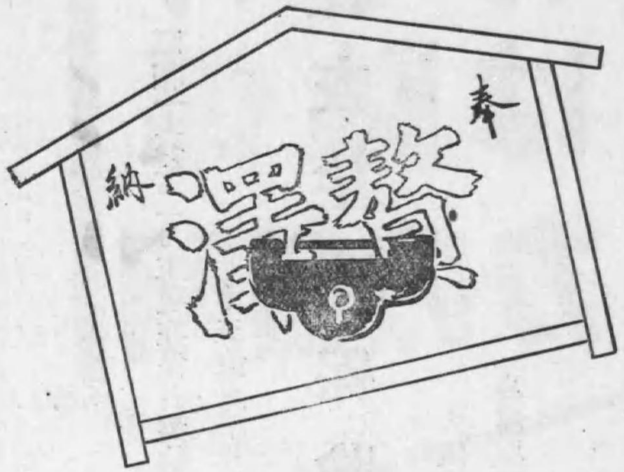


本店　神戸市神戸區榮町通三丁目

支店出張所　東京　九州　大倫敦　紐育　横濱　若松　青島　シドニー　ブエノスアイレス　名古屋　八幡　海蘭　上海　新西　大阪　小樽　馬尼刺　シヤトル

山下汽船株式會社

てめ止はくたいぜ
うせまし蓄貯



住友銀行
本店大阪北浜五丁目

のふけ
は険保
力の日明

帝國生命

本社・東京丸ノ内◇全國樞要都市ニ五十六ノ支店支部ヲリ

住友生命保險株式會社

昭和十六年二月末現在保有契約高
十五億五千八百餘萬圓

大阪市東區北濱五丁目二十二番地
專務取締役　松井考長

住友化學工業株式會社

製品種目
硫酸、硝酸、アルミナ、氷晶石
其他工業藥品
各種肥料

本店　大阪市東區北濱五丁目
製造所　愛媛縣新居濱海岸

伸銅品　輕合金
製鋼品　鋼　管

住友金屬工業株式會社

大阪市此花區島屋町三七番地

（賑賣店）東京、札幌、仙臺、横須賀、名古屋
神戸、吳、福岡、京城、上海
（出張所）佐世保、長崎、舞鶴

資本金　一億圓

總　裁　佐々木駒之助
副總裁　池邊　龍一

東洋拓殖株式會社

本　社　東京市麴町區內幸町一ノ二

資本金　五千萬圓

日本海電氣株式會社

社長　山田昌作

本社　富山市櫻橋通り一番地

資本金　五千萬圓

日本高周波重工業株式會社

取締役社長　有賀光豊
専務取締役　高橋省三

本社　京城府黃金町
支社　東京市麹町區内幸町
工場　城津・富山・北品川

松下電器産業株式會社

大阪府北河内郡門眞町

—主要製品—

電氣盤・配電盤・分電盤・電動機・工作機械
金屬加工品・無線通信機・擴聲裝置・ラジオ受信機
及ビ部分品・合成樹脂原料及ビ製品・電氣配線器具
コンヂットチューブ・乾　電　池・金屬マンガン
空氣電池・携行電燈・炭素電極・蓄電池・各種電球

松下電氣工業株式會社
松下金屬株式會社
松下無線株式會社
松下電器株式會社
松下乾電池株式會社
ナショナル蓄電池株式會社

ナショナル電球株式會社
松下鑛業株式會社
松下電器貿易株式會社
松下電器商事株式會社
滿洲松下電器株式會社
上海松下電業株式會社

不二越工材工業株式會社

本社　富山市石金二〇

日本窒素肥料株式會社

社長　野口　遵

本社　大阪市北區宗是町一

東京海上火災保險株式會社

創業　明治十二年八月

資本金　七千五百萬圓

諸準備金　壹億壹千貳百萬圓

東京市麹町區丸ノ内一丁目六番地一

支店　大阪・神戸・横濱・名古屋・福岡・新京

營業種目

海上運送火災森林盜難傷害航空風水害自動車損害

明治鑛業株式會社

社長　松本幹一郎

本社　東京市京橋區銀座西七丁目五番地十五

日本水産株式會社

營業課目

汽船トロール漁業　母船式蟹漁業
機船底曳網漁業　製氷・冷凍業
母船式鯨漁業　水産物販賣業
汽船捕鯨業　其他

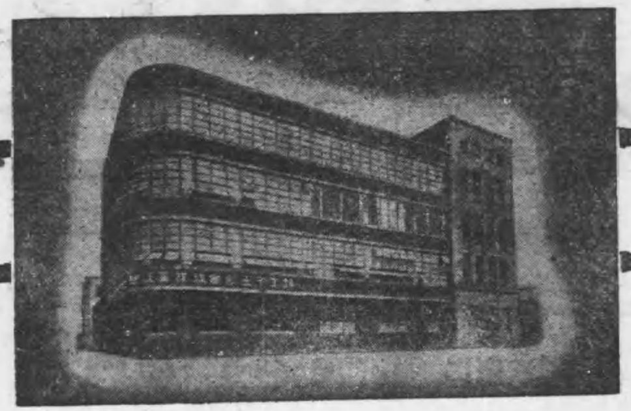
資本金　九千三百萬圓

本社　東京市芝區田村町一丁目二番地(日産館)

電話　銀座(57)
七一一(九四六)
七一一(六四六)
七一一(九四六)
六一一(六四〇)
六一一(六四〇)
六一一(六四〇)

支店　京城・新京
營業所　東京・大阪・戸畑・函館・基隆・北京・上海
其他　出張所・販賣所・工場・事業場三百三十餘ヶ所

理研化學工業株式會社



主要業品目

理研陽畫感光紙　理研青寫眞感光紙
圖鋲印完全透寫紙　國產・舶來製圖用紙
青寫眞燒付機械器具　理研錄音機・錄音盤
各種優秀寫眞機　高級リレー竹計算尺

本社　東京市京橋區銀座八丁目　電話・銀座(57)代表5686
支店　横濱・名古屋・大阪・福岡・大連・新京

男性ホルモン

エナルモン

エナルモンは純正强力男性ホルモン製劑にして、血色素數、赤血球を增加し、新陳代謝をたかめ衰弱せる諸臟器を賦活して男性ホルモン不足による諸症狀を輕快ならしめ、以て精神的・肉體的活動を活潑ならしむ。

【用　量】一回一―三錠　一日三回　服用す。

二〇錠　五〇錠
一〇〇錠　外に注射液あり

適應症

青・壯年期　神經衰弱、心身の過勞・病後の心身恢復促進。
初老期　頭痛、倦怠感、能率低下、記憶力減退、食慾減退。
高齡期　睡眠障碍、腰痛、肩凝、肢端知覺異常等

一手販賣元　株式會社　武田長兵衛商店　大阪
製造發賣元　株式會社　帝國社藥器研究所　福川
關東代理店　株式會社　小西新兵衛商店　東京

三共 SANKYO の純良薬品

疲勞恢復に オリザニン
鈴木梅太郎博士發見の强力ビタミンB劑
（末・錠・液・エキス・注射液）

食慾不振
消化不良に タカヂアスターゼ
——澱粉以外も完全消化——
（30錠・100錠・200錠）

腸疾患に ラクトスターゼ
乳酸菌酵素と發育促進性ビタミン
を含む整腸劑
（錠劑）50錠（粉末）30瓦

高血壓に ノルマトン
副作用なく効力持續的
（末）25瓦（錠）30錠（外に注射液あり

强力男性ホルモン ゲネルモン・エム
男性生殖腺中の總有效成分を含有す
（錠劑）20錠（外に注射液あり）

强力女性ホルモン
オバストロン
（注射液）

東京・日本橋・室町
三共株式會社

西園寺公一編

世界年鑑

日本國際問題調査會

14.5
799

第三年版序

支那事變のさなかに創刊せる「世界年鑑」が、今や世界未曾有の動亂期にその第三年版の上梓を見るに至つたことは、調査會一同の顧みて欣快且つ感慨に耐へざるところである。

今日の如き歴史の激動裡にあつては、よく世界を識り、己れを知つて、時勢の止むべからざる動向を把握して惑はざるもののみが、凄絶なる人類の闘争に打克ち得るのである。殊にわが日本民族の肩にかけられたる東亞新秩序建設の使命に鑑みるも、われらが現に戦争の渦中にあればあるだけに、將來の世界設計に關する眞摯なる努力研鑽の要いよいよ大なるものがある。「世界年鑑」第三年版はその意味において普く最近の資料と科學的方法により、變轉極まりなき世界情勢と、列强現實の分析綜合に努め、もつて讀者諸賢が祖國の新しき進路開拓に寄與せらるゝのよすがたらむことを期せるものである。

たゞ、われらの微力、未だその意圖を果すに充分ならざるものがあり、その點本書の不備については今後、一段と大方の叱正教示に俟つもの多きを痛感する。希くば、諸賢の敢てその勞を惜まれざらむことを。なほ、編纂校正等に際し、御教導御助力を賜つた諸先輩、友人諸氏にたいし、改めて衷心の感謝を表する次第である。

昭和十六年七月

日本國際問題調査會

西園寺公一

推薦の辭

公爵　近衛文麿

わが友人西園寺公一君の主宰する日本國際問題調査會が、先に「世界年鑑」を創刊し、こゝにその第三年版を世に問ふに至つたことは、余の衷心欣快に堪へぬところである。

今や、世界の情勢は歴史未曾有の變革期に際會せることを示し、この間に處して、わが日本民族がその光榮ある傳統と使命とを不朽に擁護顯現せんが爲には、何よりも國民が偏狹固陋の風を一掃して、廣く世界の現實を的確に把握するの明がなければならぬ。

殊に今日の日本は困難なる支那事變完遂の過程を通じて、東亞に新秩序を創造建設せんとしつゝあるのであつて、かゝる大業は雄渾なる民族の叡智を俟つて初めて成就せられるのである。世界を究めるの途は、卽ち東亞を究め、日本自らを究めるの途と言ふべきであらう。

その意味において、本書の如く多數專門家の眞摯なる協力に成る、秀れたる世界現勢の鳥瞰圖は、國民の眼光をして歴史の新しき動向に展かしめ、その一人一人をして、進取敢爲な國運の開拓者たらしむる好個の資料と信ずる。

余はかゝる國家的事業が、今後廣く江湖の支持を得て、その貴重なる使命を果すに遺憾なからむことを切に希望してやまぬ者である。これ重ねて本書を推薦する所以である。

昭和十六年七月

日本銀行總裁　結城豐太郎

我々は今や擧國一致東亞興隆の大業完成へと邁進してゐる。然るに歐洲の最近の情勢は全體主義國家の急速なる進展と之に對する民主々義國家の種々なる對應策とを遶つて、風雲日に急なるが如く見受けられ、全世界が一時に動搖して居る觀があり、眞に史上未曾有の時局に直面してゐると謂ふべきであらう。

斯かる重大なる時局に當り、正確なる國際知識を把握し、刻々變化する世界情勢の現狀を判斷して將來の見透しをつけることの實に緊要なることは言ふまでもないところであるが、從來我國に於ては此の方面の手引となる良書が乏しかつた。偶〻西園寺公一君はその天禀の才能と不斷の努力とに依り克く多數の人々の協力を得て、『世界年鑑』の發行を企圖し、茲にその刊行を見るに到つた。洵に時宜を得た企てといふべく、その內容は以て社會各方面に活躍する人士の要望を充分滿すことを得るものと確信する。君が多年の精勵により、遂に東洋に於ては他に比類なき此の事業を完成せられたことは、眞に敬服に値すると共に、國家のために慶びに堪へぬ次第である。

敢て本書を江湖に推奬する所以である。

昭和十六年七月

凡　例

一、世界年鑑第三年度版は、ヨーロッパの戰爭を中心とする世界情勢激變の最中に出版される。かゝる急激な變動過程に對して、何等かの全體的概念を得ようとするためには、從來の形式を一變して、專ら第二次大戰を契機とする世界の再編成過程に、重點が置かれなければならなかつた。このため從來本年鑑の主要部分をなしてゐた世界各國の個別的記述は、第二部「各國情勢」の中に壓縮せられ、新たに第一部「世界新秩序の展望」が加へられた。

一、第一部は、總論ならびに東亞、ドイツ、イタリア、イギリス、フランス、ソヴェート、アメリカの各ブロックにわかれる。世界新秩序の成生は、具體的にはこれら列强勢力圏の擴大と分解といふ形態のもとに行はれるものであらう。故にこゝでは世界經濟恐慌以來のブロック經濟の傾向に出發し、再軍備期を經て、最後の世界再編成の決定的段階たる、第二次大戰に至るまでの政治的、經濟的諸經過が檢討されてゐる。こゝに云ふブロックなる言葉は、政治的、經濟的勢力圏と同じ意味において使用せられてゐるもので、一つの强國を中心とする植民地、屬領のほかに支配的經濟市場、政治的權益地帶等の地域がこれに加へられてゐる。

一、わが國を中心とする東亞ブロックは、これを哲學的、社會學的、政治學的、經濟學的見地から見ようとすれば、幾つかの理論が成立つであらう。それは、東亞ブロック論、東亞協同體論、東亞新秩序論等々の文獻が、汗牛充棟もたゞならざることによつて、自明である。しかし、こゝでは、さうした根本的な理論的問題は、取扱はれてゐない。また、同樣に、東亞ブロックのブロックなる語が果して適切であるか否かについては、諸種の意見も存在するであらうが、こゝでは、さうした字義的なる論議は別として、あるひは、東亞新秩序といひ、あるひは大東亞共榮圏といふのと、同樣の意味において、ブロックなる語を使用してゐる。けだし、ブロックが一應結合體を意味するとすれば、新秩序ないし共榮圏は、それ

に内容的な意味を與へたるものであり、前者をもつて、後二者に代位せしめることは、必ずしも、不當ではないとも思はれるので、さうした點に鑑み、他地域におけるブロックと關聯對照させる便宜上、この語を用ひたのである。なほ、本論の内容は、ほんの素材の提供に終始してゐる。本當の東亞ブロック論は、むろん、さうした點に止まらず、進んでかゝる素材を體系的に、組み立てなければならないことといふまでもないが、こゝでは、そこまで立ちいたつてゐない。

一、各ブロックの内容は、さらに次のやうにわかれる。

第一章　概觀（ブロックの特殊性格、自然的構成等）

第二章　政治的構成

（一）ブロック成立の過程

（二）政治的諸關係

（三）民族的諸關係

第三章　經濟的構成

（一）經濟的構成の特殊性

（二）資　源

（三）生　産

（四）貿　易

（五）資　本

（六）交通運輸

第四章　戰時經濟の動向

第五章　文化的構成

（一）概　觀

（二）宗　教

（三）言　語

（四）通　信

（五）新　聞

以上のごとき項目は、勿論ブロックの特殊的事情によつて、全部劃一的に統一されてゐるのではなくて、常に例外を有するものであるが、内容の配列は大體においてこの基本的項目によつてゐるものである。

一、第二部は日本、アジア、アフリカ、オセアニア、アメリカ、ヨーロッパの六篇からなり、各篇に包括されてゐる國々は

世界の主要國總計五五ケ國である。そして前年版に見られたやうな歴史、元首、政治、經濟、社會、文化、自然の七項目は、專ら中心的重要性を有する政治と經濟の二項目に壓縮せられ、これら兩項目の内容も、主として第二次大戰を中心とする歴史的經過に重點が置かれた。それ故、各國の制度文物に關する詳細な説明は、前年版を參照して頂きたい。

一、各國の内容は、次のごとくわかれる。

I　政　治

A　總　論

B　内　閣

C　議　會

D　政　黨

E　外　交

F　軍　備

II　經　濟

A　總　論

B　財　政

C　貨　幣

D　外國爲替

E　金　融

F　資　本

G　生　産

H　物　價

I　外國貿易

J　國際收支

K　交通運輸

L　産業勞働

一、以上のごとき構成の變化は、われ〳〵にとつて全く新らしい試みであり、このため多くの缺陷を有するかも知れないが、次の二點において、少くとも從來の水準を突破してゐるつもりである。——(一)世界政治に對する總括的結論の導入。すなはち從來の平面的、羅列的記述より一歩進んで基本的問題の分析が行はれてゐる。(二)新らしき資料の充實。——しかしながら、われ〳〵は單に新たな出發點に立つてゐるのみであつて、多くのことが將來に期待されなければならな

い。

このほか、本年度より地圖ならびにグラフによる説明が附加された。かゝる説明は百數十葉にも達するもので、本調査會專用の白地圖が初めて利用された。これに關しては、前年に引續き東大理學部地理學教室村田貞藏氏の御教示に負ふところが多いのであつて、深く感謝する次第である。第二次大戰に關する地圖は主として Horrabin's Atlas-History of the Second Great War, Vol. I., Vol. II. 及びThe New York Timesによるものである。その他第一部の地圖は The Atlas of To-day and To-morrow (Alexander Radò), An Atlas of World Review (Clifford H. MacFadden) に負ふところが多く、またわれ〳〵の作製したものが可なりの數に上つてゐる。第二部の各國地圖は Taschen Atlas der Ganzen Welt, 1940., Philip's Handy Atlas of the World, 1937. を基礎とし、ヨーロッパ國境の變化については最新の Grosser Volksatlas, 1941. が參照せられてゐる。

各國ならびに各ブロックの終に參考文獻として掲げられてゐるもののうちには、現在入手し得ざるものも、單に紹介の意味で加へられてゐる文獻が若干擧げられてゐる。その他、全般的統計、資料等は、引用個所には註を附して書名あるひは略記號をもつて指摘してあるが、最後の參考文獻中には加へられてない。これらのうち、主要なるものは次のごとくである。

略記號	書名
A.	The Annalist.
A.I.	Annuaire Interparlementaire.
A.G.	Almanach de Gotha.
A.R.	Annual Register.
A.Y.B.	Armaments Year Book (L.N.)
B.I.N.	The Bulletin of International News (R.I.I.A.)
B.P.	Balance of Payments (L.N.)
C.C.B.	Commercial and Central Banks (L.N.)
C.E.I.	Chronologie Economique Internationale.
D.I.A.	Documents of International Affairs (R.I.I.A.)
E.	The Economist (London)
E.R.F.C.	Economic Review of Foreign Countries (U S.A.)
F.P.R.	Foreign Policy Reports (F.P.A.)
F.Z.	Frankfurter Zeitung.
H.C.E.E.	Handbook of Central & East Europe.
I.J.S.	Internationales Jahrbuch der Sozialpolitik.
I.L.O.Y.B.	International Labour Office Year-Book (I. L.O.)
I.L.R.	International Labour Review (I.L.O.)
I.T.C.R.M.	International Trade in Certain Raw Materials (L.N.)
I.T.S.	International Trade Statistics.
I.Y.B.A.S.	International Year Book of Agricultural Statistics.
J.T.A.	Japan Times & Advertiser.
M.B.	Money and Banking.
M.B.S.	Monthly Bulletin of Statistics (L.N.)
M.R.	Monetary Review (L.N.)
M.Y.B.	Mineral Year Book.
N.I.Y.B.	New International Year Book.
N.Y.T.	The New York Times.
P.H.W.	Political Handbook of the World.
P.Y.B.	The People's Year-Book.
Q.M.H.S.	Quin's Metal Handbook and Statistics.
R.W.T.	Review of Word Trade (L.N.)
S.	The Statist.
S.H.W.	Statistisches Handbuch der Welthandels.
S.I.A.	Survey of International Affairs (R.I.IA.)
S.Y.B.	The Statesman's Year-Book.
S.Y.B.L.N.	Statistical Year-Book of the League of Nations.
T.	The Times.
Tp.	Le Temps.
T.E.	Taschenbuch für Energiewirtschaft.
W.A.	World Almanac.
We.A.	Whitaker's Almanack.
W.Ar.	Weltwirtschaftliches Archiv.
W.E.S.	World Economic Survey (L.N.)
W.P.P	World Production and Prices (L.N.)
W.T.A.P.	World Trade in Agricultural Products.
Y.B.A.C.	Year Book of Agricultural Co-operation.
Y.B.B.M.S.	Year Book of American Bureau of Metal Statistics.
Y.B.L.S.	Year-Book of Labour Statistics (L.N.)

（邦文）　朝日新聞外各新聞
エコノミスト
海外經濟事情（外務省通商局）
國際經濟研究
國際經濟週報（同盟）
國際知識及評論
大日本帝國統計年鑑
國勢グラフ
東洋經濟新報
統計月報（東洋經濟）
同盟旬報

一、本年鑑編纂に際し、冬木六郎氏、滿鐵東京支社伊藤好道氏、同西尾忠四郎氏、東京政治經濟研究所柳父德太郎氏の諸先輩、ならびに友人諸氏の御鞭撻、御援助に對して多大の感謝を捧げなければならない。最後に本年鑑執筆者は次のごとくである。（五十音順）

伊藤好道　大久保正治　大島清　小島輝正　齋藤玉夫
坂根哲夫　坂本章邦　沈雄亞　吹田周郎　菅間正朔
須山卓　關口猛夫　高須忠彦　高見玄一郎　寺内顯雄
戸川英胤　中込武雄　西和男　西尾忠四郎　野地忠平
野村武秀　原誠吾　冬木六郎　前嶋信次　八木龜太郎
柳茂次　山川敏夫　山川壽　吉田隆　和田辰雄
地圖　佐藤重雄　踊池順太郎

各種單位換算表

長さ (Length):—	
1メートル (metre)*	=3.3尺=39.370インチ=3.28084フィート。
1フート (foot)	=12インチ=1.00584尺=3.30480メートル。
1ヤード (yard)	=3フィート=3.01752尺=0.91440メートル。
1粁 (kilometre)*	=1.000メートル=0.62137哩=0.25463里。
1哩 (mile)	=1.60934粁=0.40979里。
1里	=3.92727粁=2.44029哩。
1海里	=1.852粁=0.47187里。
面積 (Surface):—	
1ヘクタール (hectare)*	=10,000平方メートル=1.00833町歩=2.4711エーカー。
1エーカー (acre)	=4840平方ヤード=0.40806町歩=0.40468ヘクタール。
1方粁 (sq. kilometre)	=0.3861平方哩=0.06484方里=100.833町歩。
1方哩 (sq. mile)	=2.58999平方粁=0.16793方里=261.075町歩。
1方里	=15.42347方粁=5.9550方哩=1555.2町歩。
重量 (Weight):—	
1瓲 (ton)*	=1,000キログラム=0.9842英噸(long ton)=1.1023米噸(short ton)=266.667貫=1666.667斤。
1キンタール (quintal)*	=1/10瓲=220.462ポンド=26.667貫=166.6667斤。
1英噸 (long ton)	=1.01604瓲=270.9459貫=1693.41172斤。
1ポンド (lb. avoirdupois)	=0.45359キログラム=120.985匁。
1オンス (ounce)	=1/16ポンド=28.350グラム=7.55987匁。
1衡オンス (troy ounce)	=31.1035グラム=1グレーン=0.01728匁。
1ピクル (日本擔)	=100斤=0.06瓲=132.275ポンド。
1貫	=3.75キログラム8.26733ポンド=0.00625ピクル。
容量 (Capacity):—	
1リットル (litre)*	=0.22英ガロン=0.264米ガロン=5.5435合。
1ヘクトリットル (hectolitre)*	=21.9975英ガロン=26.4171米ガロン=5.5435斗。
1英ガロン (Imp. gallon)	=4.54609リットル=2.52014升。
1米ガロン (U. S. gallon)	=3.78543リットル=2.09846升。
1英ブッシル (Imp. bushel)	=36.368リットル=2.01511斗。
1米ブッシル (U. S. bushel)	=35.239リットル=1.95350斗。
1立方メートル (cubic metre)	=35.31338立方フィート=35.937立方尺=475.6297升。
1立方フート (cubic foot)	=0.0283179立方メートル=1.076225立方尺=15.6976升。
1立方尺	=0.027826立方メートル=0.98267立方フィート=15.4257升。
1石	=180.391リットル=47.654米ガロン=39.680英ガロン。
1バーレル (barrel)	=159リットル=35英ガロン=42米ガロン=88升。

註　Statistical Year-Book of the League of Nations, 日本國勢調會, 東洋經濟「經濟年鑑」より作成す。
*印はメートル法單位。

世界年鑑

目次

第一部　世界新秩序の展望……一

一　總　論……三

第一章　世界變革の諸過程……三

（一）戰爭の倫理……三

（二）戰爭と國民生活……八

（三）文化政策とその問題……一〇

（四）戰爭と文藝……一三

（五）戰爭と科學……一六

（六）人口問題……一八

（七）民族問題……二一

（八）新秩序建設の理論……二五

第二章　第二次大戰の經過……三一

（一）ポーランド戰線……三一

a　兩軍戰略……三三

b　軍事行動……三四

c　ソヴェートの介入……三九

（二）フィンランド戰線……四一

a　バルチック沿海諸國……四一

b　フィンランド攻擊……四一

c　マンネルハイム線崩壞……四三

（三）ノルウェー戰線……四五

a　ドイツ軍のノルウェー占領……四五

b　英佛軍の上陸と敗退……四八

c　デンマークの降伏……五三

（四）西部戰線……五三

a　戰略的諸條件……五三

b　前哨戰……五八

c　ドイツ軍の總攻擊……六一

（五）海　戰……七九

a　海戰の特殊形態……七九

b　通商破壞戰……八一

c　海軍の戰鬪および損害……八八

（六）空　戰……九九

a　一九三九年……九九

b　一九四〇年……一〇三

（七）世界新秩序の展望……一〇九

a　戰前におけるブロック化の意義……一〇九

b　第二次大戰による諸變化……一一二

二　東亞ブロック……一一〇

第一章　概　觀……一一〇

（一）二種のブロック……一一〇

(二) 東亞ブロックの意義……一三三
(三) 東亞ブロックの內容・特徵……一三三
第二章 自然的構成……一三六
第三章 政治的構成……一三八
(一) ブロック成立の過程……一三八
(二) 政治的諸關係……一三八
a 日滿關係……一三八
b 日支關係……一三八
c 南方關係……一三八
(三) 民族的諸關係……一三七
第四章 經濟的構成……一四〇
(一) 資源……一四〇
a 滿洲國……一四〇
b 北支那……一四一
c 中南支……一四三
d 佛領印度支那……一四三
e 蘭領東印度……一四四
f 泰國……一四五
(二) 生產……一四五
a 滿洲國……一四五
b 支那……一四六
c 佛領印度支那……一四七
d 蘭領東印度……一四七
e 泰國……一四八
(三) 資本……一四八
a 滿洲國……一四八
b 支那……一四九
c 佛領印度支那……一四九
d 蘭領東印度……一五〇
e 泰國……一五〇
(四) 貿易……一五〇
a 滿洲國……一五〇
b 支那……一五一
c 佛領印度支那……一五二
d 蘭領東印度……一五二
e 泰國……一五三
(五) 交通運輸……一五三
a 滿洲國……一五三
b 支那……一五四
c 佛領印度支那……一五四
d 蘭領東印度……一五五
(六) 戰時經濟の動向……一五五
a 滿洲國……一五五
b 支那……一五六

c 佛領印度支那……一五七
d 蘭領東印度……一五八
e 泰國……一五八
第五章 文化的構成……一六〇
(一) 概觀……一六〇
(二) 宗教……一六一
(三) 言語……一六三
(四) 通信……一六三
(五) 新聞……一六三
三 ドイツ・ブロック……一六六
第一章 概觀……一六六
(一) ドイツ・ブロックの歷史的基礎……一六六
(二) ドイツ・ブロックの自然的構成……一七〇
第二章 政治的構成……一七八
(一) ドイツ・ブロックの成立過程……一七八
a 第二次大戰勃發前に於ける ドイツ領土の擴大と勢力圈の成立……一七八
b 第二次大戰を契機とする ドイツ勢力の擴大ならびに廣域經濟圈の樹立……一八四
c ドイツのヨーロッパ支配機構……一九〇
d ラテン・アメリカにおけるドイツの政治的活動……一九二
第三章 民族的諸關係……一九四
(一) ヨーロッパに於ける民族問題の意義……一九四
(二) ドイツ少數民族問題……一九六
(三) ドイツ支配下の民族問題……二〇〇
第四章 經濟的構成……二〇三
(一) ヨーロッパ廣域經濟圈の性格……二〇三
a 戰爭勃發前におけるドイツ經濟圈の成立……二〇三
b イギリスの海上封鎖とその影響……二〇五
c 生產及び勞働の再編成……二〇八
d 貿易の調整……二〇九
e 通貨・金融の統制……二一〇
f ヨーロッパ廣域經濟圈と世界經濟……二一四
(二) 資源及び生產……二一六
a ドイツ本國における原料問題……二一六
b ドイツ・ブロック內の需給關係……二一七
c 鐵鋼……二二六
d 非鐵金屬……二二二
e 石油……二三五
f 石炭……二三七
g 雜原料……二三八
h 化學工業部門……二四一

i　ドイツにおける勞働力不足とその對策……二四三
(三)　貿　易……二四七
a　ドイツを中心とする貿易體制の成立……二四七
b　ナチス・ドイツの對外經濟統制……二四八
c　ドイツを中心とする貿易狀況……二四九
d　第二次世界大戰とドイツ貿易……二五三
(四)　資　本……二五四
a　バルカン諸國におけるドイツの投資……二五五
b　ラテン・アメリカに於けるドイツの投資……二五八
c　アフリカにおけるドイツの投資……二五九
d　支那に對するドイツの投資……二五九
(五)　交通運輸……二六一
a　海　運……二六一
b　航　空……二六三
c　鐵　道……二六四
第五章　文化的構成……二六五
(一)　概　觀……二六五
(二)　宗　教……二六八
(三)　言　語……二六九
(四)　通信・宣傳機關……二七〇
(五)　被征服諸國文化概觀……二七三
四　イタリア・ブロック……二七八
第一章　概　觀……二七八
第二章　政治的構成……二八一
(一)　帝國成立の過程……二八一
(二)　政治的諸關係……二八四
a　帝國內諸關係……二八四
b　對外的諸關係……二八六
(三)　民族的諸關係……二九〇
a　イタリア人少數民族問題……二九〇
b　ユダヤ人問題……二九〇
c　イタリアと有色人種……二九一
第三章　經濟的構成……二九三
(一)　經濟概觀……二九三
(二)　生　產……二九七
a　イタリア本國……二九七
b　植民地における生產……三〇四
(三)　貿　易……三〇六
(四)　資　本……三一二
(五)　交通運輸……三一三
第四章　戰時經濟の動向……三一六
第五章　文化的構成……三二〇

(一)　概　觀……三二〇
(二)　宗　教……三二一
(三)　言　語……三二三
(四)　通　信……三二三
a　郵便・電信・電話……三二三
b　ラヂオ……三二三
c　新　聞……三二三
五　イギリス・ブロック……三二六
第一章　概　觀……三二六
(一)　イギリス・ブロックの概念……三二六
(二)　英帝國構成の基礎的條件並びにブロック化の意義……三二七
第二章　政治的構成……三三一
(一)　イギリス・ブロックの特殊性格……三三一
a　英帝國の構造的特徵……三三一
b　統治機構……三三三
c　勢力圏の構成……三三五
(二)　民族的諸關係……三三六
a　カナダ……三三六
b　オーストラリア……三三七
c　印　度……三三七
d　南アフリカ聯邦……三三八
e　パレスタイン……三三九
(三)　英帝國の戰略體制……三三九
(四)　ブロック政策の新段……三四三
a　一九三七年以後の諸政策……三四三
b　第二次大戰下におけるイギリス・ブロック……三四六
第三章　經濟的構成……三四八
(一)　資源並びに生產……三四八
a　本國及び英帝國の資源……三四八
b　英本國における生產……三五〇
c　植民地に於ける生產……三五八
(二)　貿　易……三六〇
a　英本國における貿易……三六〇
b　植民地における貿易……三六三
(三)　貨幣・金融・資本……三六七
a　英本國……三六七
b　植民地……三六九
(四)　交通運輸……三七三
a　英本國……三七三
第四章　戰時經濟の動向……三七六
(一)　第二次大戰とイギリス經濟……三七六

a 景氣概觀……三七六
b 各種戰時經濟政策……三八三
(二) 對植民地政策……三八八
a 大英帝國會議とその諸結果……三八八
b 戰時經濟とブロック內矛盾の激成……三九二
第五章 文化的構成……三九五
(一) イギリス文化概觀……三九五
(二) 宗 教……三九六
(三) 言 語……三九七
(四) 通 信……四〇〇
(五) 新 聞……四〇四
六 フランス・ブロック……四〇九
第一章 概 觀……四〇九
(一) 自然的構成……四〇九
(二) 植民抄史——植民地外延の成立……四一四
(三) 第一次大戰後に於ける
ブロック經濟の展開過程……四一六
a 戰後に於けるフランス國民經濟の危機過程……四一七
b 國民經濟の危機に規定された
ブロック經濟の展開過程……四二〇
第二章 政治的構成……四三五
(一) フランス・ブロックの成立過程……四三五
(二) 政治的諸關係……四三七
(三) 民族的諸關係……四三五
a 回教徒アラブ民族運動……四三八
b 佛領印度支那の民族運動……四四〇
第三章 經濟的構成……四四三
(一) 經濟的構成の特殊性……四四三
a フランス戰時經濟の展開過程……四四三
b ブロックの經濟的構成の特殊性……四五〇
(二) 資源・生產……四五六
(三) 貿 易……四六二
(四) 資 本……四七〇
(五) 交通運輸……四七八
a 鐵 道……四七八
b 海 運……四七九
c 空 輸……四八〇
第四章 戰時經濟の崩壞と今後の動向……四八二
第五章 文化的構成……四八五
(一) 概 觀……四八五

(二) 宗 教……五〇五
(三) 言 語……四八六
(四) 通 信……四八七
(五) 新 聞……四八八
七 ソヴェート・ブロック……四九三
第一章 概 觀……四九三
(一) 自然的構成……四九三
第二章 政治的構成……四九五
(一) ブロック成立の過程……四九五
(二) 政治的諸關係……四九五
(三) 民族的諸關係……四九七
第三章 經濟的構成……四九九
(一) 資 源……四九九
(二) 生 產……五〇一
(三) 貿 易……五〇五
(四) 資 本……五一一
(五) 交通運輸……五一一
a 鐵道運輸……五一一
b 航空運輸……五一三
第四章 戰時經濟の動向……五一六
第五章 文化的構成……五一九
(一) 宗 教……五一九
(二) 言 語……五一九
(三) 通 信……五一九
(四) 新 聞……五二〇
八 アメリカ・ブロック……五二二
第一章 概 觀……五二二
(一) アメリカ資本主義の發展とそのブロック化……五二二
(二) アメリカ・ブロックの自然的構成……五二五
a 面積・人口ならびに政治的地位……五二五
b 人種的構成……五二一
第二章 政治的諸關係……五三五
(一) モンロー主義とその變遷……五三五
(二) 汎米主義の發展……五三九
(三) 互惠通商政策……五四一
(四) 第二次大戰と合衆國米洲制覇の進展……五四三
a 戰爭とラテン・アメリカ……五四三
b パナマ汎米外務大臣會議……五四四

c　汎米經濟財政諮問委員會の開催と汎米中央銀行案……五四五
d　歐洲戰爭の急轉と汎米政策の强化……五四五
e　米洲共同防衛の進展……五四九
第三章　米洲における列强の角逐……五五三
(一)　ラテン・アメリカ……五五三
a　英國の地位……五五三
b　ドイツの進出……五五六
c　イタリアの勢力……五五八
(二)　カナダ……五六〇
第四章　民族的諸關係……五六三
(一)　合衆國內における少數民族問題……五六三
a　黑人問題……五六三
b　インディアン……五六三
c　東洋民族……五六四
d　メキシコ人……五六五
(二)　フィリッピン獨立問題……五六五
(三)　中南米の黑人及びインディアン……五六六
(四)　中南米の國家主義運動……五六七
第五章　經濟的構成……五七〇
(一)　アメリカ資本主義の特殊性……五七〇
(二)　資　源……五七三
a　合衆國……五七三
b　ラテン・アメリカ……五七七
(三)　生　產……五八〇
(四)　貿　易……五八六
a　合衆國貿易の發展と世界に於ける地位……五八六
b　合衆國貿易の構成……五八九
c　合衆國の對ラテン・アメリカ貿易……五九一
d　ラテン・アメリカ貿易に於ける列强の地位……五九六
(五)　資　本……五九六
a　合衆國投資の發展……五九六
b　合衆國の對ラテン・アメリカ投資……六〇一
c　ラテン・アメリカに於ける列强の投資……六〇四
(六)　交通運輸……六〇五
a　陸　運……六〇五
b　空　運……六〇七
c　海　運……六〇九
第六章　文化的構成……六一三
(一)　概　觀……六一三
(二)　宗　教……六一八
(三)　言　語……六二〇
(四)　通　信……六二一

第二部　各國情勢……六三三
第一篇　日本篇……六三三
1　日　本……六三五
第二篇　アジア篇……六七五
2　アフガニスタン……六七七
3　アラビア……六八一
4　イラーク……六八五
5　イラン……六八九
6　印　度……六九九
7　英領マレー……七二二
8　シリア・レバノン……七二一
9　タ　イ……七三五
10　中華民國……七五二
11　トルコ……七九六
12　パレスタイン……八一一
13　ビルマ……八一五
14　フィリッピン……八二二
15　佛領印度支那……八三五
16　香　港……八四五
17　滿洲國……八四九
18　蘭領東印度……八七九
第三篇　アフリカ篇……八九五
19　アルジェリア……八九七
20　アングロ・エジプト・スダン……九〇三
21　伊領東アフリカ……九〇八
22　エジプト……九二〇
23　チュニス……九三五
24　白領コンゴ……九四〇
25　佛領ソマリランド……九四五
26　南アフリカ聯邦……九四八
第四篇　オセアニア篇……九五七
27　英領太平洋諸島……九五九
28　オーストラリア……九六五
29　ハワイ……九八一
30　米領太平洋諸島……九九〇
第五篇　アメリカ篇……九九五
31　アメリカ合衆國……九九七
32　アルゼンチン……一〇四四

33 カナダ……一〇五五
34 チリー……一〇六六
35 ブラジル……一〇七三
36 メキシコ……一〇八六
第六篇　ヨーロッパ篇……一〇九五
37 イギリス……一〇九七
38 イタリア……一一三三
39 オランダ……一一三七
40 ギリシア……一一四八
41 スイス……一一六〇
42 スエーデン……一一六八
43 スペイン……一一七八
44 ソヴェート聯邦……一一九〇
45 デンマーク……一二一〇
46 ドイツ……一二一八
47 ノルウェー……一二四五
48 ハンガリー……一二五八
49 フィンランド……一二六六
50 フランス……一二八一
51 ブルガリア……一三一三
52 ベルギー……一三三〇
53 ポルトガル……一三三〇
54 ユーゴースラヴィア……一三三七
55 ルーマニア……一三五五

第一部　世界新秩序の展望

第壹部　世界新秩序の展望……一
一　總　論……三
二　東亞ブロック……一二〇
三　ドイツ・ブロック……一六六
四　イタリア・ブロック……二七八
五　イギリス・ブロック……三二六
六　フランス・ブロック……四〇九
七　ソヴェート・ブロック……四九三
八　アメリカ・ブロック……五三二

一　總　論

第一章　世界變革の諸過程

(一)　戰爭の倫理

支那事變勃發以來既に滿四年、これと對應する第二次ヨーロッパ大戰勃發以來滿二年半に垂んとする今日、なほ東西における事態は決定的なものたり得ないが、既に明かにされた事實は、三國同盟の成立（一九四〇年九月）を俟つまでもなく、たゞにこの東西洋の劃期的戰爭がその解決において、またいふ所の世界新秩序の建設において各〻別個のものたり得るのみならず、第一次世界大戰後のあらゆる領域に亘る新しき混亂と、新しき幻滅に對して、着々その解決をなして來たといふことである。

第一次世界大戰は、單に民主主義のための戰といふに止まらず、一六世紀來スペイン、オランダ、フランス、ロシアを抑へて世界帝國を現出せるイギリスと、新興ドイツとの爭覇戰であり、ヴェルダン（八四三年）、メルセン（八七〇年）兩條約によつて扶を分つてより今日に至つたドイツ、フランス兩國の西歐大陸における對抗を意味し、同時にチュートン民族とスラヴ民族とのダニューブおよびバルチック兩領域の爭奪戰であり、チェック、スロバーク、クロアチア、セルビアおよびイタリアの各民族にとつては、塊洪帝國の羈絆を脱するための戰であつた。更に大戰の終末には、蘇聯の共產主義に對する戰爭にまで擴がつたのである。今次の大戰を理解するためには、ヴェルサイユ體制を顧る必要があるが、前大戰の結果ハプスブルグ、ホーエンツオレルン、ロマノフ等の古き王室は消滅し、またオットマン帝國の崩壞を見、民族自決主義に基く一一の新國家並びにダンツイヒ自由市の誕生を見た。民族自決主義は、國際民主主義と並んで、ヴェルサイユ體制の二大支柱をなすもので、ウイルソンの一四箇條（一九一八年一月一日）の中、第六項より第一三項に至る八項目を占めた。しかしウィルソンの理想案は、結局列國の利己主義によつて他の妥協案におきかへられたので、バルチック沿岸その他に誕生した諸小國家の存在は、表面的には民族自決といふ理想主義の現れの如くであるが、實際は英佛の利己的政策によるものであつた。即ちこれ等諸小國は英佛の對獨包圍線をなすもので、フィンランド、エストニア、ラトヴィア等はまた同時に革命後のロシアに對する防壁と見られる。さらに英佛はドイツに對して多額なる賠償金と軍備の徹底的縮小を要求し、植民地の全部、本國のうち面積の約一三%、人口の約一〇%（アルサス、ロレーン、ザール河流域、上シレジア等鐵、石炭の豐富なる地域を含む）を失はしめた。ドイツ以外の戰敗國もそれ〴〵聯合國側との平和條約によつて、本國領土の割讓、植民地の讓渡等を强制されたので、かくして成立せるヴェルサイユ體制は、永久的世界平和機構の確立にあらずして英佛の一方的利益といふ結果に終り、同時に誕生した國際聯盟の如きも、この體制の恒久的維持を圖る目的に出でたものに過ぎなかつた。さ

らにワシントン會議(一九二一年)による九ケ國條約、また一九三〇年のロンドン條約の如き、何れもヴェルサイユ會議の派生的結果であり、イギリスおよび大戰後急激に擡頭したアメリカの世界的覇權の確保を目指すものであつた。しかもこの間明白にされた事實は、戰勝國側の利益が極めて不均衡なる狀態において配分されたことであつて、イタリアの受けた冷遇、わが國に加へられた英米の重壓は、兩國の著しき不滿と、從つてヴェルサイユ體制に對する嚴しい批判を齎さずにはおかなかつた。

ヴェルサイユ條約を强制されることによつて國民的屈辱を甘受せざるを得なかつたドイツにとつて、その後の活動は如何にしてこの桎梏より脱却せんかの努力にあつたといひ得る。ナチスの擡頭、またナチス政權の確立を可能ならしめたものも、かゝる事態に外ならなかつたし、民主主義に對する全體主義の世界的昂揚も、その後の世界經濟の窮迫によるとはいへ、ドイツがヴェルサイユ體制打破に向つて着々成功を治めていつた事實に大きな影響を受けてゐる。大戰後ドイツ外交の中心課題であつた賠償問題も、一九三二年のローザンヌ會議によつて解決を見、三三年政權を掌握したナチスは三五年に至り、ヴェルサイユ條約軍備制限條項廢棄宣言を行ひ、こゝに公然と軍備擴充に向つた。かくて再び世界をあげて軍備擴張競爭は開始せられ、三六年にはエチオピア問題、ドイツのラインランド進駐、またスペインにおける内亂の勃發によつて獨伊聯携の實を見るに至つた。一方滿洲事變の勃發から國際聯盟を脱退し、その旗幟を明かにしたわが國は、三六年ドイツと防共協定を結び翌三七年にはイタリア、三九年にはハンガリー等がまたこれに加はつた。更に支那事變および第二次ヨーロッパ大戰の開始に至る一聯の事實はヴェルサイユ體制に對する攻勢として、いはゆる持たざる國の生存權の躍動であり、英米の桎梏を脱して新しき世界秩序を建設せんとする新興民族の强き意思の現れに外ならない。かゝる日獨伊三國、いはゆる樞軸國の活動が單なるアングロ・サクソン民族の世界支配に對する挑戰であるならば、それは弱肉强食、民族興亡史の一羅列としての意義のみしか持ち得ず、武に代ふるに武を以てするのみで、何等世界人類に貢獻するものではない。問題は第一次大戰後の混亂が齎らした民主制に對する幻滅、換言すれば近代的歐米社會それ自身の持つ矛盾の激化によつて、人類史に一轉機を劃すべき時期が到來してゐる事實であつて、戰爭はこの情勢を促進させる役割をなしてゐる。從つて世界新秩序の建設とは、從來植民地或は半植民地としてヨーロッパ諸國の市場であり、原料供給地であつた未開國をして單に近代化せしむる謂ひではなく、また一方國際情勢の變化によつて、英米の餘力がドイツの新ヨーロッパ建設を阻むことありとしても、そこに來るべきものは最早舊の如き社會の、繁榮ではあり得ない。

今次の戰爭がイデオロギー的に、民主主義に對する全體主義の戰として解される所以は、一見極めて明瞭の如くであるが、その實甚だ曖昧なものを持つてゐる。民主主義は一九世紀の代表思想の一であり、一六世紀來の近世民族國家の興隆に當つて、市民を封建的秩序より解放する上に大いなる貢獻をなして來たことは事實であるが、その實際政治への適用に當つて元來の理念たる各人の自由、平等は

失はれ地主または資本家の寡頭的支配を現出したに過ぎなかつた。イギリスにおいて言論その他の自由、人身の保護は國民の出生と共に深く滲み込んだ感情でさへあつたが、長く彼等を支配したものは一階級の寡頭政治であり、勞働黨の出現によつて一時かゝる形式より脱するかに見られたものゝ、一たび勞働黨が政權を握るや(一九二四年)、その内閣は何等大衆の利益を代表するものではなく、舊來の寡頭政治の中に沒入してしまつたのである。黨の指導者達にしても例へばその最左翼たるサー・スタフォード・クリップスの如き、その名の示す如く貴族の出身であり富者の一人であつたので、こゝにイギリスの政治制度の特徴が存する。しかして假にイギリス本土に民主制が行はれてゐるとしても、イギリスの帶する自由のための戰は何を印度人に與へようとするのか。四、六〇〇萬の本國人口に對し、三五、〇〇〇萬を數へるインド人に民主政治が適用されない限り、イギリスのデモクラシイはナンセンスといふ外はない。

さらにアメリカにしてもその誇る民主政治に對し、青年層は如何に考へ如何に苦惱してゐるか。英佛の協同による二〇億弗の安定資金の運用に關する一例によつても明かなる如く、ルーズヴェルトに與へられた强大な獨裁權の行使は、決して民主國の名に價するものではない。況んや實際にこの國を支配するものが何であるかを考へれば、事實は一層明白である。アメリカの平等主義は何故にアジア人に適用されなかつたのか。デモクラシイにおける自由主義が、純粹人格主義を意味するものである以上、アメリカの現在樞軸國に對する態度によつても明かな如く、アメリカの主張するデモクラシイこそ、その利己的侵略主義の假面たるに過ぎない。かゝる民主制の破綻は、戰時なるが故に露呈されたものでもなく、また戰爭を强行する必要から生れたものでもない。民主制自身また一つの歴史的段階たる事實を證明すると同時に、民主制それ自身が持つ本質なのであつて、古代ギリシアにおいて展開された政治形式の變遷は、たとへそれが都市國家といふ極めて制限された範圍内のものであり、且つ今日に比し極めて簡單な社會經濟組織内において行はれたものであつたにしても、今日なほ回想さるべき多くのものを持つてゐるのである。古代ギリシヤにあつて民主政治は衆愚政治に終り、やがて北狄マケドニアの興起によつてその生んだ優れた文化をヘレニズム文化に傳へつつも、自らは世界史の彼方に沒し去つてしまふ。しかもギリシア文化の爛熟期がその民主政治の黄金期(前四四五——前四三一年)に概當するからといつて、直に民主政治を謳歌することは誤りであつて、民族の素質と當時の社會制度こそ決定的な要因であつたので、同時にデルス同盟の存在を忘れてはならない。このことはルネッサンスにおける天才の輩出と、また民主政治の隆盛期であつた一九世紀から二〇世紀初にかけての時期の、文化の樣相とを併せ考へれば自ら明瞭となろう。

第一次世界大戰からそれに續く經濟的不況、さらに一九二九年以後の世界經濟恐慌によつて生れた混沌たる狀態は、もはや自由主義民主主義を以てしては如何ともなし得ず、その好むと好まざるとに拘はらず政治の獨裁化を必須としたのである。一八世紀一九世紀を通じて顯著だつた啓蒙主義の特徴は、第一次世界大戰によつて顛挫

し、兩世紀を通じて昂揚せられた個人主義は、國家的にまた社會的に資本主義下の大組織、大量生産に壓倒されて了つた。この大戰を決定付けた勝れた生産力と武器、そして宣傳力とは産業文化の進歩を何より雄辯に物語る。一八世紀以來、ヨーロッパ市民の最大の目標であり、またすでに完成したかに見られた民權の發達—責任政治議會政治、普通選擧—もその起るより早く退き、デモクラシイは大戰後一五年にして、なほ英米佛等數ケ國に止まつたとはいへ、夫々嚴しい批判と烈しい反對を受けなければならなかつた。生産の增加は一層明かとなつたが、同時に窮乏はさらに高まりつゝあつた。一八三〇年—一九一〇年に世界各地に擴がつた産業革命は、さらに一九三〇年に至る間一層の躍進を見、一九一〇—三〇年の間に鐵・石炭の生産額は二倍となり、比較的新しい資源たる石油・ゴムにおいても一九一〇—三三年間に前者は約四倍、後者は一〇倍の增加であり、食料品に於ては、以上の如く著しくはないが同じく增加の途を辿つてゐた(例へば小麥は一九二〇—三〇年に一・四倍)。しかもその一方世界における未曾有の困窮は一九三二年の世界主要國失業者數約三、〇〇〇萬を數へ、米國の如き一、二〇〇萬以上と推定せられた。かゝる不況の結果として、注目すべきことは、資本主義が新しい批判期に立至つたことである。

しかして世界的現象として、新しき種族政治の傾向、獨裁制の隆盛は、第一次世界大戰前の歐米各國の植民主義的發展期(一八七〇—一九一〇年)における場合にも增して、他のあらゆる部門の犧牲をも顧る暇なく一意國防國家の建設、軍備擴張に赴かざるを得なかつた。さらにかゝる準戰時體制より遂に戰時體制に入るに及んで、各國における勞働力の軍需工業への集中は、失業者或は婦人等を生産過程に引入るゝのほか、勞働時間の延長その他の方法をつくして軍器の增産に力むる一方、國防國家建設の一端を擔ふ生産力の擴充もまた多數の勞働力を必要とする。問題は平時における失業者をそのまゝ軍需工業に振向け得ないことにあるのではなく——振向け得たとしてもなほ勞働力の不足を如何ともし得ない——戰時經濟の發展は消費の增大に拘はらず生産の減少を齎し、殊に軍需資材の生産竝びに消費の特殊性は、直接的には、新しい生産手段にも、また新しい勞働力創造の消費手段にもなり得ない點に存する。又戰場となつた領域における損害の影響は、かのボエニ戰役(前二六四—前一四六年)の結果ローマの中等階級の消滅から共和制の帝政化を齎すに至つたし、三〇年戰役(一四一八—四八年)の結果ドイツは人口三〇〇〇萬から一、二〇〇萬となり、近代國家としての完成を一八七一年まで遲らさゞるを餘儀なくされた如くに極めて酷烈なるものがある。さらに戰時における平和産業の短縮、また中小商工業者の轉失業、貿易の衰頽等は交戰國はもとより、中立國に對しても深甚の影響を與へてゐる。從つて問題は再轉して、戰爭による損失、戰爭の消極的面の分析にあらずして、戰爭の積極的意義の解明と、戰後に來る可き各國の政治的、經濟的ならびに文化的情勢の見透しにある。

なほ注意す可きは現在の戰爭が世界新秩序の建設のためであつて新しき戰爭の原因となつてはならない以上、また事實問題としてそ

の結末は從來の戰爭と異るものでなければならないことである。卽ち現在の戰爭の結果は、單なる領土の割讓、不割讓の問題にあらずして、世界のよりよき發展と、諸民族の繁榮にあることを忘れてはならない。

東亞新秩序の建設とは、アジアの盟主日本の指導下に支那およびその他のアジア諸民族をして歐米帝國主義の支配より解放せしめ、以てそれ〴〵の民族的革新を斷行せしめることによつて、各〻の民族的向上發展を圖り、相提携して共存共榮の實を擧さんことに他ならない。從つて指導權の確立は、日本の一層の負擔と責任の擴大を意味するものであつて、この困難にして崇高なる事業の遂行のためには、先づ內における新國家體制の堺立、至純なる情熱の昂揚を必須とする。このことはアジアにおける日本の場合に止まらず、ヨーロッパにおけるドイツの場合も同樣である。今日の情勢においては、戰敗國は當然としても、戰勝國に對しても至大なる負擔を要求する結果として、世界における國民生活の水準の低下を必至とし、こゝに舊來の戰爭のモラルを以てしては到底理解し得ざる今次大戰の特徵が存する。

以上によつて明かにされたところは、機械文明の進歩が、一般大衆の生活の困難を齎し、これが解決のために現れた政治經濟上の變革も、國民生活の困難の點においては何等異る結果とはならないが、その意義において全く對蹠的なものたる事實である。今次の大戰は世界帝國を實現せんとする征服のための戰でもなく、勢力均衡を基調として立つ諸國家間の、覇權獲得のための戰であつてもならない。産業革命とこれに伴ふヨーロッパ的世界の擴大とによつて齎された情勢は、第一次世界大戰及び一九二九年の經濟恐慌を經て、もはやかゝる性質の戰爭を許さなくなつたと見るべきで、世界的經濟圏の擴大は個別的國家單位の存在を否定し、數個の中心を持つ世界を現出せしめたのである。しかもこれらのいくつかの中心も各〻個別的に存在するものではなく、いふところの世界史的世界の段階に達したので、日露戰爭以後の日本の世界的抬頭及びこれが他の有色人種間に與へた影響は、かゝる段階を齎した最も重要なる原因である。この世界的な轉換期に當つて支那事變を見るに至つたことは一の不幸であるが、事變の意義は支那を英米の半植民地から解放し以て東亞共榮圏を樹立せんとする點にあるので、轉換が生んだ不可避の戰爭であり、かゝる轉換が力の—政治的惹いては軍事的な—衝突として現れることは世界史の示すところである。

さらに歴史的轉換は單に政治上に止まらず社會生活全領域における變化であり、文化全面の更新である。現代における文化の懐疑的刹那的徵候は古き世界觀の動搖と新世界觀を摸索する時代の苦惱を象徵するもので、科學的研究の進歩は幾多の貢獻をなしとげたが、その自然科學の發達も第一次大戰後の混亂を何等解決するものではなく、同樣にして幻滅の傾向を如何ともし得ない。單に機械的物質的なもののみで滿足出來なくなつた文化の動きは、科學と基督教的精神との調和を企て、また機械的なものから解放される道としてベルグソン(一八五九—一九四〇年)の哲學を生んだ(「創造的進化」の上梓は一九一七年)。クローチェ(一八六六年生)等に見る理想主義の

復活らまたこの混亂期を打開すべき運動の一であつた。藝術においても一九世紀の便宜主義に對する反抗が二〇世紀を特徴付けたとはいへそこに何等統一的なものは見られなかつた。二〇世紀來ヨーロッパ文化のアメリカ化が叫ばれ、この傾向は殊に第一次大戰へのアメリカの參戰を契機とし戰後一層顯著となつた。この「質の文明」から「量の文明」への變化は、資本主義の高度化による生活と文化の變革を意味し、あらゆるものが豐富にしかし割一的に生產されるところから出發する。傳統のないアメリカ文化が古いヨーロッパ文化に勝つたといふのではなく、文化の質の轉換であり、文化もまた機械化を免れ得ない結果なのである。

かくて傳統的ヨーロッパ文化に對して革命的なバーバリズムの出現に見られる諸傾向は、文化の質的轉換の一の現れであると同時に「西方の沒落」を意味するものであつた。第一次大戰後の政治經濟上の混亂は素より、文化各面における混亂と、この大戰を理由付けたものへの幻滅とは、ヴェルサイユ體制への批判と反擊とによつてその動搖を大きくされると共に、新らしい時代への轉換を齎したのである。戰爭はそれ自身としては必ずしも常に歷史の轉換を急激に招來するものではない。しかしすでに「準備せられたる戰爭」においては、戰は發火點に非ずして終止符であり、あらゆる面における轉換は東西二大戰爭によつて決定的のものとなり、この建設戰を通じてのみすべての國民苦の昂揚がある。昂揚とは今次の戰爭が侵略主義戰の如くに、少數の利益獨占のためであつてはならない意味であり、世界新秩序の樹立と眞の平和の建設のために捧げられることを意味し、これこそ今次大戰の根幹をなす希望であり、人間解放、新しきルネッサンスへの意欲を生む所以である。かゝる大理想と勇猛心なくしては新しき時代の建設はその意義を失ひ、所謂世界新秩序の建設も第二のヴェルサイユ體制の出現となり終るであらう。

(二) 戰爭と國民生活

戰爭の擴大につれてその影響はあらゆる領域におよんだが、最も早く且つ最も具體的な形をとつて現れたのは、各國における國民生活の變貌であつた。軍の徵用、生產力(殊に消費財)の減少、貿易の途絕ないし統制等の軍事的經濟的諸原因は、衣食住にわたつて物資の缺乏を戰爭の長期化と共に益々增大せしめ、國民の物質的生活の縮少を余儀なくせしめた。從つて各國政府はこれが對策として八方の手段をつくして物資の增產を圖ると共に、配給の統制、合理化によつて戰時國民生活の安定に力めたのである。

ドイツにおいてはポーランド戰に先立つ一九三九年八月二七日、先づ食料品の切符制を開始し戰爭の擴大に具へるところがあつた。最初の割當は別表の如きものであつた。切符は一九三七年に印刷されたもので、先づパンより始まり次で肉、バター、卵の順であつた。魚類は割當から除外されたが、實際にはトロール船による漁獲高の減少により、時間制ともいふべき二週間に一度の配給であつた。北歐戰の終了後デンマーク、オランダのバター、スカンヂナヴィア地方の魚類が入るやうになり、一ヶ月六個に制限された卵の配給も倍加された。また切符には、一般用、幼兒および病人用、勞働者用、

ドイツにおける食料割當量

(單位 瓦)

	1週間	1日
肉及び肉製品	500	15
パン	2,400	91
砂糖	250	10
マーマレード	100	4
コーヒー, 紅茶	—(1)	—(1)
バター	125	5
マルガリン	90	3
馬鈴薯(2)	4※	70
野菜	2※	35

備考:——本表は大人1人當りの割當である。5月以後(火),(金)肉無しデー。(1) 配給無きも,人造コーヒーあり。(2) 1週2回配給。※單位ポンド。

一月一日から切符制が布かれ一人につき一年一〇〇點以內とし種類によつて點を異にする制度をとつたが(例へば洋服六〇點、靴下四點)、九月からは一五〇點に改められた。その他皮製品、石鹼、ガソリン、石炭等もそれ〴〵制限を受け、煙草も女子には禁止、男子も一日につき兩切は六本、葉卷は三本と定められた。早くから戰爭に備へたドイツの覺悟は切符制の實施に當り規律正しい服從心によつて極めて圓滑に行はれ、傳統的な國民の辛抱强さは當然のものとしてこれを受入れ、生活の緊縮に伴ふ暗さは見られず、殊にバリー落城後は若干の餘裕を見せてゐるやうである。一般行事の如きも大體において戰前と變らず、國立オペラ劇場も開演し、各種の藝能祭も盛大に執行されてゐる。

かゝる國民生活の動向は英(四〇年一月八日から食料品の切符制始まる)、佛、伊等共通の運命であり、たゞ食料の比較的潤澤であつたフランスにおいては、各種の制限は設けられたが、切符制に至らなかつた。しかしフランスにおいて一九三九・四〇年の作物收穫高激減の後を受けて戰敗後の食料難は極めて著しきものがあり、しかも內においては自國の北半分、北、西海岸はドイツ軍に占領され、外イギリスの封鎖を受けてゐる現在、植民地および外國からの食料品輸入も極めて困難である。執拗に繰返される空襲の下にあるイギリス一般國民にとり戰爭は神經戰爭としても感じられ、長期の地下生活は多くの困難なる問題を生んでゐるが、戰費は一日一千萬ポンド以上に上り、四〇年五月には個人に對する國家權力の最大限の發動である緊急法案が施行せられ、チャーチル內閣に入つて、四一年一月、對獨戰に具へると共に國家の恒久的見地から、國民勞働力强制徵用の方針を決した。

ドイツにおいて「婦人は家庭へ」のスローガンに拘はらず、戰時において女子勞働者のかなりの增加を見てゐるが(ドイツ當局の發表によると、開戰以來三ヶ月間に有給職業婦人の數は一、一七五萬から一、二〇〇萬に增加)、その他、勞働婦人のための托兒所に新しく加はつた義勇婦人群の數は尨大なものに上るべく、防空活動は婦人の仕事となつてゐる。イギリスにおいても今次の大戰において婦人の受持つ役割は前大戰に比べて遙かに大きい。義勇團としては婦人補助地方軍、婦人補助空軍、婦人補助消防隊、婦人地上軍、婦人空襲警報員、看護協會等が組織され、また婦人の戰時社會運動に携るものには英國婦人團體聯盟、英國婦人協會、英國女子倶樂部協會等がある。一方戰時に入つて婦女子の男子職業方面の進出が見られ

最重要勞働者用の四種が區別されてゐる衣類については一九三九年

る反面に百貨店の賣場縮少、平和產業の不振、會社の移轉等の原因によつて婦人失業者の數は七、八萬名增加したといはれる。日本の都市における隣組制度の確立もドイツの近隣援助團として知られる婦人組織と同傾向の戰時の一產物であるが、將來は國民大衆のものとしてたゞに上意下達、下情上通の國策的な役割のほかに、相互扶助的な積極性が一層要望されよう。

以上の他物價の問題、勞働條件への影響等の經濟的現象および、燈火管制による影響、イギリスの場合における都市兒童の地方への避難とこれに伴ふ都市マダム對農村婦人の摩擦、或は過渡的な現象として見られる大都市への一層の人口の集中による住宅難、交通事故の增加、さらに乳幼兒、兒童の體質の惡化等の社會的現象は、戰時および戰後を通じて問題となるべきものを持つてゐる。これらに對して各國でとられてゐる對策は現在のところ多く單なる抽象的なかけ聲か一時的な彌縫策を出でないやうである。

(三) 文化政策とその問題

文化に關聯して、文化政策なるものが人々の關心を集めるやうになつたのは比較的新しく、ナチスの政權獲得以後の現象と見られよう。勿論古來文化政策と稱せられるものがなかつたといふ意味でなしに現在の歷史的轉換期に當つて新しき强力政治の必要が、また必然的に文化政策の登場を促したといふ意味においてである。いはゆる自由主義文化の下において人々は恣意に流れ、客觀的權威に對する感情を失つて結局ニヒリズムに陷し、その行く可き方向を見失つてゐたといふべく、このニヒリズムの克服こそ新しき時代の文化にとつて最も本質的な問題であつて、同時に强權を以てするも如何ともし得ない人間の問題なのである。從つて新しき政治が眞の政治力を持つためには文化政策を不可缺の條件とし、その後に始めて文化の統制が可能であり、また從來少數の特權者にのみ委ねられた觀のある文化をして眞の國民文化たらしめ得るのである。かくして非常時の齎す物質的生活の縮少にも拘はらず、國民をして愈ゝ堅忍持久益々その士氣を作興せしめ得るので、戰時國民組織の再編成に當り文化政策の確立はその先決條件たるのである。苟も國民の支持なくして眞の國策は實行し得ず、永遠なる新秩序の建設は望み得ない。

ナチスが政權を握るや直にその重點を人間の教育におき、ナチス的世界觀による國民の再教育こそドイツ再建の基本的條件たるものとして、先づ文化政策の確立に向つて邁進したのである。卽ち一九三三年三月、大統領告示により「政府の政策竝びに組國ドイツの民族的再建に關し國民に對して啓發宣傳をなす目的」を以て國民啓發宣傳省を新設し、黨全國宣傳指導者ゲッベルスを啓發宣傳大臣に任命した。ゲッベルスの任務は「國民に對する精神的感化、國家、文化および經濟の作興、これに關する內外公衆の啓發およびこの目的に役立つあらゆる施設の行政」であつた。啓發宣傳省は從來他の各省に所屬してゐた一切の啓發宣傳事務を引き繼ぎ、その主管事務は報道制度、國の內外における啓發宣傳、國民的祭日および祭典、新聞雜誌、ラジオ、映畫、有毒な著作物の防止および各種藝術の全領域にわたつた。また同省に從屬する各種の組織の中で最も重要なも

のはドイツ文化院で、一九三三年一一月一日のドイツ文化院法第一次施行令によつて誕生したものである。その目的とするところは「藝術の創作に從事する人々を統合し、これを體系的に區分し、彼等の間に現れて來る種々の障碍や對立を除去し、その援助によつて現在および將來創作されるであらう文化財を、ドイツ國民の利益になるよう同目的に管理すること」である。一言にしていへば文化一般に關する事業の調整と、宣傳を通じて單一輿論を達成せんとするものである。尙この他に文化政策を擔當する機關としては、ドイツ文化評議會とナチス聯合K・D・F（ナチス文化聯盟とK・D・Fの合同によつて設立）とがあり、何れも自治體であるが、後者はその名の示す如く國民の厚生機關であつて、運動部、勞働美化部、旅行遊覽部、ドイツ國民教養部、「催し物」部に分れてゐる。

ドイツの場合に示された如く文化政策の重要性は、それが政治、經濟の諸部門における政策から遊離した抽象的なものではない點にあるので、文化政策自身の特殊性を持つと同時に綜合的な政策の一部をなすものでなければならない。また文化政策は人間を結合する力としての文化卽ち文化の協同性を發展せしめることによつて、國論の統一を圖るといつた消極的な意味だけでなしに、すべての國民に文化を與へると共に文化の創造者たらしめ、生產的な文化を發達せしめて從來の文化に附隨した消費的觀念を一掃するものでなければならない。換言すれば文化政策の目的は文化の制限ではなくして擴大にあるのである。卽ち藝術は觀客の數を買ふべきものではなく、觀客を指導し敎育し、常により高きものへ引き上げるものでなければならない。戰時にも拘らず毎年七月ミュンヘンで開かれる大ドイツ藝術展覽會が極めて盛大にとり行はれ（一九四〇年は七月二七日に開會された）、ヒトラーやゲッベルスの出席を見るのも、國民に藝術鑑賞眼を與へると共に「藝術がドイツ國民生活の一部をなしてゐる」事實のためであり、これによつて「國民道德を强化し、昂揚し促進させる」ためなのである。英佛の對獨宣戰のあつた九月三日は丁度ドイツ演劇シーズンの初日に當つてゐたが、國境方面の一二劇場を除いたドイツの全劇場は例年通り一齊にその幕を開けた。その後ヒトラーの文化奬勵が徹底すると共に全國の劇場が悉く開場し、各地で劇場の改築や新築が行はれた。觀客の數も戰爭に入つてがかへつて增加し、一人の俳優（ドイツの俳優數は一九四〇年七月現在六、三三六名）の出演回數は年平均戰前の一二六から一五六に增加した。また各劇場のプログラムはオペラ、芝居、音樂會、舞踊等何れも平時と何の變りも見せてゐない。たゞ前線の兵士達のためにつくられた移動的な前線劇團においては程度の低いヴァリエテを主として演じてゐる。出版物の數は一九三九年以來殆んど倍加したし、文學賞もさかんに行はれるようになり、一九四〇年度のドイツ文學國民賞はハンス・ヴェナティーアの「裁判官バルトルト」と、ウルリッヒ・ザンダーの「海の男」に與へられた。

戰時における宣傳の持つ役割はその國內的たると國際的たるとを問はず、文化政策の一部としてといふよりはむしろ直接戰爭の勝敗を決する原因の一として、前大戰以來特に重視さるゝに至つた。ドイツのこの方面における早くからの準備に對して、イギリスにおいて

も戰爭の開始直後、從來の外務省對外情報局を情報省に昇格せしめ、マクミラン卿を長官とし戰時の宣傳に當ることになつた。フランスでもおそまきながら情報局を新設し、ジヤン・ジロウドウを局長に任命した。前大戰の經驗は宣傳が單に事實を出來るだけ早く傳へるとか、或は事實の眞僞如何は問題でなくそのまことらしさによつて敵國を攪亂して、そこに恐慌の狀態を惹起せしむるためといふよりは、戰爭目的を納得せしむる思想的な一貫した原理の方がより效果的であることを敎へた。卽ち宣傳戰たると共に思想戰であつたのである。特に戰爭が長期戰となり國家總力戰となれば、個々の戰鬪ばかりでなく戰爭の全局面また背後の國民の政治、經濟、文化、且つその上に世界全體の國際關係までが一々微妙に影響して來る。殊に今次の大戰では交通機關の發達、通信網の整備、特にラジオといふ新しい武器を加へて宣傳は一層熾烈になると共に、その思想的面は一層强調されて來た。英國側の「民主制と自由のために」の聲に變りはないが、二〇餘年の經過はこの言葉の內容を著しく空疎にしてゐる。ドイツ側のそれは具體的な內容によつて敵および第三者を壓倒するに至つてゐないが、新しい世界を開く鍵の役割だけは務めてゐる。

各國の報道機關については各國とも戰時に入つても特別な變化を見せてゐない。日本の「同盟」と「聯合」との合同の例に見る傾向は當然の現象であり、また獨伊ソ聯においては夙に報道機關は國家に隷屬してゐる。フランスの敗北後アヴァス通信社は一九四〇年一月二七日をもつて解消し、新しく國營通信社（O・F・I）が設立され、舊アヴァスの海外通信網およびその通信員等はそのまゝO・F・Iに引きつがれることになつた（詳細はフランス・ブロック文化の項參照）。戰時の言論統制によつて各新聞の內容が一律化しそれぞれの特色を失つて來たことがしきりにいはれる。戰時の新聞の役割は一種の對外宣傳を兼ねると共に國の內外の情勢を報道することによつて、國民をして國家使命の遂行に協力せしめることでなければならない。從つて現在、事件の重要性に對する感覺と同時に表面的な解說でなしに根元的なものへの認識を國民に與へ得る力が要求されてゐる。國策への協力が單に消極的なものに止まつてゐる結果が、今日の新聞をして著しく無味乾燥にしてゐるのである。

文化政策に關して尙多くのものが殘つてゐるが、現在の文化政策確立の要望が一時的な現象に終る傾向を强く警戒しなければならない。單に旣成文化自體を利用し變形せんとする行き方や、現在要求されてゐる國防國家建設を皮相的に解釋することによつて、さしあたつての國防國家に必要な文化の創造を企圖することは、文化政策を以て、特別な部門に屬する一現象として處理せんとする爲政家の態度と共に、現在の歷史的轉換期を理解し得ざるか、或はこれを自己のために利用せんとするものであつて、眞に國を憂ひ國を愛するものゝ態度ではない。文化の地域的偏在の是正、生產的文化の建設日常生活面を通じての文化の把握、國民文化の建設といふことも、巡回映畫程度を以て彌縫し地方文化興隆の中心たる設備に關しては全くこれを缺く國家や、公共心の全く缺乏せる國民にとつては單なる抽象的概念に終る危險が多分にある。從つて問題の解決は廣く國民

敎育の振興に俟たなければならないのであるが、封建的閉鎖性と功利主義思想の滲潤するところとなつてゐる現代の敎育に何を期待することが出來ようか。敎員の待遇改善可なり、學生生徒の勤勞による再敎育素より可である。しかしこれによつて敎育を投資と心得る父兄、卒業免狀を就職戰線へのパスと思考する學生を絕滅することは出來ない。一言すれば問題は明治以來の人間の價値評價の仕方にあるのである。

思想問題も當然文化政策の領域に屬する。戰時の物質的生活の縮少（勞働力不足の一方に存在する轉失業の增加、中流層減少の傾向等交戰國共通の社會現象は思想問題の重要性を一段と增加して居り、各國共これが對策を急務とし銳意努力しつゝあるが、過激思想に對しては斷乎これが絕滅をなすと共に、積極策として確固たる國家思想の涵養と民族的矜恃の自覺を期すべくまたこれがため拔本塞源の策により思想だけを切離す危險を除去することが要請されてゐる。

現在の世界的傾向たる政治の優越といふことは一方において職業的政治家の位置に動搖を與へ、ドイツの邦參事會、イタリーの職能議會における例の如く、各部門の專門家の政治參與を要請してゐる。かくの如き從來孤立せる職能世界の共同提携は、文化政策における綜合性の要求と相應するものであつて、國民各自の自覺と自信とを到來せしめるものである。

（四）戰爭と文藝

戰爭による文化一般の危機が文學の上に如何なる形をとつて現れたかに就ては、政治、經濟と異つて戰爭の影響が直に具體的に意識されることは困難であり、時日の餘裕を必要とする。しかし戰爭に象徵される世界的轉換期の形相はやはり社會の本質的な變革を反映して文學の上にも大きな變化を見せて來ることは事實である。それは單に作家その他の時局便乘による似て非なる愛國文學の橫行、非常時局の精神的動員に基く作家達の權力への屈從といつた皮相的な現象でなしに、戰爭が國家の同時に個人の生死を懸けた行動であつて戰場にあると銃後にあるとの別なく生命的衝動の昇華の現象であり、又現代において戰爭の持つイデオロギーは一層擴大鮮明化されなければならず、孤高の精神を抱いて徒に憂如たるを許さないからである。一九世紀より二〇世紀初めにかけて世界文化の中心たりしフランスの沒落は、文化の持つ一の運命を暗示すると共に有閑階級の獨占物たりし文化の解放を意味し、懷疑的、保守的且つ享樂的文化から眞の人間的文化の創造を豫告する。

今次大戰の勃發までの一〇ヶ年卽ち一九三〇年代の文學の特色はナチスにおける民族的文學の傾向と共に社會的現象と深く結びついてゐたことである。アメリカにおいて、二九年の經濟恐慌は三二年以後の文學作品をいはゆる「不況の文學」たらしめ、政治的、社會的鬪爭を扱つたもの、アメリカの新しい世界的位置に基く作品、更に企業の大トラスト化による中小業者の苦境は、自己の社會的地位を確保せんとする氣持の一方に、諦めから來る享樂への傾向が文學に反映して、歷史的な作品（例へばミッチエルの「風と共に去りぬ」）となつて現れた。かゝる社會的事象への結びつきは四〇年代に入つて

一層強化されるものと考へられるが、文學において直接戰時を端的に代表するものは戰爭文學であらう。戰爭文學の形式は(一)手紙、(二)手記、(三)覺書(現地報告)、(四)感想、(五)小說、(六)戲曲、(七)詩、といつたもので、前大戰に際してフランスに最も早く、一九一四—一八年に「砲火」「殉難者の手記」等が現れ、イギリスでは一九二九—三〇年が戰爭文學の洪水期といふべきで、ドイツのルマルクの「西部戰線異狀なし」は一九二四年である。戰爭文學の特色としては特に感傷的たるか、誇張、虛僞の多いことが指摘されたがイギリスの場合の如き個人として描く際兎もすると反戰的傾向が現れ、集團として描かれたものに英雄主義的色彩が强かつた。

以上の如き諸傾向は今次の大戰に際して如何なる形をとつたか。先づドイツにおいては既にナチスの政權獲得以來文學の分野においても一大革命が行はれ、民族的精神を基調とする文學の樹立のために人生に對する責任感を喪失せしめるもの、またマルクス主義および人間心靈の絕對的現實を否定する精神分析にのみ終る作品を禁止し、トーマス・マン、フランツ・ヴェルフェル、エエリッヒ・ケストネル等を文壇より驅逐した。民族的文學の內容に關しては未だ必ずしも明瞭といふことは出來ないが、從來の主知的物質的傾向から主情的精神的傾向へ、超現實に代ふるに當面の現實を以てし、國際的たるより國民的であり、その先驅をなした鄕土藝術運動を一層擴大發展せしめんとするものであつた。しかして今次大戰の勃發に當つてポーランド進擊後と雖も尙國內は極めて冷靜な態度を持し、前大戰における如き國民的熱狂と英雄主義的昂奮は見られないが、かゝる傾向は文學にも反映し未だ滿を持して放たずとも評すべき狀態にあり、ブレーゲルの「告白」、ハインリッヒ・レルシュの「我等死すともドイツは生きよ」といつた前大戰の生んだ愛國的戰爭詩も現れてゐない。開戰後一年間の統計によると、既に東部戰線に關して一五〇種十萬部が刊行され、その大部分は現地報告であり戰勝の記錄で、戰爭前史およびポーランドにおけるドイツ兵の行動を描いたものを若干含み、ドウインガーの「ポーランドに死す」などがある。純藝術作品としては、エルハルト・ヴイテックの「ポーランドで起つたこと」ウイルヘルム・ベーターゼンの「死の踊り」ヘルチン・ラシユケの「橙の枝」ヘルマン・ベエコフの「双兒の果物」等がある。西部戰線に關しては未だ僅かに體驗記一〇種を數へるのみで(パリ陥落後のものは未記錄)、空襲、海軍を材料とするものは一九種、ノールウエー戰線に就ては三種に過ぎない。ドイツのかゝる文壇の動向は戰爭に對する昂奮を未だ示してゐないといふべく、このことは戰爭に對する冷淡を現すのでは決してなく、ヒトラーへの國民的信仰と、冷靜であればあるだけ內に秘められた深刻なる民族の決意を物語るもので、一時的な昂奮を以て解決すべき戰爭にあらざることの自覺を敎へるものである。ラテン民族たるイタリーにおいても同樣な自制的な立場が窺はれるが、元來の主情的傾向はドイツの冷靜さに比べて一沫の不安を藏するものと見るべく、ラウル・ラヂイチエの「多分明日は」の傾向はイタリアのいはゆる新未來主義と同樣に、やがて來るべき偉大なる光榮への期待に戰時を忍ぶ國民感情の現れを示すもので、理性的なものが要求される所以である。

フランスは開戰直前內閣に情報部を設置しジヤン・ジロウドウ以下アンドレ・モーロア、ジョルジュ・デユアメル、イレーヌ・キユーリー、ポール・モーラン等の知識人を動員し、對獨戰の意義闡明と中立諸國へ訴へる感情戰を開始した。文壇人の對獨意向はドイツの學藝における嘗ての世界的榮光に十分の尊敬の意思を現しながらも「今日思想迫害をこととする唯一人」に凡てを任ねてゐることを攻擊し、對獨戰をヒトラー打倒の意味において全幅的に支持してゐた。ロマン・ローランの如きも同樣であつて、ポール・ヴアレリイにしても戰爭の罪をヒトラー一人に歸してゐるので、F・モオリアックに現れる人道主義は、あくまで自己に忠實ならんとするフランス文學の本道を示すものであらう。開戰後僅かに九ケ月にして降伏の已むなきに至つたフランスが、「フランス敗れたり」に「ペンギンの島」の後繼者を見出した事實は文學の悲劇と云ふべく、近代フランス文學が最後の試煉に堪え得なかつたことの證しであり、しかもフランス人はその知性を育てた土地と氣候と產物の亡びざる限りなほその文化の復興を永遠に描くのである。評論家ノオドオはフランス敗北の原因としてフランス文學がフランスにおける新しい創造的運動の誕生を最も妨害した古い生活の勢力であることを述べてゐるが、これに對しモオリアックはモンテスキユーもパスカルも今尙存在してゐると述べ、過去の偉大な詩人の創造によつて示顯された自國民の精神力を反省すべきことを要求してゐる。敗戰後國民の文學的嗜好が著しく變化して來たことがいはれてゐるが、開戰前歷史乃至社會に關する作品に集中されてゐた大衆の興味は詩に移り、シヤルル・ペギー、ついでポール・クローデルのものが最も要求されてゐる(ペギーは前大戰當時マルヌの大會戰で戰死した詩人である)。その外アメリカのもの、例へばパック、ミッチエル等の作品が多く出てゐる。イギリスも開戰直後情報省を設け言論の統制と宣傳の整備を企圖したが文壇人の名は餘り現れてゐない。文壇においては言論の自由の擁護と共に戰爭目的の論議が行はれたが、個性的自由の信念維持のためにするヒトラーとの戰として戰爭を肯定し、獨國民とヒトラー主義との分離を希望し、そのための言說もしきりに行はれた。例へばJ・M・マリは、「ナチズムは權力獲得のために虛僞と暴力を組織的に使用し、權力維持のために科學的テロリズムを適用する大衆煽動政治である」といつてゐる。B・ショウを除いて打倒ヒトラーの旗幟に反對の聲はなく、反戰言說の現れざる處に今次の戰爭に對するイギリスの覺悟と、ミユンヘン協定の失敗以後のイギリス國民の感情を見ることが出來よう。戰爭文學としては未だ記錄すべき重要作品を持つてゐない。

アメリカの場合は現在も未だ直接戰爭に加はつてゐないのであるが、既に變革期に伴ふ社會的、人間的不安と混亂とは、開戰前二三年間の詩の上にその端的な表現を見せてゐた。國際危機の切迫と共に著しく自棄的となつたかゝる傾向が、獨ソ不侵略條約の締結とこれに續くヨーロッパ大戰とによつてさらに多くの影響を受けたのは當然である。獨ソ提携の結果はアメリカ共產黨の地位を俄かに失墜させると共に文學統一戰線を消滅せしめ、知識階級の受けた心理的影響に至つては測り知るべからざるものがあつた。戰爭によつてア

メリカの世界的位置が民主國の最大のしかも最後の城砦として意識された時、アメリカの將來について自覺的に、正しい建國の精神に立戻り眞の國民的傳統に根を下した運動と文學の確立が期待されたのであるが、實際にはむしろ後退的な審美主義、神秘主義の優勢が豫想されてゐる。

日本の場合既に數人の戰爭文學者と、「土と兵隊」に代表されるいくつかの戰爭文學を生んでゐる。「肉彈」や「此一戰」に比較して遙かに文學的なこれ等の作品は單に支那事變の產物としてゝなしに評價さるべきであると共に、これ等の作家が眞の作家たり得るか否かは今後の問題である。戰爭は文學をつくつても文學者をつくるとは限らない。戰時日本の何より要求する國內組織の再編成は文壇の統一を齎さうとしてゐる。また既に支那事變以前からの傾向ではあるが職業的作家によらざる文學の氾濫、以上三つの現象は外に現れた戰時日本文學界の動向といへよう。

(五) 戰爭と科學

戰時に入つてから科學振興の聲が世界的なものとなつて來てゐる。それは第二次大戰においてドイツのいはゆる電擊戰の赫々たる成果の結果といふべく、戰爭技術の進步に伴ふ機械力への重視が國防と科學とを緊密ならしめ、又軍事目的達成のための最も重要な原因の一である生產力の擴充を通して、生產と科學の密接なる關係が今更ながらに痛切に感じられて來たことによる。科學は數理の法則または經驗の法則に立つて永遠の眞理を探求する學問でありあくまで合理的な普遍的なものを要求する。中世の神學から學問および人間を解放したものはこの合理主義であつたしそこに始めて人間の發見が可能となつたのである。一九世紀に入つて生產技術とメカニズムの急激な發展は一方に唯物論を生むと共に、科學と合理主義とから離反することによつて始めて人間の本質を把握し得ると考へる非合理主義の哲學を齎した。現在の歷史的轉換は自由主義、マルクス主義および機械萬能の考へから人類の陷つた混亂を解決し人間を再び發見せんとするところにあるので、主知的分析的傾向を排して主情的綜合的傾向をとる。しかし注意されなければならないのはその初期において反動的に精神のみが重視されたが、やがて主意的であると同時に主知的であることが要求されて來た事實であつて、ドイツの「血の貴族主義」がヨーロッパ覇權の確立によつて訂正されなければならなくなつたのはその政治的例である。凡そ普遍的なもののみが眞の永遠性を有するものである。

日本の場合、近年の傾向はその東洋的傳統たる精神偏重主義によつて合理主義に立脚する科學を輕視し、教學と科學とは矛盾するかの如き錯覺に陷つてゐた。しかるに今次の大戰におけるドイツの教訓によつて、俄かに科學振興を唱へるに至つたのは日本文化の貧困に基くものではなくして、今日の官僚政治內にある封建的殘滓と功利主義とが便宜主義に墮して國家永遠の政策を樹立し得なかつた結果である。科學は單にその實用目的のためにのみ振興さるべきではない。同時にその振興によつて人間の持つ肉體力と精神力とが無視されては、科學のみならず文化の滅亡を招く所以で、人間あつての

科學であることは兎角一方的にのみ走り易い民族の最も銘記すべき點である。第二次近衞內閣の成立に當つて政府はその基本國策要綱を發表して「庶政百般に亘り速かに根本的刷新を加へ、萬難を排して國防國家體制の完成に邁進」すべきことを天下に表明すると共に國內體制刷新のための一要項として「國體の本義に透徹する教學の刷新」と竝んで「科學の劃期的振興」を擧げた。現在の歷史的轉換期に當つて「國本の培養、國運の發展は教學の刷新と相俟つて科學の振興による」ほかはないのであつて、科學振興の基本策としては、(一)日本科學の建設、(二)科學の綜合、(三)科學の社會化等が要望され、具體的には(一)科學研究の擴充整備、(二)科學研究の連絡統合、(三)科學者技術者の養成充足、(四)科學教育の刷新振作、(五)科學功勞者の表彰の諸項目が擧げられてゐる。日本の政治は肇國の精神に則り皇道主義を以てその大道とすべきもので、ナチスの模倣であつては決してならないが、科學振興の點に關してはドイツに學ぶべきものが甚だ多い。

一九三九年までのナチス政治七年間に國家事業として遂行された自動車專用道路網の建設、運河の改修、再軍備、勞働者生活の改善、ジークフリード線の構築等は、金額にして九七〇億マークの困難なる財政からは到底想像も出來ない巨費を要した。しかもこれによつて一方に六五〇萬の失業者救濟を完成することが出來たのである。かゝるドイツの成功はその優れた組織力の結果であると共に、科學が單に科學知識としてのみならず科學的管理として政治、國防、經濟、社會その他すべての方面に導入されたからであり、換言すればドイツ國民性の科學化に基くものであつた。また石油資源に惠まれないドイツは早くから石炭液化による人造石油事業に專念し、フイッシャー法、イー・ヂー法等によつてナチス政權成立直前年產額三〇萬瓲であつたが、ヒトラー治下の努力は今日年產額三六〇萬瓲に達し戰時石油消費量の約二分の一を賄ひ得るといふ。戰時に入つて科學に關する個人の見解發表は許されず、すべてドイツ文化院の評議員を通じて行はれることになり、(一)代用食品の研究、(二)代用燃料の改良增產、(三)人造纖維の研究、(四)、新エネルギー源の發見、(五)ポーランドその他新付地の資源開發、(六)鐵のスエーデンスペイン依存の修正等に重點がおかれ、第二次四ヶ年計畫(一九四〇年一〇月一八日發表)の遂行と戰爭目的の貫徹を期してゐる。

イギリスにおいても直接戰爭に關聯する科學的研究の動員は早くから行はれ、また勞働省では戰時中科學的研究事業の衰退の惧れあるによつて王室學會(Royal Society)その他の下に科學技能者の專門的行政的資格登錄を行つた。八六、〇〇〇名の登錄者中研究繼續可能のものは僅かに七、〇〇〇名內外に過ぎず、研究所の閉鎖せるものも多く、長期に亙る研究は概ね中止され、また技術者の需給調節も不十分である。政府は原則として科學者に對し個人としての全的自由を認め研究團體に對して國家の必要とする問題を提示し、その完成に當らせる方針をとつてゐる。敗戰前のフランスは獨英の中間的行き方をとり國立科學工業研究發明局(一九三七年設立)による統一を圖つてゐたが科學者の動員にまで至らなかつた。戰爭開始直後エミール・ボレルは「フランスの科學は今や完全にドイツを凌いでゐる。

ドイツはユダヤ系科學者の追放により（アインシュタイン、フランク、フライ、ゴオルドシュミット等を指す）自國の科學の頽廢を招いた」と豪語した。

ドイツの勝利が單に軍事技術部門のみにおける異常な科學力の發展から齎されたか否かは既に明かなことであつて、理論の側面が看却されてゐるとの評は當らない。勿論政治が文化に對して支配的な現代において、政治上の民族主義の擡頭は必ずや科學の上にもその影響を與へるであらうし、戰爭による科學の發達がある程度の偏向を示すことは避け難い運命である。しかし、來るべき世界が一民族一國家の對立にあらずして、國防圏乃至經濟圏を同じくする「數個の國家群の生成發展」にほかならないとすれば、狹義の民族主義が眞の指導力たり得ないと同樣に、科學はその終局目標を一民族、一國家の制約から離れて人類の普遍的な生活目的に貢獻すべく發展するであらう。また現在の民族的性格の强調が、却つてかゝる普遍的な發展を招來するものとも考へられる。一方戰爭による科學の教訓が科學の社會化、卽ち大衆化を促進することは疑なきところで、單に科學のみならず文化のあらゆる要素が萬人のものとなるところに、現在の歷史的轉換の意義が存するのである。

（六）人口問題

戰爭において最後の勝敗を決定するものは軍隊だけでなく、その背後にある資源卽ち物資および人間であることはいふまでもないことで、從つて人口の問題は戰爭目的の達成の上に極めて重要な意義を持つてゐる。しかし人口の問題が科學的に研究され出したのは比較的新しい時期に屬し、一國として人口調査を行つたのはアメリカの一七九〇年が最初であり英佛は一八〇一年からで、また理論的著作の代表とされるマルサスの「人口論」の第一版は一七九八年、同じく第六版は一八二六年に出てゐる。しかもマルサスにおいては、如何なる方法によつて强大有能なる人口を得るかを究明せんとして結局いはゆる人口の幾何級數的增加に對し、生存資料は算術級數的に增加する結果、現實の世界は「不健康、不德かつ不幸なる人口」を以て滿たされてゐると見たので、人口と生存資料との不均衡を均衡化せしむるものとして積極的妨げ—戰爭、飢饉、疫病—と豫防的妨げ—道德的抑制、罪惡、貧困—とを區別した。マルサスの一般的理論から見れば、現在の戰爭の如きはその主張たる積極的妨げの一現象に外ならないのであるが、現在重要なのは人口と食物間の均衡不均衡の問題にあらずして、如何にして軍事目的達成の一要因たる人口を强大たらしめんかとするにあつて、各國によつて先づその量的增大が企圖されてゐるのである。

古來民族或は國民の人口に大なる變遷のあつたことは疑ひなきところで、たゞ正確なる材料を缺くことによつてその事實を詳細にし得ず、從つて國家の隆盛と人口數とは當然正比例すべく考へられながらも明確なる結論に達して居なかつた。一九世紀以後になつてベロッホ、ルヴァスール、カールシュテット、モムベルト等の研究の出づるにおよんで西洋諸國の各時代の人口についてある程度その變遷を知ることが出來るやうになつた。ヨーロッパの三主要民族たる

ラテン、チュートン、スラヴの三者は一四世紀初頃はそれ〴〵三、〇〇〇萬、二、〇〇〇萬、一、〇〇〇萬であつたが、一八世紀終りには六、〇〇〇萬、五、四〇〇萬、五、〇〇〇萬となり、ラテンに比べてチュートン、スラヴの著しき躍進を見、さらに二〇世紀初めにラテンの九、六〇〇萬に對し、チュートン、スラブはこれを追越して、一二、〇〇〇萬および一三、〇〇〇萬に達してゐる。かゝる變化はそれ〴〵の民族のエネルギーを示すといふよりは、早くから比較的人口稠密であつた南および西南ヨーロッパに對して、北および東北ヨーロッパは人口增加の餘地を多分に持つてゐたことと、チュートン民族の領域における鐵、石炭等の資源の豐富さが、產業革命後の近代工業勃興に當つて大いに人口增加の可能性を與へたと見るべく同時にラテン民族殊にフランスにおける文化の進步、生活の向上等に伴ふ人爲的理由から來る人口停滯に基くものといへる。注意さるべきはヨーロッパにおける各國の勢力の消長がかゝる事實を多分に反映してゐることであつて、同樣にして一六世紀後半のスペインの隆盛、一八世紀初めのルイ王朝の强大の理由も說明し得べく、またナポレオンの盛時におけるフランスの人口三、〇〇〇萬はオーストリアの二、四〇〇萬、イギリスの一、五〇〇萬、プロシアの六〇〇萬を遙かに凌ぐ數字であつた。勿論人口の量のみが、國家の盛衰を決定すべき唯一の要因ではあり得ないが、特に戰時においてその重要性は一層效果を發揮するので、今次の大戰に當つて列國は、人口增加のために眞劍なる努力を拂つてゐる。

人口增加の基本策は先づ出生率の增大と死亡率の減少を圖るにある。前者の爲には結婚（特に早期の）の奬勵、後者の爲には社會施設の充實が要望されてゐる。結婚の奬勵についてとられる政策としては、ドイツの例に見るように結婚年齡の短縮、結婚資金および出生資金の貸付、獨身稅の徵收が行はれ、イタリーにおいても一九二六年一月の法令を三七年八月改正し、夫がイタリー市民權の所有者であり、夫婦の結婚年齡が滿二六歲を超えず、且つ年收一二、〇〇〇リラ以下なるものに限り一、〇〇〇リラより三、〇〇〇リラまでの結婚資金を貸與し、一男兒出生する每に一年間返濟を猶豫すると共に、長男出生すれば貸付金の半額を免除し、四男兒の出生により全くこれを免除することを規定した。またイタリーの獨身稅は二五歲より四五歲の男子を目標とし、年齡による累進的高率稅であつて、官公吏、陸海軍人（戰時を除く）たるものにして二八歲以上の獨身者はその身分保證を停止される。

一九二七年には三二八萬の武裝兵を有したフランスは今次の大戰直前には、僅かに五〇萬を有するに過ぎず（動員數は一〇〇萬と稱せられる）戰敗の一因をなした。戰後フランスは「勤勞、家庭、祖國」のスローガンを揭げる一方、離婚法の改正、相續權の擴張、また三人以上の子を有する男子の優先就職權を認める等の策に出てゐる。一九世紀後半千人につき三五の出生率を持つたイギリスは一九三三年には一四・七となり、ドイツの九、七〇〇萬に對する英本國民およびその系統合せて七、〇〇〇萬は緊急の對策を必要とする譯だが、社會衞生設備の增加、家庭生活の改善といつた一般策を出てゐない。結婚の增加（一九三九年の結婚數は四三・七萬で前年に比し七

萬增）の一面、空爆又地下生活によつて死亡率は都市において二〇%も増大し（一九四〇年九月―一二月の爆死數は二三、〇〇〇）、幼兒死亡率も戰前に比べ一五%増となつてゐる。

世界で最も優れた出生率と死亡率とを併せ持つ日本は最近その増加率の減退が注目されてゐたが、一九四〇年一〇月の第五回國勢調査の結果によれば、內地外地を含む總人口一〇五、二二六、一〇一人、內地のみの人口七三、一一四、三〇八人で一九三五年に比し總人口において六二九萬餘、內地人口において三八六萬餘を増加したが、増加率は第一回國勢調査以後の各五箇年毎に現れた比率に對して一・八乃至二%を減じてゐる。此る事實は支那事變の長期化によつて一層問題となり一九三九年夏人口問題研究所の設置を見、更に一九四一年一月、近衞內閣は人口增殖のため次の諸案を決定した。先づ昭和三五年（一九六〇年）までに內地人口一億を目標とし、ために今後十年間に結婚年齡を現在より三年早めると共に一夫婦平均出生數四を五とするもので、基本精神は、（一）永遠に發展すべき民族たることの自覺、（二）個人を基礎とする世界觀を排し、家と民族とを基とする世界觀の確立と徹底、（三）東亞共榮圈の確立および發展のためその指導者たるの矜恃と責務の自覺、（四）皇國の使命達成は內地人口の量的、質的、飛躍的發展を基本條件とする認識の徹底にあり、增加對策としては、（一）不健全思想の排除竝びに健全なる家族制度の維持强化、（二）積極的結婚媒介の指導、（三）學校制度の改革、（四）女性教育における母性の國家的使命の自覺および健全なる母性の育成、（五）二〇歲以上の女子の被傭抑制、（六）多子家族に對する優先權（物資）、表彰、優遇、（七）姙產婦、乳幼兒の保護、（八）人爲的產兒制限の禁止防遏、花柳病の絕滅、が擧げられた。死亡減少策としては先づ日本の最も弱點である乳幼兒死亡率の改善と結核豫防に重點をおき、今後二〇年間に死亡率を三割五分低下せしめんとするもので、そのためには、（一）保健指導網の確立、（二）保健婦、保育所の設置、（三）健康保險制度の擴充强化、（四）還境衞生施設の改善、特に庶民住宅の改善、（五）過勞防止のための國民生活の刷新、（六）國民榮養の改善、（七）醫育の刷新を期し、更に資源增强策として、（一）人口の分散、（二）農業人口の確保（日滿支を通じ內地人口の四割はこれを農業に從事せしむ）、（三）學校における青少年の精神的肉體的錬成、（四）都市青少年の心身錬成、（五）青年男子の一定期間團體訓練の義務制、（六）厚生體育施設の增加と國民生活樣式の確立、（七）優生思想の普及、の各項を取り上げ、以て國土計畫の一部として人口の產業的地域的分布の再編成に重點をおいた。

特殊な人口動態の例として南米の場合が擧げられる。ブラジルは一八四〇年の六〇〇萬から一九四〇年の四、五〇〇萬と七・五倍の激增を示してゐるが、ラテン・アメリカ全體として同じ百年間に二、七〇〇萬から一三、七〇〇萬に增加してゐるので、ウルグアイの如きは實に二〇倍、アルゼンチンの一五・五倍がこれについでゐる。かかる人口の急激なる增加の原因は移民によるものであつて、ブラジルにおいては過去一五ヶ年の間に四〇〇萬以上のヨーロッパ人口を迎へて居り（イタリー―一四〇萬、ポルトガル―一二〇萬、スペイン―五八萬、ドイツ―一九萬）、アルゼンチンでは過去五〇年間に

約六〇〇萬の移民を見た。今次大戰の勃發により移民の數は減少の一路を辿つてゐるが、問題となるのはかゝる複雜な人口構成が國家の發言權の上に及ぼす影響であり、元來ラテン系民族の多い南米において合衆國による汎米主義が如何なる效果を納めるか。殊に新しい移民の傾向として舊の國家人種に對して持つ執着心の强烈さは、南米諸國の人口對策が今や一轉機に立つことを示すものである。

以上の如き各國の人口政策が戰時の惡條件下において遂行されんとする時、幾多の困難に遭遇すべきことは必然であり、しかも敢へて强行されねばならないところにその意義を持つてゐる。第一次世界大戰において六、五〇〇萬の從軍と八五〇萬の戰死、二、九〇〇萬の戰傷を出した事實を想起すれば、戰時の人口問題の重要性は一層明かとなる。民族の歷史が「場所と食物とのための永久の鬪爭」であることは人類史に一貫する基本的事實であり、人口が歷史發展の起動力であることはローマの沒落に就ても、又第一次大戰後の有色人種の抬頭に基く西歐の危機に關しても論ぜられたところであつた。一九三〇年W・S・トムソンはその著「世界人口における危機區域」の中で日本の滿洲進出の必然性と共に西太平洋への進出を豫言し、殊に後者が日本の眞の發展方向たることを述べ、且つその成功を豫想してゐる。人口問題において量と共に或は夫以上に重視さるべきものに質の問題がある。又生活費の昂騰と物資の不足に喘ぐ戰時下國民にとつて扶養家族の增加による生活苦は、百萬の青年を戰地に送つた銃後女性の結婚難よりも大である。しかし出生率は「熱烈なる生活力を永遠に傳へようとする國民の意欲」であり「民族の强弱を計るバロメーター」なのである。

（七）民族問題

現在の歷史的轉換期への出發となつたものはドイツのヴェルサイユ體制打破の運動である。一九二〇年二月、ナチス黨大會はその綱領二五箇條を發表し、「我々は他國民に對するドイツ民族の平等權、ヴェルサイユ竝にサン・ジェルマン條約の廢棄を要求する」旨を宣言した（第二條）。同時に敗戰後の國力の疲弊を速かに回復し、强制されたる共和制下に如何ともする能はざりし國內の政治的、經濟的、社會的混亂を根絕せんがために「民族自決權に基くドイツ人の一大ドイツ國への結合」を要求したのである（第一條）。卽ちドイツ再建の基礎として取上げられた民族主義は、二十五ヶ條中の六ヶ條にわたつて現れ、ドイツ國家社會主義の思想的根底をなすもので、種族の哲學を昂揚し、「血のミトス」に基き血の純潔を要求すると共に、先づ大ドイツの統一を企圖したのである。世界の種族を分つて文化創造者、文化維持者、文化破壞者の三とし、アーリアン族のみを以て文化創造者となす主張は、ドイツがこの目的を實現せんがための手段にほかならない。何故なら理論的にも民族は決して社會を決定するものではなく、社會が民族を決定すべきもので、このゲルマン族のみの優越の主張はドイツ國民の士氣を作興し、當時人口總數においては僅かに一%に過ぎなかつたが、ベルリンの辨護士の七〇%、醫師の六〇%、新聞經營者の九〇%、金融機關に至つては全くこれを獨占してゐたといはれるユダヤ人の手中よりドイツを解放

するための手段であつた。即ち初期ナチスにおける民族主義は血による排他性をあくまで主張すると共に、血による結合性を何處までも要求したのである。

新しき民族主義の主張は、既に近世において民族國家として成立せる國家がその興亡の危機にあたつて國内再編成のために必要としたものであつて、國民の民族的自覺と民族價値の宣揚を主要目的とし、新しい組織と指導者理念の確立によつて國難の打開を期したのである。その際注意すべきはいはゆる全體主義國家の成立を可能ならしめた條件として、これらの國における政治的後進性、換言すれば封建的要素の濃厚なりし事實であつて、獨伊の近代的統一國家としての完成はそれ〳〵一八七一年(明治四年)、一八七〇年であつた。このことは現在の民族主義の主張がその精神において多分に復古的なる事實と關聯するもので、また社會學理的に、いふところのゲゼルシヤフトよりゲマインシヤフトへの復歸——勿論單なる復歸であり得ない——と軌を一にする。從つて血緣社會より發達して地緣社會に至つた人類の歴史は、ナチスによる血の重視によつて逆轉されたかの如く考へられ、ナチスを以て完全なる反動とし野蠻社會への還元として批判せられる原因の一となつてゐる。この場合問題となるのはかゝる抽象論にあらずしてナチスの行つてゐる事實であるが、既に明かにされた結果は民主國家に對するドイツの勝利であり、しかもこのことはローマ人がゲルマニア人によつて亡ぼされた意義とは區別して考へられなければならない。文化人が野蠻人に征服されたのではなくして、近代的社會の持つ必然的過程なのである。地緣社會の發展の結果は世界からヒューマニティを奪つた。全體主義社會において人間性が失はれたのではなく、全體主義社會は再び人間性を發見せんとする努力の一である。ドイツにおいて現在尙資本主義的な諸關係は存在してゐる。しかし資本主義の根本理念、資本の利潤を絶對的のものとする資本主義は既に支配力を失つて、國民および勞働の理念がこれに代つてゐるのである。ドイツにおいてナチス綱領第一條および第三條に已に示された如く、民族主義的根據の下に大ドイツ民族の構成およびドイツ民族の生存と過剩人口收容の土地として植民地の要求がなされてゐる。大ドイツ主義とは、ドイツ民族の隣接領域における政治的結合であり、その結果としての大民族協同體が生存を確保すべき領域の占有を要求する。かゝる要求はイタリアにおいても同樣であり、その結果隣接國または他の國家との摩擦は必然であり、戰爭への危險性を内包してゐる。從つて英米佛等の民主主義諸國は獨伊をして國際秩序の破壞者であり、世界平和の攪亂者として攻擊するに對し、全體主義國家は現在の國際秩序は過去の暴力の集積であり、優秀なる自國民族の發展を阻止する障碍物としてあくまでこれが變革を主張するのである。ナチスの政權掌握後この要求は何等變更されず、世界經濟恐慌打開策としての各國におけるブロック經濟主義の採用によつて一層積極化されたのである。

前大戰の終結に際して强調された民族自決主義は、少數民族をして各〻その處を得せしむることを理想としたものであつたが、結果は少數民族の數をある程度減少せしむることは出來たものゝ、却つて以前より困難なる狀態を齎すこととなつた。それは英佛が新らしい諸小國を設立せしめることによつてドイツを包圍すると共に、オーストリアその他との連衡を不可能ならしめ、以てドイツの再起を防止せんとする利己的政策の僞裝であるからといふよりは、かゝる諸小國が實際に國家として政治的にも經濟的にも、到底獨立を維持し得ないからであり、また民族自決主義の主張夫自身が持つ機械性の結果である。即ち民族自決主義はその政治的形態を如何にとるにしても非實際的な概念に過ぎないので、元來の民族といふ言葉は人種が生理的なものを意味するに對して社會的文化的な意義を持ち、換言すれば歴史的社會經濟的構成を意味する。ヴェルサイユ條約によつて成立した諸小國の地理的位置は幾多民族の混合地帶であつてその民族的構成は極めて複雜し、到底一民族のみを以て一國家を編成し得ざる結果民族自決主義の採用に當り、新に成立せる國家内部にもその原則を適用すべきことが規定せられ、「出生、國籍、言語、種族又は宗教の如何を問はず國内の一切の住民に對しその生命及び自由につき充分完全なる保護」を保障し、「法律の前に各人平等たるべく且つ種族、言語又は宗教の如何を問はず同一の公權及び私權を享有」することとなつたのである。しかしかゝる規定にも拘はらず實際には國内における少數民族は常に壓迫せられ絶えず紛糾を續けて何等の解決も見られなかつた。ドイツはこの狀態を利用することにより全ヨーロッパにおける二、〇〇〇萬を稱されるドイツ少數民族の存在によつて、着々その前大戰における失地を回復し、さらに年來の宿願たるバルカン、近東方面への進出を企てたのである。

既にドイツのヨーロッパ制覇における事實が決定的となつた現在において、ドイツの建設すべきヨーロッパの新秩序はナチスの民族主義の主張と如何なる關係におかれるであらうか。戰前ドイツ本國内における少數民族の數は全人口六、四六〇萬の一・六%に過ぎない一〇三萬餘であり、その約半數を占めてゐたユダヤ人はナチスの反ユダヤ政策によつて更にその半數に減少したといはれる。オーストリーの併合によつて六七〇萬の人口を加へたが、その九四%はドイツ民族で先づ問題とすべきものはない。しかるにチェッコスロヴアキアの保護領化によつて加はつた約一、四七〇萬の人口の中ドイツ人は二五%の三三二萬で結局一、一四〇萬の少數民族を加へたことになる。ポーランドに關しては、獨に分割された地域の人口數不明の僞數字を擧げ得ないが、二、九六〇萬の人口の中ドイツ人は僅かに一〇〇萬餘、ロシア系は一二〇萬で結局千數百萬の少數民族をドイツは加へたことになる。かくてドイツはその少數民族の解決を要求し、これを實行することによつて自國内の少數民族を增加するといふ矛盾およびチェッコ人並びにポーランド人の民族意識の强固さの二つの問題に當面した。更に北歐戰線および西部戰線等における勝利によつて著しく擴大されたドイツの勢力圏はまた新たなる民族問題を提供したといはなければならない。ナチスのいはゆる血緣民族主義は「肉體的特徴とそのためにまた精神的特徴を有する人種的特性」の絶對性並びに不變性を主張するものであるから雜婚等による民族の融合を企てることは考へられず、とすれば征服、被征服の關係のみが成立し、ナチスの主張は英米の侵略政策と全く變りないものとなる。とすれば今次の大戰は前大戰と何等撰ぶなき單なる

ヨーロッパその他における覇權獲得戦に止まり、人類文化の發達に貢献すべき何ものをも持ち得ない。從つて現在の事態は理論的にもナチスの元來の血緣民族主義の飛躍或は止揚を見るべきであつて、既にこの傾向はヨーロッパ協同體說に具體化されてゐる。ナチスの代表的理論家であり、民族の血の神話の鼓吹者であつたローゼンベルクも、最近に至つてヨーロッパ諸民族の共同生活を說きヨーロッパ協同體を主張するに至つてゐる。ナチスの政策乃至行動が常に現實的であり變通自在なものであることは獨ソ不可侵條約の例に徵するも明かであつて、また眞の現實的政策とは一時的、便宜的のものにあらず、常に永遠恒久なる目的は堅持しつゝ廣き視野と歷史的合則性の上に立つ融通無凝のものでなければならない。ローゼンベルクの主張は全體主義文化における民族の理念が結局諸民族共同の理念と結び、更に人類の理念と結びつくべきものたることを暗示するものである。

支那事變およびこれが解決たるべき新東亞秩序の建設も、また民族問題を以てその重要なる素因としてゐる。東亞において日本における民族主義運動の樣相は獨伊の場合と同樣の傾向を持つのであるが、支那およびその他の諸國にあつては歷史的發展の相違から來る特異な形をとらざるを得なかつた。卽ち一六世紀來アジアに進出したヨーロッパの勢力は、日本を除く全アジアをしてその植民地および半植民地としたので、ヨーロッパ資本主義の侵略に對して對抗すべくアジア民族のおかれた位置は餘りに脆弱であつた。半封建性と著しい停滯性の上におかれた農業社會とは、ヨーロッパ資本主義の進出により何等解決されず却つてその傾向を顯著とし、百年足らずして植民地化乃至半植民地化の運命を擔はざるを得なかつた。唯一の例外である日本においてすら少くともある時代において文化的面における半植民地的傾向を多分に見ることが出來る。かゝる歷史的事實は現在要請せられつゝあるアジア民族の解放および大東亞共榮圏の建設に當つて十分顧慮されなければならない。日本のロシアに對する勝利を契機として勃興したアジア民族運動は、機未だ熟せずして已み第一次世界大戦を迎へた。大戦中、ヨーロッパ商品の杜絕に伴ふアジア各地における產業の躍進、植民地の本國援助に對する代償としての民族解放案、デモクラシイ思想の普及、ロシア革命に現れた被抑壓民族解放の主張等の諸事情は再びアジア民族運動の勃興を促し、ヨーロッパ勢力打倒による民族的獨立を要求せしめた。支那においてかゝる傾向は日支相互間の政治的經濟的事情およびヨーロッパ的勢力のアジア復歸とその巧妙なる對支政策によつて、專ら反日抗日運動として現れ、そのおよぶところ滿洲事變竝びに今次事變の勃發となつたのである。滿洲事變は日本における一切の自由主義的なるものゝ沒落を齎し、新しき民族主義の興起となつた。支那事變はかゝる民族主義の一層の昂揚と、世界的性格の附與とによつて八紘一宇の大精神の顯現となつた。既に自覺せる新支那の誕生は日本の眞意を理解することによつて、東亞共榮圏建設の一端の責任を分擔してゐる。しかし支那における民族運動は今尙英米の魔手に踊らされて抗日の迷夢を忘れないでゐる。更に英米の支配下にあるアジア諸國においてもその民族運動の主流は、インドの例によつて

も明かなる如く、決して日本の眞意を理解するものではない。一九三八年一月の近衞聲明によつて明かにされた日本の東亞新秩序建設の理念はその具體的方法について、東亞協同體論、東亞聯盟論、東亞民族主義論等いくつかの解釋を生み、必ずしも國論の統一を與へるものでなかつたが、一九四〇月一一月三〇日の日滿華共同宣言によつてその歸趨は明かにされた。しかも尙問題として殘るものはその實際に臨んでの具體的なるものであつて、東亞協同體論において日支兩國相互の關係は双務的互惠的關係の維持にありと主張されたが、これのみを以て抗日支那を解消せしめることは不可能であらう。アジアにおける民族問題の解決は大東亞共榮圏建設によつてなされるといふよりは、民族問題の解決こそ大東亞共榮圏の完成を可能ならしめるものであつて、この困難なる大事業は武力のみを以てしては如何ともし得ず、武力と共に眞の新しき文化の建設を必要とする。しかも世界の全體主義化によつて設立さるべき全體主義文化は偏狹なる民族主義の文化であることは出來ないのである。

（八） 新秩序建設の理論

現在の事態は既に明かにされた如く、如何にして古き世界秩序の混亂を切拔け、新世界秩序の建設を斷行せんとするかの努力に拘つてゐる。破壞であると同時に建設であり、戰爭も平和への手段として、その歷史的必然性の故に肯定されなければならない。僞善的な世界平和は人間の委を今一度取返すことによつて、眞の人間的文化の建設のために、揚棄さるべきである。歷史的轉換は戰爭を伴はざるを得ないとしても、戰爭は過渡期の現象であつて、その後の新しき秩序の建設なくして歷史的轉換期と呼ぶことは出來ない。經濟的侵略に代る經濟的侵略は何等歷史的轉換であり得ない。第一次世界大戦は、英の世界支配に對する新興ドイツの挑戦であつたが、今次の大戦は、いはゆる民主主義に對する全體主義の戦ひとして理解され、しかも單にそうした理念のみの戦ではなく、「生活力なき生活圏」に對する「生活圏なき生活力」の戦であり、經濟的社會的見地からこれを理解すると共にその積極的主張たる文化全面にわたる再建の意欲を知ることによつてその世界史的意義が發見される。このことは今後の世界を制約する理由となり、日獨伊を中心とする世界新秩序の要求は、單に「持たざる國」の滿足を企圖するものではなく、これによつて英米の支配の下に喘ぐ全世界の民族をその不正不合理なる位置より解放し、眞の世界平和を實現せんとするものである。

來るべき世界の新しい秩序とは如何なるものであらうか。今日第一に想定されることは國防圏乃至經濟圏を同じくする數個の國家群の成立、換言すれば世界の各地域において民族的、經濟的、地理的諸條件を基礎とする生活協同體の出現である。この協同體理論の展開は日本の東亞協同體論の中に先づ現はれ、民族の問題について屢々論爭が繰返されたが、民族主義對地域主義といふ形でとりあげられたこの問題は、むしろ兩者の結合の上に協同體の觀念を築くべきものと考へられてゐる。この理念において重要視さるべきは、日本の民族主義が單なる民族的エゴイズムとして他の東亞諸民族を侵害するものではないといふ點と、東亞の地域的運命の共同の防衛は日本

の指導によつてのみ可能であるといふ點である。ドイツの主張するヨーロッパ新秩序が如何なるものかは未だ具體化されて居ないが、一九四〇年七月のフンク聲明は先づヨーロッパにおける經濟的新體制を明かにしたものといへよう。「新ヨーロッパ經濟體制はドイツとヨーロッパ諸國との間に既存する密接な經濟的協力を基礎とする自然の事實から發生する」といふこの聲明は、「戰爭終了後は全ヨーロッパに對しドイツが戰前および戰爭中成功をかち得た經濟政策と同一の政策を適用し」また「ライヒスマルクはヨーロッパにおける支配的通貨となるであらう」「金は將來ヨーロッパ通貨の基礎たる性格を失ふであらう」と述べてゐる。經濟協定の締結、生產の强化等豫想せられる新體制においてその根本基調たるものは、自給自足と合理的計畫性を基礎とする有機的な統一體としてのヨーロッパであり、ドイツの他國に對する重壓にあらずしてあくまでヨーロッパの共同感情の强化たるべく、同時にそれは他の政治、文化各面においても要請さるべきものであらう。

世界新秩序に關する建設的な提案といふよりは今次大戰に對する和平の試みとしてローマ法王ピオ一二世は一九三九年一二月二四日の演說において次の五ケ條を擧げた。(一)大小何れを問はず各國民の生存と獨立の保證、(二)世界の軍備の奴隸から解放、(三)世界の諸問題を和平裡に解決するため現下の國際諸機關の缺陷の是正、(四)各國並びに各少數民族の必要且つ正しき要求の是認、(五)各國並びにその政治家によりキリスト敎主義が遵奉せらるべき規定の設置。

更に世界のいはゆる文化人達が來る可き世界に關してなしてゐる提案の中代表的なものとしてH・G・ウエルスを擧げる。彼は現在が歷史的轉換期たることを認め、從つて「新しい生活方法が樹立されない限り人類の滅亡は必至であり、戰爭後の世界會議はヴェルサイユ會議の如く眞の新しいものを齎し得ず」とし、戰火しきりなる現在において「偉大なる討論」を行ふべきであるとする。彼は世界平和への道としてクラレンス・ストレイトの世界聯邦論(一九三八年)をとりあげ、その聯邦案の分類である民主主義國に加へられたアメリカ、イギリス、フランス等が何等民主國家にあらざることを指摘して「人權宣言十箇條」を提出する。卽ち(一)各人は人種、信仰、意見の如何に拘らず、その生存する限り肉體的、精神的活動を爲すために十分なる榮養、醫療等の設備を與へられる。(二)各人の能力に應ずる敎育の機會均等と、言論、結社、信仰の自由、(三)職業の自由と生活の確保、(四)共同の福祉に反せざることを條件とする貿易の自由、(五)合法的に獲得せられたる個人財產の公的保護、(六)旅行の自由と住居不侵害、(七)精神異常者にあらざる限り、法律を犯すことなしに六日以上、また公判なくして三ケ月以上監禁せらるゝことなし。更に良心的な反對を示す限り公の徵募に應ずることなし。(八)批判の自由と名譽毀損からの保護、(九)當人の自由意志によらざる限り斷種せらるゝことなし、(一〇)以上諸項目の不修正、不變更。

ウエルスのかゝる主張が、彼自身の成長した環境との相關において理解さるべきは當然であるが、彼の「文化史」に現れた世界觀は

己に固定されと見るべきであつて、彼は「自由の中に求めて得られた眞理と美の至高な價値」を「世上の政府或は國家といふが如きものよりより偉大」なるものとしてあくまで主張する。ナチス・ドイツおよびソ聯は彼にとつては人間文化に對する暴力の行使者に過ぎないので、「現代のあらゆる國家統制に對する人間知性の反逆」を宣言する。從つて彼の反逆は獨伊ソ聯に限らず英帝國自身にも向けられるもので、要するに彼は知性を以て一の遊離せる存在夫自身と見做しプラトン的なユートピア(彼自身のユートピアは、「人間解放」「五十萬年後の世界」「世界國家」「近代ユートピア」に示す如く形式的には近代的科學的である)を夢みつゝ、知性の貴族主義を主張するのである。たゞ注意すべき點は彼が世界聯邦的な團結を暗示してゐることで、「今日直に縮減せらるべくもない戰爭の苦惱化に、生活は異常なる急速度をもつて「集產化」せられつゝある。單に獨裁國のみならずあらゆる國々において、食料、住宅、主要商品、大企業、或は運輸機關等の統制權は國家の手中に歸さんとしてゐる。かくて自由主義的制度の復活せられる可能性は既に極めて疑はしい」として世界の集產主義制不可避を述べると共に、「無能力なる政治家、支配者」を「知性に輝く輿論」によつて制御し、「自由な批判、敎育の普及、出版、討論等の自由」を大いに主張することにより「光に輝いた集產主義制」を齎し、「高度の集產主義的世界秩序」を築かんとするのである。彼が「現在の戰爭は我々の目前に現に起つてゐる大變革の從屬的な事件に過ぎない」と見るのは正しい。「七年の歷史しか持たないナチス・ドイツは暫くは既得の技術が向う見ずの能率で適用されるであらうが、遠からず獨自で思索的な頭腦を失ふに違ひない」と見て、その時を二〇年先とする彼はその「基礎的な科學的、政治的思考」を失はないために變革に際して自由の維持を主張し、戰爭と變革に當つて自由を保持すべく「人間の權利の再擧明」と「偉大なる討論」を要求する。しかし「必然な變革」に對して抽象的な「人權の要求」が實際に當つて何の效果を持つであらうか。事實は彼の思考より遙に苛烈であり無慈悲である。

ウエルスと同樣な立場において、ジュリアン・ハックスレイはイギリスのためにナチズムの淸算と西ヨーロッパの聯邦組織を主張し、この聯邦の條件として、(一)國際的な平時航空組織の確立、(二)適當な軍備縮小計畫か、または軍隊を國際的な警察權下に委ねること、(三)國際的基礎に立脚した政治的並びに經濟的な統一制度の樹立、(四)國家間の紛爭に對する强制的な第三國の干涉權の確立、(五)醫術およびその他の專門的な技術の相互利用、(六)大規模な敎育および學術研究の交換、(七)政治的、國家的、民族的な少數派の保護と亡命および移民問題の解決、(八)非統治的な植民地を聯邦組織に委任すること、(九)以上の計畫を十分に遂行するため各國の主權を制限すること、を擧げてゐる。當時の外相ハリファックスはこの聯邦論を以て紙上の計畫として支持せず、各國においても素より何の反響も見られなかつた。イギリス側のヨーロッパ聯邦案として今一つ英國勞働黨のものがある。それは帝國主義的な要素を一掃しようとする主張と共に勞働黨の一種の和平提案だとされてゐる。この勞働黨の主張はイギリス植民帝國の解體を意味するもので、その手段と

して一方にイギリス市民の享受してゐる一切の經濟的特權の廢棄と他方に植民地民衆の教育を促進することによつてその自治を完成せしめようとする。イギリスの聯邦組織に關する思想はストレイトの主張によつて大いに進歩したといはれるが、かゝる思想の實現に當つて先づ考へられたのはアメリカとヨーロッパ諸國の聯邦制度によるべしとする意見であつた。この案はアメリカとヨーロッパ諸國の建國に關する歴史的事實の比較檢討によつて望み薄とされイギリス獨自のものが考へられた。勞働黨の聯邦案とされるものはこれまた紙上の計畫に近く、加入國は少くとも軍事統帥權の一部を聯邦に移讓すべしとか、聯邦自身の空軍を創設すべしといつた議論のようで、文化的面にふれる餘裕を持つてゐない。兎もあれ國際聯盟の失敗した原因は聯盟自身が武力を持たなかつたからでもなく、アメリカが加入しなかつた結果でもなく、その實體が少數の寡頭支配であるに拘はらず世界のあらゆる國家を包含しようとした點にあつたといふべく、從つて最近の傾向はヨーロッパを自然の文化的、政治的單位として考へようとしてゐる。

民族主義を以てその理念としたナチスが、その最初の要求である「大ドイツ國への結合」を完成し、更に現在ヨーロッパ大陸の大半をその勢力圏に加へようとする時にあたつて、元來の狹義の民族主義は一歩を進めて汎チュートン的なヨーロッパをドイツの指導下に樹立せんとする主張に變りつゝある。しかしかゝる廣域政治經濟圏の具體的内容については既述の如く未だ極めて漠然たる程度を出でず當局は素よりナチスの理論家達による明確なる案も見出し得ない。

「國民社會主義は輸出品にあらず、またこれによつて何人も容易に幸福になり得るところの萬國共通の處方箋ではない」といふナチス内部の主張はナチス理論家の一人であるカール・メルゲルレの「國民社會主義はその世界觀を何人に對しても强制する意思はない」といふ言葉によつて裏書されるので、この主張がやがて來るべきヨーロッパ廣域圏の建設に對し一の方向を暗示することは考へ得る。同時にメルゲルレはゲルマン系諸國の地方主義を克服し汎チュートン的ヨーロッパの統一を主張するのであつて、彼のこの案は大體北部および西部においてスカンヂナヴィア半島の三國、オランダ、ベルギー、および北フランス、南部においてはバルカン半島を含むものと推定される。これら地域の中、南ヨーロッパにはゲルマン的要素は稀薄であるがハンガリーには六〇萬、ルーマニアには八〇萬、ユーゴースラヴィアには七〇萬のドイツ少數民族があるのである。かゝる勢力圏の建設にあたりイクリアを代表とするラテン民族との關係は問題なしとするも、バルカンにおけるソ聯の勢力との關係は、將來多くの問題を投げるものと見なければならない。尙ドイツの廣域圏建設の具體策に今一つ暗示を與へるものは、已にドイツによつて占領された諸地方に對する支配形式であつて、現在のそれは素より確定せるものにあらず、凡ては今後の決定に待つべきであるが、ドイツがその新ヨーロッパ秩序の建設に當り、すべての國を一律に待遇することは考へられざるところである。

ドイツが採用せんとするヨーロッパ新秩序は現在においては未だ混屯たる生成と變化の時期にあるといふべきであり、ヨーロッパ協

同體の建設理念は既にその方向を決定してゐるとはいへ、尙ナチス内部においてチュートン人の優越を主張し、敗戰國の政府が類廢的なデモクラシイの殘存者の手中にある限り、これらの國々の再起は困難であり、當然被支配の運命を甘受すべきであるとして、ナチズムによる世界革命を信じてゐるものも多い。かゝる主張はその本質として、他の國がドイツ民族と同樣な革命的更生を經驗し得るとすれば、やはり民族の優越性と世界支配の主張とを認めなければならないであらう。また他民族がドイツと同樣な全體主義國家となり得るとすれば、ドイツの拘束から脫する手段として全體主義を利用することも出來る譯である。例へばフランス、スペイン等がラテン民族の優秀性を主張して、ラテン・ブロックを結成する可能性なり根據が全くないといふことは出來ない。從つて眞の新しき秩序を建設せんがためには合理的普遍的なるものがあくまで追求されなければならないのである。

現在の歴史的轉換期に際して民主主義に代はる全體主義の勃興は世界的運命である。全體主義をファッシズムと解すればそれは近代の合理主義に反對する非合理主義であり、社會學理的にはゲマインシャフトの思想をとる。ゲマインシャフトは自然的な有機的な結合であり、生命的であると同時に閉鎖的である。このことは今日の全體主義が實際には民族主義であり國民主義であつて、血と地、特に前者が强調されることはナチスにその典型的なものを見出してゐる。しかして全體主義がその新しき世界の建設に當つてその閉鎖性の解決を迫られてゐる現在、全體主義の正しい發展は、封建的なるものの神秘的なるものへの復歸によつて人力以外のものを期待することではなく、その内に持つ非合理主義的性格が眞の合理性へ發展することによつて始めて可能となる。この一見飛躍的なる事實は如何にして成立し得るであらうか。近代的なゲゼルシャフトがいはゆる自由主義的であり個人主義的であることによつて今日否定せられたことは歴史的必然の結果である。しかしその嘗て歴史的に占めた位置は同じく必然性によるところであり、「第三階級の概念」であつたゲゼルシャフトが今日の世界において否定されたといふのは、それがすべて人類社會の背德であり、何ものをも貢獻しなかつたといふ意味においてではない。この事實は新しきゲマインシャフトの成立がかゝるゲゼルシャフトを經過することによつて生れ、より高次なる段階として理解されなければならないといふことを敎へるのである。「ゲゼルシャフトはゲマインシャフト的にならねばならず、ゲマインシャフトはゲゼルシャフト的にならねばならぬ」とは已に古き言葉である。一切の合理性を排斥することは歴史的生命を否定することであり、歴史は常に回顧されることによつて民族の生命となる。

（尙殘る問題として世界新秩序の建設に當つて要求さるべき、文化面における政策があり、ドイツを追はれたユダヤ系の學者達、或は敗戰諸國から亡命した學者を迎へて現在世界一を誇稱し、ルネッサンスにおけるイタリアの位置を以て自ら任ずるアメリカの最近の文化の動向がある。前者について現在の段階は未だ新しき協同體文化の創造といふところまで至つてゐないので、共同體の指導者たるべきものに對して共同體内の各民族の民族文化に關しては、各民族の

自由發展に任すべきことが要請されるに止まつてゐる。同時にそうした新しき文化の創造は、先づ基礎となるべき大方針が決定されて後に漸を追うて進むべきものと考へられ、例へばアジアの場合日支文化の融合が叫ばれるに當つて、先づ新東亞文化の理念が追求されたのであつた（アメリカ文化に關してはアメリカ・ブロックの項に讓る）。

――参考文献――

加田哲二「人種・民族・戰爭」（一九四〇）
〃　「政治・經濟・民族」（一九四〇）
森戸辰男「戰爭と文化」（一九四〇）
W・ヴント（平野譯）「民族心理より見たる政治的社會」（一九三九）
A・ローゼンベルク（田中譯）「國民組織の綱領」（一九四一）
岡崎文規「新東亞確立と人口對策」（一九四一）
蠟山政道「東亞と世界」（一九四一）
外務省調査部編「獨逸の宣傳組織と其の實際」（一九四〇）
セルバン（一九四一年四月より「新文化」と改題）
Bowman (I.), The New World. London, 1924.
Brown (F.J.), Hodges (C.), Roucek (J.S.), (ed.) Contemporary World Politics. London, 1939.
de Wilde (I.), Popper (D.), Clark (E.), Handbook of the War. Boston, 1939.
Hayes (C.H.), Essays on Nationalism. New York, 1933.
Peterson (H.C.), Propaganda for War. Oklahoma, 1949.
Russel (F.M.), Theories of International Relations. New York, 1936.
Simonds (F.H.), Emeny (B.), The Great Powers in World Politics. New York, 1937.
Hogben (L.), Science for the Citizen. New York, 1938.
Streit (C.), Union Now. New York, 1939.
Peprocki (S.J.), Minority Affairs and Poland. Warsaw, 1935.
Mellis (W.), Why Europe Fights. New York, 1940.
Laski (H.J.), Democracy in Crisis. 1933.
〃　Liberty in the Modern State. 1930.
Siegfried(A.), England Crisis. 1933.
〃　America Comes of Age. 1927.
Thompson(W.S.), Danger Spots in World Population. 1930.
Heiden(K.), A History of National Socialsm. 1934.
Buell (R.L.), (ed.) New Governments in Europe. 1934.
Morley (F.), The Society of Nations. 1932.
Wells (H.G.), The Shape of Things to Come. 1933.
〃　The New World Order. 1939.
Drucker(P. F.), The End of Economic Men. New York, 1939.
Epstein (M.), The Annual Register for 1939. London, 1940.
Current History (New York)
Foreign Affairs (New York)

第二章　第二次大戰の經過

（一）ポーランド戰線

第二次歐洲大戰は一九三九年九月一日に始まる。この日ドイツのハインケル爆擊機は、グヂニアその他ポーランドの諸都市を一齊に爆擊し、ドイツ國防軍はポーランド國境を越えて、北から、南から、また西から進擊した。二日後の九月三日、全世界はイギリスが「劍の審判」に應じて起ち、フランスも亦その同盟國たるイギリス、ポーランドと共にドイツに對する戰爭に參加することを報ずるラヂオニュースに聽き入つた。かくして、未だ人々の記憶に新たなるうちに、再び大戰の日（Der Tag）がヨーロッパを訪れたのである。

それは歴史上最も公然と宣告せられ、恐らくは、最も怖れられた戰爭であつた。

八月の初めに早くも、ドイツ國境附近の工場主は、後方へその財産や機械類の移轉を命ぜられた。ベルギー國境の工業都市アーヘンにおいては、婦女子までが撤退する事を警告された。戰爭勃發寸前二〇から三〇隻のドイツ潛水艦がカテガットおよびスカゲラックを北海へと通過した。また三隻のポーランド驅逐艦（グロム、ブリスカヴィカ、ブルサ）は靜かにポーランド海港、グヂニアの海軍基地を去つて、スコットランドの基地にある英國艦隊に加はつた。

此等の警告にも拘らず、對立諸國間に、同程度の戰爭への準備があつたわけではない。ヒットラーのドイツ第三帝國は平時――尤も一九三九年の歐洲に平和は無かつたが――からその全生活組織は戰時經濟に最も適合するやうに組立てられてゐた爲、ドイツ軍のポーランド侵入に續いて起つた大戰への轉入に際してさしたる變動はなかつた。陸海空に於てドイツは動員され、即決戰に備へて居た。その產業、特に航空機工業は、八月の末には最大限度の生產を行つて居なかつたのであるが、直ちに急速な增產に應ずべく裝備された。常備軍は親衛隊、豫備軍と共にポーランド國境に集結した。國防軍はジークフリード線の窪地や砲臺を占領し、豫備軍は編成せられ、全國に於て訓練せられた。四つの「空中艦隊」に編成

各國陸軍兵力

	平時兵力		戰時兵力	
	師團數	兵員（1,000人）	師團數	兵員（1,000人）
ソヴエート聯邦	75—90	1,750	180—300	3,500—5,500
ドイツ	51—60	800—1,000	150—200	3,500
フランス	37	765	110—140	2.500
ポーランド	37	350—500	70	1,000
フインランド	3	25	6—10	150—350
イギリス	6—7	100—160	100?	1,200

備考：――戰時兵力は最大限兵力。
資料：――N.I.Y.B.

され、裝備せられた空軍は、間髪を入れず大規模な行動を起すべく準備してゐた。一方海軍は、略ミ六〇隻の現役潜水艦、著名なドイツチェランド級ポケット戰艦三隻、および二六、〇〇〇噸級のシャルンホルスト、グナイゼナウとを擁して、來るべき海戰にその役割を演ずべく艤裝した。

各國海軍兵力

	艦船保有高		建造中の艦船	
	隻數	總噸數	隻數	總噸數
イギリス	329	1,381,308	86	670,225
フランス	173	530,327	65	270,431
ドイツ	120	242,072	67	272,799
ソヴエート聯邦	180	215,000	52	80,000
ポーランド	9	13,210	1	990
フインランド	7	9,628	…	…

備考:——本統計數字は 1939 年 9 月 1 日現在のものであつて、各國とも戰艦、巡洋戰艦、航空機母艦、巡洋艦、駆逐艦、潜水艦のみを扱ひ、水雷艇、掃雷敷設艦、砲艦等の小艦艇を除く。

資料——N.I.Y.B.

聯合國側の不準備はドイツの完備に對し著るしい對照をなす。ポーランドは常備三〇軍團を八月末までに戰爭に參加せしめ得る狀態に齎したのであるが、總動員(それには六〇日を要する)の命令が發せられたのは辛うじて戰爭勃發の數時間前であつた。フランスは豫備軍および技術者を軍旗の下に召集した。そしてマヂノ線、この「要塞の貝」に據る人的裝備は充分であつた。然し、フランスは如何なる意味に於ても、戰爭の立場に立つてゐるとは云へなかつた。英國は豫備艦隊を動員し、他の準備をも整へたが、聯合國側の何の國も戰爭に對する緊急の準備に於て、ドイツに匹敵するものはなかつた。

各國空軍兵力

	第一線機 (1939年9月1日)	豫備機 (39年9月1日)	月生産高 39年9月1日	月生産高 40年1月1日	月最大生産能力
ドイツ	3,500—5,500	2,000—3,000	700—1,100	1,500—2,000	2,500—3,000
ソヴエート聯邦	3,000—5,000	1,500—2,500	200 ?	200 ?	300—500 ?
イギリス	3,000—4,000	2,000—3,000	500—700	900—1,000	1,200—2,500
フランス	1,800—2,500	1,000—2,000	100—200	300—400	800—1,500
ポーランド	700—900	200—300	30—50	…	60
フインランド	100—200	50	1	2	3—4

資料——N.I.Y.B.

a 兩軍戰略

ポーランド戰爭はドイツ人にとつては十八日間の戰爭 Der Feldzug Der Achtzehn Tage として知られ、世界に於ては、ナチスの電擊戰 Blitzkrieg なりと言はれて居る。一方各國の軍人にとつては軍の精鋭の典型なりとされ、現代に於ても將又將來に於ても研究さるべき古典なりとされるに至つた。戰爭に關する完全なる資料はどちら側からも得る事は困難であるが、兩方から公表されたコムミュニケや新聞の報道等を綜合すれば次の如くである。

ドイツ軍およびその作戰——ドイツ軍がポーランド國境を突破すべき豫定行動開始時刻は九月一日午前五時三〇分であつた。ポーランドに進入したドイツ軍の編成および指揮者ならびに兵力は次の如くである。

アドルフ・ヒットラー	總統兼全軍總司令官
ウイルヘルム・カイテル	國防軍最高指揮官參謀總長
ワルター・フオン・ブラウヒッチ	陸軍總指揮官
ヘルマン・ゲーリング	空軍總指揮官
フリッヒ・レーダー	海軍總指揮官

陸軍——歩兵三五ないし五五師團(一個師團兵力一五、二二四人)、四ないし五輕機械化師團(機械化されたる歩兵ならびに戰車等)、四ないし大裝甲師團(Panzerdivisionen)(約一一、〇〇〇人と輕戰車四二五)、二ないし三山岳師團、一騎兵師團、其の他警衛隊、コンドル軍(スペイン戰への參加部隊)等合計九〇〇、〇〇〇ないし一、二〇〇、〇〇〇人

空軍——一、二〇〇ないし二、五〇〇機

海軍——二級戰艦二隻(シュレスウイヒ・ホルシュタイン、シレジーエン)その他駆逐艦、掃海艇、水雷艇等の小艦艇。

ドイツの作戰は簡單であつた。ドイツはポーランドを三方面より攻擊するにあつた。先づポメラニア、シレジア、スロヴァキア、東プロシアの基地を出發したドイツ軍飛行機は、ポーランドを縱横に翔け廻つて、猛烈な爆擊および地上掃射を浴びせかけた。海軍はバルチック海よりダンツイヒの攻擊に乘り出した。ダンツイヒ港、グヂニアのポーランド軍事施設、ヘル半島の要塞等を攻擊した。他方陸軍は深くポーランドに進擊して、大規模な包圍作戰に出た。それは二千年前カンネーの戰鬪にハンニバルが輝かしい戰果を納めた古典的二重包圍であつた。北からと南から進んだ二つの軍團はワルソーを包圍して、東方へ退却せんとするポーランド軍主力を阻止し、これを包圍殲滅せんと企てた。この包圍網をのがれたポーランド分遣隊は、何れも、後の更に大規模な掃蕩作戰、すなはち北方ならびに南方より國境を突破せる獨軍がサン河およびブク河の背後において相合するといふ大規模の包圍を受けねばならなかつたのである。ポーゼンに向つたドイツ軍中央部は、故意に手薄な配備のもとにあつたと思考されるが、その背面はフランクフルト要塞地帶によつて堅固にカヴァーせられてゐた。

ポーランド軍およびその作戰——この攻擊に應戰したポーランド軍の編成は次のごとくである。

エドワルド・リズ・スミグリー	總司令官
スタヅキエヴィッ	總參謀總長

陸軍——北部軍團、中央軍團、南部軍團、その他、動員せられたる兵力は歩兵約三〇個師團(一ケ師團一二、〇〇〇人)、騎兵一四個旅團、其他で總兵力五〇〇、〇〇〇人、外に動員中のもの三〇個師團約五〇〇、〇〇〇人があつた。

空軍——七〇〇ないし九〇〇機

海軍——駆逐艦四隻、潜水艦四隻、基地グヂニア

ポーランドの作戦は未だ明らかではない。そしておそらく明らかになる事はないであらうが、何となれば、その作戦に關し責任ある指揮者の大部分が或は戰死し、或は負傷し、捕虜となり、亡命し、抑留されて居るからである。たゞ、ワルソーにあるフランス派遣軍やイギリス幹部の忠告が全然顧みられなかつたと云ふ事は相當權威ある指示をなす。同盟國の忠告者はポーランド軍が國境附近でドイツ軍を支へる事は不可能である事を強く指摘し、ポーランド西部の戰を長びかせて、主要なる抵抗線は傳統的な三角形防禦陣――ワルソーの近くで合流するヴイスツラ河、ナレウ河、バッグ河の線――の背後に構築せん事を促したのである。何故同盟國の警告が公然と無視されたかと言ふ事は、過去のポーランドの歴史に徴しても容易に理解される。ポーランド外相ヨセフ・ベックは長く反フランス派で有名だつた。一九二〇年、ウエイガン將軍が、ポーランドの國民的英雄ピルスドウスキー元帥を援け、ポーランド革命戰爭に於けるヴイスツラ河の一戰に勝利を得せしめ、世界注視の中に、同戰爭の勝利に對し大なる信用を博した時以來、ポーランド軍の中には反フランス的な強い暗流が流れて居たのである。

とに角、戰爭の餘映は、ポーランド軍の作戰が、いかなる場合にもヴイスツラ以西の戰爭を長びかせようとするのでなかつた事を、ほゞ明らかに示して居る。戰爭が始まるや、ポーランド軍の大部分は明らかにヴイスツラ河の西に集結した。北方軍團の一部を「廻廊」に、他の一部をワルソウの北に置いたのみで、中央軍（三軍中の最强軍團）の大部分はボツナン（ポーゼン）とクトノウ間のロッズのやゝ北にあり、一方南軍は上部シレジアの工業地帶を防備した。その主力はクラカウおよびルウオー間に集結した。ドイツ官邊の臆測によれば、ポーランド北方軍の分遣隊はダンツイヒを占領し、後、東部ポーランド（ビアリストック、アウグスタウ、スワルキ附近）より動員した豫備軍の援助により、三方から東プロシアを攻擊し、かくてこのドイツの「島」を除去する筈であつたと思はれる。ポーランド人にとつては以上の行動は全く實現可能な事の樣に見えた。と云ふのは彼等は東プロシアを基地とするドイツの進擊は不可能であると最後まで信じて居た事を告白して居る。しかしてこの信念は戰爭に對する致命的な計算違ひの一つであつたのである。

演習に於ては最强の軍隊とされて居た中央軍であるから、それはドイツの攻擊に相應する樞軸として、東プロシアに侵入する北軍の左翼を援護し、同時に他方では、廻廊へ進擊するドイツ軍の右翼をおびやかすものと思はれて居た。南軍は出來るだけ長く、敵の前に曝された上部シレジア地帶を支へ、然る後、新しく發展した「三角形工業地帶」、――Centralny Okreg Przemyslowy と云はれ、ヴイスツラ及びサン河の平野の間にあるサンドミエルズの近くにある――を確保する意向であつた。

b　軍事行動

九月一日朝ドイツ軍が進擊を始めると共に起つた事は、有史以來の最も猛烈な空軍力の使用であつた。ドイツ機は來る日も來る夜もポーランドの空を翔け巡つた。ドイツ機の最初の目標は劣勢なポー

ランド空軍自體、その飛行場、ガソリン・タンク、工場等であつた。ポーランド空軍、その飛行場、格納庫、飛行機は爆擊され、破壞された。その操縱者は空から打ちおとされ、辛じて操縱されて居たポーランド機の多くは遠かにその攻擊力を解除されてしまつた。そして、ドイツのハインケル、ドルニエ爆擊機は、その目標を鐵道に、停車場、橋梁、道路等の交通網に、またポーランド豫備軍の集結地帶に轉じ、遂に都市、部落に轉じた。九月一日、早朝、グヂニア、クラカウ、カトヴイスその他のポーランド諸都市に、ドイツ爆擊機が警告なしに爆彈を投下して以來一週間も經たぬ中に六〇の都市が遙か東方のブレスト・リトヴスクに至るまで、ドイツの「咆哮する無敵空軍」によつて爆擊された。故にドイツの電擊戰に於ける空軍の重要性はあくまで强調されねばならない。それはポーランドの運輸交通路を切斷し、豫備軍の動員を妨害し、阻止した。また極めて巧妙に組織された地上の諜報機關や、偵察部隊の援助によつて、空軍は如何なる小部隊であらうとも、凡ゆるポーランド軍の集結を發見して、總司令部に報告した。このことは戰火をポーランド全土に擴大し、ポーランド軍の士氣を沮喪せしめ、且つポーランド軍と國民を盲目にし、苦しめ、混亂せしめ、分裂せしめた。飛行機は戰略上も戰術上も共に用ひられた。戰略上は上述の樣な遠距離目的の攻擊のため戰術上は地上部隊と緊密な協力の下に、ポーランド要塞、砲床や援方を攻擊するためである。それは砲兵の攻擊範圍を擴大した。敵地上部隊を猛擊し、堅壕組織、要塞の突破を援助した。空軍が敵軍を擊破、壞走せしめるに貢獻したところは誠に大なるものがある。空軍はドイツの電擊戰なる公式に於て、本質的な要素であるのである。

然し地上のガソリン・エンヂンも、空中のガソリン・エンヂンに劣らず、ドイツの勝利に、最も重大な貢獻をなして居る。ドイツ軍は機械化部隊を猛烈に、且つ勇敢に利用した。ヴイスツラ河に至るまでの地形はこれを阻止する樣な大きな障碍はない。それは烈しい夏の太陽に焼きつけられた低坦な平原である。そしてドイツはポーランド軍の指揮者、裝備、訓練等に關する精密な計算を行つた上で他の第一流の敵國に對しては到底不可能と思はれるほど大膽な突破戰術を遂行したのである。ドイツ軍の基本的戰術は簡單である。即ち包圍作戰であつた。しかし、その方法は、その速力および連絡に於て、怖ろしく效果的であつた。

これを例へて云ふならば、海岸に打寄せる波浪の如きものであらう。浪が次第に盛り上つて岸に押寄せる時、抵抗物、すなはち砂の丘やドームは潮に取り捲かれ、孤立せしめられる。そしてこれら孤立せしめられた要塞が次第に潮によつて噛碎かれる一方、殘餘の潮は急流の如き勢を以て砂の谷間や平坦地を踏巡り、掃蕩し、新たな抵抗物に襲ひかゝる。そして孤立せしめられたる要塞は次々に水中に沒して全く平定せられてしまふのである。かくの如くして、ドイツ軍がポーランドに雪崩れ込むや、前世界大戰中工夫した潛行戰術(Infiltation Tactics)を機械化して大規模に採用した。ドイツの歩兵部隊が二、三のポーランドのトーチカに遭遇し、あるひはポーランドの決定的な抵抗につきあたつて、歩兵部隊の陣地突破を援助す

べく砲兵部隊が配備されると、ドイツの裝甲師團あるひは輕機械化部隊は敵の戰線の弱點を求めてポーランド軍の側面に達した。最も抵抗力の弱い通路を探しながら――そして一旦發見するや、そこを撃破し、敵の側面へ更にその背後へ殺到した。それは何遍となく繰返された方法である。永久に變りなき包圍作戰である。かくてポーランド軍の抵抗は比較的少さな孤立した部隊に分裂せしめられ、然る後一つ一つ打ち破られたのである。

運動性こそ電撃戰のキー・ノートである。ポーランドの平野を縱横にかけ巡り、深く敵の後方へ突入するドイツ機械化部隊の敏速な運動の前には、ポーランドの歩兵部隊は勿論、騎兵隊の突進も全く頼りなかつた。

若干のポーランド騎兵隊が最初の、短期間の勝利を納めた。それはポーランド戰に於けるポーランド軍の唯一の勝利であつた。即ち彼等は手薄なポッナン(ポーゼン)地方および東プロシヤの國境を越えて、僅かにドイツ領に進入した。しかし大決戰が始まり、この「勝利」に意氣揚々たりし騎兵隊は、やがて、彼等の國に死と災難とを齎した大雪崩の中にたゝき込まれてしまつた。

適當な對戰車裝備の缺乏、適當な野戰砲壘の準備の不完全、適當な主要抵抗線を定めなかつたこと、滿足な道路障碍および戰車壕のなかつたこと、電撃戰の最初の猛撃によつて、ポーランドのラジオその他、通信交通機關が全く破壞されたこと、これ等の事情はすべてドイツ軍の行動を極めて容易にしたものであつた。ポーランド軍は、連絡を斷たれ、攪亂されて盲目となり、眞の情勢を全く知り得なかつた。ドイツ軍の配置運動を正確に知る事は殆んど出來なかつた。その結果は不可避的である。野戰將校のみならず、師團または軍司令官も全閣僚と共に、時には部下の大部分の者と共に捕虜となつた。開戰後一週間にして早くも勝敗の數は決したのである。

ダンツィヒ占領――九月一日、シュレスウィヒ・ホルスタイン號がダンチヒ港、ウエスターブラッテの砲撃を開始し、東プロシアからの騎兵隊、歩兵隊が勇敢な、しかし短期間の抵抗をうけた後ダン

第一圖　ドイツ軍のポーランド進撃

チヒ自由市を席捲するや、フォン・クルーゲ麾下の第四軍(北部軍團の一部)はポメラニアからポーランド廻廊へ、ブロムベルヒ、グラウデンツの線に押し入つた。

同軍の使命は、この兩都市の間でヴイスツラ河を渡り、東プロシアから南西方ケルムノの線へ進撃するフオン・キユヒラーの第三軍の右翼と連絡をとる事であつた。(第一圖①)。同時に第三軍の主力は眞南のアレンシユタイン＝ムラワ＝ワルソーをつなぐ線を攻撃し(第一圖②)、他方その左翼は遙か東方ロムザにまで擴つて居た。第三軍の使命は、ナルー、ブグ河を押し渡り、ワルソー東方にて、フオン・ライヘナウの第一〇軍(南軍に屬する三つの軍團の一つ)に連絡する事であつた。

同時に、廣大なポーランド西南地域に對する大規模な攻撃戰が南軍三ヶ師團によつて展開せられた。その中央にあつたフオン・ライヘナウ軍は東北方クロイツベルヒ＝ワルソーの方面へ前進した。一方ライヘナウ軍の左側に、プラスコビツツの第八軍はブレスラウの東よりロッヅへ向つて進撃した。(第一圖③)最西南方に於ては、――この方面ではリストの第一四軍がポーランド領を包んでモラヴィヤスロヴアキアにまで擴つて居た――攻撃は二方面から行はれた。左翼はブレスラウ、グライビツツからカトヴイス及び低部工業地帶へ向ひ、中央軍はクラカウおよびヴイスツラ河の主流方面へ向つた。(第一圖④)他方その右翼は、オーストリア、スロヴアキア軍および山嶽部隊の援助をうけて、カルパチア山脈中の西ベスキッド山のヤブルンカ峠を通つて南から北へ、東北方へ、と向つた。然る後、シレジアから進撃した友軍と連絡をとり、東に轉じてズツハならびにノイマルクトへ、更にカルパチア山脈の麓を通つてポーランド領に入つた。ドイツ軍の最右翼を進んだ小分遣隊は、ヅクラ峠を通つて主力軍に合した。かゝる行動は、廣範圍に分散した軍隊によつて行はれたにも拘らず、極めて順調に行はれ、それは北部の廻廊を、南部に於ては、シレジアの工業地帶を危地に陷入れ、ワルソー附近の軍隊ひいては全ポーランド軍を潰滅せしめたのである。

ポーランド廻廊遮斷――開戰第二日の終りまでに、廻廊は、ポメラニア及東プロシヤから進撃した軍隊によつて完全に遮斷された。第四軍のポメラニア、ブランデンブルグ歩兵部隊はポーランド軍のブラヘ河の線を突破した。東プロシヤから南方へ進んだ第三軍はムラワに到達した。南軍は上部シレジアの工業地帶前面のトーチカ堡壘を猛撃中であつた。山岳部隊はヤブルンカ峠を突破强行し、ノイマルクト及ズツハの線に達した。廻廊の基底にあるビドゴスツ及グルドチアズの要塞はその翌日(三日)に蹂躙された。既に海から封鎖されて居たポーランド海岸線は陸からも急速に包圍された。そして廻廊の中にあるポーランド軍の掃蕩戰は始まつたのである。(この戰鬪は Tuchola Heath の戰として知られ、一五、〇〇〇に達するポーランド軍が殲滅された。)

南方のトーチカ線に據つたポーランド要塞軍は數時間、コンドル軍團の正面攻撃に對し頑强な抵抗を試みた。が、ドイツ機械化部隊が、その線の弱點を突き破り、要塞地帶の側面に迂回するや、この抵抗は忽ちに崩壞し去つた。國境附近のポーランド南軍中の數部隊

は遠かに捕へられ、或は滅され、又早くも退却したものもあつたがそれもやがては大混亂に陥つた。九月三日までにはドイツ軍は上部シレジア工業地帶の大部分を占領し、一日後古代ポーランドの心臓であるクラカウを占領した。一方第八軍は右側の第一〇軍と共に、ブレスラウ東方のポーランド軍を掃蕩した。ワルテ河に沿ふポーランド防禦線を超えて機業都市ロッヅに突入した。他方北軍は東プロシヤから南へ、ワルソーを離るゝ二一哩の地點まで進出した。

包圍完了――九月八日までにポーランド戦の大勢は決した。この日までに、ドイツ軍の大きな包圍線がワルソーに向つて閉ぢ初めた。ドイツ軍の一隊は、實際にポーランド首都に突入した（それはすぐ引上げたが）。ポーランド軍の大部隊がヴィスツラ河の西でドイツ軍の陥穽に陥つた。第三軍は東プロシヤから南進し、ナルウ河の要塞のため數時間前進を阻止された後、この河を押し渡り、その先行部隊はブグ河を越えて、ウィスツコウの橋頭堡を確保した。リストの第一四軍は南部から東方ブルゼミスル及ルウオーの要塞へ向つた。第一四軍及第一〇軍の一部隊はヴィスツラを渡りヴィスツラ線の南側へ轉じた。そして三角形工業地帶の中心地サンドミエルツを占領した。

ドイツ軍の迅速な包圍行動及機械化部隊のポーランド内部への深き突入は、既に多數のポーランド分遣隊を包圍殲滅し、或は捕虜とした。若干の師團は完全に破壊され、何千と云ふポーランド軍が降服した。そして大部隊がラドムに於てライヘナウの第一〇軍に包圍された。

第二圖　ポーランド軍の壊滅

かくして、開戦一週間そこそこで、ポーランドの二つの主要工業地帶は敵の手中に陥つたのである。傳説的なヴィスツラおよびブク河の防禦線は南北とから覆へされた。ポーランド軍の大部隊がヴィスツラの西部で敵の策に陥し入れられ、そして人口三千萬の國家がまたビルスドウスキーとその軍團、或ひはパデレウスキーとその友人とによつて抱かれた希望と夢が、殆んど征服され、亡びてしまつ

たのである。

ブズラの戦――九月一四日までに、ラドムに包圍されたポーランド軍は、ドイツ軍の推測によれば、四ケ師團、六萬人以上が「生存を中止」したのである。ワルソーならびにモドリン要塞は殆んど完全に遮斷された。銅鐵の指は、ルウオーおよびブレスト・リトヴスクを摑んだ。第二の、廣範圍のドイツ軍の挾撃作戦は開始され、第三、四、八、第一〇軍の主力がフオン・ルンステット將軍を總司令官として、穿の中のポーランド大部隊の包圍陣をうおめ、之を「ヴイスツラの屈曲部」（ワルソーの西、ポーゼンの東にあり、中部にはクトノウがあり、ブズラ河とヴィスツラ河の間にある。）へ壓迫した。

ブズラ附近で最大の戦闘が行はれた。猛撃を受けつゝあるワルソーからは、ラヂオ放送所を通じて世界に援助を求める痛ましい訴がなされた。一方ドイツ軍は鐵の包圍陣を更に強化し、ポーランド大部隊の包圍を脱せんとする凡ゆる努力を阻んだ。ブズラの戦は一〇日間の戦の後九月一七日から二〇日までの間に徐々に終りに近づいて行つた。ドイツ軍はこの戦だけでも三〇萬以上の捕虜と莫大な數の武器彈藥を捕獲したと云ふ。そして、ポーランド軍のボルトノウスキー將軍及びその全幕僚はこの戦で捕へられたのである。

ワルソー陥落――ブズラ戦と同時に、他のドイツ軍はワルソー、モドリンを完全に包圍し、孤立せしめた。南方に於てはプレミスルの要塞を占領し、南軍を撃破し、捕虜とした。更にルウオーを包圍した。北方に於てはブレスト・リトヴスクを確保し、海岸線のグヂニアを占領した。ドイツ南、北軍の或部隊は九月一六日に、ヴィスツラの遙か後方にあるウロダワに達した。それ等の部隊は一六日間に敵國中を二〇〇ないし四〇〇哩も進撃したのである。

ポーランド戦は終つた。しかし、ワルソーは支へられて居た。燒かれ、猛撃され、血塗れになりながらも降服しなかつた。何百と云ふ建物が破壊されて廢墟となり、死者は公園に埋葬され、九月二七日ポーランド首府が絶對的に包圍され、約一萬の駐屯兵が全部捕虜となるまで抵抗が續けられた。モドリンの要塞は翌日包圍された。そしてグヂニアの近くのヘル半島の要塞のみが一九四〇年の一月一日まで支へられ、それが組織的な抵抗を續けるポーランド領土の最後の「島」であつた。

C　ソヴェートの介入

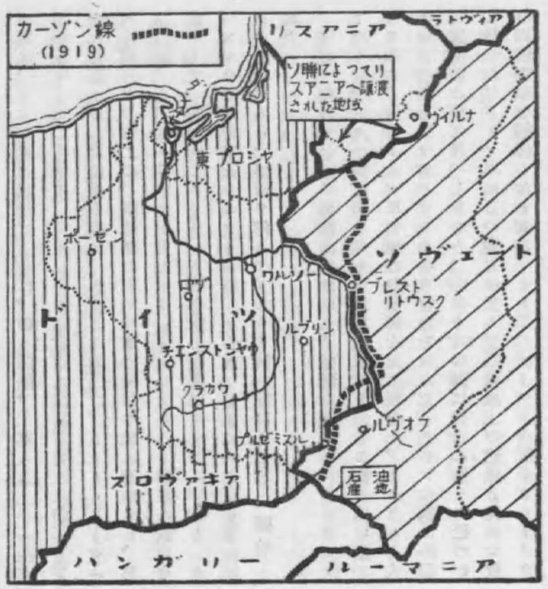
ブズラの戦が終り、ポーランドが完全に征服されるや、九月一日午前四時を期して、ロシア軍（その兵力約五〇萬）がポーランド東部國境を越えて西へ進撃した。北に於て白ロシヤを通過し、南に於てはウクライナを通つてドイツ軍の前哨地點へ向つた。ドイツ電撃戦は全く迅速に、完全にポーランドを蹂躙し去つたので、ロシア軍の越境までには既にポーランドからの組織的な抵抗の見込はなくなつたのである。しかし、ロシアの背後からの突撃はポーランド人の懐いたゲリラ戦の望み――カルパチア山脈を根城とし、プリペット沼澤地の堅壘による有效なゲリラ戦――を完全に排除してしまつた。

この新手の、思ひがけない攻撃に對するポーランドの抗戰は自然離れ離れで弱いものだつた。ロシア軍は主力の先頭に若干の機械化部隊、戰車を送つたが、その大部隊はツァー時代の軍隊の傳統的なのろい、重々しい足取で歩いて行つた。「進撃」といふにはやゝ相應しくないロシア軍の「行列」は北方に於ては、ウィルノ（一九日占領）へ更にグロドウノ（二〇日占領）からパラノヴッツェ、ビアリストックへ移動した。一方他部隊はプリペット沿澤地を廻つて南方ブレスト・リトヴスクへ向つた。そこでドイツならびにソ聯軍最高指揮官の間に第四次ポーランド分割に關する詳細を決定すべく會議が開かれ、九月二八日獨ソの國境ならびに友好、經濟協定が成立した。南方に於ては、ロシア軍はウロドゼイミエルツ、ルウオー、スタニスラウからルーマニア國境へ向ひ、速かに、ポーランド、ルーマニア鐵道線を遮斷した。かくてドイツ軍の前進を前に退却して來たかなりのポーランド軍は窮に陷つて了つた。

しかしながら政府役人や高級指揮官を交へた多數のポーランド軍がルーマニアへの脱出に成功した。かなり多くの國民も避難した。他の何千と云ふ人がリスアニアに於て拘留され、破壞を免れた數十臺のポーランド機はルーマニアおよびリスアニアに於て抑留された。ポーランド役人及避難民の多くはフランスへ逃れた。フランスでは「國のないポーランド政府」が完全に再建され、新ポーランド軍が西部戰線に於て英佛軍を援けるべく編成された。

モスクワその他に於けるその後の會議に於て、最初からヴイスツラ河に沿うて定められた獨露國境は、リスアニアからナルー、ブク、サン河に沿うてハンガリア國境に走る線に改められた。自由の悲劇的終焉を未だ知らないポーランド軍は離れ離れに、或はプリペットの濕地に於て、或は山岳地方に於て抗戰を續けたが、組織的な抵抗は九月の終りまでには完全に粉碎されてしまつた。そして世界の最

第三圖　獨ソ新國境の劃定



註　カーゾン線とは一九一九年のヴェルサイユ講和條約により決定された暫定的東部國境である。

初の近代的電撃戰はこゝに終りを告げたのである。

ポーランド作戰におけるドイツ軍の損失は、戰死一〇、五七二、負傷三〇、三二二、捕虜および行方不明三、四〇四人、飛行機二〇〇ないし五〇〇臺であつた。ポーランド軍に關しては、利用し得る完全な資料は無い。恐らく五〇萬の動員された軍隊は全部死傷し、または捕虜、行方不明となつた。他の部分的に破壞された軍隊もすべて破壞された。ドイツ軍は七〇萬の捕虜を得たと稱してゐるが、戰死者は五萬ないし一〇萬に上るものと推定される。空軍も全部破壞された。

（二）フィンランド戰線

a　バルチック沿海諸國

ポーランド分割後、ソヴェート聯邦は西方バルチック海へ進出して年來の政策を實現した。これは帝政ロシア時代からの遺言の執行であり、同時に一九三九年の戰闘における最も重要な要素の一つである。バルチック小國、ラトヴィア、リスアニア、エストニアからドイツの勢力が自發的に撤退するや、ロシアは一〇月に之等の諸國と條約を結んで、バルチック海にソヴェート海軍および空軍の根據地を獲得した。一〇月および一一月の末、ロシア陸軍は此等三國に進駐し、軍艦と飛行機はエストニア、ラトヴィアの諸港に碇泊した。海、空軍基地がリバウ、ウィンダウ、タリン、ダゴー、オーゼル諸島その他に、またヴェントスピルとビットレイジの間には海岸砲陣地が建設された。

b　フィンランド攻撃

ロシアはフィンランド灣内の或島嶼ならびに他の領土的割讓を要求してフィンランドに壓迫を加へ始めた。これに關する小田原評定は何等意見の一致を見ず、その後一時外交關係は比較的平靜であつたが、一一月三〇日突如、力の威嚇を力の行使に變へて、小フィンランドに對し「宣戰せざる戰爭」を開始した。

レニングラードおよびエストニアの基地を發した飛行機はヘルシンキその他諸都市を爆撃し、艦隊はハンゲ等の諸港を砲撃し、陸軍は午前八時フィンランド國境を越えた。

空襲は分散的で、力も弱かつたが可なりの被害があつた。しかし軍事的效果は擧げ得なかつた。海からの攻撃も目的がなく、却つてフィンランド海岸砲はロシアの得たよりも多くの損害をこれに與へた。新巡洋艦キーロフは損害をうけ、驅逐艦も一隻沈んだと言はれる。然しロシア海軍は前から要求して居たフインランド灣内の諸島ホグランド、ビテサリ、ロバンザーリ、セイスカリを占領した。しかし主要な戰爭が、九五五哩に亙る廣範圍な國境線に於て急速に展開され、間もなく、ロシアの熊は手强い抵抗にぶつかつたのである。

ソヴェートの作戰——最初ロシア軍は巾七〇哩のカレリア地峽最短部を突破する作戰であつたが、そこにはラドガ湖からフィンランド灣まで、所謂マンネルハイム線として知られる要塞線が構築されてゐた。ロシア軍は先づ沿岸のトリヨキを占領して、ここに所謂「フィンランド共産主義共和國」なるものを樹立したる後マンネルハイ

ムの前哨線に達し、マンネルハイム線の攻撃部隊はその後漸次増強されたに拘らず、三九年末までには何等見るべき進展を示さなかつた。初めはタイパレ河に沿うて攻撃した。次に海岸方面から、更にラドガ湖の氷の上を通つてヴィボルグならびに南フィンランドを占領せんとした――両しすべては無駄であつた。他の部隊はラドガ湖の北方から侵入し、ラドガ湖北岸に沿つて、重要都市ソルタヴァラに向つたがフィンランド軍の反撃は彼等の前進を阻止し、のち三九年末にはアグラエヤエルヴィに於てロシヤ軍は散々に敗れた。勿論これらの攻撃の基地はレニングラードであつた。

第四圖　ソヴェート軍の攻撃

北方においては他の部隊が、レボラからヌルメスへ向つた。さらに別の部隊はレニングラード、ムルマンスク線上のケムからスオムスサルミの方へと向つた。これはスオムスサルミからフィンランドの蜂腰部を突破してウレアボルグに到りボスニア灣に出でんとする作戰であつたと思はれる。第三の攻撃はカンダラスカの南西より國境を突破してサラ、ケミヤエルヴィを經てボスニア灣北岸のトルネアを占領せんと試みた。以上三つの作戰は明らかにフィンランドを南北に二分し、ウレアボルグとトルネアを通過する鐵道を切斷し、以てスエーデン工業地帶とフィンランドとの連絡を斷つ目的を有したものである。最後に今一つの攻撃はムルマンスク西北より北氷洋岸のフィランド要地たるペツアモを占領し、自動車路を南下してトルネアに出でんとした。

ロシア軍の敗退――最初これらの努力は成功したかに見えた。ロシア軍の侵入は至るところで國境を深く進み、中央部はスオムスサルミを通りヒリンサルミおよびキアンタ湖にまで達した。フィランド軍はキアンタ湖附近まで敵の進出を許したが、直ちに輸送路を遮斷して包圍し、窮中の敵を攻撃した。おまけに冬の惡天候はロシア軍に慘憺たる打撃を與へたのである。その結果はフィンランド軍の勝利であつた。一二月二九、三〇日間赤軍第一六三師團（一、八〇〇〇）は完全に遮斷され、何千と言ふ兵士が戰死、負傷捕虜となつた。

更に北方ケミヤエルヴィに於も猛烈な戰鬪が行はれた。ロシア軍は國境から六七哩も進出したが、後サラ地方まで後退した。

更に最北方に於ても同樣の物語が繰返された。ムルマンスクを基地として、ロシア陸、海、空軍は北極海のフィンランド不凍港ペツアモを攻撃占領し、更に七〇哩南方ナウチへと向つたが、その結果は、數週間の努力もその效なく、重大な損害をうけ、武器を殘して退却せねばならなかつたのである。

フィンランド軍の成功の原因は多々あるだらうが、就中ロシア軍の機械、武器輸送機構が貧弱であつた事はその最大原因である。又赤軍の自分の力に對する過信、湖、河の多い、森林の多い地形――それは特殊のゲリラ戰術を用ひ、輕い自動小銃を持つた、二〇萬のフィンランド・スキー部隊には理想的な地勢なのである。これに加ふるに氷點下の惡天候、永久的な北極の夜、および深い雪、此等も亦ロシア軍に恐るべき悲慘な結果を齎したのであつた。

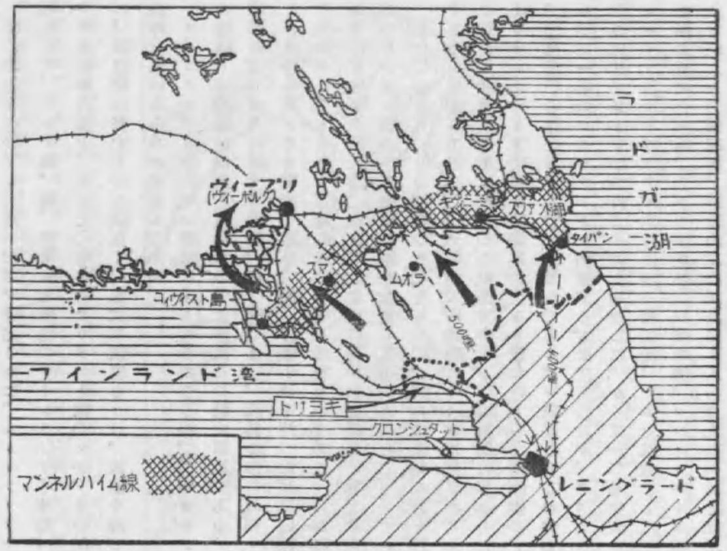
しかしながら、この初期の敗北をもつて、直ちに赤軍の力を評價することは危險であらう。ソ聯側では實際には最初報道されたやうな尨大な軍隊は使用しなかつた模樣である。この戰鬪に參加したのはレニングラード軍管區常備兵力たる九個ないし一〇個師團で、約三〇萬ないし四〇萬の兵力と見られてゐる。ソ聯は最初この兵力をもつて一擧にフィンランドを制壓する方針であつたが、フィンランドの抵抗が强まるにつれて兵力を增加した。かくて一二月中旬にはムルマンスク＝ペツアモ地方に約三個師團、ケムを基地として三個師團の機械化部隊、ラドガ湖北岸に四個師團、マンネルハイム線に六ないし一〇個師團、總計約二〇個師團約八〇萬人の兵力を使用した。同時に極東で名聲を博したシニチルン將軍が總指揮官の地位についてゐる。

これに對してフィンランドは一九萬の戰時兵力を六ないし一〇個師團に分ち、マンネルハイム戰およびラドガ湖北岸を防備し、英佛より若干の援助を受けた。

以上の數字によつてソ聯兵力の絶對的優勢は認められるであらう。しかし戰鬪は北歐の森林、沼澤地、しかも薄暗い白雪の上で行はれ、フィンランド軍は至るところ鐵道によつて原隊よりの輸送を行ひソ聯軍と對等の兵力を揃へ得るに反し、ソ聯側は、鐵道はおろか道路も無い廣大な地域に侵入してゐた。此處では機械化部隊もあまり役に立たず、加ふるに惡天候のため航空機と大砲の使用が思ふ樣に行かなかつた。そして密林の中では、機關銃すら使はぬ小銃と手榴彈による原始的戰鬪が行はれたのである。かゝる條件に對して、地の利に明るい、フィンランドのスキー部隊が、その急速な機動力を利用して、ソ聯の密集部隊に多大の被害を與へたとしても、決して不思議ではないであらう。

C　マンネルハイム線崩壞

一九四〇年二月二日、約三〇萬の兵力を以て、マンネルハイム線に對する再度の總攻擊が始められた。ソ聯軍の攻擊は最初フィンランド軍左翼に加へられたが、主力の攻擊地點は比較的平坦で障碍物の少い右翼ならびに中央右翼であつた。この攻擊において、赤軍は前回の失敗を繰返さぬため、二〇〇の可動砲（Mobile Gun）と六〇〇の小中口徑砲を以て猛砲擊を加へ、重要點の攻擊には最精鋭部



第五圖　マンネルハイム線攻撃

隊を差向けた。フィンランド軍は約一週間にわたつてこの要塞線を支へてゐたが、一三日マンネルハイム第一線は、スマ地方において突破された。このためフィンランド軍は一五日遂に前進陣地の大部分を手放し、一六日に至つては總計遂に五三の堡壘を奪はれた。かくてマンネルハイム線は先づスマ北方地區、ラドガ湖附近タイパレニヨキ地區で破れ、次いで一八日、中央部ムオラ地區も突破された。ついでソ聯軍主力はムオラ、ソンムの間をレニングラード＝ヴイボルグ鐵道に沿うて西北進し、フィンランド軍は二月末には同地方の最も重要な戰略的地點ヴイボルグから一部後退のやむなきに至

第六圖　ソ芬新國境線

註　黒罫線區域は、新たにフィンランドよりソ聯に割讓せられた地域で、總面積はパンゲを含み三〇、〇〇〇平方粁、人口四七〇、〇〇〇人であつた。但し人口の大部分はフィンランド側に移動した。

り、三月一一日、このフィンランド第二の都市であり、マンネルハイム線西南端の主要陣地たるヴイボルグ（ヴイーブリ）市はソ聯軍の手に歸した。

かくて三月一二日ソ芬間に平和協定が成立し、フィンランドはソ聯邦に多大の犠牲を拂はせたにも拘らず、フィンランド軍の敗北となつた。

（三）ノルウェー戰線

フインランド戰が一段落を告げた一九四〇年三月末から四月始めにかけてドイツならびに英佛側何れにとつても、ノルウェーの地位といふものが決定的重要性を有するやうになつた。同時に獨ソのスカンヂナヴイアに對する勢力調整が必要であつた。四月六日ヨハン・ニガールヅヴオルト諸首相とコート外相とがノルウェーの中立性を强力に表明した聲明を發してゐる點よりして、既にこの頃交戰國のノルウェー工作は熾烈化してゐたと見ることが出來よう。

ノルウェーの戰略的位置については、多くを語る必要がないであらう。若しドイツがデンマークと共にこの地方をその勢力下に收めるならば、北大西洋の覇權を握ることが可能であらうし、有名な鐵鑛その他鑛物資源を有するスエーデンを英佛側より切り離し、ドイツ勢力圏となし得るものである。のみならず無數のフイヨルドは潛水艦、ならびに水上機の絶好基地となり、英國を北方から脅威し得る。特にこの頃英國主要軍事施設が北方に移轉したため、ドイツ空軍の英本土空襲は、北方ならびに南方より行はれなければ十分の戰果を擧げ得ないことが明かとなり、對英空襲基地としてのノルウエー、デンマークの重要性はとみに增加した。逆に若しノルウエーが英佛の手に落ちれば、北海における英佛海軍の勢力が著るしく强化され、ドイツに對する經濟封鎖をより完全なものとなし得るのみならず、絶えず北方よりドイツを牽制することによつて、西部戰線における軍事行動を一部妨碍し得る。

a　ドイツ軍のノルウェー占領

ドイツ側聲明によれば開戰は先づ八日早曉英海軍によつて行はれたノルウエー領海三ケ所における機雷敷設——スタットランド、ウエスト・フィヨルド、ブット附近——を契機とする。これはドイツとノルウエーとの航路を遮斷し、鐵鑛石その他戰事禁制品の對獨輸送を阻止せんとする目的のために行はれたものであると發表された。しかしながら同日ドイツ輸送船リオデジヤネイロ號がクリスチヤンサンド附近で、ポセイドン號がオスロー・フィヨルド附近でイギリス潛水艦によつて擊沈せられたとのオスロー電報が事實とすれば、すでにドイツのノルウエー作戰は秘密裡に開始せられてゐたこととなる。別のストックホルム電報によれば九日午前三時から五時の間にオスロー灣、ベルゲン、トロントハイム、ナルヴイク諸港にドイツ軍の上陸が開始せられてゐる。またノルウエーの對獨宣戰は九日午前一時三一分に行はれた。これらの事情より綜合すれば、四月初から各種準備が行はれてをり、すでに八日以前に行動開始せられてゐたことを否定するわけには行はないであらう。

ノルウェー攻撃は九日早朝に始まる。最初この作戦の主體をなしたのは空軍部隊であつて、作戦開始と共にドイツ空軍部隊はノルウェーおよびデンマークの各飛行場を空襲し、一部に對しては機銃の威嚇射撃を行ひ、多數飛行場を占據して、英空軍の來襲にそなへた。他の部隊は北海前面およびノルウェー西部沿岸を飛翔して哨戒の任にあたり一部戦闘部隊は密集隊形をなしてデンマーク西海岸、およびドイツ北海沿岸を間斷なく飛翔し、陸軍の上陸作戦を援護した。同時にユンケル大型輸送機による陸軍部隊の空輸も相當に行はれた模様である。

海軍は八日夜中にノルウェー西海岸の重要地點全部並びにスカゲラック海峡、リンデスルス、ロドブエロ、フッケロエイ、サンドナエス、ハゲ間に機雷を設置した旨ドイツ海軍司令部より發表された。そしてドイツ軍の上陸はオスロー・フィヨルド、および大西洋岸の各戦略的地點に行はれた。

ドイツ上陸軍約四〇、〇〇〇に對して宣戦を布告したノルウェーの軍備は陸軍現役一四、〇〇〇人、豫

第七圖　ドイツ軍上陸占領地域

註　矢印（黑ドイツ、白イギリス）は攻撃方向を示す。

後備併せて七五、〇〇〇人、海軍は四千噸級海防艦四隻、驅逐艦五隻、水雷艇三隻、潜水艦九隻機雷敷設艦一隻、他に四隻、空軍は陸海合せて四〇〇機に過ぎない狀態であつて、獨力では到底ドイツの精鋭を相手とすることは出來ない。しかもなほドイツに抵抗したのは、明らかに英佛の援助を頼みとしてゐたものである。それ故ドイツ軍が英佛よりの援軍が到着する前に、果敢な上陸を遂行したためオスロー、ナルヴィク、トロントハイム、ベルゲン、スタヴァンゲル、エーゲルスズンド、クリスチャンサンド、アレンダル等の要地は直ちにドイツ軍の手中に歸した。

ドイツ軍の上陸作戦は次の三つの目的を有してゐたと想像される。第一はオスロー・フィヨルド上陸軍によるオスロー占領でありこれはノルウェーの首都であり最大の戦略地點を奪ふことによつてノルウェーの抵抗を排除し、且つ後續部隊の最も有力な上陸地點を確保するにある。第二は南ノルウェー、すなはちトロントハイムからオスローに至る海岸要衝の占領であり、これは對英攻撃のための海空軍基地を確保し、且つノルウェー内部への攻撃基地となす目的を有する。これら基地となるべき地點は、トロントハイム、アンダルスネス、エーゲルスズンド、クリスチャンズンド、ベルゲン、スタヴァンゲル等である。第三はナルヴィクの占領であつて、スエーデンのキルナ鑛山＝ナルヴィク鐵道を確保し、鐵鑛石の對英輸出を阻止する目的を有してゐる。

先づ第一のオスロー占據は、ドイツ軍發表によれば四月九日無抵抗裡に行はれたこととなつてゐるが、ニューヨーク・タイムスはストックホルム電報として次のごとく述べてゐる。

「ノルウェー軍が急造したオスロー防禦線に對するドイツ上陸軍の第一攻撃は四月一二日に始められ、オスロー西北約五〇哩のコングスヴィングル

第八圖　オスロー附近略圖

ならびにフォルムズンド、アルネス、エヅヴォルトにおいて激戦が展開された。第二の攻撃はスキーベルグに上陸せるドイツ軍によつてフェトズンド方面に加へられた。このためハルデン＝オスロー鐵道は切斷せられハル

デンは一三日遂にドイツ軍に包圍せられた。同日フレデリックスタードおよびサルプスボルグは占領せられ、オスロー防禦線はオスローより二五哩南のホーレン、モス間において破られたため、ノルウエー軍は防禦線をホーレン、ミーゼン、ロメリック、トリフイヨルドの間に縮小した。」

しかしながらオスローが四月一五日までに陥落せることは確實である。ドイツ軍は此處よりオスロー＝アンダルスネス、オスロー＝トロントハイム鐵道に沿つて、ノルウエー軍の抵抗を排除しながら北上した。（この經過に關しては b 英佛軍の上陸と敗退、3 中部ノルウエー戰線を參照、）

次に第二のトロントハイム以南の沿海要地はドイツ軍によつて終始確保せられてゐた。但し四月一四日には英軍がアンダルスネスに上陸し、五月二日こゝを放棄するまで、英獨間に戰鬪が續けられた。四月中旬から下旬にかけて、ドイツ軍はノルウエー南部に戰果を擴大した。オステル、グドブランズの戰略的二溪谷はドイツ軍の手中にあつたし、オスロー＝スタヴアンゲル間の海岸線は明らかにドイツ軍に確保されてゐた。ベルゲンのドイツ軍はノルウエー内部に向つて行動をおこし、空軍は殆んど全ノルウエーの制空權を得るに至り、聯合軍上陸部隊ならびにその輸送路をおびやかしてゐた。そして五月一日ドムバスにおける英軍の敗退、同二日アンダルスネス、ナムソス放棄はノルウエー南部におけるドイツ覇權の確立を證明するものである。第三のナルヴイクにおける戰鬪も、四月一〇日以來ノルウエー軍主力と英佛軍によつて屢々攻撃が加へられたにも拘らず、ドイツ軍はよく防戰して五月末まで持ちこたへたが、同月二九日ナルヴイクは聯合軍に占據せられた。しかしながらトロントハイムより北上せるドイツ軍の到着とドイツ軍の西部戰線における勝利は英佛軍のノルウエー撤退を餘儀なくし、遂に六月一〇日ノルウエー軍の停戰命令と國王ハーコン七世ならびに政府のイギリス亡命によつてノルウエー戰は終了する。

b　英佛軍の上陸と敗退

1　上陸作戰

ドイツ軍のノルウエー侵入が世界に知られた時、既にドイツ軍はノルウエーの戰略的要衝をその手に收めてゐた。このため聯合軍の上陸作戰は甚だ困難となつた。兩軍の戰鬪を一言にして盡せば海軍と空軍の戰鬪である。すなはち聯合軍海軍の目的は、第一にドイツ軍の輸送路を切斷し、第二に陸兵海上輸送と上陸を掩護することである。ドイツ空軍の目的は潜水艦および艦隊と協力して輸送路を防衛し、且つ聯合軍の上陸を妨害することにあつた。この戰鬪における聯合軍艦隊の第一の目的を達するためには、廣水域にわたる機雷原に阻まれたスカゲラック海峽を突破しなければならない。加ふるに優勢なドイツ空軍とデンマークならびにノルウエーの海岸砲の標的となる。第二の目的を達するためには、同樣に既に占據せられたノルウエー海岸砲と空軍に阻止されるうへに、フイヨルドといふ自然の要塞の奥深く突破しなければならない。かゝる場合陸上と海上との戰略的優劣は多くの戰史によつても明らかである。

以上のごとき事態のもとで聯合軍の上陸作戰は次の二つの部分に分れるであらう。すなはち第一はナルヴイクの奪還、第二はトロントハイムの奪還である。この兩者の意味するものは、ナルヴイクについて云へばスエーデンの鐵鑛資源とその輸送路たるキルナ＝ナルヴイク鐵道を確保し、以てドイツに對する鐵鑛輸出を阻止するにある。ナルヴイクは冬期間スエーデンの鐵鑛石を西歐に輸出し得る唯一の港であり、一九三八―三九年度においてはスエーデン鐵鑛の六三％が此處から輸出せられた。トロントハイムについて云へば、この地はスエーデンの首都ストックホルムとノルウエーの首府オスローに至る鐵道の要衝にあたり、この地方より南下してオスローに至るロムスダル、グドブランダルの二溪谷は、歴史的な侵入路として知られ戰略的に極めて重要である。且つトロントハイムは遠征軍上陸地として最好の條件をそなへ、ドイツ北上軍を阻止してゐるノルウエー軍援助地として最も重要な地點であつた。そしてより直接的には、ノルウエー政府が屢々古都トロントハイムの奪還を英國に慫慂し、イギリスも亦ノルウエー政府ならびに國王の救出と、ドイツ北上軍を阻止してゐるノルウエー軍を援助するため、この地點への上陸を必要としたのである。

2　ナルヴイクの戰鬪

海上からのナルヴイク攻撃はフイヨルドと彎曲した海岸線のため他のノルウエー西海岸諸地方と同樣に、甚だ困難である。同時に陸上においても、スカンヂナヴィア特有の山岳地帶は、大軍の作戰を困難ならしめる。しかしながら、ノルウエー軍の主力がこの地方にあつて、ドイツ上陸部隊をおびやかしてゐた爲、これらの條件は幾分か緩和せられた。

英佛兩國のノルウエー派兵は、ドイツ軍が上陸を開始した四月九日の緊急閣議で決定せられ、英海軍の第一回ナルヴイク攻撃は一〇日早朝に行はれてゐる。この戰鬪においてドイツ甲級巡洋艦ブリュッヘル號（一〇、〇〇〇噸）ならびに乙級巡洋艦カルルスルーエ號（六、〇〇〇噸）は撃沈せられたが、イギリス側も驅逐艦ハンター號（一、三四〇噸）、同ハーディ號（一、五〇五）を喪ひホスチル號（一、三四〇噸）は損害を受け、英海軍は後退した。

第二回の攻撃は同一三日戰艦ウォアスパイトを旗艦とする英艦隊によつて行はれた。この戰鬪において七隻のドイツ驅逐艦はナルヴイク港に封鎖され、撃沈せられたと英國側は報じてゐる。ついで同一五日イギリス海陸兩省は、一五日はじめて英軍がノルウエー海岸數ケ所に上陸した旨發表し、ストックホルム電報は英軍はナルヴイク灣、ハルスタッド灣、およびロフオテン島に上陸したと報じてゐる。これに對してドイツ軍も、若干のイギリス兵力がナルヴイクの北方約五〇粁のハルスタッドに上陸したことを肯定した。しかし英軍のナルヴイク占領が行はれなかつたことは確實であらう。四月一九日頃においてもなほナルヴイクはイギリスならびにノルウエー軍の包圍を受けたまま持ちこたへてゐた。

英海軍のナルヴイク攻撃は二五日夜も行はれてをり、引きつづき四月中も英獨間に戰鬪が續けられたが特記すべきものは無い。そして五月二八日聯合軍がこの地を占領したにも拘らず、西部戰線におけるドイツ軍勝利のため、イギリスは此處を放棄するのやむなきに

至つてゐる。

五月初旬における英軍のアンダルスネス、ナムソス等中部ノルウエーからの撤退後も、なほナルヴイクの攻撃が續けられた所以は、第一にスエーデンの鐵鑛に對する執著であり、第二にスエーデン、ノルウェーを北方より牽制せんとする意圖を有したものと思はれる。

3　中部ノルウェー戰線

中部ノルウェー戰線はトロントハイムを中心とする戰略的地點の爭奪戰に終始する。同方面に對する聯合軍の上陸は、先づナムソスに於て成功し（一四日）ついでアンダルスネス上陸が行はれた（一七日）。英海軍部内では、英國海軍を以て直接トロントハイムに突入せしめんとする案があつたが、チャーチル海相およびチェンバレン首相は艦艇の損傷を恐れ、右二地點の上陸作戰となつたものの如くである。このほかボドエ、レールダルへの上陸説が數日後に至つて報ぜられたが眞僞不明である。この方面の戰略的意義については既に述べたが、さらに詳述すれば、

(a)　レールダルより聯合軍は一路國道を南下して、未だドイツ軍によつて占領されてゐないゴール(Gol)に達し、この地點においてオスロー＝ベルゲン鐵道を切斷し得る。しかしこの地方における上陸は未だ確かでない。若し上陸したとしても直ちにドイツ軍のため撃退されたものと思はれる。

(b)　アンダルスネスからは、鐵道によつてドムバス(Dombas)に達し、この地點より一は北上してトロントハイムに迫り、一はグドブランズ溪谷を南下してオスロー方面に向ひ得る。

(c)　ナムソスは明らかにトロントハイム攻撃の基地たるの目的のもとに占領せられたものであつて、トロントハイムについては前述せる通りである。且つボドエ上陸もナムソスの場合と同意義を有し、就中この地はナムソス＝ボドエ國道の終點にあたり同方面に有力な地歩を占めんとする目的をもつてゐたものと解される。

以上各地に對する上陸兵力は明らかでない。約四萬ないし五萬と報ずるものもあつたが、かゝる大軍の輸送は到底不可能であらう。若しこれに近い兵力を輸送し得たとしても、聯合軍の作戰は甚だ困難であつた。この點について少しく述べなければならない。

註＊アメリカ陸軍の評價によれば戰時武裝のもとにある歩兵一人を輸送するに平均七・五噸の船を必要とし、これに對する後方よりの糧食、彈藥輸送のため一ヶ月に一三ないし一四噸の船舶を必要とする。この數を基礎とすれば、ノルウェーへの輸送船として使用されたエムプレス・オブ・オーストラリア(二二、八三三噸)は二、九〇〇人を輸送し得る。そして一個師團(米軍にして約一二、〇〇〇人)を輸送するためにはエムプレス・オブ・オーストラリア級の船舶を四隻ないし五隻必要とするであらう。

先づ第一にドイツ軍は最初のノルウェー進撃によつて、重要な港灣、空軍基地を悉くその手に收めた。このため聯合軍は甚だ貧弱な設備をしか有せぬ港灣、あるひはフィヨルドに上陸しなければならなかつた。たとへばドイツ軍が占據したノルウェーの古都トロントハイムは約五五、〇〇〇の人口を有し一一、〇〇〇フィートの岸壁

と二個の電力クレーン（能力五噸ないし三〇噸）、鐵道引込線、二個の乾船渠（各能力四、二〇〇噸）ならびに五、〇〇〇ないし一〇、〇〇〇噸の石炭と三、〇〇〇噸の重油があつた。そして港灣の深さも巨船を碇泊せしめるに足る。また背後地廣く附近にはヴェールネス(Waernes)の空軍基地があつた。これに對してナムソスは八〇〇フィートの岸壁しか有せず、クレーンも無かつた。このため重兵器の陸揚げが甚だ困難となり、約二〇噸の砲ならびにその他重兵器を揚陸するには先づこれをボートに移し、徐々に岸壁に引揚げねばならなかつた。空軍基地の如きものは勿論無い。そして小型のドックもドイツ空軍のために破壞せられてゐた。アンダルスネスも同樣に規模の狹小な港で八〇〇噸以上の船を繫留することは不可能である。

第二に空軍基地として利用し得べき土地は、氷結せる湖面以外に聯合軍は遂に取得し得なかつた。このため聯合軍の飛行機は主としてフィヨルドを利用する水上機、または艦載機であつたが、ドイツ陸上機に比して速力ならびに裝備の點で及ばなかつた。

第三にノルウェー特有の山岳的地形が、地上作戰を甚だしく困難ならしめた。加ふるに雪解けの泥濘があり、鐵道網の稀薄なノルウエーにあつては、このことはフィヨルド、山岳、河川と共に地上作戰に大きな影響を與へたものであり、ドイツ軍のみよく飛行機によつてこの條件を克服し得た。

以上のごとき條件のもとで、戰鬪の結果は明らかである。英國の攻撃は四月一一日のトロントハイム沖の海戰にはじまり、引續きスタヴアンゲルの空襲、トロントハイム附近の戰鬪が展開された。この方面における英軍は、四月一四日初めてナムソスに上陸し、これに二、三日後れて、フランスのアルプス部隊が參加し、この部隊の一部はノルウェー軍救出のため急遽にスティンキエル附近に進出した。ついで一七日アンダルスネス上陸が行はれ、この部隊はドムバスに前進し、一部隊はリレハマルにおいてドイツ北上軍を喰止めてゐたノルウェー軍と合流した。トロントハイム附近では、最初からドイツ軍の熾烈な抵抗に會ひ、屢々スティンキエルで兩軍の衝突が見られ、次いで戰線は膠着した。アンダルスネスに上陸せる聯合軍は、ノルウェー軍がドイツ北上軍をグドブランダル溪谷において喰ひとめてゐたため、大した困難もなく、鐵道によつてドムバス南方リレハマル(Lillehammer)附近まで進出し、こゝでトロントハイム救援のためグドブランダル溪谷を北上するドイツ軍を喰止めんとした。しかしながら四月二五日リレハマルが陷落したため聯合軍は急速後退し、レンゲブ(Ringebu)を獨軍が占據するや、一擧に五〇粁北方のクヴアム(Kvam)に退いた。一方ドイツ軍はグドブランズに平行する東方のオステルダル溪谷を北上し、四月二八日頃はオスロー＝トロントハイム鐵道に沿つたティンセットならびにアルヴダル方面から一は西方のフォルダルへ、一は北西のインセットに向ひ、最後のものは北東のレーロスおよびスエーデン國境地方に向ひ、此處でノルウェー軍の抵抗を受けた。かくて聯合軍對ドイツ軍の決戰はドムバス＝レーロスの線において展開された。すなはちこの方面における二九日の兩軍の態勢は、グドブランダル溪谷を突破

したドイツ機械化部隊はすでにドムバス＝ステーレン（Stoeren）を結ぶ鐵道線路に到着し、ドムバス北方三二粁、ステーレン南方一二八粁の要地イエルキンにおいて同鐵道線路を切斷せんとし、若しこの鐵道が切斷されるとステーレンにある英軍は全く孤立せしめられるので、英軍もまたイエルキン方面に兵力を集中して防備につとめた。しかるにトロントハイム南方の要衝ステーレンは三〇日陥落、ここにトロントハイムより南下せる獨軍とオスローより北上せる獨軍との連絡が成つた。また中部ノルウェーの要衝ドムバスも同日正午陥落し、トロントハイム＝ドムバス＝オスロー鐵道はドイツ軍の手に歸した。

第九圖　中部ノルウェー戰線

裝備の劣弱さと、訓練不十分のため聯合軍の敗北は慘憺たるものであつた。そしてナムソス方面においてもスティンキエルにおいて大敗を喫し、聯合軍は五月二日夜ナムソスを撤退、また同日中にアンダルスネスからも撤退し、中部ノルウェーの戰闘は終了した。

C　デンマークの降伏

ドイツ軍のデンマーク攻略はノルウェー戰の一挿話として、簡單な、しかしながら重要な部分を占める。デンマークに對する攻擊はノルウェー上陸作戰が開始されたのと同時刻、四月九日午前四時半であつて、ドイツ機械化部隊はフレンスブルグおよびトンデルンの二ケ所において國境を突破し、アーベンラーデ、エスビエルグを通過して北上した。また東海岸攻擊部隊は拂曉小ベルト海のミッテルファルトに上陸し、同所を占領した。ドイツ海軍は大ベルト海峽を通過しユルゼールおよびニーボルグに陸戰隊を揚陸せしめた。ワルネミュンデから進軍せる一部隊は對岸のギエトゼルに上陸し、同地から北上、ギエトゼル島北端からヴォルディングボルグにかかる橋梁を占據した。最後に他のドイツ部隊はコペンハーゲンに上陸し無抵抗裡に首都を占領した。この作戰に參加せるドイツ軍は五萬ないし七萬と見られてゐる。一方デンマーク政府は、ドイツ軍に對する一切の抵抗を禁じ、九日午前中に全デンマークはドイツ軍の手に歸し、同日のデンマーク閣議はドイツの保護を受諾することに決定した。

この作戰の意義は二つに分れる。すなはち第一はノルウェー上陸

軍援助と、スカゲラック、カテガットの兩海峽を陸上よりその所有圏に屬せしめるにある。これによつて英佛海軍のスカゲラック海峽侵入は一層困難となるであらう。第二は對英攻擊の基地となす目的である。同時に歐洲大陸におけるドイツの經濟的地位は强化されるであらう。

なほデンマークがドイツに降伏したため、從來デンマークと同君聯合體をなしてゐたアイスランドならびに屬領グリーンランドの歸趨が重要視されたが、四月一〇日英國は右兩地に對するドイツの進出を防止するため「凡ゆる努力を拂ふ」旨の聲明を發し、フエル諸島（Faroe Is.）は英海軍に占領された。同時にアイスランド議會はデンマーク國王クリスチャン一〇世の大權を剝奪する旨決議し、ついで五月一〇日、英軍はこの地に上陸占領した。またアメリカ合衆國は四月一二日大統領談をもつてグリーンランドに對する關心を示し、同一六日ハル國務長官はグリーンランドがモンロー主義の圏内に入るべき旨の言明をなした。

（四）西部戰線

a　戰略的諸條件

1　地形

西部戰線こそは大戰の檜舞臺であり、歴史的な獨佛決戰の場所である。ドイツにとつて戰爭の主たる目的は、云ふまでもなく英佛を倒すことであつて、逆に英佛にとつてはドイツを倒すことにある。そしてこの決戰の陸上の正面が、正に西部戰線を形成してゐた。此處の戰闘に比すればポーランド、フィンランド、ノルウェー、地中海、アフリカ等々の戰線は、單に從屬的なものであらう。何故ならば兩軍ともに戰爭目的を達するには、この一線を突破しなければならないからである。

西部に於ける軍事行動は、困難な地勢と中立諸國、スイス、ベルギー、オランダ、ルクセンブルグ等のこみ入つた國境があると云ふ理由からばかりでなく、二つの大要塞線――マジノ線およびジークフリード線――の故に、極めて制限せられてゐた。マジノ線は開戰當時英佛海峽からスイスのジュネーヴ湖まで達して居た。しかし、ベルギーに向つてゐる部分はフランスへ侵入する場合の直接の通路を守備するあの大要塞地帶ほど頑堅ではなかつた。

ジークフリード線は最近構築されたもので、開戰當時は未だ完全に出來上つて居なかつた。しかし、モーゼル河畔のトリエルおよびライン河の近くのカルルスルーエ間の主要なる部分と、その南、シユワルツワルトを通り、スイスに達するまでの部分は充分準備が完了して居た。北方オランダ國境附近は、開戰後數ケ月間建設工事が續けられてゐた。

この間にあつて、オランダと北フランスは大軍の行動に便利な唯一の平坦な地形をなしてゐる。またこの地方は對英攻擊の最上の基地であり、且つイギリス遠征軍の上陸地點でもある。イギリスにとつて、この地方を敵の手にゆだねることは、生命線たるドーヴァー海峽を直接的危險に曝すことを意味する。それ故幾世紀もの間、イ

ギリスの政策は、この土地がヨーロッパの強國の手中に歸することを防止するにあつた。

ベルギーおよびオランダは各國の勢力が互ひに交錯してゐるのみならず、それ自身としても矛盾した性格を有してゐる。すなはち弱小植民地帝國として、海外植民地防衛のため英海軍に依存しなければならないし、經濟的にはドイツとの中繼貿易に依存する。それ故英獨佛が互ひに敵味方となる場合、兩國の中立は保全し難い。

かくてドイツからフランスへ、またフランスからドイツへ攻め入る場合、ベルギー、オランダ兩國が戰場となるべきことは、論理的歸結である。加ふるにこの地方は六個の魅力ある侵入路を提供してゐる。しかしこのうち三個の重要ルートたる海峽諸港に至る廣幅員の外廓ルート、一九一四年に第一軍の進擊せるブラッセル・ルート、ムーズ溪谷を下る古典的侵入路の三者は要塞化されてゐた。ベルギー國境はマジノ線延長として、フランスの援助のもとに、嚴重に固められてゐた。リエージュの周圍は古い要塞がマジノ樣式に近代化され、新らしい要塞がこれに追加されてゐた。歴史的侵入路であるばかりでなく、要塞化された工業地帯の重要な一環であるムーズ溪谷は、全面的に武裝されてゐた。この複雜な要塞工業地帯の南は防禦に好都合なアルデンヌ森となつてゐる。ベルギーを通過するその

第一〇圖　マジノ線及びジークフリード線

第一一圖　オランダ及びベルギーの防禦線

他すべてのルートは、リエージュよりアントワープに至る幅二〇〇フィートのアルベール運河によつて切斷される。

若しドイツがベルギーに侵入しないとすれば、それ以外の獨佛國境を選ばねばならなかつたが、斯かる場合困難は倍加したであらう。ルクセンブルグからラインに至るまで、八つの丘陵とマジノ線の最深部によつて阻まれてゐる。フランスはヴェルサイユ條約によつてロレーヌ豪地のすべての戰略的地點を要塞化し丘陵は銃砲によつて埋められ、道路はバリケード化してゐた。

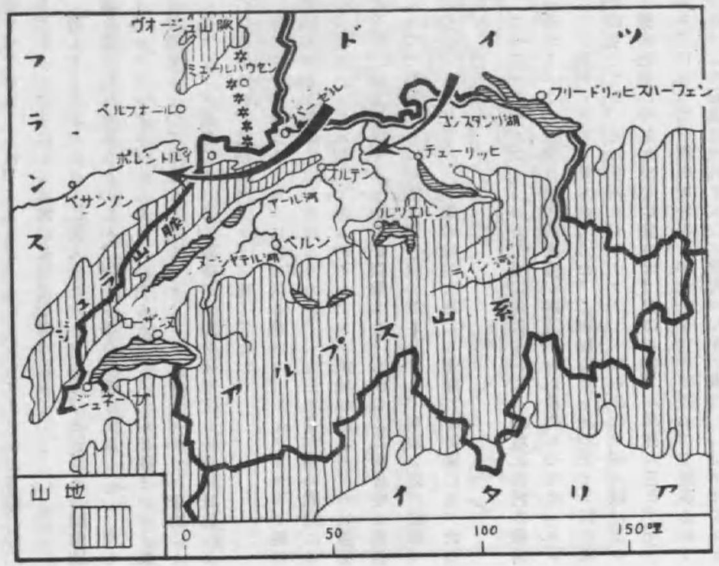
逆にフランスからドイツに攻め入る場合も、ジークフリード線の堅固な要塞を突破しなければならない。一九三九年初期の戰鬪において、フランスは北方ではルクセンブルグ國境に沿ふモーゼル溪谷を下り、他方ではザール地方を攻擊した。しかしこの兩者とも森林によつて點綴される要塞は五〇哩の深さを有し、突破は甚だ困難であつた。そしてフランス軍の目的も單に「牽制」の範圍に止つたのである。

さらにルクセンブルグの九〇哩以南において、國境は直角に南西に折れる。この突角は近代的要塞が構築され以前にあつては「ロレーヌの關門」として知られてゐた。この點より上流のライン河は獨佛國境となり、その前面はジークフリードならびにマジノ線によつて要塞化されてをり、その後方は、東においては黑林（Black Forest）によつて、西においてはヴォージュ山脈によつて掩護されてゐる。この要塞を突破するには數萬の人命を犧牲としなければならないであらう。ただラインがさらに東方に折れてスイスに入る一點において、ナポレオンがドイツに攻め入つた有名なベルフォール・ギャップがある。この山峽はアルプ、ジュラ、ヴォージュの山麓臺地であり、且つライン、ダニューブの分水嶺をなすフェルト・ベルグ山塊に面し獨佛の自然の通路となつてゐたが、前大戰以後、嚴重に固められた。この方面における今一つの通路は、スイスの中立を侵して進むことによつて得られるが、これにも多くの困難があつた。

第一二圖　豫想された攻擊路

2　ドイツ軍作戰

西部における軍事行動は、一九三七年九月より四〇年五月初に至るまで、大きな展開を見ず、兩軍の主要な戰鬪行爲は、四〇年五月



第二三圖　スイス・ルート

より六月に至る僅か二ヶ月で終りを告げる。これを前大戰における四ヶ年の戰線膠着に比すると、甚だ對蹠的であるが、このドイツの輝かしい勝利こそ、全く戰略的勝利と云ひ得るであらう。

一九四〇年におけるドイツ軍司令部の作戰は、前大戰當時シュリーフェン伯が計畫した作戰の批判に立脚し、北フランスに在る英佛軍を、その作戰基地たる中部フランスから切離し、海岸に向つて壓迫せんとするものであり、次いで第二段階としてフランスの心臟部パリを衝くことであつた。ソ聯空軍少將タタルチェンコはこれを次の如く述べてゐる。

「一九四〇年五月一〇日から六月五日に至る期間のドイツ軍最高司令部の戰鬪戰略計畫は、全戰線では地上部隊を以てし、後方では空軍によつて、敵の飛行場、鐵道分岐點その他を襲擊する果敢な攻擊によつて、敵の凡ゆる戰略豫備軍を拘束し、セダン＝ナミュール區間にあるマースの堡壘を突破し、第一、第七、第九フランス軍およびイギリス遠征軍團の戰線ならびに後方連絡路に進出し、彼等を英佛から切離して逆戰線で交戰するを餘儀なからしめ、作戰的にこれを包圍し殲滅せんとするにあつた。同時に聯合軍はベルギー軍と共に北東から包圍されるに至つてゐる。故にわれ〳〵は玆に二重の突破と二重の戰略的包圍を見るのである。すなはち一はオランダ＝ベルギー突破であり、他はセダン＝アミアン突破であつて、二つながらダンケルクを突かんとする共通方向を採つてゐる。そして何れの突破も同じ圖式で包圍を展開してをり、敵に打擊を與へるのである。その一つは英佛軍の戰略的戰線の北翼

全體を包圍するのであつて、重要な攻擊であり、他は主要作戰を保證し、掩護的任務を果す補助的なものである。かくて英佛軍は逆戰線で戰ふことを餘儀なくされる。二重の包圍は、初めは作戰的なものであるが、後には殆んど全く戰略的包圍に發展してゐる。」

ドイツ軍首腦部はポーランド戰と同樣であるが、西部における陸軍の主要構成は次の三軍團より成つてゐる。

(a)　フォン・レーブ軍團　フォン・レーブ上級大將の率ゐる集團軍の任務はドイツ西部第一線の左翼を構成して、スイス國境からモーゼル河に到る一帶に强固な防禦線を張るにあつた。ついで作戰の推移に從ひ、フォン・ヴィッツレーベン上級大將および、ドルマン大將の率ゐる二個軍を以て攻擊に移り殲滅戰を展開する計畫であつた。

(b)　フォン・ルントシュテット軍團ならびにフォン・ボック軍團　この軍團はモーゼル河から北海に到る全線において、敵の國境陣地を突破してオランダを占領し、アントワープに向つてディーレ陣地に迫り、リエージュを奪取し、特に左翼の集中兵力をもつてマース河口に到達し、裝甲機械化部隊の重壓を以て、ナミュールからカリニャンに到る間、セダン附近において國境突破を敢行する。次いで全裝甲機械化部隊を集結してこの作戰を更に進展せしめ、エーヌおよびソンム兩河の水路を利用して海岸線に達せんとするものであつた。このほかルントシュテットの南方軍團は、一九一四年の「マルヌの奇蹟」を再び繰りかへさぬため、ドイツ軍の突破の持續に伴ひ當然暴露せんとする左翼側面の掩護を行ふ任務をも併せ有した。

次にドイツ軍の兵力は、全軍二〇〇個師團＝三、五〇〇、〇〇〇人、四〇〇ないし五五〇飛行中隊＝四、五〇〇ないし六、〇〇〇機で、この外に多數の豫備機を有してゐた。このうち一五師團約一百萬人がベルギー＝オランダ國境に向ひ、約一、五〇〇ないし三、〇〇〇機の飛行機がこの戰鬪に參加せるものと見られてゐる。

3　聯合軍作戰

聯合軍は明らかに最初から誤れる觀念に支配せられてゐた。英佛側はドイツに對して軍備の立後れが認識せられてゐたにも拘らず、前大戰の經驗より引き出された「防禦力の攻擊力に對する優越」の理論により、マジノとジークフリードの兩要塞によつて堅固に固められた西部戰線は、當然膠着するものと信じられてゐた。かくて英佛の作戰は、最初から消極的な長期作戰であり、陸上における陣地戰、海上における封鎖が、この作戰の兩翼をなしてゐる。そしてこのことは尨大な植民地資源を有する聯合軍にとつて極めて有利であり且つドイツを屈服せしめる唯一の方法であると考へられてゐた。

中立國たるオランダ、ベルギーが、專ら防禦に專心した。そして兩國の防禦力に對する英佛の過大評價があつたことは、ナチスの近代兵器に對する過小評價と要塞への過大評價の當然の結果であつた。

これら防禦作戰に動員せられた兵力はベルギー、オランダ合計九〇〇、〇〇〇人、飛行機五〇〇ないし九〇〇であり、フランスは最大

兵力一五〇個師團＝二、七〇〇、〇〇〇人の兵力を動員し得る狀態にあつた。これにイギリス遠征軍三五〇、〇〇〇ないし四〇〇、〇〇〇人が加へられる。また西部の戰鬪に參加せる英國飛行機數は不明であるが、フランスはドイツに對して甚だ貧弱な總數三、五〇〇ないし五、〇〇〇機を有したのみであつた。

b 前哨戰

1 フランスの前進

西部においては九月三日英佛の對獨宣戰以來、二つの要塞線の庇護の下に交戰國の兵力は動員されて行つた。フランスは幾分厄介な二一日動員機構の運轉を開始した。一方國境都市、部落の人民は退去を命ぜられた。イギリスは大陸に遠征軍を送るべく準備を進めた。そして、聯合軍の總司令官ガムラン元帥は、フランス野戰部隊司令官ジョルジュ將軍に敵を牽制する意味の攻擊を命じたのである。それは東部戰線の同軍の一部を割かしめ、重壓下に苦しむポーランド軍の壓迫を輕減する意圖であつた。

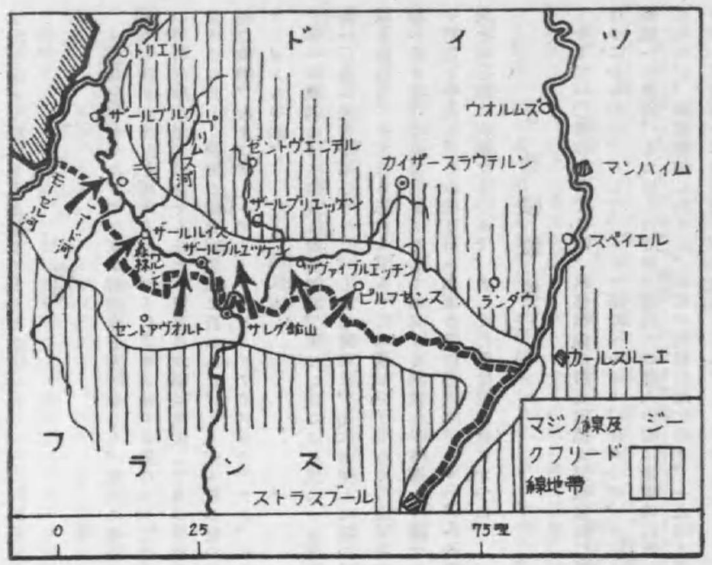
しかしこのフランスの牽制は眞に大規模な攻勢ではなく、むしろ强行偵察とか前衛部隊の衝突等を含んだ一連の局部的行動にすぎなかつた。フランス軍の行動はライン河とモーゼル河間の一一〇哩の國境部分卽ちラウターブルグ、バーゼル間の獨佛國境地帶に限られてゐた。

フランスの攻勢は主としてザール地方（面積七三八平方哩、豐富な鑛業及び工業地帶でその中心都市はザールブリュッケンである）に向けられた。最初フランス軍の努力はマジノおよびジークフリード線間の「無人地帶」を「探り」、曲りくねつた國境線により構成された地理的な突出を除去するに捧げられ、この目的のために、ザールブリュッケンの西部および東部に於ける活動は最も華々しく行はれた。一方フランス軍の「探り」はハルト山脈中のビーンワルトにまで潛行して行つた。

かゝる偵察の後フランス軍は徐々に前進したが、忽ち西部戰線のドイツ國防軍および豫備軍による頑强な抵抗に遭遇した。當時西部戰線のドイツ軍は大部分豫備軍よりなつて居たのである。戰車防碧機關銃網、その他の障碍物は、森の多い地勢と相俟つてフランス軍の前進を妨げた。九月第三週までにはフランスの動員は略〻完成したが、この攻擊は佛軍の前哨線を構築したにすぎなかつた。それはドイツ領内にはあつたが、最初の主要なる抵抗線たるジークフリード線には接してゐなかつた。フランス軍の最前線は鋸齒狀に左の如く擴がつてゐた。バールの北ルクセンブルグからシウエルドルフの北ウエーヒンゲンの南部を通り、ザールの南岸の少し南方ハイニングから、ザールブリュッケンの南郊ワルントの森の中を通り、ホルンバッハの南、シュワイツの北方にあるスピッヘルン、オーレンタルに至り、ビーンワルトをすぎてライン河に至るのである。

このフランス軍の前進は大規模なものではなかつたが、ドイツ軍の抵抗が激しくなるや、戰車――あの有名な七〇―九〇トンもあるフランスの重戰車も若干混つて居た――による潛入戰術が用ひられた。騎兵も攻擊に於ても、防禦に於ても偵察の目的に使用された。

第一四圖　フランスの攻擊



フランス軍の前進は多數のドイツの國境地帶の都市を放棄せしめた。ザールブリュッケンは長期間死の町であつた。ビュービンゲン、クラインブリッタードルフ、ブリースランスバッハ、ベーベルスハイム、ブリースメンゲン、アウエルスマッヘル等のザール鑛業地帶の諸都市も、撤退を餘ぎられ、開戰六―八週間はザール地方の鑛業および工業的活動が全く衰微したと云ふ事は殆んど疑のない事と思はれる。しかし一方、フランス軍はザール地帶の重要な部分を何一つ占領出來なかつた。大工業中心地は砲擊によつても破壞されたものは一つもなかつた。ザールブリュッケンも一時は野砲の射程内にあつたが、殆んど損害は蒙らなかつたのである。

開戰後二週間の中に西部戰線に於て更に猛烈な攻擊があつたとしても、ポーランドを助ける事は出來なかつたであらう。何となれば東部に於けるドイツ軍の進擊は、之を支へるにはあまりに迅速であり、猛烈であつたからである。

とに角フランスの牽制的攻擊は失敗した、少くともポーランドを救ふには間に會はなかつた。九月中旬にはドイツ軍は東から西へ軍隊の移動を開始した。その頃までには西部要塞軍團は相當に再强化された。そして、九月二一日までには、ドイツ軍の大部隊は征服し終つたポーランドから西へ西へと移動して居たのである。

ポーランドが征服されて了つては牽制は目的を失つてしまひ、またジークフリード線はフランスの攻擊軍を淺駕する大部隊によつて强化され、今や大規模な攻擊は極度に危險となつたので、フランスは賢明にも、防禦作戰に轉じ、一〇月三日までには自國領土内の主

要防禦線まで軍隊を引き揚げてしまつた。

2 ドイツの攻勢

一〇月上旬今度はドイツ軍が偵察隊を先行せしめ、砲兵に掩護されつゝ徐々に前進を開始した。ライン、モーゼルの線にあつた佛軍の前哨部隊は忽ち驅逐せられた。獨軍の攻撃は主として次の二點に集中された——佛軍の抵抗が頑强に行はれた。モーゼル河の東の四哩の戰線、およびザールブリュッケン、ツワイブリュッケン、ビルマーゼンスの線。

第一の戰線には三個或は四個師團、第二の線には八或は一五師團約一〇萬の兵力が用ひられた。しかし佛軍は、先に占領した敵の地域を維持すべく大なる抵抗も試みずに準備の完了せるその主要抵抗線へ引き揚げたのである。そして獨軍も自國領内の佛軍を一掃するや前進を中止し、その後はたゞ佛軍の手にあるフォールバッハの突角を部分的に攻撃するのみで、大した行動は見られなかつた。

3 戰線膠着

かくて一〇月の末までには、西部戰線の兩要塞線は開戰當時の靜けさにかへつた。そして、ドイツ軍のベルギー、オランダ、スイス國境への集結、またはこれ等中立諸國への進入の噂は斷續的に傳へられたが、西部戰線に於ては、兩軍の偵察行動を除き、一九三九年の末まで何等の軍事行動も行はれなかつた。

しかし、この期間、兩方が何もしなかつたと云ふのではない。年末までには二百萬近くの軍隊が聯合國およびドイツによつて西部戰線に集結せられた。一一、一二月中には一日に一、六〇〇——二、〇〇〇人が配置せられつゝあつたのである。兩軍からは二〇人前後からなる小偵察隊が日に四〇組も出された。彼等は森を通り、河をこえて「無人地」を偵察した。毎日捕虜、死傷者が出たが、軍は少しも動かなかつた。そしてこの嵐の前の靜けさの中に、獨、佛兩軍とも、マジノおよびジークフリード兩要塞線を益ゝ强固にしたのである。

4 英國軍到着

戰爭勃發と共にフランスに派遣された英國遠征軍の小部隊は、開戰後四ヶ月は殆んど何もしなかつた。イギリスは直ちに六個師團を派遣する事が出來た。完全に裝備した一五八、〇〇〇の軍隊および二五、〇〇〇の裝甲車の輸送は一〇月八日までに完成した。更に多くの軍隊が海峽を越えて、主としてサザンプトンからシェルブールに送られた。

英國陸軍の總司令官はアイアンサイド將軍、遠征軍の總指揮官は軍内に「虎」として知られたゴート將軍であつた。

マクノートン將軍麾下の最初のカナダ部隊一六、〇〇〇は一二月に英國に到着した。オーストラリア空軍部隊は同月下旬に着いた。要するに一九三九年の西部に於ける戰は、全く手詰りの狀態であり、それは斧とシャベルとキャムブの戰であつた。

5 ドイツ再度の攻勢

一九四〇年に入つてからは、戰爭の舞臺は北歐に飛んだ。フィンランドに續いてノルウェー戰が一段落した五月初に至るまで、西部は依然として膠着してゐたが、この間、二回にわたるドイツ軍の攻擊が見られた。一は三月五日のルクセンブルグに近い獨佛國境における戰鬪ではじめて英軍の前哨線に攻擊が加へられたが、斥候の衝突以上に發展しなかつた。

ついで四月一日モーゼル河とファルツの森の間において砲兵の掩護のもとに突擊部隊の進出が試みられ、フランス領内に數粁進入したのみに止つた。同日ザールラウルテン南方、ツワイブリュッケン南方、ライン上流のイドシュタインにおいても小衝突が行はれたが兩軍は依然として對峙せるまゝであつた。

C ドイツ軍の總攻擊

1 白蘭侵入

西部における決戰は、一九四〇年五月一〇日早朝、ドイツ軍の白蘭國境突破によつて開始された。この方面に對するオランダ、ベルギー兩國の防禦は、オランダでは主力八個師團をアムステルダム東南方のブツムス、ユトレヒト東方のジースト、ユトレヒト東南ワール河畔ティールの線に、三個師團をティール南方のヘルトゲンボッシュと、この南方エインドホーフェンの線に展開し、二個師團を豫備としてアムステルダム、ロッテルダム中間地區に配置してゐた模樣である。またベルギーにおいては主力一四個師團をアントワープ、ハッセルト、リエージュ、マルシュの線に展開し、一部の豫備軍をブリュッセル、ムル附近に配置してゐた。これに對するドイツ軍の戰略的目標はオランダ國境防禦陣地および、南方ナミュール方面の突破を敢行し、エーヌおよびソンム北方の英佛軍を殲滅すべき前提條件を創り出すにあつた。そして前大戰におけるシュリーフェン作戰と異り、明らかに左翼をもつてする前線突破に重點が置かれてゐた。

この中心勢力をなすものはルクセンブルグを突破して來たクライスト快速兵團であり、同兵團は三個の機械化師團と、五個の裝甲師團より成るもので、ポーランド戰と異つて、裝甲機械化師團の集中的使用が行はれた。この兵團は後にカレー方面への急進擊を行ひ、フランダースにおける戰略的包圍の前提條件を造り出したものであつた。そして西部における全兵力は約一五〇個師團、航空機三、〇〇〇と推測されてゐる。

西部におけるナチスの電擊戰に關して、タタルチェンコは次のごとく述べた。——「作戰展開上の電擊的特徴は、敵をして呆然たらしめ、戰況を正しく評定する可能性や、防禦上の正しい決意や、方法を得せしめないことである。凡ゆる戰鬪手段に高度の調和のとれてゐること、戰車や自動車化師團や、落下傘部隊をもつ空軍の運動速度を十分に利用すること、これら一切がドイツ軍の進擊成功に決定的役割を果したのである。」

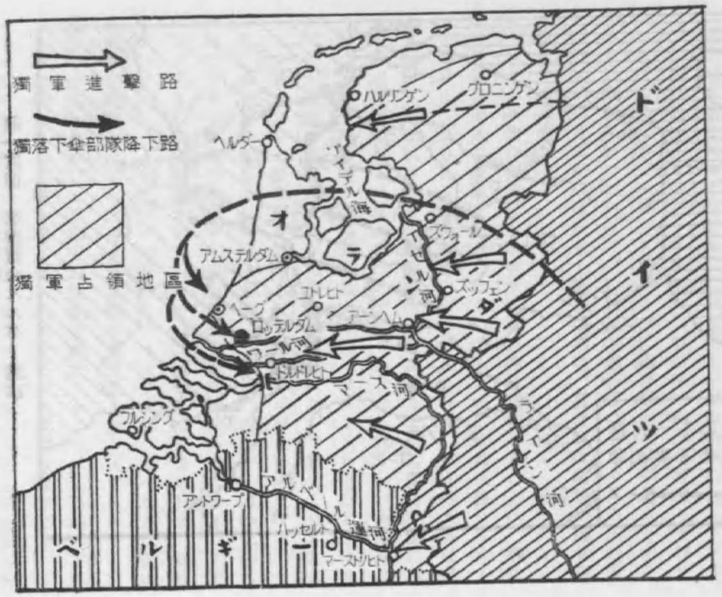
ナチス黨部發表の戰爭經過を要約すると次のごとくである。五月一〇日拂曉、西部國境より一齊に進擊したドイツ軍は、同日午後早くもイッセル河畔に達し、オランダ領内各所においてマース河を渡河、マーストリヒトおよび同市西方アルベール運河上の數個の橋梁をその手に收め、マルメディーを占領した。また南方ルクセンブルグを突破した部隊はベルギー國境を越えた。オランダ、ベルギー、ルクセンブルグ國境を越えたドイツ地上軍は到るところで國境守備軍を潰走せしめ、落下傘部隊および空輸部隊が、それ〴〵戰略的地點に着陸した。一方北フランスにあつた英佛軍はベルギー東部戰線に急行し、若干の英軍が海峽を渡つてベルギーに派遣せられた。

一二日、北部オランダではグロニンゲンが攻略され、ドイツ軍はハーリゲンおよびゾイデル海東岸に達した。一方イッセル河の陣地を突破せる部隊は、さらに西進を續け、アーメルスフォールトとレネンを結ぶ「グラッペ・ライン」を突破し、ベール陣地を陷れた。ドイツ軍はさらにベルギーのハッセルト、マーストリヒト間においてアルベール運河を横切り、マーストリヒト西南方のリエージュ要塞線最大據點の一たるエベン・エメール堡壘を攻略した。

ルクセンブルグ占領——南部ベルギーでは敵の頑强な抵抗を排して廣汎な地域を占領し、ルクセンブルグ公國は、一二日中にドイツ軍の手中に歸した。

リエージュ陷落——西部戰線におけるドイツ軍の攻擊は、一二日極めて有利な展開を示した。オランダにおいては南部ウィレム運河の西方に進擊、ロッテルダム附近に着陸した空輸部隊との連絡に成功した。ベルギーにおいてはハッセルト西北においてアルベール運河を渡河し、リエージュ西方のドイツ軍はマース河の北方を西に進み、一部は一三日リエージュに突入した。しかしリエージュ外廓堡壘はその後依然として抵抗を續けてをり、一四日リエージュ市の完全占領が行はれた旨發表された。同市南方では、アルダンヌ地方を越えて南下せる先鋒部隊が、ナミュールとジヴェの中間においてマース河に達した。なほ北方より南下せる部隊は、一四日アントワープ東北のチュルヌー運河を越え、さらに南方のゲット河本流に達した。ナミュール北方ではドイツ裝甲車部隊は、ディール河陣地に後退中の敵戰車を捕捉した。しかしこれらドイツ軍の果敢な攻擊をうけつゝも、リエージュならびにナミュールの要塞中、或る堡壘はうけつゝ五月二〇日まで抵抗を續けてゐる。

オランダの降伏——オランダ戰線において、ドイツ軍は一四日午前、南部より「オランダ要塞地帶に進入し、ドルトレヒト附近の蘭軍を擊破せる後、ロッテルダムに急進し、同日ロッテルダムは占領された。最南部ではブレダを經てシェルド河目ざして進み、ローゼンダールを占領した。また同日ユトレヒトも占據された。かくてロッテルダムに續いて首都アムステルダムの危機が切迫したので、オランダ軍司令部は全軍に停戰命令を發し、オランダの投降取極めは一五日午前一一時ドイツ軍總司令官とオランダ陸軍總司令官との間に調印せられた。この後ドイツ軍はハーグおよびアムステルダムに入城したが、なほゼーランド方面で戰鬪が行はれてをり、この方面の掃蕩は一八日に至つて終了する。またこれよりさき、五月一一日、

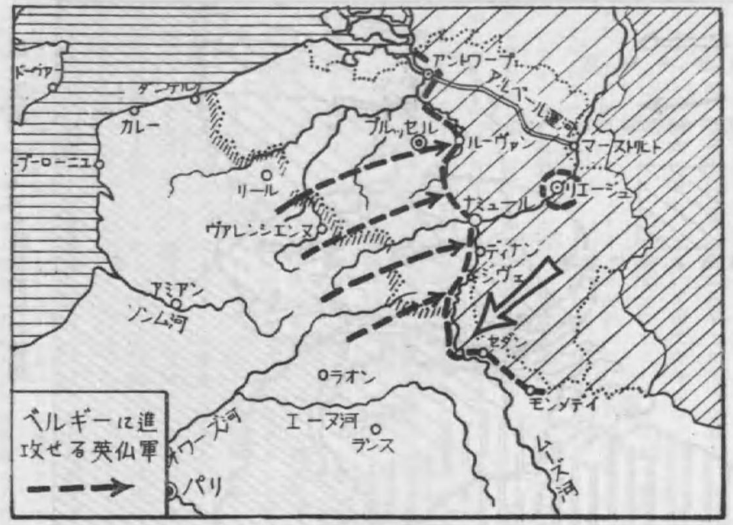


第一五圖　オランダ降伏前後の戰線

英國政府は聯合軍が蘭領西印度を占領せる旨發表した。

ムーズ（マース）河突破——五月一四日ドイツ軍はセダン方面およびナミュール、ジヴェ間の三ケ所においてムーズ河を突破し、ムーズ河西岸において戰車隊を先頭とするフランス軍の逆襲を擊退した。このためフランス軍防禦線は約六〇哩（一〇〇粁）の大突破口をあけられてしまつた。このムーズ河の突破こそ、西部における急速なドイツの勝利に對して、重要な契機をなすものである。フランス軍はレイノー首相の言葉をかりれば「一連の信じ得べからざる過失のため」ムーズ河の三つの橋梁を爆破せずして退却した。このためドイツ機械化部隊は、易々と佛白國境に雪崩れこむことを得たし、カレーへの大旋回＝戰略的包圍の端初的態勢を完成し得たのである。はるか後方において、佛軍は防禦線の間隙を充塡したが、俄造りのマジノ要塞と、これにおとらず俄造りの防禦線とが、ドイツの精鋭を喰止めるには、あまりにも貧弱であつた。このほかセダン方面においても、一五日獨軍のムーズ河突破が成功してゐる。

アントワープ陷落——フランス軍がムーズ河の陣地より後退したとき、ベルギー軍主力はマリーヌ、ルーヴァン、ワーヴルを結ぶディール河陣地にあつた。しかしながらこの陣地も、五月一七日、ワーヴル南方において突破せられた。かくてルーヴァンは一七日中に占領されブリュッセルも同日陷落した。一方ナミュール要塞の北東前線も崩壞した。ついでアルベール運河要塞線の北西端をなす首都アントワープ要塞線は、同一八日ドイツ軍によつて突破せられ、同市は降伏するの餘儀なきに至つた。アントワープ陷落後、ベルギー軍



第一六圖　英佛軍のベルギー進攻

はなほ頑强な抵抗を續けてゐたが、英白聯合軍は次第にシェルド河の後方陣地に後退した。

ベルギー軍降伏――しかるに、このシェルド河の聯合軍陣地は、北方では五月一九日アントワープ西方で突破され、南方においては翌二〇日ドイツ軍はゲンドル河を越えてシェルド河上流に達した。次いで聯合軍はガン東方およびシェルド河南方において攻勢に出た

第一七圖　ムーズ河陣地攻撃

が、間もなく撃退された。このほかシェルド河陣地においては頑强な抵抗が試みられたけれども、二二日ドイツ軍の全面的攻撃を受け、二四日遂にフランダース戰線でこの最後の强固な陣地も突破せられた。このため、ベルギー軍ならびに聯合軍は、最早頼みとするに足る防禦線を喪つたわけで、これ以來聯合軍はドイツ軍の大包圍下に陷り、五月二八日ベルギー軍五〇萬は、聯合軍に何等の豫告無く降伏した。

ベルギー降伏の事情――ベルギー軍が突然降伏したことは、聯合軍の戰線に多大の混亂を招來したものであるが、これは聯合軍にとつて豫見すべからざる事ではないやうに見られる。三九年九月以來レオポルド國王はベルギーの嚴正中立を主張し、若し聯合國側に加擔すれば、再びドイツ軍によつて蹂躙されるであらうといふ豫想のもとに、屢〻聯合國との協力を拒否した。フランスおよびイギリスは、マジノ線の本壘がベルギー國境の東角において終つてゐるためドイツ軍はマジノ線攻撃を回避して、再びベルギーに侵入するであらうとの見解を有してをり、三九年一二月と、四〇年一月の二回にわたつてドイツ側のベルギー國境突破の可能性があつたとき、英佛はベルギーの共同防衛を申入れたが、二回とも拒否せられた。さらにノルウエー、デンマークに對するドイツの攻撃が加へられた折に英佛は三度びドイツのベルギー攻略の危險性を論じて、ベルギーに協力を申入れたが、なほ國王の信念は動かなかつた。この時すでにドイツ軍侵入のさい聯合軍は直ちにベルギーの主要防禦線たるアルベール運河要塞戰その他の防衛に參加するであらうことが暗示されてゐたのである。

ドイツの白蘭に對する侵入が行はれたとき、フランス參謀總長ジェオルジュ將軍は、ベルギー國内に聯合軍を移動せしめることは、最上の作戰に非ずとの意見を具陣した。彼はこの作戰が其だ冒險であると論じ、聯合軍はフランス國内に防禦陣を敷くべきであると主張した。そしてこの意見はパリにおいて多大の賛成を得たにも拘らず、イギリス側は海峽諸港を敵の手に渡すべからざることを强力に主張したため、ガムラン將軍はベルギーに對する聯合軍の侵入案を採用した。そしてこの作戰が決定されたのと殆んど同時に、レオポルド國王よりの救援依頼が到着した。

かくてベルギー軍と聯合軍との指揮は統一せられたにも拘らず、レオポルド國王と英佛との感情的對立は融和せられず、加ふるにベルギー軍は專らベルギーの防禦を第一とし、英佛軍は單に軍事的目的から自己の利益のためにベルギー戰線に參加したのである。この戰爭目的の相違は決定的場面において、兩者の分裂の可能性を多分に含むものであつた。

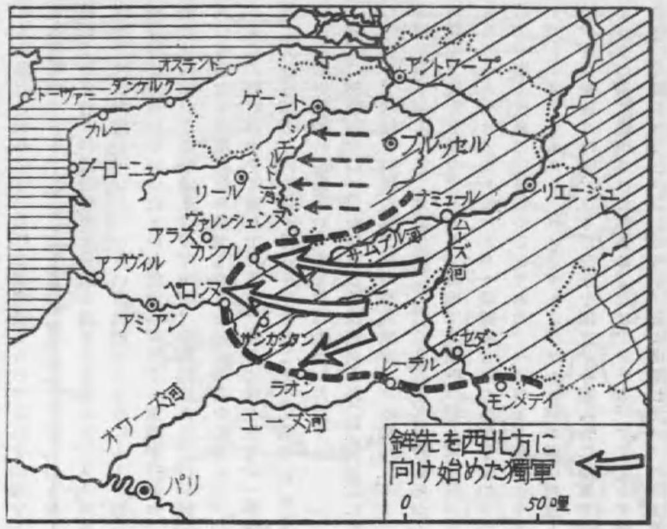
2　北フランス戰線

ドイツ軍のフランス國境突破は、ドイツ軍行動開始の數日後、すでにモントメディ、セダンを結ぶムーズ河前線において實現せられてゐたが、ムーズ河の防禦線に阻止され、五月一四―一五日のムーズ河の突破を受けるまで、決定的な侵入は見られなかつた。しかるにムーズ河防禦線の崩壞以後、この方面におけるドイツ軍の進擊は

約一〇個師に達する機械化兵團、ならびに輕戰車、裝甲車を根幹とする機動兵團の殆んど全部を擧げて、モーブージュ、メジエール間約九〇粁の地域に集中された。ジークフリード要塞方面との兵力の比率も一對七の割合で、前大戰當時モルトケ將軍が右兵力を一對三としたのに比し、今回は「西方の鐵壁」ジークフリードを顧みとし、突破正面に殆んど全兵力を集中してゐる。このためドイツ軍の進擊は甚だ速かで、一九日にはフランス軍ならびに一部英軍は、第一八圖のごとく白、英軍の防禦線たるシェルド河の線と聯繫を保ちつゝ、ヴァランシェンヌ、カムブレ、ペロンヌ、ラオン、レーテル、モントメディの線に、袋狀の防禦線を敷いた。しかしながら、二〇—二一日の間に、この袋の底にあたるペロンヌ方面に突破口を生じ、ドイツ機械化部隊は、急流のごとくカレーを目ざして進擊し北フランスの聯合軍はこゝに、中部フランスの作戰基地から全く切り離されるに至つた(第一九圖)。このためガムラン元帥にかはつて新たに近東軍司令官ウェイガン大將がフランス軍總司令官となり、聯合軍は五月二一日以後數回にわたつてヴァランシェンヌ地方から南方に包圍を突破せんと試み、またアミアンおよびペロンヌ地方とアラスを隔てる狹い廻廊を横切つてソンム河方面との連絡を强行せんとし、中部フランスよりも、ペロンヌ方面よりこの行動に應ぜんとしたが遂に成功しなかつた(第二〇圖)。この間ドイツ軍の進擊狀態を見れば、一八日にはモーブージュ、ルフェール間の地域に攻擊を加へ、サムブルおよびオワーズ河を渡りラ・カトウならびにサン・カンタンを占領した。次いで二〇日北佛の要衝ラン市陥落。かくてベルギーの最强作戰集團と、セダン南方マジノ線とを繫ぎ、ムーズ河を死守して友軍連絡の任に就いてゐたフランス第九軍は殲滅瓦解せしめられ、第九軍司令官ジロー將軍は捕虜となつた。この猛攻によつて開かれたフランス軍の破口へ、數個師團のドイツ兵力が洪水のごとく崩れ込み、先鋒たる戰車隊および機械化部隊は、アラス、アミアン、アブヴィルを占領し、ソンム河以北に殘つてゐた聯合軍に對する包圍圈を英佛海岸まで押し進めた。

五月二一日、レイノー首相は、フランス軍敗退の經過を、次のごとく、上院において發表した。

「わが國土を防衛すべき要塞線はバーゼルからルクセンブルグ國境を經てロングウイに至るマジノ本線と、セダンから英佛海峽に達する要塞線に二分し得ることは諸君も御承知の通りである。オランダ、ベルギー、ルクセンブルグ三國は既に侵略されたが、佛軍左翼はセダンから英佛海峽に至る要塞線の外側にありセダンを中心とする扇形戰線は、東はマジノ線、北はベルギー領ヘルトーゲン、ボッシュにまで伸びてゐた。かゝる戰線の出現は余の夙に豫見し、期待したところであるが、敵は强力をもつてこれを突破した。敵はセダン、ナミュール間ムーズ河沿岸に作られた蝶番形のフランス防備陣に猛攻を加へ來つた。ムーズ河はその渡河困難なところから、敵に對する重大なる障碍たるべしと考へられてゐたことが惡かつた。同方面の防備の任務を帶びた佛軍各師團が同河沿岸廣汎圍にわたつて展開してゐた理由もこれであり、同方面防備には、比較的裝備も强力ならず、訓練も劣つた師團を以てし



第一八圖　包圍開始

註　五月一九日頃の狀況。

第一九圖　カレー進擊

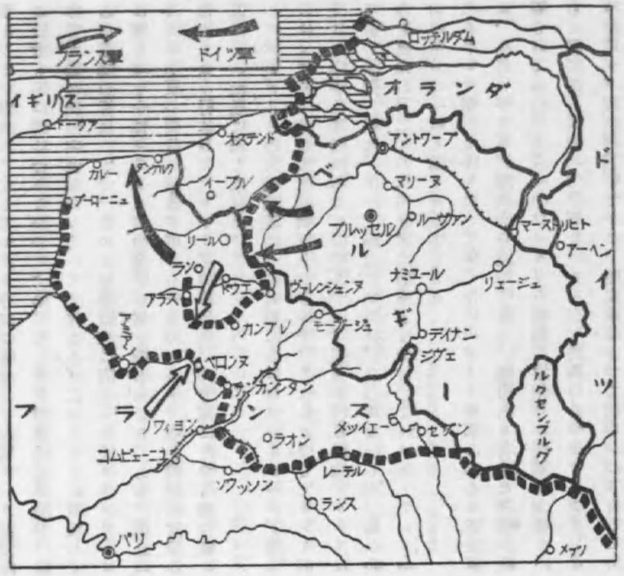
註　五月二一日頃の狀況。

精最鋭部隊をベルギーにおける進撃軍に向けた理由でもある。若しムーズ河が攻めるに困難な河であるとすれば、正確には、護るにも困難だと云へよう。若干の機關銃くらゐでこれを防禦することは不可能である。しかもわが歩兵部隊の半數以上は、あと少しの進撃で計畫通りの蝶番陣形を完成し得るにも拘らず、ムーズ河沿岸まですら到達し得なかつたといふ狀態で、さらにムーズ河の橋梁破壞が行はれなかつたといふ信ずべからざる失敗が行はれ、敵機械化部隊がこの橋梁を渡つて突擊、敵戰鬪機またこの訓練裝備共に劣弱なわが軍團を四散せしめるといふ事態を招來した。かゝる失敗は嚴罰に附する積りであるが、諸君は現在佛軍の一部隊が斯く完き潰滅ともいふべき慘狀を呈したことを認識せねばならぬ。佛軍の戰略的要點はかくして敗れ去つたのだ。

獨軍の突破したのは、わが軍の前線幅員百粁(約六〇哩)にわたつてをり、機械化兵團に次ぐ裝甲軍兵團がパリに向つてポケット陣形を作り、次いで西方英佛海峽に向つて進擊し、佛白國境のわが防禦線の後方を斷ち、ベルギー戰線で交戰中の聯合軍を脅かさんとしつゝあつた。かくてベルギー戰線聯合軍の退却命令の下つたのは、漸く五月二〇日夜のことである。一昨日まで獨軍はケズネー、レース、カムブレ、ペロンヌおよびソンム河の線に到達したが、その後四八時間、さらに進擊を續け、今朝八時に佛軍司令部より余の下に提出された報告によれば、アラス、アミアンの兩市が遂に占領されたとのことである。余は反問したい。如何にしてわれ〳〵はかゝる情勢に陷つたのであるか。わが陸軍の士氣に遺憾があるのであらうか。否々決してさうではないのだ。

戰鬪方法に關するわれ〳〵の傳統的概念は機械化兵團の急速なる突進、落下傘部隊の降下といふ新らしい概念に衝突したのである。この新らしい概念の基礎としては機械化師團と軍用機の大量使用があるのみならず、敵の後方深く背後を攪亂する落下傘部隊の活躍がある。この落下傘部隊たるや、オランダにおいてはリーグを殆んど獨力で占領せんとし、またベルギーにおいてはリエージュの最强力な堡壘を占領した。これら部隊が電話を通じて各地當局に虚報を傳へ、これがため住民の浮足が立つたことなどは別として、この際われ〳〵の先づ第一に爲すべきことは、精神の平衡を保つことである……後略。」

カレー攻略——フランドル地方、ヴァランシエンス、カムブレ、アルトワ方面で兩軍の死鬪が續けられてゐる時、南アルトワ方面のドイツ軍はカレーへの進擊を開始した。かくて一〇〇萬の聯合軍は南北より漸次包圍を受け、ベルギー領内のガンおよびクールトレは二四日陷落、アラス北方のヴィミイ高地も同日占領され、これよりリエール、サン・トメー、グラヴランに至る間がドイツ軍の手に歸した旨發表された。但しブローニュはドイツ側では陷落したと發表したが、英佛はこれを否定してゐる。かくてドイツ軍の海岸への進出は決定的となり、二四日カレーも包圍を受け、激戰の後二五日陷落した。この方面の聯合軍の敗北は慘憺たるもので、三千の英軍と一千の佛軍は約四日間にわたり防戰につとめたが、英海軍の保護のもとに、無事イギリスに上陸した者は、僅かに三〇人に過ぎなかつ



第二〇圖　ドイツ軍のカレー進出

た。

聯合軍の引揚——五月二六日、ベルギー方面より進擊せるドイツ軍はイープル前方に迫り、聯合軍はこれに對して西はグラヴリーヌよりサン・トメール地方に至る間、東はニューポールよりイープル地方に至る間の洪水戰術地帶を防壁とし(第二一圖)、この方面で未だ聯合軍の手中にある唯一つの港たるダンケルクより、英本國引揚作戰を開始した。この中部フランス軍主力はルテル、モンメディの中間に集結し、リール方面に包圍された友軍救出に努めたが成功せず、二八日ベルギー軍降伏のため、佛白戰線に混亂を生じ、同日ヴァランシエンヌ放棄、リール、オルシー、ドウエが陷落した。次いで二九日にはリール、オステンドも占領され、フランス第一軍はカッセル東方において潰滅し、ブリウー第一軍司令官は幕僚と共に捕虜となつた。ドイツ軍は聯合軍の投降を豫想して一氣呵成に攻め立てて來たが、聯合軍は必死の防戰を續ける傍らダンケルクよりの撤退を開始し、サン・トメール、アラス、ヴァランシエンヌおよびクルトレ方面に作戰してゐた聯合軍は、後退にあたつて、先づバセおよびスカルプの兩運河線を占領、ついでリール、グラヴラン、カッセル、イーゼル、ニューポールの線に退却し、最後にダンケルクに撤退して洪水地域に圍繞されたダンケルク陣地を構築した。そして惡戰苦鬪の後、聯合軍三三・五萬は六月三日夜までに英本國引揚に成功し、六月四日、ドイツ軍はダンケルクの一角に突入した。かくしてベルギーならびに北佛戰線は終結するのであるが、この方面における聯合軍捕虜はドイツ軍により一二萬と發表された。

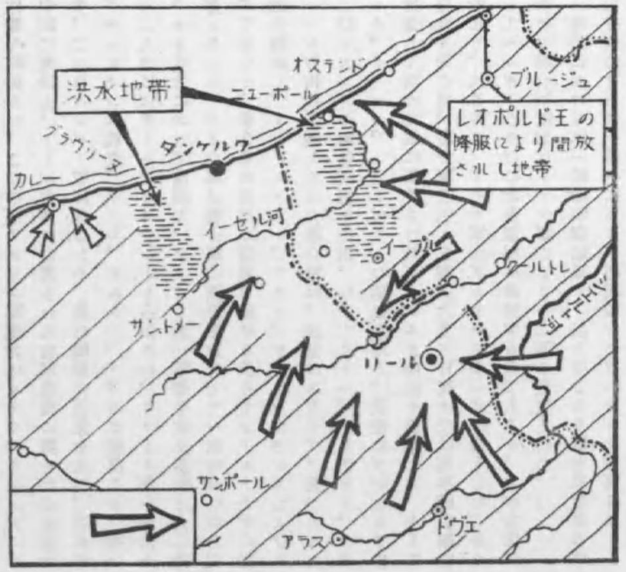
西部における第一段階の諸結果——以上のごとき聯合軍敗退の理由を要約すれば、第一にムーズ河戰線ならびにセダン方面におけるドイツ軍の突破である。既にチャーチル首相も述べた如く、ことに

セダン方面では、この方面のフランス軍主力をなす最精鋭部隊がベルギーに派遣せられてゐたため、ドイツ軍は難攻不落と信ぜられてゐたアルダンヌの森をも、最初の二日間殆んど抵抗を受けずに突破することが出來た。そしてセダン方面の突破口を充塡すべき豫備隊の派遣も遂に間に合はなかつた。第二にドイツ機械化部隊が、極めて大膽な楔形突破戰術を用ひて北佛ならびにベルギーに轉戰してゐた部隊の背後に出で、これを包圍體形に陥し入れてフランダースの聯合軍を中部フランス軍主力から切り離したことである。第三にベルギー軍の突然の降伏が擧げられるであらう。聯合國側に何等の豫告もなく行はれたベルギー軍の降伏は、同方面にあつた聯合軍を甚だしい混亂に陥し入れた。

フランダースの大殲滅戰は、前大戰におけるタンネンベルグあるひはマズリ湖畔の大殲滅戰以上のもので、これによつてフランスが受けた傷手は甚だ深刻なものであつた。五月一〇日以來フランスは三個の軍團（第九、第一、第七）を失ひ、三〇萬ないし六〇萬の兵力を喪失し、二人の軍司令官は捕虜となつた。これは全フランス兵力の三分の一にも達する數字である。

イギリス側の損失も決して少くない。ゴート將軍の率ゐる遠征軍は、全部イギリス正規兵から成つてをり、經驗ある有能な將校が配屬されてゐた。五月一〇日ベルギー領内に進擊せる英軍は六個ないし八個師團の兵力、二〇萬ないし三二・五萬であつた。このうちどれだけが本國に歸還したかは、歷史家によつて明らかにされるであらうが、ドイツの急迫をのがれて、殆んど武裝解除を受けたにも等しい狀態で歸國した。

しかしながら、ドイツ軍も亦決して犧牲なくしてこの勝利を得たのではない。特にフランダースの包圍戰では空軍、機械化部隊が多



第二一圖　フランダース殲滅戰

大の損傷を受けてゐる。五月一〇日以來ドイツ軍が蒙つた損失は、約四個ないし五個師團の兵力、一〇萬ないし三〇萬と推定された。*尤もナチス黨部發表の數字では一五六、四九二人となつてをり、**兩者に甚だしい開きがある。しかし假りに前者の數字を採るとしても、これを聯合軍の損失約五〇個師團一〇〇萬人と比較するとき、甚だ僅少の犧牲と云はざるを得ないであらう。

註 * Baldwin, H. W., The Scope and Meaning of the German Victory: The New York Times, June 2,1940.

** Der deutsche Sieg im Westen; 1940.

かくの如きものがドイツの勝利における軍事的諸結果であるが、さらに戰略上の諸結果をつけ加へる必要があらう。ドイツはナポレオン以來、ヨーロッパの何れの强國も爲し得なかつた海峽への進出を實現し、ノルウェー北端よりソンム河口に至る一、二〇〇哩の海岸線をその手に收めた。ドイツ空軍ならびに潛水艦の基地は、今や英國の門前に達し、封塞せらるゝ者が逆に封塞する立場に轉じた。すなはち、この西部における戰鬪の第一階梯において、潛水艦基地に使用され得る一二の港灣および三〇ないし五〇の空軍基地を得たのである。

さらに海峽諸港占領の意味するものは、英佛の直接的最短路の切斷である。聯合軍は最早統一ある一つの戰線を形成することが不可能となり、英佛の兩戰線の間にドイツ占領地域の楔が打込まれた。英國よりするフランスへの食糧、兵力の供給はイギリス南西岸の諸港よりアーヴル、ブレスト、あるひはさらに南のフランス諸港を利用せざるを得ぬ狀態となつた。

3　フランスの敗退

西部における戰鬪行爲の第二段階は、六月五日、ウェイガン線に加へられたドイツ軍の總攻擊に始まる。これよりさき、フランスはソンム河流のアブヴィル方面よりソンム河に沿ひラオンおよびオワーズ＝エーヌ運河に至る一二〇ないし一五〇哩の地帶に、所謂ウェイガン線を構築し、この一線によつてドイツ軍を喰ひ止めんとした。この方面の地形は、海邊に見られる小砂丘、灌漑用運河、沼澤ピカルディ＝ノルマンディー地方小河川の平行せる溪谷の如きものから、エーヌ河沿岸、エーヌ南方の森林に蔽はれた斷崖に至る極めて變化に富むものであつて、ソンム河以南は森林の無い廣大な耕作地となつてゐる。そしてソンム河自體はそれほど軍事的價値のあるものではないが、この河に連なる運河およびソンム、アーヴル溪谷の沼澤が、この河川の防禦的價値を甚だ大ならしめてゐる。さらに東方ソワッソンおよびオワーズ＝エーヌ運河附近は、シュマン・デ・ダームの如き好適な防禦陣地を提供する皺層多き山塊が起伏してゐる。

フランス軍が、この歷史的防禦線に構築した陣地はマジノ樣式の固定要塞線ではなく、極めて可動性＝柔軟性に富むもので、第一線陣地に迅速に移動し得る對戰車砲隊を主とする防禦線を設け、第二線陣地は、ドイツの急降下爆擊に備へるため有力な空軍部隊を配しその間に步兵、砲兵陣地を隨所に設立した。この總兵力は約二百萬

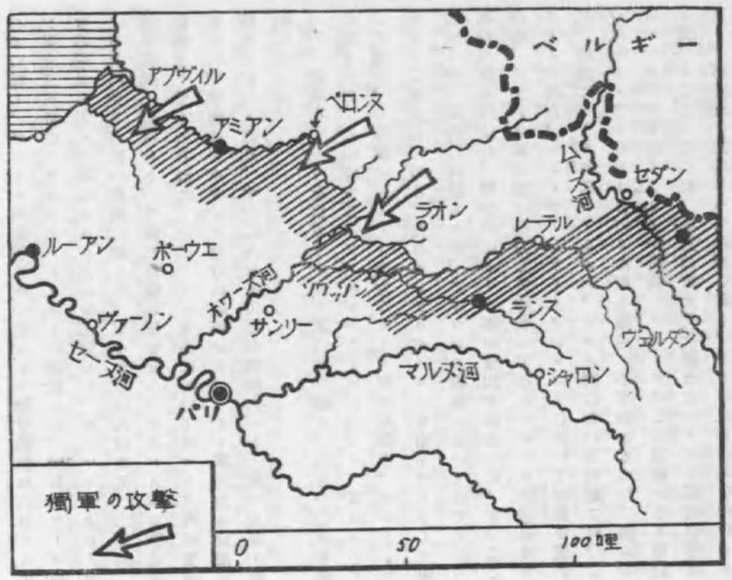
と稱せられてゐた。

しかしながら、この戰鬪の開始される以前に、既にドイツ軍兵力は聯合軍に優位し、總兵力においてのみならず、特に機械化部隊と航空機との決定的な優越を持してゐた。五月一〇日ドイツ軍が白、蘭に侵入した時、その兵力は一七五ないし二〇五個師團と推定されこれに對してフランス軍は一二〇ないし一三〇師團、イギリスは八ないし九師團をフランダース戰線に、他の二ないし三師團をその他のフランス領に留め、ポーランド軍は多分四個師團、これにベルギー軍の二一師團、オランダ軍一〇個師團を加へたものであつた。しかるにウェイガン線の攻防戰が始まるまへに、兩軍兵力に甚だしい懸隔を生じてゐた。すなはちベルギー、オランダの兩軍が武裝を解除せられ、イギリス軍八ないし九個師團、ポーランド軍一個師團フランス軍は多分二四個師團がフランダース戰の直後、最少限一ケ月間は裝備その他の點よりして戰線に復歸することが不可能であつた。ドイツ軍はこれに對して僅か四ないし五個師團が捕虜として若干期間戰線に復歸し得ない狀態にあつたに過ぎない。加ふるに斯のごとき聯合軍の敗退は、次の事實によつて更にその戰略的意義を加增するのである。すなはちイギリスはフランダースにおいて、全機械化裝備を喪ひ、フランスはその半ばを喪つたのである。ドイツ機械化部隊の損害も僅少ではなかつたが、最初から聯合軍の二倍の裝備を有し、且つ大なる補充能力を有するため、西部における戰鬪の第二段階の初にあつて、五月一〇日より更に大なる裝備の優越をもたらすことが出來た。

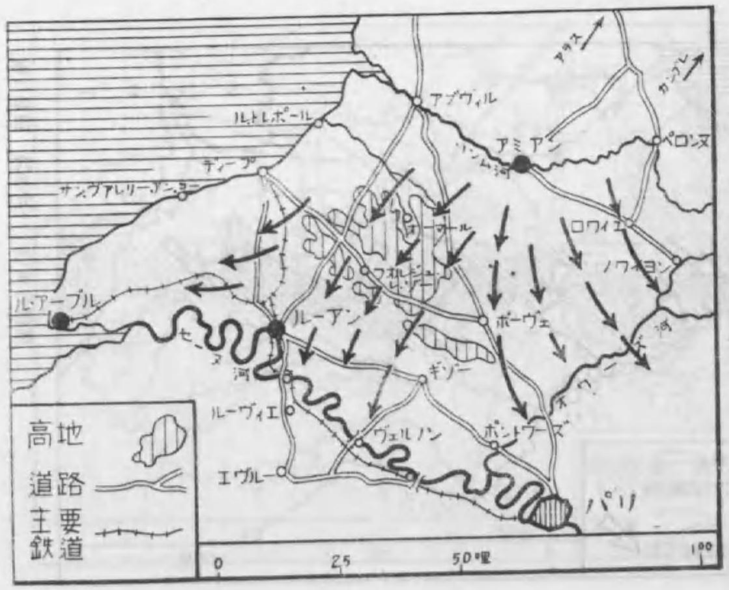
それ故、フランス軍はフランダース戰の後には、最大限五〇個師團を手中に收めてゐるに過ぎず、これに僅少のイギリス兵力と二ないし三個師團のポーランド軍を加へ、三〇〇哩にわたる戰線を防禦しなければならなかつた。かゝる兩軍兵力および裝備の差違は、ソンム河戰線における聯合軍敗退の重大な要素である。最後に戰略的要素としてのイタリアの役割——後方の脅威的中立——がこれに加はる。

ドイツ軍西部作戰の第二段階は、六月三日パリ周邊の空軍基地ならびに航空機工場の空襲に始まり、ウェイガン線に對する總攻擊は、北佛戰線が完全に終了した六月五日早朝にはじまる。この新たな作戰段階の目的とするものは、フランス北部戰線を突破し、四分五裂せるフランス軍を南西ならびに南東方に壓迫し、最後にこれを殲滅せんとするもので、ルントシュテット、フォン・ボック、フォン・レーブ三上級大將の指揮する三集團軍がその任につき、而してフランス軍事專門家の計算によればソンム下流に加へられた初期の攻擊兵力は四五個師團、約七〇萬で、戰車二、二五〇、裝甲車一五、〇〇〇、急降下爆擊機一、〇〇〇と見られてゐる。

ウェイガン線突破——ドイツ軍の攻擊はアミアン、ペロンヌ、ランの三地區において最も激烈であり、すでに六月五日、ソンム河は河口、アム地區、オワーズ＝エース運河の間において突破せられ、その背後のウェイガン線も、同六日隨所に突破せられた。かくてドイツ軍はソンム河およびオワーズ＝エース運河南方に進出し、七日には北佛の戰略的要衝、シュマン・デ・ダームの高地が一部ドイツ軍



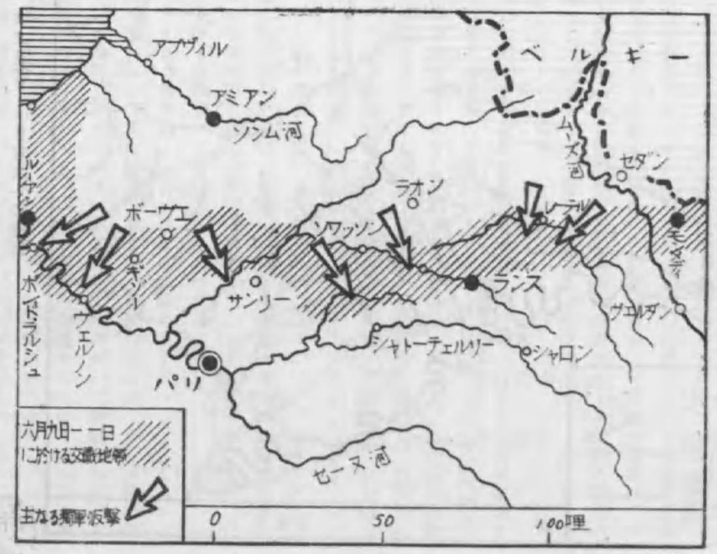
第二二圖　ウエイガン線攻擊



第二三圖　パリ方面への進擊

の手に歸し、ブレール河渓谷にあつたドイツ装甲部隊は八日ルーアン東北三五粁のフォルジュ・レ・ゾーに進出した。同日オワーズ河を進撃せるドイツ軍はカルルボンを占領した。オーマールよりノワイヨンに至る百粁の戰線に對して、ドイツ軍は八日歩兵二〇個師、裝甲部隊七個師をもつて新たな猛攻撃を加へ、フランス軍は後退を餘儀なくせしめられた。ソワッソン東方においてはエーヌ河が突破せられ、戰線はアルゴンヌ地方に迄擴がり、ドイツ軍兵力は急速に擴大されつゝあり、すでに八日までに百個師約一五〇萬の大軍が前線にあつた。

パリ陥落――パリを目ざすドイツ軍の總攻撃は、六月一〇日早朝に始まつた。この時すでにフォルジュ・レ・ゾーのドイツ軍はルーアンに達し、一部隊はルーアン南方のセーヌ河沿岸都市、ポン・ド・ラルシュに突入してゐる。九日モンディディエより南下せるドイツ軍はボーヴェ附近に到達したが、アルゴンヌ戰線においてはフランス軍の反撃が行はれ、部分的にドイツ軍の進出を阻止した。すでにこの時、フランス軍左翼に協力して防戰してゐたイギリス派遣軍はディープの西方、サン・ヴァレリイ・アン・コーにおいて包圍を受けた。最後にセーヌ河はヴェルノン、アマン間において切斷され、このためル・アーヴルよりパリに至る輸送は不可能となつた。加ふるに一一日午前零時イタリアが參戰しフランスはこの方面からも脅威を受けることとなつた。事態の重大化を認めたフランス軍司令部はマルヌ河附近を防備する全師團に對し、パリの東方近郊を含むマルヌ河南岸に後退を命じ、パリ北方のオワーズ河戰線においてもコン

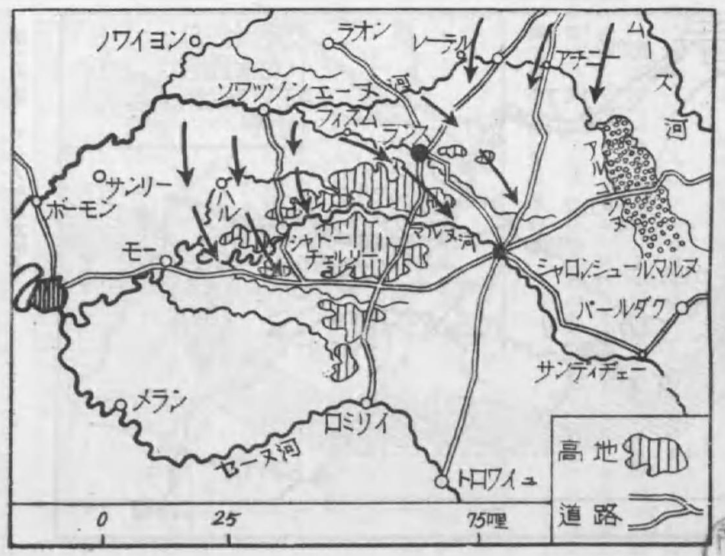


第二四圖　六月九―一〇日の戰線

ビエーニュ、ノワイヨンを放棄してパリを去る五〇粁内外の線に防禦陣を布き、パリ西部、セーヌ河下流に進出せるドイツ軍に對しては反撃を企圖した。かくて一二日、シャンパーニュ地方の要衝ランスは陥落し、佛軍はエーヌ地區を撤退、ルテル南方に後退した。一方ドイツ軍は同日シャトウ・チエルリー附近においてマルヌ河を突破し(第二四圖)、一三日にはシャロン・シュール・マルヌを占領、マジノ線背後を脅威しはじめ、こゝにパリは漸く包圍を受けんとするに至り、ウェイガン總司令官は一三日パリの明渡しを聲明、一四日佛軍はパリを後退し、同日ドイツ軍の入城が行はれた。

フランスの降伏――パリ放棄後、フランス軍は西部においてはセーヌ河後方に退き、戰鬪は今やエブルー地方に展開され、ル・アーヴルは一四日陥落するに至つた。東方においては、シャトウ・チエルリイ附近のマルヌ河を突破したドイツ軍がロミリイに到達し(第二五圖)、フランス軍は漸次トロワイユ方面に押しつけられた。ランス方面よりシャロン・シュール・マルヌを突破せるドイツ軍は、サン・ディヂエー近くに迫り、マルヌ、ムーズ兩河の中間地帶ではドイツ軍はアルゴンヌの森を横ぎり、一五日前大戰の激戰地ヴェルダンを攻略した。

以上の如くしてフランスは、首都たるのみならず軍需工業の中心地たるパリを喪ひ、ル・アーヴルを通過するイギリスとの連絡を斷たれた。加ふるにマジノ線はドイツ軍の後方迂廻により孤立化の危機にさらされ、且つこの方面に對する豫備軍も全く使ひ盡したので一六日マジノ線より撤退を開始した。

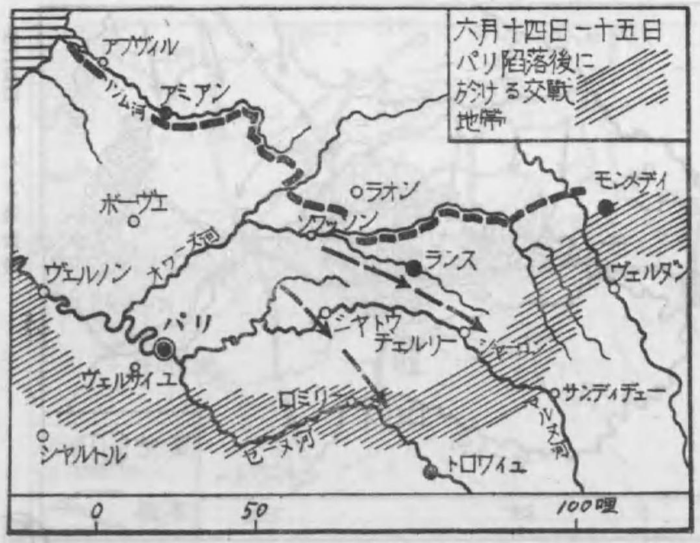


第二五圖　マルヌ河突破

かくて六月一七日、ペタン内閣の成立とともに、フランスはイギリスの英佛聯合案を拒否し、ドイツに對する休戦申込を行つた。此の間ドイツ軍はさらに前進し、ノルマンディ方面ではシェルブールならびに英佛海峡海岸に向つて前進、パリ南方ではオルレアンにおいてロアール河を渡河し、パリ東方マルヌ河突破部隊はアヴアロンに到達、マルヌ、ムーズ兩河中間地帶を前進せる部隊はラングルを經て殆んどスイス國境にまで達した(第二六圖)。敗退せるフランス軍は支離滅裂となつて南部および西南部に潰走し一七日メッツ要塞降伏、ベルフォール、ディジョン陥落、一九日ナンシー、シェルブール、レンヌ、ストラスブール、ツール、ムーラン、ブレスト、リヨンと重要地點が續々陥落し、フランス軍は全く抵抗不能の狀態となつた。この間休戦交渉進捗し、歴史的な休戦協定調印が六月二二日コムピエーニュの森において行はれ、此處にフランスの敗退といふ、第二次大戦における最も重要なエピソードが描かれたのである。休戦協定によつて、第二八圖のごとくフランス北部および西部海岸地帶はドイツ軍に占領された(休戦協定全文については「ヨーロッパ篇、フランスの項參照)。

4 イタリアの參戦

久しく「戦略的中立」を持してゐたイタリアは六月一一日午前零時、パリ陥落の直前、英佛に宣戦し直ちに南佛リヴィエラ方面に軍事行動を開始し、同時にアフリカの佛領チュニス、地中海のコルシカ島への攻撃を始めた。そしてフランスの降伏に至るまで、南佛に



第二六圖　マジノ線後方進出

第二七圖　フランス軍の崩壊

對する重要な進出を企圖し得ず、アフリカにおいては英佛軍の逆襲を受け、後のアフリカ戦線(アフリカ篇の各國參照)ならびにギリシア(ヨーロッパ篇ギリシア參照)、地中海(五海戦參照)において戦線を擴大したのみであり、伊佛休戦協定による利得のほか、現在(一九四一年初)に至るまで決定的な戦果を擧げてゐない。

5 獨英決戦の新たなる段階

第二次歐洲大戦は、フランスの敗退といふ歴史的エピソードを以て全く新たなる段階に入つた。この新段階を特徴づけるものは、獨英の決戦の到來、ドイツのヨーロッパ大陸制覇、アメリカ合衆國の對英援助强化、日、獨、伊三國同盟の成立であり、軍事的には戦局の長期化、海戦の意義の增大、バルカン、近東、アフリカの戦略的意義

第二八圖　獨軍占領地域

の增大等々であらう。戰爭は今や世界的規模にまで擴大せられた。

この新たなる段階における獨英兩國の主たる關心は、ドイツにあつてはイギリスの直接的攻擊と、長期戰にそなへるヨーロッパ＝世界新秩序の構成であり、イギリスにとつては英本土防衛ならびに終局において勝利を得るための作戰展開である。そしてイタリアの參戰によつて、戰線はドーヴァー海峽より地中海、アフリカに迄擴大せられた。

イギリスの對獨封鎖作戰は最早さして有效ならざるものとなつた。イギリス海軍はなほ海上における優越を持續してゐる。しかしナポレオンの時代においてすら、ナポレオンを屈服せしめたものは單に海軍力のみではなかつた。それにはボンド・スターリングの威力と、ヨーロッパにおける機會主義的聯合國とが必要であつたのである。今日においては、若しイギリスの大陸封鎖が有效なものであり、戰爭による荒廢がヨーロッパに飢餓をもたらしたとしても、少くともドイツ一國は餓ゑないであらう。イギリスの通貨政策は、一〇〇年以前と同樣に大陸封塞に參加してゐるとしても、アウタルキー下のヨーロッパに、直接さして大なる影響を及ぼさないであらう。そして大陸におけるイギリスの聯合國は、少數且つ無力である。

それ故イギリスの第二の關心事――對獨攻擊作戰の展開は、決して容易の業ではない。しかしこの第二の企圖が第一の企圖とは明らかに別個のものであり、しかも第一の企圖を阻害するが如き性質のものではないのであつて、英本國の防衛といふことは、戰鬪のイニシアチヴを取ることによつて、ドイツに對する攻擊ともなり得るものである。但しこの攻擊を有效に遂行するためには、アメリカ合衆國の强力な援助を必要とするであらう。

ドイツ側の對英攻擊作戰も同樣に二つの面を有する。第一のものは潛水艦、航空機、あるひは小艦艇によるイギリスの海上輸送路の切斷であり、第二のものは直接的上陸作戰であらう。しかるにこの上陸作戰は第一の作戰の有效な遂行なくしては、技術的に不可能であらう。そしてドイツの對英封鎖作戰が長期にわたる場合、ヨーロッパにおけるアウタルキーないしは新らしき秩序の建設が不可避的となる。かくて世界は新舊兩體制の鬪爭場と化したのである。

イギリスはドイツの英本土上陸作戰にそなへて、三〇〇萬の陸軍を待機せしめてゐる。そしてノルウェー、フランス、オランダ、ベルギーの海岸に駐屯するドイツ軍が常にイギリスへの脅威となつてゐることは明らかであらう。かゝる兵力の存在に對してイギリスはドイツ軍英本土上陸作戰の可能性を常に想起せしめられる。このため英國は日夜警戒をゆるめることが出來ないし、常にドイツ軍の作戰遂行を牽制すべく、オステンド、フラッシング、シェルブール等ノルウェー沿岸からブルターニュ海岸に至る諸港、ならびに戰略的目的物の爆擊を續けなければならない。

しかし一九四〇年の冬に入つて、英本土上陸作戰の危險性は去り戰爭の主要舞臺は、アフリカ、バルカンに移つた。この方面における若干の勝利は、ギリシアを援助することによつて對獨攻擊の足がかりを作るといふバルカン作戰を可能ならしめたものであるが、英本國防衛のため、大兵力を東國に動員したことは、大英帝國ならびに

自治領の防備を弱化せしめるものであつた。ジブラルタルの狀態は甚だ不安なものとなつた。これがためイギリスはスペインの中立維持に懸命の努力を拂ひ、或は和協的態度を以て、或は英艦隊の海上封塞が食糧の危機を齎すべきを暗示し、その好意的中立を强要してゐる。イギリスの脅威は强力なドイツの一軍が、此處を通過してジブラルタルを攻略する可能性にある。

さらに今一つの危險性は、ドイツ軍の西北アフリカ占領にある。これはフランスの援助の有無に拘らず、實現可能の事態であらうが若しドイツが北アフリカを席卷し、赤道アフリカまで進出することを得れば、希望峰を迂廻するイギリスの輸送路は、直接ドイツ空軍の空襲を受けなければならない。すでにこの脅威は、スペインのタンジール接收およびドイツ軍のダカール占領によつて著るしく現實のものとなる。かゝる樞軸國のアフリカ進出に對して、イギリスは如何なる手をうつであらうか。此處に想像されるのは、第一に前記のごときスペインの中立確保であり、第二にド・ゴール政權の援助ひいてはヴィシー政權への働きかけによつて、ドイツの進出を防ぐにある。

しかしながら、アフリカにおける樞軸國の脅威は、別の方面から急速に增大しつゝある。リビヤ戰線におけるイギリスの反擊は、有力なドイツ機械化部隊の到着によつて喰止められた。ユーゴースラヴィアの劇的クー・デターを契機としてドイツ軍はユーゴー、ギリシアに侵入し、イギリスは有力な部隊を北アフリカからギリシアに上陸せしめねばならなかつた。このためリビヤ戰線の兵力に不足を來したうへ、且つバルカンにおける聯合軍の敗北といふ事態に立到るならば、スエズは重大な危機に當面するであらう。

加ふるにパレスタインはシリアより脅威されるであらうし、イギリスが頼みとする唯一の國であるトルコも亦、甚だしく不利な立場に陷るであらう。

(五) 海　戰

a　海戰の特殊形態

海戰は大體統計物語、すなはち勝敗を語る統計の物語である。獨英海戰の歸趨は最初から明瞭であると思はれる。噸數および砲門數から言つても、ドイツの小艦隊では、如何に潛水艦が强くとも、あのイギリスの大艦隊、それに佛艦隊が加はつては、如何なる意味に於てもまともな太刀打ちが出來ようとは思はれなかつた。また聯合國の直接的封鎖を破る事もあまり望めなかつた。その頼みとするところは潛水艦であり、飛行機、快速艇と相俟つてイギリス逆封鎖を企て、機雷、魚雷、爆彈によつて著るしく優勢な聯合國艦隊を徐々に減殺せんとした。また敵艦隊をばら〳〵に分離せしめる作戰を採つた。從つて獨軍は前大戰と同樣防禦作戰を採り、臨機應變主義をとつた。

イギリス海軍はその勝れた海軍力を以て、ドイツの通商を海上から驅逐し、ドイツ商船を全世界に於て港に閉籠め、ドイツ商人を捕へ、ドイツへ必要な軍需品を供給せんとする通商路を遮斷すべく直

ちに活動を始めた。しかしながらなほ英佛軍は一擧にドイツ海軍を擊破することをなし得ず、專ら英國の戰略的弱點たる輸送路の保全に努めなければならなかつた。かくて海戰は最初から前大戰と同樣のスキーマ、すなはちドイツは海軍力劣勢のため、イギリスは通商路保全のため、最初から決戰ないしは一大會戰を避ける形態がくりかへされ、專ら小艦艇による通商破壞戰と封鎖戰が行はれたのである。

チャーチルは直ちに海軍大臣に任命され、フォーブス大將の指揮の下に主力艦隊は、スカパ・フロー、クロマルティ等を基地としてドイツ艦隊をドイツ海岸線近くに封鎖した。開戰當時地中海艦隊はカニンガム少將が指揮官であつた。豫備艦隊は開戰前に動員されて居たので英海軍力の增强に直ちに役立つた。

ダルラン提督指揮下のフランス艦隊も、イギリスの直接の指揮下におかれた。三色旗を纏へした軍艦は、大西洋艦隊、地中海艦隊とに分れて、Uボートの活動を阻止するため大なる援助をなした。驅逐艦、世界最大の潛水艦スルコーフ、戰艦グンケルク、ストラスブールはドイツ通商を妨害し、聯合國の通商をドイツの爆擊から防護すべく特に役立つた。

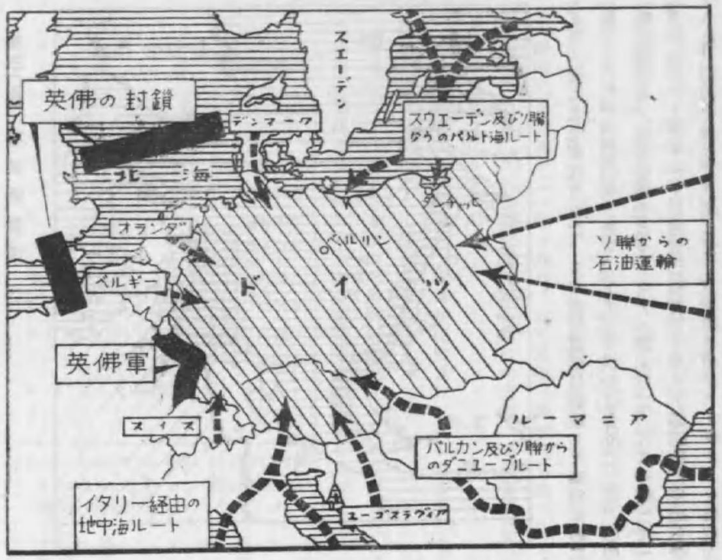
レーダー提督麾下のドイツ海軍は北海艦隊およびバルチック艦隊に分れて居た。しかし、ドイツの海上艦隊は開戰後數ケ月は活動せず、主としてイギリス海上艦隊とドイツ潛水艦との間に商船擊沈戰が展開された。

聯合國側の封鎖——大艦隊に加ふるに、イギリス海軍省は、直ちに商船を武裝船に改造した。そして、その大部分を北海の監視隊に編入した。それはヘブライド、アイスランド、グリーンランド間およびオークニー諸島からノールウェー海岸までの廣大な海面の監視偵察にあたつた。同時に前大戰のドーヴァー監視隊が再建された。冬が近づくにつれて、イギリス商船、漁船は軍用に改造され、既に世界最大を誇る大艦隊は更に更に强化されたのである。

中立國商船の書類及び積荷の檢査港が設けられた。イギリスによつては、オークニー諸島のキルクウオール、ラムスゲート、ウエインマウス、ジブラルタル、マルタ、ハイファ、ポートサイド、アデンの諸港フランスによつては、ダンケルク、アーヴル、マルセイユオラン等。また中立國商船が封鎖線を通過し得るための、「航行許可證」制度が前大戰の場合と同じ樣に設置された。

潛水艦戰——ドイツ潛水艦は開戰當時既に海中に活躍しつゝあつた。第一の獲物はイギリス旅客船アセニア號で、それは九月三日の夕刻、チェンバレン首相及ダラジエ首相が挑戰に應じた數時間後の事にすぎなかつた。それは第二のルシタニア號擊沈であり、多數のアメリカ避難民もその中にあつた。アセニア號擊沈は突然であり、無警告に行はれたが、このニュースを受けたアメリカは平靜であつたし、この事件はアメリカの輿論を愈ミ中立の希望へ導くに役立つたのみである。

ドイツ潛水艦は最初は、若干の例外を除いて、國際法を遵守した。破壞前に停船を命じ、警告を與へ、また出來得る限り乘組員を安全に避難せしめた。



第二九圖　聯合軍の封鎖

ドイツの潛水艦作戰に應ずるイギリスの方策は、前大戰の經驗により暫得した護送船團であつた。開戰後六週間內にこの組織は主要な通商路に採用された。商船はハリファックス、シドニー、ジブラルタル等に集結し、驅逐艦、護衞船に守られてイギリス或はフランスの港に向つた。時には巡洋艦、又陸地近くでは長距離偵察機に護衞された。イギリスの採つた他の方策は機雷原であつた。イギリスはドイツ海岸沖、ならびに多分ドーヴァー海峽にも機雷原を敷いた。そしてこれは一二月更に英國東海岸に擴大されてゐる(第三〇圖)。イギリスは驅逐艦偵察隊を作り、潛水艦の偵察にあたらせ、また商船を對潛水艦砲、および高射砲を以て武裝した。

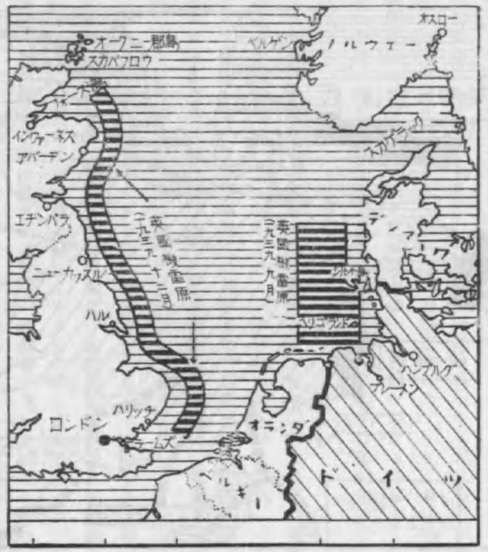
ドイツ潛水艦作戰は最初は功を奏したが、イギリスの防禦方策の完備と共に一〇月及び一一月の初めにはその效果が少くなつた。しかし一二月には復イギリスの損害が增加して來、潛水艦と防禦艦隊とのシーソー・ゲームが行はれ、交互に、共に傷いたのである。

b　通商破壞戰

チャーチルの計算によれば、一二月上旬に於ては、イギリス商船の純損失は——全損から、捕獲されたドイツ船の噸數、中立諸國から買收または傭船した噸數および新造船噸數を差引いたもの——六〇、〇〇〇噸にすぎぬ。しかしワシントン駐在のイギリス海軍武官のステートメントは純損失は一週五〇〇噸平均と計算して居るが之は前のチャーチルの言と甚だしい相違がある。

開戰四ケ月のドイツ商船の損失は二一隻、約一二二、二九九噸である。その大部分は捕獲前に自沈した。若干は乘組員の避難後、

第三〇圖　英國機雷原



イギリス艦により撃沈された。その外同盟國の捕獲した獨船は約二〇隻、一〇〇、〇〇〇噸であり、ドイツの損失は合計二二二、〇〇〇噸に達する。最大の損失はコロンブス號（三二、五八一噸）で一二月一九日ケープ・メイの四五〇哩沖でイギリス驅逐艦に停船を命ぜられ、捕獲を避けて自沈した。宣戰數日前ニューヨークを出航したブレーメン號は、巧みにイギリス巡洋艦の目を逃れてロシアのムルマンスク港に辿り着き、ノールウェー領海を通つてドイツに歸航した。聯合國および中立國船の重なるものは、ポーランド船ビルスドスキー號（英國の傭船であつたが、一一月二六日魚雷によつて撃沈された。）、日本定期船照國丸（一一、九三〇噸、一一月二一日）であり、合衆國船の損失はなかつた。

聯合國によつて撃沈されたドイツ潜水艦の數は不明である。乗組員の若干は捕虜となつた。英佛は三〇から四五のUボートを破壞したと云ふが確認されては居ない。しかしドイツは、信ずべき調査によれば、一ヶ月平均六・六隻のUボート建造の能力を有すると云はれ着々建造中である。

一二月半ばに、ドイツは從來の武器たる魚雷と大砲に、今一つの新しい武器――機雷――を加へて攻撃を強化した。また戰爭始まつて以來初めて飛行機がテームス河口およびイギリス海岸に近く機雷を敷設した。最初、イギリスは之に對する準備が出來て居なかつたため、この機雷敷設は聯合國側の損失を增加した。しかし再びイギリスは之に對する防禦策を講じ得た。トロール船が掃海船として機雷の一掃に任じた。他方一二月最後の週に、英海軍省はオークニー諸島からダウンに至るまでの東海岸沖に長さ五〇〇浬、幅三〇ないし四〇浬の機雷原を敷いた事を發表した。

一九四〇年に入つて、イギリス政府は英國軍艦によつて護送される中立國船舶に對する命令權を海軍司令部に移したため、ドイツは英國軍艦によつて護送される中立國船舶が、完全に敵性を帶びるに至つたと見做し、かゝる船舶に對する無警告撃沈方針を決定した。

このため二月に入つて、中立國船舶の被害は激增した。

戰爭による各國商船の被害が幾ばくに達するかといふことは、政治上からも經濟上からも重要な問題であるが、第二次大戰における船舶喪失は、甚だ尨大な數に上り、前大戰五ヶ年における撃沈あるひは喪失船舶噸數一、二八一萬噸に對し、今次大戰では僅か五ヶ月間に一一七萬噸に達した。この大半は貨物船で二五〇隻八一二、四九四噸、タンカー二一隻一六六、六三三噸、客船一七隻一九一、九九四噸である。また主要交戰國ならびに中立國の船舶被害は次表のごとく計算される。

各中立國側より、しば〳〵抗議が提出されたにも拘らず、中立國船舶の被害は依然として減少しなかつた。

四月に入つてイギリスの對獨經濟封鎖戰は一段と强化された。この間の事情は三月八日の第六次英佛戰時最高會議を終り、二日英國下院において發表されたチェンバレン首相の演說に寛はれるすなはちイギリスはデンマーク、スイス、スペイン、ギリシア、トルコ、ユーゴースラヴィア等の中立國に對して戰時通商協定を結び、或ひは結ばんとし、右協定は各中立國の對獨輸出制限に關する規定を含むものであつた。このほかノルウェーならびにスエーデンに對しても四月五日對獨封鎖强化に關する通牒を手交したが同通牒の內容は兩國がドイツ船舶に對し、スカンヂナヴィア產鐵鑛輸送のため領海內通過を許容した問題に關するものと推定された。同月九日にはじまるドイツのノルウェー進撃に鑑み、これは中立國爭奪戰の激化してゐたことを意味するものであらう。ノルウェー戰勃發直前、ノルウェー領海の主要海面には、英佛兩國によつて機雷が敷設せられ、船舶の航行は甚だ不自由となつた。一方英佛の對獨經濟封鎖は極東水域にまで擴大されたが、兩國はわが國との摩擦を避ける方針を示した。

英海軍省は五月七日ノルウェー作戰遂行過程において沈沒したドイツ商船の噸數を三〇萬噸と發表した。但しこの中には輸送船の被害は含まれてゐない。また同時に發表された開戰以來のドイツ側損失累計は六〇萬噸に上り、これはドイツ戰前の保有商船噸數の一五%にあたる。この內譯は確實に沈沒、拿捕、自沈せるもの四五四、〇〇〇噸、聯合國側の潜水艦、機雷、飛行機によつて撃沈されたと推定し得るもの一五萬噸である。これに對し、ノルウェー戰中において沈沒せる聯合國ならびに中立國船舶は、イギリス四隻六、六八九噸、聯合國一隻一、四五八噸、中立國二隻二九八噸と發表された。これと相前後して、ストックホルムの一經濟雜誌は第二次大戰勃發以來六ヶ月間に撃沈された船舶噸數を一、三五七、〇〇〇噸と

各國船舶被害

（單位　噸）

	隻數	噸數
イギリス	126	549,134
ドイツ	26	143,164
フランス	14	74,406
ノルウエー	38	90,336
オランダ	9	47,656
スエーデン	27	56,029
ソヴエート	2	4,967
フィンランド	6	13,907
イタリア	3	14,665
日本	1	11,930

備考：――本統計數字は開戰より1940年1月末までの各國被撃沈ないしは喪失船舶噸數で神戸某方面の計算に據る。

發表した。うち交戰國八五七、〇〇〇噸、中立國五〇〇、〇〇〇噸で、被害順位は英獨兩國が最高であるが、各國保有船舶噸數に對する比率において見ればスエーデンが第一位で所有船舶の四・七%、次いでデンマークの四・六%、以下フィンランド、ギリシア、ベルギーの順を示し、比率の點では、交戰國は第六、七位を占めた。

五月二五日英海軍省の發表によれば、開戰以來同月二二日までに損失せるドイツ商船噸數は、(一)擊沈ないし自沈せるもの三七〇、五〇〇噸、(二)拿捕せるもの二五九、一〇〇噸、(三)潛水艦または航空機により擊沈せられたと見られるもの一九〇、〇〇〇噸、合計八一九、六〇〇噸で、これは獨商船總噸數四二〇萬噸の二〇%に該當する。一方イギリス側損失は同期間に七四〇、〇〇〇噸で、開戰前の保有噸數の四%に過ぎず、この損失噸數は、既に新造船、拿捕船その他總計八八〇、〇〇〇噸によつて補充されて餘りあると稱した。またドイツはデンマーク、ノルウェー、ベルギー、オランダへの進擊によつて、これら諸國の所有船舶約一〇〇萬噸であつたが、イギリスはこれら諸國よりの拿捕は五〇〇萬噸に達すると發表した

西部戰線におけるフランスの敗退後、戰局は一轉して英獨の決戰に入つたが、ドイツ側は熾烈な空襲を敢行する一方、イギリス輸送路の本格的攻擊をはじめた。これは所謂「對英飢餓作戰」を意味するもので、このため英護送商船團の被害が急激に增加し、ドイツ側發表によれば、一回の攻擊による擊沈噸數は屢々數萬噸に達した。イタリアは地中海でイギリスの生命線たる印度へのルートを脅かし始め、このルートに對する致命的攻擊は加へ得なかつたとしても、多くの英艦を地中海に膠着せしめることによつて、本國防衛を手薄ならしめた。

この結果、イギリス側の商船損失は急激に增加したが、ドイツ軍司令部は、八月六日、前月七日より三一日に至るイギリスの損害を次のごとく發表した。(一)潛水艦による損失三四四、一七四噸、(二)その他艦艇による損失九八、五〇〇噸(以上の數字は機雷による損失を含まず)、(一)空軍による損失二一五、〇〇〇噸、(一)以上合計六七九、三二四噸。

また同時に發表された開戰以來のイギリス側損失は海軍艦艇による損失三、七二五、五四七噸、空軍による損失一、二六一、三一三噸、合計四、九八六、八六〇噸であつた。

對英攻擊の本格化にともなひ、ドイツは八月一七日對英完全封鎖を宣言した。この封鎖線水域は、フランスの大西洋岸北緯四七度三〇分、西經二度四〇分の交叉點(ブルターニュ半島南岸)を起點として西南に進み、北緯四五度、西經五度の交叉點に達し、それより西に向つて北緯四五度、西經二〇度の點に至る。この點と北緯六二度、東經三度の地點(ノルウェーのベルゲン沖)とを結び、それより南行ベルギー海岸に達し、さらにフランス海岸線を走つて起點に歸る線を以て劃された全水域を含むものである。

右封鎖水域の發表にともなひ、ドイツ政府は封鎖の目的がイギリス一國にあること、前大戰において無警告潛水艦戰は凡ゆる水域で行はれたものであるが、今回の全面封鎖は特定の海面に限定されたること、アイレ共和國船舶が食糧品輸入のためドイツを初め、その

他中立國に航行するときは、事前にドイツ側に通告することを求めドイツはこれが護衛の任にあたること等、附加的說明を發表し、且つドイツは中立國船舶の英本土近海封鎖水域航行にも無警告爆擊を敢行する旨を明かにした。

かくて通商破壞戰は双方とも熾烈化し、被害は增大したが、ドイツの對英通商破壞戰について、イギリス側では次のごとき樂觀的見解を發表した。

「ドイツは再び飢餓戰術によつてわれ〳〵を屈服せしめようとしてゐる。一九一四—一八年におけるドイツの商船擊沈作戰は主として潛水艦に依存してゐたが、今回の主要兵器は潛水艦、機械水雷と聽繫を保つ爆擊機である。また情報によればドーヴァー海峽海岸に設置された長距離砲もこれに參加してゐる。公海上で絕えずわが商船隊を脅威し續ける一方、ドイツ側の主たる期待は、灣港內外における船舶の爆擊、港灣管理および貯藏能力の攪亂、港灣より通ずる鐵道ならびに道路の破壞にかゝつてゐる。前大戰當時、食糧および原料の決定的不足を來さぬうちにドイツ潛水艦が一掃されたごとく、イギリス領空よりドイツ爆擊機を一掃することに成功したならば、世界よりわれ〳〵を孤立せしめんとする、この二度目の試みも間もなく失敗に終るであらう。われ〳〵はドイツ側の熾烈な集中攻擊に備へなければならない。時が經過すれば經過するほど、航空機生產の點において、われ〳〵が有利となることを知つてゐるドイツは、今のうちに最大限の攻擊を企てんとするであらう。また、われ〳〵は船舶損失の增大、貨物の積載、荷揚げの困難の加重、ならびに貨物の內陸集散に關する萬全の策を施さねばならない。

英國支配下の船舶輸送能力については、直接的關心を必要としない。戰前わが國貿易の三〇%を占めてゐたヨーロッパとの通商杜絕、地中海航路の實質的中絕によつて、一船當り航行距離は延長され一噸當りの輸送能力は低下した。しかし渡洋船舶噸數は、ドイツに侵略された各國の所有船舶の大部分を接收したためと、新造船の增加とによつて、堅實に增大してゐる。そして商船隊の擴大はドイツ側によつて擊沈された噸數を、はるかに超過してゐるのである。事實、全體として見れば、一航海當り航行距離の延長にも拘らず、わが國の輸入ないし輸出能力は、戰爭勃發前と同じである。

七月以降、わが護送商船團に對する爆擊が熾烈化したため、船の損傷は增大した。一九三九年九月三日より四〇年六月二日に至る間、一週平均一九、六一四グロス噸の商船が擊沈された。七月二八日に至る四週間の週平均損失船舶は五二、九九三グロス噸に達した。七月末の損傷率を年平均に計算すると二、七五五、〇〇〇グロス噸となるが、これは年平均造船能力を、一、二五〇、〇〇〇グロス噸だけ超過するものである。しかしながら、國內における造船のほかに、われ〳〵は海外における造船能力を有するし、加ふるに外國からの船舶購入、あるひは傭船することが出來る。さらに敵國商船の拿捕も亦疑ひを容れぬところである。それ故に今後數ヶ月にわたつて、船舶の損傷率がさらに大となつても、イ

ギリス戰時經濟の重大な障碍とはなり得ぬであらう。

戰爭初期においてドイツの對英空襲の效果を豫見することは困難であつたが、今やナチスは漸く海峽におけるわが輸送を不可能ならしめんと試み、且つ南部および南西海岸の諸港を破壞せんと試みてゐる。彼等の目標とするところは、彼等が接近し得る若干の港灣の使用を斷念せしめ、若しこれら港灣が最早十分の防備を有せざるにおいては、續いて港灣、鐵道、道路等を破壞せんとするものであらう。次いで同樣に他の港灣の空襲を企圖し、英國の外國貿易に重大な障碍を齎らさんとするものと思考される。かくてドイツはわが沿岸輸送を內陸鐵道、あるひは道路に押しこめ、以て運輸の閉塞を來さしめんとするものであらう。

幸にして、わが國の沿岸は至るところ港灣に富み、外國ならびに內國貿易は適當に分散せしめられてゐる。緊急事態に當面すれば、各港灣の能力は著るしく增大せしめられ得るし、同樣に鐵道も、一九二九年以來輸送は減退してゐるが、輸送能力は何等當時と變りないのである。蒸氣機關車は一九二九年の二三、三六八臺から三八年の一九、六四六臺に減少したが、一臺當りの牽引力は增加した。これは機關車一臺當りの平均重量が四六・一三噸から四九・九四噸に增加してゐるのに徵しても明らかである。同期間に貨車數は六八六、〇四七から六四九、九八四に減少したが積載能力は七、六八五、〇〇〇噸から七、八〇八、〇〇〇噸に增大した。さらに運輸プール制はその利用能率の上昇を確保し、集散系統に大なる柔軟性を與へることにならう。その他トラックの輸送能力も一九二九年よりはるかに增大してゐる。一九二九年九月には、これらトラック臺數は三三九、〇〇〇臺であつたが三九年九月には四九五、〇〇〇臺に增加し、一臺當り平均輸送能力は、それ以上に增大した。

ドイツはイギリスの全港灣ならびに、その接續輸送路を不斷に爆擊し續けることは不可能である。故に若しある港灣が使用不可能の狀態となれば、容易に他の港灣をもつて代位し得るし、若しさらにこれら港灣が破壞せられた場合は、さきの港灣を修理して使用し得る。かくてイギリスの運輸政策は先づ第一に全主要港の能力維持にあることは勿論であるが、短期間における一港から他港への航空機、ドック勞働者、および修理工の移動が準備されねばならぬ。さらにわが輸入政策も柔軟性を有しなければならぬ。若し、全輸入が一時的に杜絕することありとせば、最も必要ならざるものを排除し、若し今日のごとく食糧の高度のストックが行はれてゐる如き場合は、優先的に原料品ならびに彈藥の輸入が行はれねばならぬ。」*

註 * The Economist, London, Aug. 17, 1940.

またニューヨーク・タイムスの軍事記者ハンソン・ボールドウインは、イギリス輸送能力の低下を次のごとく述べてゐる。「商船保有量においても、海軍力以上に英獨の不均衡は大であつた。イギリスは開戰前約二一、〇〇〇、〇〇〇噸の商船を有してゐたが、なほ且つ商品輸入の四〇ないし四五%は外國船に依存してゐた。今日、アメリカ合衆國、ドイツ、イタリアの船舶は英本國

から隔離されてゐるうへに、戰爭によつて約二、二五〇、〇〇〇噸を喪失した。聯合國ならびに中立國の被害は約三、八〇〇、〇〇〇噸である。

しかるにノルウェー、オランダ、ギリシア所有船舶の主要部分がイギリスの手中にあり、さらに大なる豫備を有する。これに對してドイツならびにイタリアの商船隊は拿捕あるひは擊沈によつて重大な損失を蒙つた。そして殘餘のものはイギリスの海上封鎖によつて、本國の港灣に閉ぢこめられてゐる。

かゝる外見的な有利さにも拘らず、イギリスはドイツに對して決して優位な條件のもとにあるわけではない。イギリス艦隊は、海面上では明らかにドイツに勝つてゐるが、潛水艦、航空機、快速艇、機雷によつて甚だしい脅威を受けてゐる。」*

註 * The New York Times, Nov. 17, 1940.

それのみならず、大西洋、印度洋におけるドイツ海軍の脅威があり、イギリスの危機は、さしあたりドイツ軍の英本土上陸よりも、むしろこの方面において增大しつゝある。

一九四〇年一二月に入つてイギリス船舶の被害はさらに增大し、中立國の損失をも合して、開戰以來既に四百萬噸の船腹が喪失された。ドイツの通商破壞戰は、戰爭初期においては主として潛水艦によるものであつて、一九四〇年末には一〇〇ないし一八〇の潛水艦を有し、この約三分の一は常に出動準備を整へて待機してゐることと想定された。これに加ふるに若干のイタリア潛水艦が大西洋に活躍してゐた。

第二には航空機の使用である。これは潛水艦との協同作業によつて二重の脅威を與へるもので、直接的に英本國諸港に入港する船舶を擊沈し、イギリス東部、南部諸港の使用を危險ならしめるとともに、護送船團の襲擊に潛水艦と協力することによつて、大きな威力を發揮してゐる。

第三の要素は機雷である。ドイツは一九四〇年末までに約八〇萬噸の船舶を機雷によつて擊沈せしめた。そして一九三九年後期から四〇年初にかけて磁氣機雷が多大の威力を發揮した後、數種の新型機雷が現れ、掃海作業を著るしく困難ならしめた。

最後に戰略的重要性を有するドイツ艦隊がこれに加へられる。イギリスはドイツ艦隊の直接的攻擊を防ぐため、有力な艦船を護送船團に配屬せしめねばならない(C海軍の戰鬪參照)。

これらのものは一九四〇年後期に、月平均三二五、〇〇〇噸の船舶を擊沈せしめた兵器であるが、イギリスの對策としては、(一)護送船團組織、(二)海空の巡航警備、(三)掃海作業、(四)船舶建造能力の擴大、外國船購入、拿捕等が考慮された。しかしながら最初の三つの方法は、艦船ならびに航空機の不足によつて、甚だ不十分なものである。なかんづく護送船團の警備は極めて手薄である。

イギリス商船隊の損失は、建造能力を越えるものであつた。前大戰における一五ヶ月の商船喪失七百萬噸に比較して、今次大戰における同期間の喪失四百萬噸は、數量としては少いが、イギリスに與へる脅威は甚だ大きい。一九一七—一八年には、イギリスは合衆國商船隊のほかに、イタリアおよび中立國の船舶を利用することが出

来たが、今回は單に合衆國商船隊を交戰圏外で利用するほか、若干のフランス、ベルギー、オランダ、デンマーク、ノルウェーの拿捕船を有するのみである。商船建造能力は、年間一百萬噸から一・五百萬噸に增大し、これに一三〇隻の購入船、合衆國に既に發註せるもの六〇ないし一二〇隻、さらに追加註文數百隻を考慮しても、イギリスの立場は甚だ困難なものとならざるを得ないであらう。

本年三月二五日附朝日新聞の有題無題氏は英國輸送力の減退について次のごとき興味ある數字を發表した。

「英船に關する數字は諸説とりとりで、正確なものを攝めないが權威ある筋の觀るところによつて客觀的な情勢を示さう。そもそも開戰當時のイギリスの保有船腹を二、〇〇〇萬噸とおさへるそれ以外に、ノルウェー、オランダ、フランス等の船を接收したが、それを約一、〇〇〇萬噸と見ると、總計三、〇〇〇萬噸となるが、この中には使ひものにならぬものがかなりある。クイーンメリーなどは大きくても使ひものにならぬし、近海を歩いてゐる小型のものも役に立たぬものが多い。それらが約一、〇〇〇萬噸くらゐあるから結局二、〇〇〇萬噸が實際の海運力といふことになる。そこで、今日まで何萬噸を失つたかが問題で、これもいろいろにいはれてゐるが、まづ六〇〇萬噸は下るまい。すると、現有勢力は一、四〇〇萬噸といふことになる。ところでこの一、四〇〇萬トンが、みなコンヴオイ(護送船團)制度になつてゐるので遠力の調整、航路迂回などいろいろの事情からその三分の一の能力しかないと見ていい。つまり五〇〇萬噸程度の實力しかない。これをデット・ウエートに働かしてまづ七五〇萬噸、年に各航路が四回就航と見て、年延べ三、〇〇〇萬噸、一方、一年間の食糧輸送が一、五〇〇萬噸、紡績用棉花その他の工業品が一、五〇〇萬噸、計三、〇〇〇萬噸が平時の輸送貨物だから、現在がまさに、境界線になる。國内のストックの程度も勘定に入れねばならぬが、一方ドイツの逆封鎖戰はます〳〵本格的になるであらう。撃沈噸數が一、〇〇〇萬噸を突破すると、英國の苦惱はいよ〳〵深刻となると海事通は觀てゐるやうだ。イギリスの造船力は、平時で年八〇萬噸、今日では約六〇萬噸だが、これが空爆打撃と軍艦製造に力を入ねばならぬ關係で、漸次低下してゆくことは必然だ。」

c 海軍の戰鬪および損害

1 海上のゲリラ戰

海上に於ける他の恐らくより重要な戰爭形態は三國軍艦の間のゲリラ戰である。正面からイギリス艦隊に對戰する事の不可能なドイツ艦隊は不意打ちならびに秘密作戰を採つた。若しこの作戰がイギリス海上艦隊の力を自國艦隊に相應するまで減殺するに成功すれば、イギリスの封鎖陣を撃破し、戰に勝を制する事が出來ると信じたのである。ドイツ潜水艦および飛行機の主たる目標は一五隻のイギリス主力艦(戰艦一二隻、巡洋戰艦三隻)であつた。イギリスの優越は第一にはこの主力艦に依るのである。

一九三九年中にドイツは一隻を撃沈し、少くとも他の一隻に重大な損害を與へる事に成功した。プリエン少佐のUボートはイギリス主力艦隊の根據地スカパ・フロー港に、嚴重な監視を冒して侵入し三——五ケの魚雷によつて戰艦ローヤル・オーク號を撃沈した。決死的早業は他のドイツ潜水艦によつても演ぜられた。一二月二二日、その潜水艦はファース・オブ・フォースの防禦線をくぐつて一萬トン級新巡洋艦ベルファーストに損害を與へた。クイーン・エリザベス級の戰艦(恐らくバーハム號)は一二月下旬、ドイツ魚雷に見舞はれた。また九月中巡洋艦レパルスは輕微な損害を蒙つた。イギリスは、これは戰爭による損害ではないと云つてゐる。航空母艦カレヂアス號は九月一七日魚雷によつて撃沈された。これはイギリス軍艦の最初の犠牲だつた。

一一月および一二月には二つの最も劇的な事件がおこつた。一一月二五日、エムデン號と思はれる巡洋艦を伴つたポケット戰艦ドイツチュランド號が、アイスランド沖でイギリス船ロールビンディ(六インチ砲を以て武裝した商船で北方監視にあたつてゐた)に發見された。ドイツ艦の一一インチ砲は裝備の劣勢なイギリス艦に向つて猛烈なしかも正確な砲撃を行つた。ロールビンディ號は、しかし全部の砲門が役に立たなくなるまで戰つた。そしてイギリス艦が到着するまでには、ドイツ艦は北海の霧の中に姿を消してしまつたのである。ロールビンディ號は全艦炎に包まれて、その乘組員の大部分と共に沈んで行つた。

今一つの事件はグラフ・シュペー號の自沈である。一二月一三日海戰史上極めて珍らしい戰闘の一つが起つた。開戰以來イギリス商船の撃沈に從事し、既に九隻を沈めたグラフ・シュペー號が、ウルグアイ沖で八吋砲のイギリス巡洋艦エクセター號に發見された。エクセター號は直ちに六吋砲巡洋艦、アヂャックスおよびアキレス號に援助を求めた。ハーウッド指揮下の輕快な巡洋艦三隻は、その快速を利用して丸一日に亙る戰闘中、シュペー號の跡をつけ廻し、煙幕を利用して、砲撃してはすぐ逃れる戰術によつて、重いドイツ艦を惱ましたのである。エクセターはドイツの一一吋砲によつて重大な損傷をうけて戰闘力を喪失し、アヂャックスも命中彈をうけたが、シュペー號の損害も重大であり、夜半シュペー號は、吃水線、船尾、司令塔等に多くの穴を開けられてモンテビデオ港に避難した。乘組員の死者三六、傷者六〇であつた。エクセター號の死者六一、傷者二三、アヂャックス號は死者七名、傷者五名、アキレス號は四名と三名だつた。

一二月一七日午後までに凹航するか、抑留されるかとの通告に對しハンス・ラングスドルフ艦長はどちらをも選ばず、ポケット戰艦を港外まで航行せしめ、プレート河に於て自爆を遂げたのである。これはヒトラー總統の直接の指令によると云はれて居る。乘組員はブエノス・アイレスに抑留され、ラングスドルフ艦長は三日後自殺を遂げた。

このほかイギリス海軍の潜水艦ウルズラは更に、エルベ河に於てケーニヒスベルグ級巡洋艦一隻に魚雷を命中せしめ、他の潜水艦サルモンはライプチヒ級六千トン巡洋艦一隻及ブリュッヘル級一萬ト

ン巡洋艦一隻に魚雷を命中せしめて損害を與へたと云ふが、ドイツ軍は之を全部否定してゐる。また多分一二月中旬、英主力艦ネルソン號（三三、九〇〇噸）およびパーラム號（三一、一〇〇噸）は機雷のため損傷を受け、四〇年三月に入つて漸く艦隊に復歸することが出來た。

一九四〇年一月二一日、イギリス驅逐艦グレンヴィル號（一、四〇〇噸）が北海において沈沒した。原因は機雷によるものか、潜水艦の魚雷攻撃によるものか不明である。同二三日、同じく驅逐艦エックマス號（一、四七五噸）も機雷に觸れて沈沒した旨英海軍省より發表があつた。

同月二四日ニューヨークに達した情報によればドイツ潜水艦三隻は補給船タンネンベルグ號？と共に英海軍の封鎖線を突破し、西印度諸島方面に向つたと云はれ、カリブ海の不安を增大した。

二月九日英海軍省の發表によれば、イギリス護送船團を攻撃せるドイツ潜水艦二隻が、英驅逐艦のため大破せしめられた。

二月一六日、ノルウェー領海において、國際政治の上から極めて重要な事件が起つた。さきにモンテビデオ港外で自沈したグラーフ・シュペー號の補給船アルトマルク號は、イギリスの封鎖線を突破してノルウェー西南端スタヴアンゲル、クリスチアンズンド間を歸航の途中、イギリス驅逐艦コサック號に襲撃されて死者四名、負傷者五名を出し、英人俘虜船員約三〇〇を奪還された。同事件はノルウェー領海内において起つたことによつて、國際的紛爭をまきおこした。先づドイツはノルウェー政府に對して、自國領海内へ英艦が侵入せるにも拘らず何等適當の措置を執らなかつたことを痛烈に攻撃し、損害賠償ならびに責任者の處罰を要求した。ノルウェー政府は同事件につき、英國に對して强硬な抗議を提出、救出捕虜の全員引渡しならびに完全なる損害の賠償を要求した。これに對してイギリスはノルウェー政府に對して、ノルウェー官憲がベルゲン港でアルトマルク號を臨檢せるさい、英人捕虜の存在を確證せず、且つアルトマルク號はグラーフ・シュペー號の補助艦であるにも拘らず、ノルウェー政府がこれを抑留しなかつたことを非難した。かくてノルウェーの中立を繞つて英、諸、獨三國の抗爭が行はれたが、同事件の重要性は、チャーチル海相の北海における英佛商船武裝宣言と共に、ドイツに英佛商船無制限攻撃の口實を與へ、且つドイツのノルウェー作戰を促進せしめるに與つて力あつたことである。

三月二三日、フランス驅逐艦ラ・ライーエーズ號（一、三七八噸）はモロッコのタンヂール港を出港せんとした際爆沈したとイタリア側の發表があつたが、フランス側より何等の發表も見られなかつた。

2　ノルウェーの海戰

ノルウェー作戰における英海軍の目的はさきにも一言せるごとく（一）ドイツ軍輸送路の切斷と、（二）ノルウェー海岸に聯合軍の上陸基地を獲得することにあつた。しかるに第一の目的を達するには、廣大な機雷原を突破することがあつたし、且つ航空機、潜水艦の最好の標的となるため主力艦の出動は不可能であつた。それ故聯合軍

の對獨攻撃は主として潜水艦および機雷に依存せざるを得ない狀態となり、この方面に利用され得る艦艇は、一六隻の英佛機雷敷設潜水艦および英國巡洋艦、驅逐艦等の小艦艇であつたが、ドイツに對しては、何等大なる脅威を與へ得なかつた。聯合軍側はスカゲラック、カテガットの兩海峽に若干の機雷敷設に成功したが、ドイツの輸送路に脅威を與へるには不十分で、そのうへドイツは、大兵力の空輸に成功したため、海上の脅威はそれほど大きくなかつたのである。

第二の目的に對しては、聯合軍は多少の成功を得てゐる。しかしこれとても海岸砲と航空機の襲撃を受けつゝ戰略的に甚だ不利な戰闘をくりかへして漸く達し得た成果であつて、この戰闘において聯合軍に課せられた任務は「海戰史上最も困難」な任務であつたとされてゐる。

四月七日夜、イギリス空軍偵察部隊は、巡洋船艦、巡洋艦、驅逐艦より成るドイツ艦隊が北上しつゝあるのを認め直ちにこれを報告したので、英艦隊司令長官は出動命令を下し一戰を交へんとした。かくてスカパ・フローならびにロザイスを出發せる第二巡洋戰隊、および八日この戰闘に參加するため出發せる第一巡洋戰隊は九日索敵中、間もなくドイツ空軍の空襲を受け、ドイツ側發表によれば主力艦二隻、大型巡洋艦二隻、その他一隻は重大な損傷を蒙つた。但しイギリス側はこれを否定してゐる。*

註＊ チャーチル海相は、一一日の下院における演說で次のごとく述べた。

――「九日ベルゲン沖を南方に向つて航行中の英艦隊は、ドイツ空軍の繰えざる攻撃を受けた。ドイツ側はこの戰闘において、わが艦隊に多大の損害を與へた如く宣傳してゐるが、事實は巡洋艦二隻が輕微な損傷を受けたに過ぎない。ただ旗艦コドネー號（三三、九〇〇噸）は重爆彈一發を受けたが、甲板裝甲が强力であるため、さしたる損害を受けず、乘組員七名が負傷したのみである。……わが艦の構造は極めて滿足すべきものだと云ひ得る。巡洋艦オーロラ號（五、二七〇噸）は敵機の急降下爆撃により爆彈五發を受けたが、全く何等の効果もなかつた。驅逐艦ガーカ號（一、八七〇噸）は敵彈を受けて沈沒したが、乘組員は殆んど全部救助された。また驅逐艦ズール號（一、八七〇噸）は同日オークニー島沖において獨潜水艦一隻を撃沈した。」

チャーチル海相の報告演說によれば、英驅逐艦グローウオーム號（一、三三五噸）は、ナルヴィク港封寒作戰に參加せんとして北上中、九日夜ドイツ驅逐艦二隻ならびに艦種不明の一隻と遭遇し交戰の後撃沈された。また英主力艦リナウン號は九日早朝ナルヴィク沖においてドイツ主力艦シャルンホルスト號と遭遇し、シャルンホルスト號に重大な損害を與へたが、シャルンホルスト號は一萬噸級巡洋艦の煙幕にかくれて、リナウン號は遂にこれを逸した。

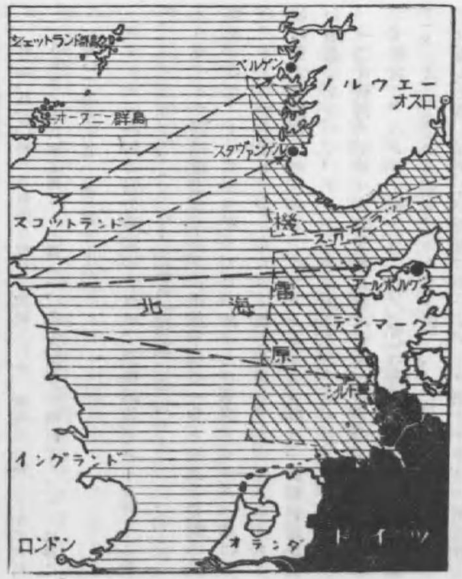
一〇日早朝、イギリス驅逐艦五隻はナルヴィクのドイツ軍を攻撃して敗退し、ハンター號（一、三四〇噸）は沈沒、同じくハーディ號（一、五〇五噸）は坐礁し、ホスチル號（一、三四〇噸）は損傷を受けその他は後退した。この戰闘においてドイツ側はイギリス驅逐艦三隻を撃沈し、他の一隻に大なる損害を與へたと云ひ、イギリス側は英驅逐艦二隻の撃沈と二隻の損傷を認め、その代りドイツ驅逐艦一

隻を撃沈三隻に損害をあたへ、ドイツ輸送船七隻を撃沈したと稱してゐる。また同日オスロー・フィヨルドの戰闘でドイツ甲級巡洋艦ブリュッヘル號（一〇、〇〇〇噸）は二八糎海岸砲の命中彈を受けて大破し、後機雷に觸れて沈沒、乙級巡洋艦カルルスルーエ號（六、〇〇〇噸）もクリスチャンサンド沖でドイツ軍上陸作戰掩護に從事中、甚大な損害を受けて沈沒した。このほか四千噸級のノルウェー巡洋艦二隻（ノルゲ號、アイヅヴオルト號）はナルヴイク港内でドイツ海軍のため撃沈せしめられた。以上發表せられたものの外に、兩軍とも若干の爆撃による被害があるものと推定される。

一一日ドイツ空軍はトロントハイム北西方二五〇粁の海上で英艦隊を空襲、航空母艦に大型爆彈一個を命中せしめたと發表した。同日ノルウェー政府コムミュニケは、去る九日オスロー・フィヨルドの戰闘でドイツ戰艦グナイゼナウ號（二、六〇〇噸）が海岸砲のため撃沈された旨發表し、フランスはタルツ號（二、四四一噸）の沈沒を否定した。同日英艦隊はスカゲラックおよび南部ノルウェー沿海の制海權を得んとしてドイツ海軍に攻撃を加へたが失敗した旨、ドイツ軍司令部より發表された。

四月一二日、英海軍はスカゲラック、カテガット兩海峽ならびにオランダ、ノルウェー近海に至る廣汎な水域に機雷を敷設した旨發表した。この新しい機雷原は、ドイツ、デンマーク沖の從來の機雷原をベルゲン西南六〇哩の地點まで擴大し、スカゲラックは中央二〇哩をあけて兩側にスエーデン領海より北海に至るまでの間に敷設されたもので、カテガットも封鎖された。この大機雷原は、一九一八年北海において二三〇哩、七一、〇〇〇個の機雷を敷設したものより、さらに大規模のもので、カテガット、スカゲラック兩海峽の出合ふ地點に重點が置かれた。翌一三日英主力艦ウオーアスパイト號に率ゐられた有力な驅逐艦隊は、ヴエスト・フィヨルドの奥深く進入し、ドイツ驅逐艦七隻を撃沈した旨、英海軍省より發表があり、この戰闘でイギリス驅逐艦三隻も損傷を受けたと發表された。

一四日英海軍はさらにバルチック海ならびにその入口に機雷を敷



第三一圖　英國機雷原

設した旨發表した。

ドイツ側は四月一五日ノルウエー方面の作戰でイギリスは主力艦四隻、巡洋艦八隻、驅逐艦一一隻を失つた旨公表したが、イギリスは驅逐四隻の喪失を肯定し、他を否定してゐる。また同一六日、ドイツ潜水艦はトライバル級のイギリス驅逐艦一隻をシエトランド沖で撃沈した旨ドイツ軍司令部より發表された。

ノルウエーにおける戰況の進展に從つて、海戰も漸次局面を一轉し、英海軍においては專ら輸送の護衛が中心的問題となり、スカゲラック方面は專ら機雷と小艦艇による攻撃が加へられ、ナルヴイク方面で若干の主力艦による攻撃が加へられた模樣である。ドイツ側も主力艦を以てする英艦隊攻撃はドイツにとつて不利なるのみならず、ドイツ海軍を消耗する危險性があるため專ら空軍と小艦艇を以てする攻撃に出で、ノルウエー戰初期におけるやうな華々しい海戰は見られなくなつた。そして宣傳戰は益々甚だしく、兩國艦船の行動および被害の發表は眞相を把握するに困難であるが、四月二一日ニューヨーク・タイムスの發表せる各國海軍損傷に關する數字は、別表のごとく、イギリス一七隻七〇、三七九噸、ドイツ四〇隻五二、三七五噸、英佛合計一八隻七五、一五二噸であつた。この損失が各國艦隊中に占める比率はイギリス四・七五％、フランス〇・八六％ドイツ一四・八％である。そしてドイツ、なかんづくその潜水艦の喪失は四二・九％にも達するものであるが、これは聊か誇大に失するのではないかと思はれる。またこの數字が事實であつたとしても建艦能力の優位のため、この數字を基礎としてそのまゝ英獨艦隊の優劣を論ずることは危險であらうが、絶對的損傷率は英佛が甚だ大であるにも拘らず、比率の點ではドイツが劣つてゐる點、特に注目さるべきであらう。

海軍の掩護によるイギリス軍の上陸は、ナルヴイク、ナムソス、アンダルスネスにおいて成功し、これら三地點に對する輸送路の確保は、次第に重要性を有するやうになつた。そして海軍の戰闘は、海上よりする上陸軍の援助といふ新しい任務を有するに至り、主力艦の行動も多く北方海面において行はれるやうになつたのである。

四月二五日主力艦ウオアスパイト號に率ゐられる驅逐艦隊はナルヴイク港を攻撃し市街に砲火を浴せかけ同二八日にはヴエスト・フイヨルドに機雷を敷設し、ドイツ上陸軍の海上連絡を斷たんとした。これに對するドイツ側の攻撃は海岸砲、航空機を主とし、二七日ドイツ軍司令部發表によれば、ナルヴイク沖およびアンダルスネス沖において何れもドイツ空軍の空爆が行はれ、巡洋艦二隻を大破せしめたと稱してをり、三〇日ナムソス沖の海空戰では英巡洋艦一隻を撃沈したと發表された。

四月二五、六日頃に至り、ドイツ大部隊がトロントハイム南方地區に到着する可能性が豫見され同時にナムソス、アンダルスネスの基地に猛烈な連續的爆撃が行はれたためこれら地點への大部隊上陸さらに大砲および軍需品の揚陸すら不可能の狀態となつた。かくて英軍引揚の方針が決定されるに至り五月二日夜、英海軍の掩護のもとに、アンダルスネスおよびナムソスからの撤退が行はれ、このさい英驅逐艦アフリヂ號（一、八七〇噸）および佛驅逐艦ビゾン號

開戦以來の各國艦艇損失量

（1940年1月中旬）

	保有量(a)		喪失量(b)		(a)に對する(b)の百分比
	隻數	噸數	隻數	噸數	
Ⅰ イギリス					
戰艦	13	402,600	1	29,150	7.25
巡洋戰艦	3	106,100	—	—	—
巡洋艦	15	145,620	—	—	—
輕巡洋艦	52	333,375	—	—	—
駆逐艦	200	275,614	10	14,465	5.25
航空母艦	7	137,400	1	22,500	16.40
潜水艦	69	72,355	5	4,264	5.90
計	359	1,477,064	17	70,379	4.75
Ⅱ フランス					
戰艦	7	163,945	—	—	—
巡洋艦	7	70,000	—	—	—
輕巡洋艦	12	87,729	1	4,773	5.45
駆逐艦	64	128,046	—	—	—
航空母艦	1	22,146	—	—	—
潜水艦	87	82,493	—	—	—
計	178	554,359	1	4,773	0.86
Ⅲ ドイツ					
戰艦	5	115,580	—	—	—
ポケット戰艦	3	30,000	1	10,000	33.3
巡洋艦	5	50,000	1	10,000	20.0
輕巡洋艦	7	43,400	1	6,000	13.8
駆逐艦	42	60,954	7	11,375	18.7
航空母艦	1	19,250	—	—	—
潜水艦	85	35,000	30	15,000	42.9
計	148	354,184	40	52,375	14.8

備考：——The New York Times, Apr. 21, 1940. (a) は 1939 年 9 月の保有量，但し建造中のものも完成に近きものはこれを含む。

（二、四三六噸）はドイツ空軍の爆撃を受けて沈沒し、英トロール船六隻も同様に沈沒してゐる。

これとは別個に、英佛當局の確認するところによれば、英哨戒艦ビターン（一、一九〇噸）は五月一日北海においてドイツ空軍の爆撃によつて沈沒し、フランス驅逐艦一隻は大破し、哨戒艇一隻は觸雷

の後沈沒した。またノルウエー沖において英海軍と協同して作戰に從事中であつたポーランド驅逐艦グロム號（二、一四四噸）もドイツ空軍のため撃沈された。

ナムソスおよびアンダルスネスよりの撤退以後、英佛海軍はノルウエーにおいては沿岸封鎖を強化し、主としてナルヴィク方面の戰鬪に從事してゐたが、五月下旬英巡洋艦エフィンガム號（九、五五〇噸）は岩礁に衝突して沈沒し、輕巡洋艦カーリユー號（四、二九〇噸）はドイツ空軍の爆撃を受けて沈沒した。またドイツ側發表によれば、ドイツ空軍はレゾリユーション級の英主力艦を大破せしめ航空母艦一隻もナルヴィク沖において同樣に沈沒してゐる。

五月三一日、六月一日の二日にわたり、ナルヴィク南方一九〇粁のボドエから英派遣軍の一部撤退が行はれ、英海軍の掩護が行はれた。英海軍省發表によれば、六月一四日、トロントハイム峡灣にあつたドイツ主力艦シャルンホルスト號は、英海軍機のため重爆彈二發を見舞はれた。

かくてノルウエー軍の降伏に引續き六月一〇日英佛軍の引揚が宣言されたが、この作業中英航空母艦グローリアス號（二二、五〇〇噸）は撃沈された。次いで六月一三日、ヒットラー總統の「ノルウエー作戰完了宣言」が行はれ、ノルウエー作戰の綜合戰果として次のごとき海軍の損傷が發表された。

英佛海軍損失——航空母艦一隻、巡洋艦一隻、驅逐艦一〇隻、驅潜艇一隻潜水艦一九隻、合計六五、〇〇〇噸、その他輸送船一隻、給油船一隻。

ドイツ海軍損失——巡洋艦三隻、驅逐艦一〇隻、水雷艇一隻、潜水艦六隻その他小艦艇一五隻。

3　海戰の新段階

ノルウエー作戰の終了によつて、海戰は新しい段階に入る。ドイツのノルウエー征服の結果、北方よりするイギリスの脅威は甚だしく增大した。すなはちノルウエー西南部海岸が、新しくドイツ海、空軍の基地として提供せられたため、北海におけるイギリスの制海權が甚だしく縮小され、ベルゲンおよびスタヴアンゲルよりスカパ・フロウまでは僅かに三三〇哩、シエトランド諸島までは二三〇ないし二六〇哩を隔てるのみとなつた。これはドイツ空軍の有效な行動半徑のうちにある。このためイギリスの對獨海上封鎖線は遙かに擴大し、效力を減殺される。

次にイタリアの參戰氣配、地中海の不安によつて、イギリスの地中海艦隊は增强されねばならなかつた。これはノルウエー方面よりの艦艇を引揚げることによつてのみ遂行されたのである。そして五月初め英佛地中海艦隊は、東部地中海のイギリス海軍基地たるアレキサンドリア港に集結をはじめた。

五日一〇日ドイツ軍のオランダ、ベルギー進入後、わづか一週間にして、英佛海軍は聯合軍の英本國引揚を掩護するため、沿岸作戰に從事しなければならなかつた。そしてこれは、同月末聯合軍のダンケルク撤退によつて終りを告げるのであるが、このためあらゆる種類の船舶が、カレー、ダンケルク方面に集中され、聯合軍海空軍

の掩護のもとに、五月二九日より六月三日夜までの間に、聯合軍三三五、〇〇〇は英本國に引揚げることが出來た。かゝる大兵力の短期間引揚を可能ならしめたものは、一に英佛艦隊の海上よりの掩護砲撃と空軍の活躍によるものである。ドイツ側は海軍の劣勢と、空軍の不足によつて、遂にこの大部隊を逸してしまつた。

しかしながら、撤退作業中に英佛の艦隊もかなりの被害を受けてゐる。この作戦に使用されたイギリスの艦艇は、イギリス側發表によれば、海軍所屬のもの二二二隻、徵發船六六五隻、其他約一八〇隻の小艦艇とであるが、ドイツ軍は猛烈な空襲と、潜水艦、快速艇を以て攻撃を加へ、英海軍は驅逐艦グラフトン號（一、三三五噸）同グレネード號（一、三三五噸）、同ウェークフル號（一、一〇〇噸）、特務艦一隻、輸送船アブキール號（六八九噸）、驅逐艦バジリスク號（一、三六〇噸）、キース號（一、四〇〇噸）、サヴァント號、その他小艦艇二四隻を喪つた。フランス海軍も艦艇ならびに商船その他三〇〇隻を使用し、うち二、七〇〇噸級の驅逐艦ジャガール、シャカール二隻、一、七五〇噸級の驅逐艦ラドロア、モードロワイヤン二隻、一、七二七噸級の驅逐艦ブラスク、オラージュ、シロコ三隻、以上計七隻のほか補給船ニジェ號を喪つた。以上は英佛兩國によつて確認せられたもののみであつて、ドイツ軍の發表は右の數字よりも大である。

これら撤退作業に關聯して、英佛海軍に課せられた任務は、海峡諸港の破壞であつた。このため聯合軍の放棄せる海峡諸港は、大部分破壞せられ、ドイツ側が對英攻撃のため使用するには、何れも若干期間の修理を必要とする狀態となつた。

六月末フランスの降伏と、休戦協定によるフランス艦隊のドイツへの引渡しは、イギリス海軍をはなはだしく脅威するものであつた。このため英海軍はフランス海軍の主要部分を拿捕するか、あるひは武裝解除した。このため、フランス海軍の勢力は別表のごとく主力艦において著しい被害を蒙つた。イギリスは獨佛休戦協定締結の條件として、フランスの單獨休戦前に全フランス艦隊をイギリスの港灣に入港せしめることをフランス政府に申出てゐたが、かゝる結果を來したことは明らかに失敗であつたと云ひ得るであらう。

ただ、主力艦の殆んど全部をフランス側から拿捕ないしは破壞したことによつて、僅かに英獨主力艦のバランスを從來通りに保つことを得た。フランス艦艇喪失の内譯は次のごとくである。

休戦協定後におけるフランス海軍の勢力

艦種	休戦協定成立當時の保有隻數	イギリスの破壞を受けたる後の隻數
主力艦	8	1
巡洋艦	18	14
乙級巡洋艦	32	30
驅逐艦	38	28
潜水艦	77	一
護衛艦	37	一
航空母艦	2	1

備考：一本統計數字は英海軍により加へられたる撃沈、拿捕、武裝解除を差引いたもので、イギリス側により確認せられだる數字である。

（一）イギリス港灣に於いて英海軍に拿捕せられたるもの――主力艦二、

乙級巡洋艦二、驅逐艦八、潜水艦數隻、その他補海艇、驅潜艇等約二〇〇。

（一）カサブランカ港において拿捕せられたもの――未完成主力艦二。

（一）アレキサンドリア港において武裝解除せられたもの――主力艦一、巡洋艦四、八吋砲裝備船三、その他小艦艇。

（一）オラン海戦の結果行動不能となりしもの――主力艦三、驅逐艦二、航空母艦一、その他小艦。

（一）ダカールにおいて破壞せられたもの――主力艦一。

オラン海戦――フランス軍艦の引渡し問題をめぐり、七月三日アルジェリアのオラン沖において、英佛間に海戦が行はれた。イギリス海軍はオランならびにメル・エル・ケビール港にあつたフランス海軍主力艦ダンケルク號ならびにストラスブール號（何れも二六、五〇〇噸巡洋戦艦）プロヴァンス號（二二、一八九噸）ブルターニュ號（二二、一八九噸）以下輕巡洋艦、驅逐艦、潜水艦接收のためサマーヴィル提督の率ゐる主力艦三隻、航空母艦一隻、驅逐艦三隻、その他小艦艇よりなる一艦隊をさし向け、（一）フランス艦隊が引續き獨伊兩國と戦闘を繼續すること、（一）乘組員を減少したうへイギリス港灣に廻港すること、（一）若し乘組員がこれを拒絶した場合は六時間以内に自沈すべきこと、の三ケ條の要求を提出したが、佛艦隊司令官ジャンスール中將はこれ拒否し、兩軍間に火蓋が切られた。ドイツ側發表によれば、この戦闘において、英艦の砲撃が開始せられたとき、フランス艦隊は汽罐の火を落してゐたのみならず、港門極めて不便な位置に投錨してゐたため間もなく苦戦に陷り、ダンケルク號、プロヴァンス號および驅逐隊旗艦モガドール號は火を發し、ブルターニュ號は辛うじて港外に出たところ、英艦隊の敷設せる機雷に觸れて沈没した。かくて英艦隊の包圍を脱してツーロンに入港せるものはストラスブール號以下七、六〇〇噸級巡洋艦五隻、その他驅逐艦、砲艦、潜水艦各數隻と云はれ、正確な數字は判明しないが、フランス海軍の死傷者は一、〇〇〇名に達した。この海戦は、世界政治のうへに極めて重要な結果を生み出してゐる。オラン海戦の報がつたはるや、七月四日フランス政府は英領海港にある全艦隊の本國引揚を命じ、續いて五日、ルブラン大統領司會のもとに緊急國務會議は對英國交斷絶を決定した。

伊英遭遇戦――オラン海戦の一週間後、カニンガム提督の率ゐるイギリス地中海艦隊はマルタ島東方においてイタリアの有力な艦隊と遭遇し、最初の英伊海戦が行はれたが、英艦隊は一五吋砲一發を主力艦に命中せしめたのみで、遂にイタリア艦隊を逸してしまつた。この後しばらくの間英伊の地中海における戦闘は專ら空軍と海軍との間に行はれることとなるが、獨英海戦も若干の小遭遇戦を除き、同樣の局面を持續、海上における長期戦――空襲と通商破壞戦が續けられるのである。開戦約一年にして交戦國海軍力のバランスは、あまり變化を見せなかつた。英海軍の損失は甚大で、一七〇隻、約四〇萬噸に達したが、なほ樞軸國に對する海軍力の優位を保つことが出來た。すなはち開戦以來、一九三九年九月より四〇年一一月に至るイギリス側損失は、次表のごとく、獨伊に比較して大であるにも拘らず、艦艇保有量は別表のごとくイギリス側が優位を占めてゐた。しかしながらイギリスはその艦隊を本國の防衛のみならず、イタリアの參戦によつて、地中海に配備しなければならないため、

この優位性はそれだけ減殺されるのである。イギリスは地中海に主力艦七隻、航空母艦三隻のほか、多數の巡洋艦、驅逐艦、潜水艦、を配置することによつて、漸く樞軸國側の海軍力に優位することが出來た。そして一一月中旬、イギリス空軍のタラント空襲によつて、イタリア主力艦に多大の損失を與へたため、イギリス地中海艦隊の地位は、相對的に高められ、アフリカ戰線における攻勢、およびギリシア軍援助といふ、二つの重要な政策を好條件のもとに遂行し得たのである。さらにイギリスの地中海支配は、以前紅海を基地としてゐた七隻のイタリア潜水艦中、六隻を撃沈あるひは拿捕することによつて強化された。クリート島には新しい英國海空軍基地が建設され、ギリシアは空軍基地を提供し、漸次イタリアを海上より封鎖せんとするものゝ如くである。

各國艦艇損失數

（1940年11月中旬現在）

艦種	イギリス	ドイツ	イタリア
戰艦	1	—	—
ポケット戰艦	—	1	—
航空母艦	2	—	—
巡洋艦	3	3	1
驅逐艦	33	11—15	6—10
潜水艦	17	25—50	15—30
武裝商船	10	—	—
補助艦艇*	103	16—30	?

備考：——BALDWIN, H. W., Both Sides Strike Hard in a Crim War at Sea; *The New York Times, Nov. 17. 1940.*

* 掃海艇、トロール船等。

が、訓練を受けた人員の不足は、ギリシア軍に對する決定的援助を行ひ得ず、若しドイツ軍がダーダネルスあるひはジブラルタルに南下することがあれば、イギリス地中海艦隊の地位は、甚だ不安なものとなるであらう。

各國艦艇保有數

（1940年11月中旬現在）

艦種	イギリス	ドイツ	イタリア
戰艦	14	5	5
ポケット戰艦	—	2	—
航空母艦	6	1	—
巡洋艦	61	7	20
驅逐艦	210—230	40—50?	100—120?
潜水艦	52	110—140?	80—100?

備考：——BALDWIN, H. W., op. cit. 損傷せるものまたは建造中のものを計算せず。本表中若干のものは入渠中であると推定される。たとへばイタリア主力艦3隻はタラント空襲のため傷つき、60ないし100隻のイギリス驅逐艦は修繕のため入渠中であると思考される。

地中海が斯くのごとき狀態である一方、南大西洋において、ドイツ國旗を飜へす一隻の武裝商船がイギリスの通商路を脅威してをり、北大西洋においては、アドミラル・シェーア號と推定されるポケット戰艦が遊弋してゐた。このため西地中海にあつた航空母艦一隻と巡洋艦數隻が大西洋に派遣されねばならなかつた。これら大西洋上のドイツ艦艇は甚だ微力であるが、戰略的には甚だ重要な役割を果してゐる。イギリスはこのため常に數倍ないしは數十倍の艦艇を遠隔の大西洋上に浮べてゐなければならないのである。ドイツの潜水艦航空機の攻撃にさいし英本土防衛のため、一隻の小艦艇たりとも分派し難い折、かゝる大量の軍艦を別の目的に割くことは、イギリスの苦痛を

さらに大ならしめる。

ゆゑに見せかけだけの保有艦艇量では、海戰の端緒は判定し難いのである。イギリスは九月二日の英米協定によつて、西半球における八つの植民地の海空軍基地を合衆國に引渡し、これと交換に五〇隻の老朽驅逐艦を讓り受けた。しかしながら一一月中旬に至るまで主としてイギリス側海員不足のため、全部の讓渡は行はれなかつた。またたとひこれら驅逐艦全部を入手したとしてもイギリスはなほ艦艇の不足を來すであらう。前大戰末期において、イギリス海軍は五〇隻の戰艦、九隻の巡洋戰艦、一〇九隻の巡洋艦、四三三隻の驅逐艦、一三七隻の潜水艦を有し、且つわが國海軍ならびにフランス、イタリア、アメリカ合衆國艦隊の援助があつたにも拘らず、最後の一ヶ月間漸く海上の支配を完うすることが出來たに過ぎない。今次大戰におけるドイツ軍占領地域、前大戰當時との英海軍力の比較、新しき航空機の脅威を考慮すれば、海戰がしかく容易に結末に達するとは考へ得られないし、イギリスは前大戰に數倍する危機に直面してゐるのである。

（六）空戰

a 一九三九年

第二次大戰における新らしい重要な問題の一つは空軍の戰鬪である。空軍の重要性は決定的と見做されるに至つた。最初の四ヶ月間の戰爭の特異性の一つは、空中艦隊の活動が比較的不活潑であつたことである。兩國の政府も人民も、軍事目標或は非軍事目標の活潑な、休みなき爆撃を豫想したのであつたが、ポーランド征服に於て獨機が猛烈な攻撃力を發揮した以外は、兩方の飛行機は嚴重に鎖に繋がれ、使用される目標も極めて制限された。

聯合國の立場としては、この方策は正しかつた。何故なれば、開戰當時、ドイツ空軍は、聯合軍に比し著るしく優越して居たし、ドイツ工場も英佛を合はせた以上の飛行機生產率を示して居た。そして比較的平靜な期間に、聯合國は、アメリカの援助を得てドイツの優越を凌駕し得たであらうから。

ポーランド戰が完了し、ヒットラーの平和的提案が拒否された場合、何故、さらに猛烈な空軍の行動がドイツによつて行はれなかつたかを諒解する事はより困難である。政治的理由は重要かも知れないが、こゝには二三の軍事的理由を想定して見よう。第一は季節が既に遲かつた事である。若しイギリスに對する空襲戰が行はれたとしたなら、西ヨーロッパの冬の天候は、繼續的な障害の少い戰をなす事を妨げたであらう。第二は空爆に對しドイツ自身が危險な狀態にあつた事である。フランスから三、四〇分の飛行圏内にあるルールの重工業地帶およびフランス國境のザール工業地帶は聯合軍の報復的爆撃の前には莫大な損害を蒙るべき事を彼等は知つて居た。第三の恐らく最も重大な理由はドイツの航空機製造工場の生產率――それは勿論高かつたが、九月には未だ戰時生產力の最高限度に達しなかつた。――が一九四〇年の晩春までには英・佛・米三國を含めたより以上に增進するだらうと言ふ可能性であつた。

イギリスの劇的な最初の攻撃は九月四日、ドイツがポーランド攻撃に専心して居る時、多數のブレンハイム、ウエリントン爆撃機によつてなされたキール運河のドイツ艦隊の爆撃であつた。イギリスはこの爆撃によつてシャルンホルスト級の戦艦が重大な損害をうけたと發表したが、詳細な調査の結果は、この報道を覆へす證據を擧げて居る。かへつてこの爆撃行によつて蒙つたイギリスの損害は重大であり、その後數週間は同じ樣な企てはなされなかつた。

九月、一〇月中はイギリスはドイツ上空を偵察飛行するだけで滿足した。それ等の使命は寫眞を撮る事と宣傳パンフレットを撒く事であつた。ポーランド戦に於て英佛兩國とも飛行機をポーランドに送つてドイツ軍の進撃を阻止しなかつた事が非難されて居るが、實際のところ、兩國は送りたくとも送り得なかつたのである。英國空軍は三隊に分れて居た。戦闘機隊司令官はドーディング元帥、爆撃機隊司令官はルドロー、ヘウイット元帥、海岸防備隊司令官はフレッド・ボーヒル元帥であつた。これ等の中最も活潑だつたのは海岸防備隊であつた。この飛行隊（大部分は長距離飛行艇であつた）は一ヶ月に一〇〇萬哩以上も飛んで、潜水艦の偵察、護送のための偵察に從事し、六〇回も連續的にドイツ潜水艦を攻撃した。

ヴュールマン將軍指揮下の佛空軍はドイツ上空に若干の偵察飛行を試みたが、その爆撃隊は殆んど活動しなかつた。この偵察撮影飛行に於て、アメリカ製のカーチス・ホーク（單坐、低翼、ブラット・ウイトネー發動機、口徑五〇ミリ機關銃四、五を備へつけた）戦闘機は單發動機のメッサーシュミットとの戦闘に於て、操縱に於ても、上昇力に於ても敵機に比しあまり遜色がなかつたと云はれる。

ポーランド處理の後、ドイツ空軍（第一軍司令官ケッセルリング、第二軍指揮官フェルミー、第三軍スペルレ、第四軍レール）はスコットランドの基地、オークニー、シエトランド諸島のイギリス艦隊の連續偵察、爆撃行を開始した。一〇月一六日ファース・オブ・フォースの最初の爆撃行は全く突然で、イギリスは空襲警報を鳴らす暇もなかつた。だから、この飛行に參加した機數は僅かであつたにも拘らず巡洋艦サザンプトンは輕微ながらも損害を蒙り、海上では巡洋艦エヂンバラ、驅逐艦モホークが若干の損害を蒙つた。翌日ドイツ編隊はスカパ・フローを襲ひ、練習艦として使用されて居た舊戦艦アイアンヂューク號に輕微な損傷を與へた。比較的少數の編隊による連續爆撃は續いた。そしてそれ等の主たる目標はシエトランドの諸海軍機基地、および北方封鎖艦隊の根據地であつた。

九月二六日、主力艦、航空母艦、巡洋艦、驅逐艦よりなる一艦隊が、約二〇機のドイツ編隊に攻撃された。ベルリンの報ずるところによると、これは「戦爭史上、この種の軍事行動の最初の成功」であつた。その後秋から初冬を通じて、イギリス艦は度々空中よりの攻撃をうけた。空軍對海軍の最初のテストであつた。

初期のイギリス基地爆撃の時は英空軍の防禦力は弱かつたが、その後の英軍の反撃は迅速、果敢、有效であつた。追撃機、阻止機はドイツ攻撃軍が少數であつたため、敵機を迎へ打つに充分の力を持つて居た。かくて攻撃軍の多くを撃墜する事が出來た。一方イギリス軍艦の對航空武器は敵機にかなりの高度を保つ事を餘儀なからし

め、その爆撃目標を惑亂せしめた。爆撃に加へてドイツ機——概ねハインケルか、ドルニエ機——は英佛上空に長距離偵察飛行を試みた。特にイギリスに於ては遙か西方リヴァプールまで目的物の撮影に飛行した。かゝる飛行は永く續けられたが、兵力は少なかつた。

さらにも一つの重要な航空機の使用——これも小規模ではあつたが——は北海に於ける護送商船團の攻撃に用ひられた事であつた。空からの廣範圍に亙る商船攻撃は豫期されてゐた。特に潜水艦戦が、不活潑になつてからはさらにさうである。イギリス商船は對航空、對潜水艦砲を以て武裝された。しかしドイツ機の攻撃は離れ〳〵で、時々しかなかつた。そしてドイツ機はあまり效果を上げずに、却つて損害を蒙つた樣に思はれる。

以上よりも遙かに有效なドイツ機の使用は一一月下旬から一二月にかけて、飛行機による水雷敷設が潜水艦の機雷敷設に參加した時であつた。ドイツ機はテームス河口、その他イギリス海岸沖の機雷敷設に成功した。それは如何なる戦爭にも行はれなかつた最初の出來事である。その後、ドイツ機はイギリス漁船艦隊に對する徹底的攻撃を開始した。多數のトロール船を爆撃し、機銃掃射を浴せかけた。以上の二つの攻撃は突如として行はれ、またこれに對抗する事の困難なため、最初はかなりの損害を生ぜしめたが、イギリス防禦方策は、一層勇敢な航空機の反撃と相俟つて、年末までにはこのドイツの攻撃を阻止する事が出來た。

一九三九年の空戦に於ては、一方が明瞭に優勢になつたと云ふ結果は生じなかつた。また多少の空軍の活動はあつたが、兩國の空軍軍備は大した損害を蒙らなかつた事も明らかである。故に充分な結論は不可能であるが、次に大體の結果を見よう。

戦闘機間の戦闘に於ては、高速度の價値は過大に强調されて居た事が、一一月六日のフランスカーチス機九機とドイツメッサーシュミット二七機との戦に於て例示された。ドイツ機は速力こそより早かつたが、操縱がより不自由だつたのである。

ドイツからイギリス海軍根據地まで一、〇〇〇—二、〇〇〇哩の往復を行ふ長距離爆撃は技術上、戦術上、組織および給與に關して大きな問題であるとされた。

開戦後數ヶ月中、飛行機による戦果の見るべきものがないにも拘らず（ポーランド戦は別として）、飛行機に對する恐怖、就中都市および市民に對する無制限な飛行機の使用に對する恐怖は、各交戦國の努力を飛行機に對する方面に集中せしめた。史上未だ曾て國内戦線にかくも巨大な努力が捧げられた事はなかつた。交戦國の主要都市は夜間は黑一色に塗りつぶされ（これは少なからず士氣を害したが）、何萬、何十萬と云ふ軍隊、市民、準市民（英國では約一二五萬）が警防組織、空襲豫防工事のために準備をとゝのへて、直ぐにも高射砲を發射せしめ得

西部戦線の航空機損失

（1939年9月1日——40年1月1日）

	損失機數	空襲による死者
ドイツ	150—275	4,000
イギリス	100—200	2,600
フランス	80—150	1,500
計	330—625	8,100

資料：——N. I. Y.

る用意をおこたらなかつた。何千と云ふ高射砲、サーチライト、何百と云ふ防空機、それから他の仕事に有用に使用され得る何百萬と云ふ費用、等がこの防空組織に費やされた。歴史始まつて以來、初めて政府は戰爭力の大部分をその國内戰線に注いだ。西ヨーロッパ文明は空の脅威に對して地下にもぐつてしまつたのである。

b 一九四〇年

1 空軍の活動復活

開戰以來第二の四ヶ月間は、最初の四ヶ月の狀態とあまり變化がなかつた。この期の末、ノルウェーにおけるドイツ空軍の活躍は特殊な重要性を有してゐるが、フィンランド戰におけるソ聯の空軍は、マンネルハイム線の突破に大きな役割を果したとは云へ、あまり重要でない。そして一般に惡天候にさまたげられて、冬季間の空軍の行動は豫想されたやうに沈滯した。

北方に對するイギリス空軍の作戰は常に防禦的であつたが、これは西部においても北海においても、ドイツの防禦線が、その戰鬪機數を考慮した場合比較的短いのに反し、イギリス東海岸の防禦線は甚だ長く、イギリスはこの線に多くの戰鬪機その他を分散して配置しなければならなかつたからである。

海上においては、ドイツ空軍は所謂「全體主義戰爭」の方式に則つて常に攻勢を持したが、英佛空軍は標的たるべきドイツ側の船舶が少いため、この方面ではあまり活躍しなかつた。そして地上においても、防空施設完備のため、英佛空軍の活躍は一定の限界を有したのである。このため聯合軍の重爆擊機は、多くの場合本來の機能を離れて、單に偵察や巡航をなすのみであつた。西部における空軍の戰鬪、これはむしろ空中における小競合と云つた方が適當であるが、かゝる場合にも同樣の局面が現れてゐる。一九四〇年に入ると同時にシエトランド沖と東アングリア沖においてドイツ戰鬪機とハインケル飛行艇が擊墜された。一月一一日、若干のドイツ機はアバディーン、サネット間のイギリス海岸線を越えて英國内に飛來したが、間もなく引揚げた。かくのごとくしてドイツ空軍は時々シエトランドあるひはイギリス東海岸に飛來し好標的を發見すると爆彈を投じ、イギリス空軍もたまにヘリゴランドその他の戰略的地點を爆擊したが、全體として空軍の大規模な行動は見られなかつた。

季節的條件の恢復とともに、再び空軍の活動期に入り、三月一六日一四機編隊のドイツ爆擊機は、突如スカパ・フロー軍港を空襲した。ドイツ側發表によれば、この空襲によつて、英主力艦三隻、巡洋艦三隻に大損害を與へ、英海軍省も若干の被害を確認した。これに續いて一七日もドイツ爆擊機四機がスコットランド東海岸を空襲し、英空軍と戰鬪を交へてゐる。イギリスはこの報復として一九日夜ドイツ領ジルト群島のホルナム空軍基地を爆擊した。そしてドイツ空軍は二〇日も再度スカパ・フローを空襲し、護送商船團を爆擊した。

空軍の活動はこの頃より西部戰線においても漸く活潑ならんとし三月二二日ドイツならびに英佛側よりそれ〴〵偵察飛行が行はれ、

二五日には地上の局部的砲兵戰および偵察戰と關聯して空戰が行はれた。これ以後、西部戰線における空軍の活動が、次第に强化された。

2 ノルウェー戰における空戰

四月九日早朝に始まるノルウェー作戰において、ドイツ空軍は決定的重要使命を果した。すなはちドイツ空軍は一齊にノルウェー、デンマークの空軍基地を爆擊し、ノルウェーにおいては約四〇〇臺の陸海軍機があつたが、殆んどこれを全滅に等しいまでに擊破した。そしてノルウェーの重要な空軍基地を占領するや、これを據點として北海前面およびノルウェー西部沿岸哨戒の任にあたり、一部戰鬪部隊は密集隊形をなしてデンマーク西海岸およびドイツ北海沿岸を間斷なく飛翔し、陸軍の上陸部隊を援護した。

さらに航空機の重要な使用は、大型輸送機による地上部隊の輸送と、落下傘部隊の活躍である。幾許の兵力が航空機によつて輸送せられたか不明であるが、外國よりの報道によれば、デンマークよりノルウェー領内に一日一、〇〇〇ないし二、〇〇〇の兵力が空輸された。或る報告は四、〇〇〇と稱してゐるが、かゝる兵力の空輸が果して可能であるかどうか疑問であらう。兎に角JU—86型の爆擊機あるひは旅客機は一臺に一〇名ないし二〇名の武裝せる兵員を乘せることが出來るから、一日一、〇〇〇名の輸送は易々たるものである。

ドイツ空軍の英艦隊爆擊は、四月九日、北海北部における第一、第二巡洋戰隊に加へられた攻擊に始まる。この戰鬪においてドイツ側は主力艦二隻、巡洋艦二隻に大なる被害を與へたと發表したが、イギリスはこれを否定した。翌九日には、今度は英空軍がベルゲン峽灣においてドイツ巡洋艦を空襲した。一方英空軍はシュレスウィヒ・ホルシュタインのデンマーク國境鐵道爆破を行ひ、ノルウェーのドイツ軍占領地たるナルヴィク、クリスチャンズンド、スタヴァンゲル等の空襲を決行したが、有力な對英攻擊の海軍基地となるべき可能性を有するスタヴァンゲルに對しては、その後も引續き猛爆擊が加へられた。しかしながら、ドイツ空軍がノルウェーに確固たる地位を築いたのに比して、英空軍は遂にノルウェー領内に基地を求めることを得ず、凍結せる湖の氷上を利用するか、あるひはフィヨルドを根據地とする水上機による攻擊を以て漸く若干の空軍の利用が出來たに過ぎない。特に聯合軍のノルウェー上陸作戰にあたつて、英水上機とドイツ戰鬪機との交戰は、速力や裝備の點で英空軍に著るしい落目があつた。

一二日ドイツ軍基地を空襲した英爆擊機の編隊はメッサーシュミット新鋭戰鬪機と遭遇し、八機を擊墜された。イギリス側はこの戰鬪でドイツ機四機を擊墜したと發表してゐる。ドイツがノルウェー作戰に幾許の航空機を使用したか不明であるが、或る報道によれば輸送機五〇〇——六〇〇、軍用機四〇〇——五〇〇、合計約一、〇〇〇であつて、開戰以來二週間にノルウェーにおいて約一〇〇機を喪ひ、デンマークにおいて約五〇機の損失があつた。その他約四〇——五〇機の不時着を合すると、損失總計は約二〇〇機といふことになる。これはポーランド戰における損傷率とほゞ相等しいのであ

る。この間ドイツ空軍は、二〇ないし三〇機編隊を單位として約二〇回にわたり英艦船を攻撃、その戰果は次のごとくである。――英戰艦三隻破損、航空母艦一隻破損、驅逐艦二隻撃沈、五隻破損、潜水艦三隻撃沈、輸送船五隻撃沈、五隻破損。

英空軍は大てい一〇機ないし二〇機編隊を以て單位とし、ドイツ艦船の攻撃に從事したが、開戰後二週間にドイツ側にあたへた損害は次のごとくである。――巡洋艦一隻撃沈、一隻破損、驅逐艦一隻撃沈、二隻損害、潜水艦一隻破損、輸送船一一隻撃沈、三隻破損。

このころ、すでにドイツ軍はノルウエーの完全な制空權を得てゐた。このため英佛上陸軍は甚だ苦戰に陷り、ドイツ軍の空中輸送、戰略的地點に對する落下傘部隊の降下は、交通不便なノルウエーにおける戰鬪に、多大の効果を現した。

各國空軍力

（1940年4月中旬）

	機　數	月生產能力
ドイツ	10,800—19,500	1,600—2,500
イギリス	6,000—11,000	1,000—1,500
フランス	3,500— 6,000	200— 350
イタリア	4,000— 6,400	200— 250

備考：―― The New York Times, May 12, 1940 に據る。數字は最低、最高推定數。この頃アメリカ合衆國の月生產能力は200—250機と發表されたが事實はこの數字以上であつたと推定される。

ノルウエー戰末期における各國空軍力は別表のごとくである。ヨーロッパにおけるドイツ空軍の勢力は決定的で、月生產能力も、英佛にアメリカ合衆國を加へた數字よりも大であつた。かくてノルウエーにおける聯合軍の敗北には、空軍の不足といふことが、大きな要素をなしてゐるのである。

ノルウエー戰の結果近代的空軍の價値について、一つの評價基準が作られた。すなはちこの戰鬪は一般にイギリス海軍に對するドイツ空軍の戰鬪であると見做されてゐるが、「空軍對海軍」なる問題の提出に對する解答は「空軍は極めて有力且つ重要なものであるが、なほ海軍の威力はこのため著るしい打撃を蒙らない」といふものであつた。

3　西部戰線における空軍の行動

ポーランドならびにノルウエーにおけるドイツ空軍の大量的使用は戰史に嘗つて見ざるものであり、作戰上新しい役割がこれに附加されることとなつたが、西部戰線におけるドイツ空軍の活躍こそ、實に近代戰の典型なりと云ふことが出來る。空軍は從來のごとき偵察や戰略的目標の爆撃のほかに、地上第一線の機械化部隊と密接な連繫を有する連續編隊爆撃といふ新らしい重要なテーマを提供した。また落下傘戰術が綿密に計畫される場合、恐るべき偉力を發揮することが明らかとなつた。かくて近代戰における極めて重要な部分が、空軍によつて占められるのである。

五月一〇日ドイツ軍のオランダ、ベルギー侵入と同時に、ポーランド戰と同樣の方式によるドイツ空軍の各地一齊爆撃が行はれた。オランダ、ベルギーのみならず、若干の部隊はロンドン、パリその

他英佛の重要地點を爆撃してゐる。一方地上第一線上空においては前進するドイツ機械化部隊の前方へ、押し寄せる波浪のやうに、爆撃機の編隊が、くりかへし〳〵爆彈を投じて行つた。

西部戰線においてドイツ空軍は絶對的優勢を示してゐた。すなはち一九三九年九月には第一線機、豫備機合計五、五〇〇〇臺ないし八、五〇〇〇臺であつたが、四〇年四月には一〇、八〇〇〇臺ないし一九、五〇〇〇臺に增加し、月生產能力も七〇〇〇臺ないし一、一〇〇〇臺から一、六〇〇〇臺ないし二、五〇〇〇臺に增加してゐた。これに對して英佛合計の機數は九、五〇〇〇臺ないし一七、〇〇〇〇臺、月生產能力一、二〇〇〇臺ないし一、八五〇〇臺で、特に生產能力の點では、合衆國の全面的援助を得ても、英佛側はまだ著るしい不足を示した。かゝる戰略的條件は、ドイツの空軍作戰を益々大膽ならしめる反面で英佛側の航空機使用を制約したのである。それゆゑ前線における交戰國空軍の實際的威力は、保有機の比率ないし生產能力の比率以上に格段の差を生じた。

白蘭戰線におけるドイツ空軍の第一の目標は、ポーランド戰と同じく敵空軍の戰鬪力を破壞することであつた。そして短時間のうちにドイツ空軍の制空權は擴大せられた。次いでその他戰略的目標の攻撃が行はれ、さらに落下傘部隊および空輸部隊は、熾烈な抵抗を冒してオランダ要塞の內部に地歩を占め、メルデイク附近の大橋梁を抑へて南方からの進撃路を確保し、裝甲機械化部隊をして、時を移さず此處より突入し、空軍との協力のもとにロッテルダムを攻略せしめ得たのである。この落下傘部隊は甚だ强力なもので一一日までにドイツ軍はアムステルダム、ハーグ、ロッテルダム附近八ケ所に、合計二、〇〇〇名以上の兵力を着陸せしめてゐる。最初の空からの防禦地帶內への侵入と、これに續く外側からの快速部隊の來援は、ユトレヒトの東南、グレッベ・ラインの同時突破と相俟つて、正味五日間の戰鬪の後、五月一日オランダを降伏せしめた。

ベルギーにおいても先づ各飛行場が空爆せられたが、英佛空軍の來援によつて、地上部隊の空輸ないしは落下傘部隊の降下は、オランダにおけるほど容易に行はれず、空軍の活動は主として地上部隊との連繫のもとに、アルベール運河およびマース河沿線の要塞に對する集中攻撃を行ふにあつた。

空軍の行動はドイツ側のみならず、英佛側においても、かなり活潑であつて、しば〳〵空中戰が演ぜられたが、數および質においてドイツ空軍は次第に優勢となつた。イギリス空軍は、本國防衛のため主要部分を西部戰線へ送り得なかつたし、フランスの空軍の作戰も主として防禦的であつた。そして開戰後短時間のうちに聯合軍は多大の損失を受けたが、ドイツ側發表によれば一二日中に三二〇臺の聯合軍航空機が撃破され、うち空中戰による撃墜五八、高射砲による撃墜七二、地上爆碎一九〇機である。英空軍省發表になる同日までに至る英空軍の戰果は撃墜四五機、英空軍の損失三五機であつた。西部戰線がドイツにとつても英佛にとつても決定的重要性を有するため、この方面の空戰も激烈を極め、一三日もロッテルダム、トルトレヒト、ブラバントヴィージエル上空で空中戰が行はれ、交戰國は互ひに後方陣地、その他敵國深く侵入して爆撃を行つた。こ

の結果ドイツは英機五〇機以上を撃墜したと發表し、イギリスは獨機四〇機以上を撃墜したと發表してゐる。

一四日セダン方面の戰鬪でドイツは英佛機七〇機を撃墜したと發表し、イギリスは同日某方面の戰鬪で獨機一五機を撃墜したが、英機の損失も三五機に上ると發表した。

一七日英空軍省は「一七日獨軍司令部は聯合軍空軍一、四六二機を撃墜せる旨發表したがドイツ側損害は更に大である」と述べた。但しドイツ側の損失機數として、白蘭進撃以後一、〇〇〇機以上と發表したに過ぎない。二一日ドイツ機による英本土の初空襲が行はれたがあまり被害は無かつた。ついで二四日英佛海峡上で英獨空軍の戰鬪が行はれ、英空軍はアーヘンを空襲、アラス、ブーローニュの戰線においても空中戰が行はれてゐる。かくて同日イギリスは五月一〇日以來のドイツ空軍の損失を一、五〇〇機と發表した。その後も引續き交戰國における空軍の熾烈な交戰があつて、以上の如き航空機の大量消耗が、近代戰の一つの型として記錄されるに至つたが、英佛軍のダンケルク撤退を以て幕を閉ぢる第一期作戰においてドイツ空軍は空中戰によつて一、一四二機、高射砲によつて六九九機、合計一、八四一臺の敵機を撃墜し、さらに地上爆碎一、六〇〇ないし一、七〇〇機と發表してゐる。故に右の計算に基づけば、この期間に聯合軍は三、四〇〇ないし三、五〇〇機を喪つたこととなる。

同じくドイツ側發表によれば以上數字に比して、第二期作戰——ウェイガン線攻撃よりフランスの降伏に至る二〇日間——における英佛空軍が喪失せる機數は、空中戰において三八三、高射砲により一五五、地上爆碎二三九、原因不明一五、合計七九二機となつてゐる。第一期作戰は五月一〇日より六月三日に至る二五日間であるから、ドイツの第一期作戰における聯合軍の損失は、第二期作戰における損失の約三・九倍となる。以上の如き發表數字に政治的手加減が加へられてゐるとしても、これによつて空戰の決定的局面が第一期作戰にあり、且つ英佛側の敗北は明らかである。第二期作戰においては、英空軍は主として本國の防衛に從事し、專ら微力な佛空軍がドイツ空軍の精鋭に立ち向つた。

4 空戰の新段階

空戰の新段階は、フランスの降伏以後、一九四〇年夏から秋にかけて行はれたドイツ空軍の英本土空襲と、英空軍の防禦戰ならびに逆空襲である。ドイツ空軍の英國空襲は、六月一八日約一〇〇機を以て行はれたケンブリッヂシャー空襲にはじまり、以後引續き集團的空襲が行はれ、四、五百機のドイツ空軍は七、八月の頃になると、毎日のやうに英本國上空に現れ、至る所空襲の猛威を逞しうした。これに反し、イギリス側のドイツ空襲は甚だ微力なもので、英空軍は主として本國の防衛に從事しなければならなかつた。

ドイツ空軍の行動は、八月中旬以後若干期間ロンドン空襲に集中された。ロンドンは文字通りイギリスの心臟部であり、イギリス人口の三分の一はロンドン附近にあり、同樣に企業の約三分の一が此處に集中してゐるし、そのドックならびに倉庫はイギリス經濟に大

きな役割を有してゐる。それにも拘らずその戰略的位置は甚だ脆弱であつて、北海岸より約一〇分、カレー附近より三〇分ないし四〇分の飛行距離にある。これに反してイギリスからベルリンを空襲するには約三時間の行程を有し、ドイツ國境を超えてから一時間を要する。ゆゑに英空軍は、ドイツ空軍が英國海岸に來る以前に、これを邀撃しなければならない。これがため、常に若干の航空機が警戒のため巡航してゐなければならないのである。かゝる戰略的脆弱性に加ふるに、航空機の不足は、英空軍の作戰を防禦的ならしめたのである。

ドイツのロンドン空襲は、英本土上陸作戰の前提條件を作り出すといふより、むしろ直接的に英國の抗戰意識を摩滅せしめるといふ目的を達成するに力あるものと思はれた。しかしながら、ドイツ空軍は地上に相當の被害を與へたに拘らず、英空軍の熾烈な反撃を受けて、遂に英本國における制空權を得ることが出來なかつた。空襲の最も烈しかつた八、九月の間におけるドイツ空軍航空機の損失は英空軍の損失に三倍し、パイロットは五倍するといはれる。*

註 * BALDWIN, H. W., War's Climactic Phase May Come in The Spring: The New York Times, Jan. 19, 1941.

一〇月以後、イギリスの上空は冬季の惡天候に包まれる。このためドイツ空軍の來襲は比較的緩漫となり、ドイツの英本土上陸作戰の危機は一應去つた。しかし大空爆は引續き折を見て行はれ、ドイツ側の作戰は、明らかに空と海からの逆封鎖による摩滅戰（War of Attrition）に轉じた。かくて空軍の作戰それ自體としては、專

各國空軍勢力の強化

（1940年末現在）

	イギリス	ドイツ	イタリア
1939年9月における軍用機保有高……(1)	6,000— 9,000	8,000—18,000	4,000— 6,000
〃 第一線機……(2)	2,000— 3,000	4,500— 6,000	2,000— 3,000
戰鬪による損失			
(a) 確認せられたるもの	2,100 *	1,300— 2,500	150— 250
(b) 敵國發表數字	2,500— 3,500	5,000— 9,000	500— 1,000
戰鬪によらざる損失 ……(3)	2,000— 3,000	1,000— 2,000	200— 600
月生產率 ……(4)	900— 1,500	2,100— 3,000	250— 500
(a) 合衆國よりの輸入	240— 380		
1940年末における軍用機數 ……(5)	10,000—22,000	17,000—32,000	4,000— 7,000
〃 第一線機……(6)	3,500— 4,500	5,000— 7,000	2,000

備考：—— BALDWIN, H. W., War's Climactic Phase May Come in The Spring: *The New York Times, Jan.* 19,1941. より引用。(1) Military Aircraft, 各種タイプおよび練習機を含む。(2) 活動中のもの。(3) 不時着その他による破壞機數。(4) 練習機を含む各種タイプの軍用機月平均推定生產高。(5) 各種タイプを含む。(6) 現に活動中のもの。* 印は概數。

ら來るべき春における攻撃を準備し、この間時々封鎖戰に參加するにあつた。

一九四〇年中、獨英兩國の航空機の損失は數千に上るが、それにも拘らず、兩國の所有機數は別表のごとく增加してゐる。冬季中、獨英兩國とも空軍の再建に對する努力が拂はれ、ドイツ側にはハインケル、メッサーシュミット、フオッケ・ヴルフエの新型が現はれ、イギリス側ではホウカー・タイフーン、アメリカン・ダグラス(DB—7)の新型が現はれた。

この英本土空襲の結果、イギリスは二五、〇〇〇の死者と三八、〇〇〇の負傷者を出し、ロンドンをはじめ、南西の海岸諸港は甚だしい破壞を受けた。工場、勞働者住宅、輸送機關の破壞のため、イギリス側は二〇%ないし五〇%の生產低下を來した。但しこれは平時生產を基準とするものでなく、戰時生產計畫に對する百分比である。ドイツ側の被害は不明であるが、イギリスほど重大な損失を被らなかつたことは明らかである。イギリスはかゝる重大な被害と脅威を受けたに拘らず、國民のモラルは比較的健全であつた。これには地中海における勝利が與つて力あるものと思はれる。

ドイツ空軍の行動は、一つの都市を破壞し、次いで次の都市を破壞し、かくて英國の戰鬪力を逐次喪失せしめるといふ方式をとることが、理論的歸結となつた。これは明らかに摩滅戰を意味するものであるが、英空軍の抗戰力がなほ減退せず、ドイツ空軍の晝間集團爆擊に對して、英空軍が夜間の報復爆擊を行ふといふ狀態を續ける限り、勝負は特に一方的であるといふことは出來ないであらう。かかる戰鬪は空軍のみによつて解決出來ない。空軍に加ふるに海軍、陸軍の協力が必要である。かくて當面ドイツは陸軍および空軍において優位してゐたが、イギリス海軍力はなほ獨伊海軍力を制壓してゐたので、かゝる狀態のもとで、イギリスの希望は、さし當り合衆國からの航空機輸入によつて空軍勢力を再建し、陸軍の機械化裝備を整へたうへで(大部分はダンケルク撤退のをりフランダース戰線に放棄された)ヨーロッパに上陸の足がかりを作り、フランス、チェコ、ポーランド、オランダ、ベルギー、デンマーク、ノルウエー等に對するドイツの支配を覆へすにある。ゆゑにイギリスの希望は一に掛つてアメリカ合衆國からの航空機ならびに船舶、軍艦の援助にあるのである。

フランスの屈服、ドイツの對英攻擊の本格化にともなひ、アメリカに對するイギリスの航空機註文が激增した。そして英米間に開かられた數々の會談を經て、合衆國は一九四〇年七月より四二年七月に至る間に一四、〇〇〇臺の航空機を英國に引渡す契約に調印したのである。合衆國は自國防衛のため二六、〇〇〇臺を必要とするから、その合計四〇、〇〇〇臺がこの二ヶ年間に生產されなければならない。これは一九一四年から一九四〇年六月一日までに生產された合衆國の各種航空機が、右とほゞ同數の四六、〇〇〇臺に過ぎないことを想起することによつて、その甚大さを知り得るのである。さらに別の數字を以てすれば、一九三九年末に合衆國は月平均二〇〇臺の軍用機と五〇〇ないし七〇〇の發動機とを生產してゐたが、右計畫を遂行するためには一九四二年半ばまでに、月平均生產量を

軍用機三、三三三臺、發動機八、三三三臺に高めなければならない。加ふるに一九四〇年一一月、合衆國はさらに陸軍機一二、〇〇〇ないし二〇、〇〇〇臺の生產を右計畫に追加した。これによつて合衆國の航空機生產目標は年五〇、〇〇〇臺、月平均にすれば四、一六七臺といふ計算になる。

かゝる尨大な生產の增加は、合衆國の生產能力を以てしても甚だ困難であらう。合衆國の航空機生產は、一九三八年に一、二〇〇臺三九年に約二、六〇〇臺、四〇年には約六、〇〇〇臺に近づいた。そしてこのうち約二、〇〇〇臺が陸軍に、約一、〇〇〇臺が海軍に殘りの三、〇〇〇臺が英國に引渡される計畫であつた。しかるに四〇年一〇月の計畫數量と實際の生產量とを照し合せると、計畫の約八〇%が實現されてゐるに過ぎない。すなはち同月の計畫七五〇臺に對して生產量は六〇〇臺足らずであり、うち二八〇臺が英國に引渡され、開戰以來の對英輸出最高記錄を示したが、なほ計畫より六〇ないし七〇臺の不足を來した(これで開戰以來英國が購入した航空機は、合計一、四八〇臺に達した)。一方合衆國軍に對しては一〇月中に三〇〇臺が支給されたけれども、これは豫定よりも約一〇〇臺少なかつた。それゆゑ、生產のカーヴが急速に上昇しつゝあるにも拘らず、合衆國の航空機生產能力は、なほ十分であるとは云へないし、計畫の蹉跌は明らかである。

參考までに、その後の計畫內容を掲げると一九四一年七月における生產量二、〇〇〇臺、うち七〇〇臺を對英輸出。一九四二年初期における月平均生產量二、七〇〇臺、うち九〇〇臺を對英輸出。計畫最終月たる同年七月における生產量三、三三三臺(うち對英輸出約一、〇〇〇臺?)。

合衆國の航空機生產計畫が豫定通り進行しないとしても、かゝるアメリカの援助に對して、ドイツ空軍は決して樂觀を許されないであらう。確かに航空機ならびにパイロットの點では、英米に優位し得るであらうが、燃料の點で重大な制約を受けねばならない。

ロバート・レーンの計算*によればドイツの一二〇個師團が西部における行動を開始して以來、約三、〇〇〇の航空機が一日四時間ないし六時間の戰鬪に從事したとして、この空軍の六週間の戰鬪に必要としたガソリン量は一、五〇〇、〇〇〇トンとなる。これより少な目に計算しても、一年間の消費量は一〇、〇〇〇、〇〇〇トンと推定されるが、ドイツの年生產量は四、二八〇、〇〇〇トンである。さらにイタリアの年平時消費量二、五〇〇、〇〇〇トンに對して、國內生產高一〇、〇〇〇トンといふ狀態であるから、イギリスの海上封鎖が續く限り、ドイツ空軍の大集團行動は、この方面から制限されることとなる。こゝにドイツのルーマニア進駐の意義がクローズ・アップされるのであり、近來における作戰の可能性も見出されるであらう。

註* The New York Times. Dec. 22, 1940.

(七) 世界新秩序の展望

a 戰前におけるブロック化の意義

第二次大戰は、その長期戰への發展にともなひ、世界を數個のブロックないしは勢力圏に分裂せしめた。かゝる傾向を理解するためには、戰前の世界經濟または世界政治について簡單な說明を要するであらう。

新らしき世界の歷史が一九三〇年以後に始まることは、既にわれわれが前年版において指摘した如くであるが、一九二九——三二年の大恐慌こそ、かゝる傾向を生むに至つた第一階梯である。前大戰後における生產の恢復、世界市場の狹隘化は、恐慌に直面して各國既得市場の防衛の必要を益々切實なものとし、排他的植民地關稅の設定、外國爲替管理、その他輸入割當制、清算協定等の各種經濟統制は、純粹に政治的ないしは戰略的目的を有するアウタルキー政策と相俟つて、世界經濟における相互依存關係を次第に稀薄ならしめ、强國を中心とするブロック化の傾向を促進せしめたのである。アメリカ合衆國における一九三〇年の新關稅、大英帝國においては一九三二年のオタワ協定、フランスは第一次大戰後、主として軍事的要請から植民地との連繫を强化してゐたが、一九三三年の植民地會議豫備會議、三四——三五年の帝國會議が、かゝる傾向を代表するものである。ついで一九三三年ドイツにおけるナチス政權の樹立、イタリアにおけるファシスト政策の遂行が、その植民地要求によつて所謂持てる國々をして益々自己權益の擁護に向はしめ、獨伊のアウタルキー計畫は益々世界經濟の分解を促進せしめたのである。最後にソヴェート聯邦は、前大戰後、一時世界經濟から分離されたが、新經濟政策、五ヶ年計畫の時代に入つて、建設資材の輸入、原料品輸出といふスキーマのもとに再び世界經濟との關聯を大ならしめた。しかし五ヶ年計畫＝一國社會主義建設の主たる方針はソ聯邦を自給自足的近代工業國たらしめるにあり、計畫の進捗にともなつて次第に外國貿易は減少した。ベルギー、オランダ等の植民地所有國も英米の範に從つた。

一九三三年以降、各國における生產は再び上昇し、恐慌からの恢復が見られたにも拘らず、ブロック化の傾向は益々强められた。尤も一九三六——三七年に若干の自由貿易主義、あるひは統制の緩和が見られたが三八年以降再び强化されてゐる。恐慌恢復期におけるかゝるブロック主義の强化は、最早恐慌對策として說明され得ないであらう。こゝに、われ〳〵はブロック强化の第二階梯を規定するものとして、再軍備といふ要素を見出すのである。

ドイツの再軍備宣言、ロンドン軍縮會議の失敗を契機とする各國再軍備の强行は、經濟的面においては、尨大な軍事費の撒布によるブームの發生を見るに至り、一九三七年に至る各國國民經濟の表面的復活は、主として再軍備を契機とするものであつた。そして恐慌對策として出發したブロック主義は、今や戰略的原料資源の確保、政治的影響力增大への努力、等々の新たなる意義を有するに至るのである。かくて再軍備への努力が、如何に大きなものであつたかは次のごとき軍事費の增大によつて切實に窺はれる。

一九三二年に各國軍事費支出は總計約三、八〇〇百萬ドルと推定せられ、一九三四年には、既に五、〇〇〇百萬ドルとなつたが、未だ再軍備は普遍的現象ではなかつた。しかるに一九三六年には一三、

〇〇〇百萬ドルとなり、三七年には一五、五〇〇百萬ドル、三八年には一七、五八一百萬ドル、三九年の數字は判明しないが、アナリスト誌*は主要國の軍事費膨脹の程度から推測して、三九年度軍事費支出（九月以前）は二〇、〇〇〇百萬ドルないし二一、〇〇〇百萬ドルと推定してゐる。

註＊　The Annalist; Jan. 25,1940.

ブロック化の第三階梯として、第二次大戰の勃發が擧げられる。以上のごとき世界經濟の分解は、戰爭によつて極度にまで押し進められた。ヨーロッパにおける海上封塞および逆封塞は、交戰による經濟關係の杜絕を、さらに中立國にまで擴大し、アメリカ合衆國の對英援助强化、日獨伊三國同盟の成立は、合衆國をして主要商品の輸出禁止を實行せしめるに至り、アウタルキーないしは廣域經濟圏の概念は、今や全く普遍的のものとなつた。

かくて今日の世界體制は、既に一九三〇年代のはじめから、熾烈な經濟的、政治的對立のもとに、徐々に形成されたのである。一九三〇年以後の歷史は、第一次大戰によつて築きあげられたヴェルサイユ體制の崩壞と、新たなる再組織によつて特徵づけられる。

ヨーロッパにおいて、イタリアは一九三五年にフランスからリビア國境の一一四、〇〇〇平方哩を得、さらに一九三六年にエチオピアを併合することによつて、六四九、二八八平方哩の土地と、七六〇萬の人口を加へ、舊植民地であるエリトリア、ソマリランドとともに、新たに伊領東アフリカとして、これを再編成した。次いで一九三九年には、アルバニアを征服することによつて、面積一〇、一〇八平方哩と、人口一、〇〇三、〇〇〇人を加へた。舊スペイン共和國は、新らしく全體主義國家として登場したが、最初想像されたやうな獨伊のヘゲモニーは、イギリス勢力の滲透と國內諸勢力の確執によつて、甚だ稀薄となり、專ら中立的性質を帶びて來た。一九三三年以來、ナチス獨裁制となつたドイツは、一九三五年に、人民投票によつてザール地方を得、三八年にオーストリアを、三九年春チェコスロヴァキアならびにメーメルを合し、既に戰爭勃發前七七、三三〇平方哩の土地と、一九、六五〇、〇〇〇人の人口を新たに包合して大ドイツとして再編成されたばかりでなく、嘗つて英佛の勢力圏であつたバルカンに、大きな勢力を扶植した。

以上のごとくして、ヨーロッパおよびアフリカにおいて、六つの獨立國が消滅し、第一次大戰後の英米、英佛の對立は、英米の接近と英佛同盟といふ形で再生產された。エチオピア戰爭以來、獨伊樞軸といふ新らしいファシズムの連繫が成立し、ソヴェート聯邦は、一時國際聯盟に參加してゐたが、ミュンヘン以後ヨーロッパの諸會議から退き、一九三九年にドイツと結ぶことによつて、第二次大戰に參加した。

一方極東では、一九三一年の滿洲事變の結果、翌三二年に滿洲國が建設され、三五年の北鐵讓渡によつて、北滿からソヴェートの勢力が一掃された。この滿洲國の總面積は一、二四七、二七六平方粁（五〇三、〇一三平方哩）人口は三六、六七二、七〇〇人である。わが國の勢力は爾來北支に伸び、三七年の支那事變勃發によつて、さらに中、南支に伸び、わが軍の占領地域は、新たに汪政權のもと

に再組された。

b　第二次大戦による諸變化

1　ドイツ

ドイツは赫々たる戰勝のもとに、ヨーロッパ大陸の覇權を握り、此處に一つの經濟圏を確保し、以て對英長期戰の姿勢を示してゐる。一九三九年九月以來一ケ年間に、ドイツが占領せる地域は、別表のごとくポーランド、デンマーク、ノルウェー、ルクセンブルグ、オランダ、ベルギー、フランスの七ケ國に上り、その面積は三〇七、八八六平方哩、人口は七三、六五〇、〇〇〇人である。

これを戰前の併合面積および人口に加算すると、面積において三八五、二一六平方哩、人口において九三、三〇〇、〇〇〇人となる。これのみならず、一九四〇年の冬以來、對英上陸作戰の延期、英本土空襲の一段落を契機として、バルカン方面に驀足を伸ばし、機械化師團三個師、飛行機一、七〇〇臺は、四〇年一〇月ルーマニアに進駐した。次いで四一年三月、ギリシア戰線を牽制するため約一二個師團、一五萬の兵力がブルガリアに進駐した。航空機數はルーマニアと同樣一、七〇〇臺前後と見られてゐる。兩國の面積、人口は、ルーマニア（ベッサラビアを除く）の面積九四、三八四平方哩、人口一六、二三三、八〇〇人、ブルガリアの面積三九、八二五平方哩、人口六、〇七七、九〇〇人である。そして戰前の大ドイツに、ポーランドの占領地域、第一次大戰後ドイツよりベルギーに分割併合されたオイペン、マルメディ、モレネ地方を併合し、フランスとの歴史的

ドイツ支配下の諸國

（1941年3月現在）

	面積（方哩）	人口（1,000人）
I　戰前の併合		
オーストリア	32,000	6,500
ズデーテン	10,500	3,500
チエコスロヴアキア	34,000	9,500
メーメル	830	150
計	77,330	19,650
II　戰爭による攻略		
ポーランド	73,500	22,000
デンマーク	16,575	3,750
ノルウエー	75,333	2,700
ルクセンブルグ	999	300
オランダ	12,704	8,700
ベルギー	11,775	8,400
フランス*	117,000	27,800
計	307,886	73,650
III　進駐		
ルーマニア**	94,384	16,234
ブルガリア	39,825	6,078
計	134,209	22,312
總計	519,425	115,612

備考：——* 占領地帶。**ベッサラビア及び北ブコヴィナを除く。

資料：——The New York Times, Sep. 1, 1940.

IIIは The Statesman's Year-Book, 1940 に據る。

繫爭地たるアルサス、ロレーンを接收した。

本年四月ユーゴースラヴィア、ギリシアの攻略を加へて、今やドイツの支配下に立つヨーロッパの諸國は、ノルウェー、デンマーク、オランダ、ベルギー、フランス、ハンガリー、ルーマニア、ブルガリア、ユーゴースラヴィア、ギリシアの一〇ケ國に上り、中立國たるスイス、スエーデン、フィンランド、スペイン、ポルトガルも亦、樞軸國との連繫無くしては困難な立場となるであらう。

かくしてイタリアと共に形成された尨大なヨーロッパ・ブロックの中樞をなすものは、戰爭によつて更に擴大された大ドイツである。ドイツは、今や對英逆封鎖、英本土空襲のほかにバルカン、アフリカの兩戰線で多大の成果を得た。そして益々長期戰の準備をとつてゐる。かゝる場合當然問題となるべきは第一に軍需資源の問題である。鐵鋼、石油、食料品、その他原料の自給は、ヨーロッパにおける主要資源の獲得によつて、著るしく强化されたとは云へ、なほ機械化せる近代的戰鬪の燃料となる石油を十分に確保するためには、イラク、イランの近東油田を包含する必要があるであらう。ドイツは、このためウイルヘルム二世以來の歴史的ルートたるバグダッド鐵道を一九四〇年七月に完成した。しかしながら、この方面に對する英勢力は、未だ强固なものがあるため、近東における軍事行動を必要とする。またこの場合ソ聯邦との勢力のバランスを考慮しなければならない。

その他不足せる原料として、マンガン、クローム、ニッケル、タングステン、鋼その他若干の非鐵金屬、纖維原料、熱帶産物、および食料品は、代用品の使用と海外からの輸入を必要とするであらう。このうち金屬原料はフランスその他敗戰國におけるストックならびにスクラップの獲得によつて、若干の餘裕を見積らねばならない。フンク經濟相の、ヨーロッパ廣域經濟圏に對する說明において、ヨーロッパ經濟圏が「自足自給的なものではなく、世界の經濟圏に對して有無相通の關係に立つ」といふ一項は、ヨーロッパ經濟圏の外延としての南米、アフリカ、東亞に對する關心を示すものであらう。

第二に、ドイツ・ブロックの基本的性格の一つは、ブロック内の政治的統一が、占領地區の宣撫といふ形で行はれなければならないことである。特にフランスの如き、嘗つてヨーロッパ大陸最强の國家としての傳統と誇りを有する國に對しては、極めて慎重な對策を必要とする。現にヴィシー政府に對する英米の働きかけは根强いものがあり、獨佛の關係も亦極めて微妙である。その他イベリヤ半島およびバルカン諸國に對する英米の工作を排除しなければならぬと同時に、中東歐、バルカンの民族問題も解決しなければならない。それ故、ドイツは對英攻撃、ヨーロッパの防禦と確保のため、大兵力を各地に駐屯せしめる必要がある。かゝる兵力の正確な數字を得ることは困難であるが、大體ノルウェーに一〇萬、デンマークよりフランス・スペイン國境に至る海岸線に八〇萬、ソ聯との國境に一〇〇萬、中東歐、バルカンに一〇〇萬、アフリカに一〇萬、合計約三〇〇萬の兵力をヨーロッパの各地に分散せしめてゐる（一九四一年四月）。

第三に對ソ聯關係が考慮されねばならない。ナチズムとコムミュニズムとは本質的に相容れざるものである。兩國の提携は單に政策的なものであつて、國境におけるドイツ軍一〇〇萬と、これにほゞ同數のソ聯赤軍の對峙狀態は、この事態を說明するものであらう。かゝる對立にも拘らず兩國の連繫を必要としてゐる所以のものは、ドイツにとつては、對英戰にさいして背後より脅威される不利を排除する點にあり、ソ聯にとつては、英獨戰によるヨーロッパ諸國の國力の消耗と、ソ聯國力を絕對的にも、相對的にも急速に增加せしむる點にある。ソ聯は數次の五ケ年計畫の成功にも拘らず、ヨーロッパの一流諸國に比して極めて低い水準から出發したため、政治的にも、軍事的にも常にドイツから脅威を受けてゐた。そして傳統的政策たる西部國境の安全といふことは、ミュンヘン以後、ドイツとの提携に向はせたものである。

第四にヨーロッパの廣汎な地域にわたる戰時經濟、フンク經濟相の言葉を以てすれば、「ドイツが戰前および戰爭中大成功を獲ち得た經濟政策」は長期にわたる場合、おそらく生產力の低下とインフレーションを促進するものであらう。かゝる戰時經濟下における國力の消耗が戰爭を擴大すれば擴大するほど急速であるといふこともまた見逃し得ざる一要素である。

以上のごとき性格を基礎として、ドイツの對英攻擊は、さしあたり北海方面では英本土空襲、逆封塞、地中海アフリカ方面ではイタリアの援助と近東攻略といふ形態のもとに行はれるものと推測される。

2　イタリア

イタリアは軍事的にも、經濟的にもドイツ・ブロックの中に包含せしめられる。イギリス地中海艦隊の海上封塞と、アフリカおよびギリシア戰線における不振も、ドイツの援助によつて取返された。但しイギリス地中海艦隊の存在と、その海上封塞は、アフリカ植民地との連絡を甚だ不便ならしめ、この方面の作戰は著るしく制約されてゐる。それ故植民地の主要部分たる伊領東アフリカならびにリビアと緊密な連絡をとるためには、地中海の制海權を得ることを必要とする。また地中海の制海權を得、エジプト、およびアングロ・エジプト・スダン等を攻略し得たとしても、本國、植民地を一丸とするイタリア・ブロックは、經濟的にも、政治的にも、あまり惠まれた狀態のものではないであらう。かくてドイツの軍事的、經濟的援助を必要とするに拘らず、政治的にはイタリア・ブロックとして一つのまとまりを有するものであり、ドイツ・ブロックに包括されながら、且つ獨自の存在をなすものである。

3　ソヴェート聯邦

ソヴェート聯邦はそれ自身單一のまとまりを有する大陸國家であり、今次大戰によつて獲得された諸地方も、逐次聯邦の一員として編入された。いま戰爭による諸變化を要約すれば次のごとくである。

一九四〇年三月、フィンランド戰の結果、ヴィーボルグを含むカレ

リア地峽、ラドガ湖北岸および海軍基地としてのハンゲを得、カレリア地方においては新たにカレロ・フィン共和國が樹立された。この總面積一一六平方哩人口四七〇、〇〇〇人であるが、人口の主要部分はフィンランド領內に移住した。同年六月二七日、多數ウクライナ人の居住するルーマニア領のベッサラビアおよび北ブコヴィナがソ聯に割讓され、モルダヴィア共和國として再組織された。この面積一九、五〇〇平方哩、人口三、七〇〇、〇〇〇人である。バルト海三國、すなはちリスアニア、ラトヴィア、エストニアから、ソ聯は既に一九三九年に軍事基地を得てゐたが、ドイツの諒解のもとに、これら三國はソヴェート聯邦に編入され、エストニア共和國、ラトヴィア共和國、リトワ共和國として、聯邦の一員となつた。以上三國の面積合計六一、八〇〇平方哩、人口五、〇〇〇、〇〇〇人である。これに一九三九年秋のポーランドの分割によつて得た西白ロシアおよび西ウクライナの一一四、〇〇〇平方哩、人口一二、八〇六、〇〇〇人を加へると、今次戰爭によつて新たに得た地方は、下表のごとく二〇七、〇〇〇平方哩、人口二一、九七六、〇〇〇人となる。かくて一九四〇年末に、從來の聯邦一一の共和國は一六に增加した。

第二次大戰に對するソヴェート聯邦の政策は、內にあつては國力の充實（新一五ケ年計畫を根幹とす）と、外にあつては、國境の安全を基本的方向とする。西ヨーロッパ國境の西遷も、ソ聯邦攻擊の足がかりを除去するといふ目的のものである。また同樣にトルコおよびイランに對する關心も、ソ聯の積極的な攻擊を意味するものでなくて專ら守勢的である。極東においては、一九四一年四月、わが國と中立條約を締結することによつて、國境の安定に資し、且つヨーロッパ、なかんづくバルカン、近東に對する睨みをきかせることとした。

ソ聯邦のかかる平和主義、ないしは守勢的立場は、根本的にはその軍事的弱さに由來するものであらう。赤軍は未だドイツ軍に對して對等の水準に達してゐないうへ、ドイツは西部における事態を顧慮することなくして大兵を東部に集結し得るといふ戰略的條件を有するし、ロシアは傳統的にドイツに敗北してゐるといふ心理的狀態もこれに加はつて、軍事的には何等積極的立場をとり得ない。且つ西歐文明に對する歷史的立後れ、技術水準の低さ、ドイツの科學および發明力に對する恐怖等々が、ソ聯の對ヨーロッパ政策を決定する重要なモメントとなつてゐる。

大擴の土領聯ソ

（1940年末現在）

	面積（平方粁）	人口（1,000人）
舊ポーランド領	296,000	12,806
カレロ・フィン共和國	30,000	470
モルダヴィア共和國	50,300	3,700
エストニア共和國 ラトヴィア共和國 リトワ共和國	160,000	5,800
合計	536,500 （207,000哩²）	21,976

備考：——哩印は平方哩。但1平方哩＝2.59平方粁として換算す。

資料：——J. T. A.: 蘇聯邦年鑑, 1940.

しかしながら、かゝる防禦的立場にも拘らず、ソ聯が近代戰に有利な條件たる世界最大の大陸國家であること、聯邦共和國の政策はコミンテルンの政策と一應別個のものであること、およびソ聯が今後恐らく世界政治のうへにおける攪亂的要素となる可能性を有することは、注目すべき特殊性である。

4 イギリス

イギリスは戰爭によつて甚だしい打擊を受けた。ノルウェー戰の敗北、フランダースよりの撤退、フランスの敗北、バルカン、アフリカにおける敗北といふ契機によつて、北歐諸國、ベルギー、オランダ、フランス、バルカン諸國におけるイギリスの勢力は一掃され且つドイツ側の逆封塞によつて、本國自身の危機が切迫してゐるものの如くである。

しかしながら、以上のごとき敗北も、なほ致命的なものたり得ないであらう。ナチスの英本土上陸作戰には多大の困難があるし、ドイツの大空襲に對する英國民のモラルも比較的健全である。そして合衆國の全面的援助のもとに、海軍力は未だドイツに對して壓倒的優越を示してゐるし、英國地中海艦隊は未だ樞軸國の近東、アフリカにおける決定的優越を許さないであらう。且つアフリカ、南米に對するイギリスの勢力は明らかに增大した。すなはちアフリカの心臟部に横たはる白領コンゴに對する支配力は增加し、ド・ゴール政權の援助によるフランス植民地への喰込みも堅實に進行してゐる。そしてエチオピアにおいては若干の成功を示してさへゐる。北海方面においては、舊デンマーク領たるアイスランドおよびフェロー諸島の占領によつて海空軍の有力な基地を得たし、極東においては、佛印、蘭印等に對する政治的影響力が增大した。かくて、英帝國の中樞的位置を占める印度＝太平洋地帶におけるイギリスの勢力は、却つて强化された。

戰爭は今や英本土邊周においてのみならず、この英帝國中樞部の邊周、すなはち近東、北アフリカに發展する傾向を示してゐる。ここに至つて、英本土を考慮外に置けば、英帝國の戰略的强靱性が前面に現れて來るのであり、長期戰の展望が、端倪すべからざる所以である。

自治領、植民地を中心とする尨大なイギリス・ブロックは、一九世期の中葉に成立したものであるが、英帝國の中樞部分たる印度＝太平洋地帶の構成は、既にヴィクトリア朝の末年たる一九〇一年に成立した。そしてイギリス・ブロックの特殊性は、その尨大な植民地が、地球上に分散し、英本國と遠隔の地に存在する點にある。かかる地域的構造の特殊性は、さらに經濟的にはこれら地方に對する多額の資本投下と、本國との貿易とがその性格を規定する。軍事的にも、以上のごとき特殊性は、尨大な植民地軍の利用、傳統的な海軍力の優位、海上ルートの重要性等々となつて現れて來るのである。

戰爭の現段階を、長期戰への轉入と規定するならば、イギリスの政策は次のごとく推定され得る。

第一は本國の防衛である。合衆國よりの援助は、軍用機、艦船の

購入と、兵器の輸入により、ドイツの逆封塞を打破することを主要目的とする。ドイツ空軍は英本土における制空權を未だ得てゐないし、ドイツ海軍も亦決定的な脅威を與へてゐない。ただ護送船團に對する航空機および潛水艦の襲擊が、重要な問題を提起してゐるに止る。合衆國よりの護送船團は、グリーンランドのユリアネハープよりアイスランドのライキャヴィクに至る北方ルートと、バミューダより大西洋上のポルトガル領アゾレス諸島に至る南方ルートがあり、イギリスは直接カナダのハリファックスおよびバミューダより英本國に至る二線と、希望峰迂廻ルートを加へ、合計五つのルートを有するものであるが、これらの航路は、英海岸より六〇〇哩內外の地點において、何れも獨空軍および潛水艦の攻擊を受ける最危險水域に入る。これに對してイギリス空軍および艦船の不足は可なり顯著であり、益々合衆國依存の度を强めねばならない。

第二は植民地ならびに地中海の防衛である。地中海における制海權は、未だ英海軍の手に在るとは云へ、既に印度＝太平洋地帶への最短ルートは最も危險なものとなり、實質的に使用不可能の狀態に近づきつゝある。ジブラルタルおよびスエズは、ドイツ軍の南下によつて更に大なる脅威を受けるであらう。

第三はドイツ攻擊であるが、現實において、これは第一、第二の問題と密接な關聯を有するものである。先づ英本土空襲に對するにドイツ領および占領地の報復爆擊を行つてゐる。但し航空機不足その他の戰略的條件からして、イギリス側は專ら守勢をとらざるを得ない。イギリスの積極的攻擊は現在まで主として地中海方面より行はれてゐた。すなはちギリシアおよびリビアにおけるイタリア攻擊がこれであつた。しかしドイツ軍の進出は、この方面においても、スエズおよびエジプト、近東の防衛に轉ぜざるを得ない狀態となつた。最後に開戰以來の海上封塞は、未だ決定的重要性を有してゐる。

第四はドイツ傳占領地域および中立國に對する外交交渉によつて反獨勢力を結成せんとするにある。特にヴィシー政府に對する直接的工作以外に、アフリカのウェイガン軍およびド・ゴール政權を通する間接的工作は重要な意義を有するであらう。またスペイン、ポルトガル、トルコの中立への努力と、近東の安定とは、この政策の中に含まれるものであり、ソ聯に對する働きかけも亦輕視すべからざるものであらう。

5 フランス

敗戰の結果、フランス・ブロックは明らかに二分された。すなはち佛領赤道アフリカを中心とするド・ゴール政權が、反ヴィシー勢力として登場したのみならず、各植民地においても、兩派の抗爭が繼續されてゐる。そしてこの顯著な例をなすものは、シリア、佛印等であらう。しかし大體において、印度＝太平洋にあつては、本國との連絡の杜絕によつて英米の勢力下に置かれ、アルジェリアおよびモロッコの北アフリカ方面は、ヴィシー派と見做すことを得るであらう。但し、この間の關係は極めて微妙であり、獨佛關係の消長によつて、多大の變化を蒙るものと見なければなるまい。

6　アメリカ合衆國

アメリカ合衆國は、前大戰におけると同樣積極的な對英援助に出てゐるが、この方向を規定するものは、第一にアングロ・サクソン民族に對する血のつながりと、第二にアメリカ資本主義の壓力、第三にアメリカに對するナチズムの脅威である。その他傳統的民主主義精神が內包してゐる獨裁への嫌惡等々、各種の要素があげられるであらうが、世界政治のうへにおいて最も基本的なものは、アメリカ資本主義の特殊な性格である。

イギリスを一九世期型の資本主義とすれば、二〇世紀における合衆國は最も新らしい型の資本主義である。そして、その經濟的比重は世界の五〇％に達する最大のものであつて、前大戰以後、特に恐慌期を通じて、英米の對立は英の屈服（このメルクマールは一九三八年の英米通商協定である）といふ形をとり、戰爭勃發後は、英帝國のみならず、オランダ、ベルギー等の海外植民地に對する著るしい進出を示した。かゝる積極的立場は、その若い潑剌たる資本主義的經濟力に起因する。

戰前から現はれてゐた米洲におけるイギリス勢力と合衆國勢力との交替は、戰爭の勃發によつて、さらに著るしく押し進められ、カナダおよびオーストラリアの後見人としての立場が强化された。そして太平洋においては、蘭印、佛印、支那への發言權を强化してゐる。大西洋においては、グリーンランドを「モンロー主義の圏內」に包含し、アフリカとの經濟關係が强化されたのみならず、直接ヨーロッパの諸國、バルカン諸國、スペイン、イタリア等に對する外交の手を伸ばした。そして國內に强固な反戰思想が在るにも拘らず、最初は中立法の改訂によつて、次いで武器貸與法の成立によつて、さらに最近では哨戒水域の擴大と護送船團制の計畫によつて、益々參戰の氣運を濃厚ならしめてゐる。

對英援助の强化のみならず、樞軸國に對する經濟制裁は、世界の分立傾向を益々强めるものであつた。特に合衆國のわが國に對する重要原料ならびに藝材の禁輸は、反作用的に、東亞における廣域經濟を促進せしめるものであらう。

かゝる合衆國の積極的態度に拘らず、若干の弱點も亦その內に包藏する。カナダおよび南米諸國の如き、ヨーロッパとの貿易關係の杜絕は、多大の苦痛を與へるものであり、合衆國が汎米ブロックとしてこれらの國々をも經濟封塞に引入れることは、益々弱點を露呈することとなるであらう。

7　第二次大戰と東亞

わが國を盟主とする東亞新秩序の建設は、支那事變遂行の過程において勃發した第二次ヨーロッパ大戰によつて、決定的に促進せしめられんとしつゝある。大戰勃發當初、わが國は不介入方針を堅持してゐたが、フランスの敗北、ドイツのヨーロッパ制覇の結果として、南洋方面の事態は、最早ヨーロッパの事態に關聯することなくして佛印、蘭印の諸問題を解決することが不可能となり、一九四〇

年九月、遂に日獨伊三國同盟を結ぶことによつて積極的に所謂東亞共榮圏ないしは東亞新秩序を確立することが要請されるに至つた。すでにこれよりさき、地中海方面の航行が困難となつたため、わが國は鹽化加里、燐礦石、原料鹽等の輸入が著るしく阻害されたばかりでなく、ヨーロッパおよびアフリカ方面への輸出が不能となつてゐた。三國同盟の締結は、かゝる事態を更に强化するものであつた。この結果として英米との對立は激化し、わが國に對する經濟的壓迫が强まつたのである。すなはち合衆國は屑鐵をはじめ、機械類、銅、鉛その他の對日禁輸を決定し、印度は對日銑鐵輸出の禁止を行つた。さらに海外貿易の壓迫策として、英領諸地方は、わが國船舶に對して薪炭、糧食、用水等の供給を拒絕するに至つた。こゝにおいてわが國は國內經濟の再編成と、外延的には東亞における廣域經濟圏の確立が當面の問題となつたのである。

かゝる東亞ブロックの中樞をなすものは、日滿支三國であり、しかも日支間の戰鬪行爲が繼續される一面において、建設が行はれねばならぬといふ特殊な事態のもとにある。さらに今一つの特殊性は戰爭の相手國たる支那が、從來の半植民地的事情に規定されて、そのまゝ世界的規模における對立を再生產してゐるといふ點にある。すなはち汪政權、重慶政府、中共の三鼎關係は、そのまゝ世界の勢力抗爭關係の縮圖であり、且つ微妙にこの間の勢力の消長を反映するものである。ゆゑに事變の解決＝東亞新秩序完成への基礎條件がヨーロッパおよび世界の再編成過程においてのみ十分に達成され得る狀態にあるといふことに注意しなければならない。

本年四月、松岡外相の渡歐を契機とする日ソ中立條約の成立は、かゝる事態に對する一つの前進と見られるであらうし、これを基礎とする新たな方向づけが生れて來る可能性も生じてゐる。

——參考文獻——

世界戰爭（K・ヘルフェリッヒ著　安井源雄譯）
世界大戰—その戰略（H・リーデル・ハート著　後藤富男譯）
總力戰の性格（塚田正之助）
第二次歐洲大戰誌（外務省歐亞局編）
獨逸西部作戰（ナチス黨編　同盟通信社譯）
日本經濟年報（東洋經濟新報社）
東洋經濟新報
エコノミスト
同盟旬報
朝日新聞
Economic Warfare ; P. Einzig, London, 1940.
History of the War, Vol. 1,2,3; S. King-Hall, London, 1939
Horrabin's Atlas-History of the Second Great War, Vol. 1, 2; J.F. Horrabin, London, 1940.
Military Strength of the Powers; Max Werner, Tr. by E. Fitzgrald, New York, 1940.
New International Year Book, New York, 1940.
The Second Quarter; R. Storrs, London, 1940.
Frankfurter Zeitung.
The New York Times.
The Times.
Völkischer Beobachter.

二　東亞ブロック

第一章　概　觀

（一）二種のブロック

世界の歴史は、いまや、從來の單なる一國家の孤立的な存在の時代から、いはゆる結合的な存在、卽ちブロックの時代に進みつつある。もちろん、ブロック的存在は、從來の國家的存在を單に否定するものではなく、その一層高度に發展せる形態であるといふべきであるが、兩者の間には、注目すべき相違が見られる。

ブロックは、先づ、一國家としてではなくて、數個ないしそれ以上の多數國家の結合的な存在が、國家の存在方式として、通例とられるところに成立する。ブロックは未だ完成されずして結成の途中にあり、したがつて、その結合の形式、形態は、各ブロックによつて異らうが、何れにせよ、多數國家の廣大なる領域を包藏するところに、その特徴がある。

更に、ブロックは、單に多數國家が無意義に寄せ集められたものではなく、共通の理念ないし目標を有してをり、その達成をもつて、結合の意義、目的としてゐるところに特徴がある。これも、高遠なる道義的理想から、そのうちにおける支配的國家の便益といふが如き卑近なる目的に至るまで、いろいろありうるが、ともあれ多數の國家が、共通の目標に向つて協働するところに、ブロックは成立するのである。

ブロックに包括される國家は、血緣的に、種族を同じくすることにおいて、最もよく成立すること當然であるが、社會的、文化的意義を包括せるいはゆる民族的近似性がある場合に好適であり、更に廣くは、地理的、經濟的、政治的、文化的な親近性があることによつて成立する。

要するに、ブロックは、從來の如く、單に一國家の孤立的、分散的な存在が不可能となり、多數國家が共同的な存在の時期に入りつつあるといふことによつて發生せるものであり、しかも、それは、單に無目的、無意義にでなく、一定の共同目標に向ひ、有意義に進むことを特徴としてゐるのである。

かうしたブロック時代の到來は、しからば、何によるのであらうか。上述のところからも、根本的な理由は、いはば文明、文化の發達が、既存國家の領域を狹隘ならしめるにいたつたところに、求められるであらう。近代國家における巨大なる生產力の發展、交通、通信機關等の驚異的發達、人口の急速なる增加等々が、一般的に、根本的にブロックを必至ならしめたことは、多く說明するまでもあるまい。

次には、かうした一般的條件の下において、經濟的、政治的に見て、特に、新たに發展的な國家が擡頭して來たといふことが擧げられるであらう。日本、ドイツ等の事例は、明かに、これを證明してゐる。しかも、かうした諸國は、いはゆる持たざる國として、經濟

的、政治的に、自己の自然の發展を阻害する條件に圍まれてをり、どうしても、より廣大なる領域を求め、そこに新たな國家的存在の方式を見出さざるをえない立場にある。

加ふるに、第三には、昭和四年にはじまつた世界恐慌が諸國をして不況のどん底に陷らしめ、そこに、ブロック結成による苦境打開の具體的な第一歩を踏み出さしめた。すなはち、世界恐慌は、各國の經濟的、政治的困難を異常に强め、一方ではそれからの脫却を、經濟的に自己の支配する市場、勢力圏の設定、擴大に求めしめると共に、他方では政治的に、國防の强化、擴充を必要ならしめ、彼此相俟つて、經濟的、政治的に、新たなる領域を要請せしめるにいたつたのである。

しかも、今日の情勢においては、世界は英、米、佛等一握の列强によつて、廣大なる領域を占有されてゐる結果、これらの諸國は、かうした情勢に直面して、何よりも先づ自己の勢力範圏を確保、强化することに專念したために、ブロックの結成は、むしろこれらの諸國によつて口火を切られ、例へば、オタワ會議による英帝國ブロックの結成となつて現はれた。すなはち、ブロックは、先づ、既に廣大なる領域を有する諸國が、自己の勢力を保持せんとするいはば縱張主義的見地から、はじめられたのである。

これに對し、未だ大なる領域を有せざる、いはゆる持たざる國を中心とするブロックの結成は、滿洲事變を契機とした東亞ブロックをもつてはじまつたと見られるが、これは、今後、新たに、ブロック的關係を築き上げて行くものだけに、その前途は必ずしも容易ではない。さうした地域にも、多かれ、少かれ、いはゆる持てる國の影響力が及んでゐるので、新興的ブロックは、これら舊勢力との鬪爭なくしては、進展しえない立場にあるからである。

かくして、同じ、ブロックとはいふものの、單に、舊來の勢力を保持し、舊體制、舊秩序を維持する建前に立つものと、新たなる領域を要望し、新たなる體制と秩序を欲求する建前に立つものとがある。一方では、ブロック結成は、何よりも新興的な經濟的發展の當然の結果としての意義を有し、これを阻害する舊秩序的壓迫に對する新秩序建設の道義的根據に立つてゐるが、他方では、たゞ單に自己の苦境を打開せんとする利己的動機に出で、頑迷に舊秩序を墨守せんとする。もちろん、この經濟的發展の理由、實情は、國によつて必ずしも同一ではないが、一國經濟が從來の國民經濟の範圏に滿足しえざる程度に發展したによることは明かであり、この意味において、そのブロックの志向は、一般に、歴史的進步の線に沿ふ道義的意義を有するものといふことができる。これに對し、單に、自國の經濟的困難、矛盾の加重から、すでに極度に發展し、かつ廣大なる領域を有する國が、その舊來の縱張りと秩序を維持せんとするブロック的傾向は、まさに歴史的進步に背く罪禍である。要するに、一は進步と道義に則り、他は保守と利害に據る。ブロックは實に、かうした二樣の意義を有する異物のものからなつてをり、しかも、それは、單に、經濟的のみならず、いまや、政治的、軍事的に、激烈なる鬪爭の過程において存在してゐる。ブロックの發展もまた、生みの惱みなくしてはありえないのである。

(二) 東亞ブロックの意義

東亞ブロックは、いふまでもなく、ブロックたる限りにおいて、一般ブロックと共通の意義を有すると共に、特に、それが、進歩と道義に則る點において、特殊の意味を持つてゐる。

我々は、こゝで、近代日本の躍進的な發展について、その經濟的、政治的、文化的進歩の跡について、贅言する必要はないであらう。數字を擧げなくとも、第一次ヨーロッパ大戰當時から今日までの經濟的發展の速度を見れば、恐らく日本は、かの特殊の好條件を有する米合衆國とならんで、世界に冠たる國であらう。この意味において、わが日本が、最も强く、ブロック結成の必要を痛感せざるをえなかつたことは、餘りにも、當然のことである。

更に、他方、わが日本をめぐる東亞の情勢は、このブロック結成の必要を一段と促進してゐると見られる。先づ、東亞自體のうちには、わが日本と指導權を爭ふ中心的な國家はない。もちろん、滿洲、支那、泰等、獨立國はあるが、しかし、近代國家として、特に、ブロックの指導國としては、日本と競爭的關係にある國ではない。日本は、東亞ブロック結成における指導的國家として、運命づけられてゐる。しかも、東亞の領域は、殆んど、すべて英、米、佛、蘭等の諸國の屬領ないし支配下におかれてゐる。最も大なる獨立國たる支那において、英米が、いかに强大な勢威を張つてゐるかは、改めていふまでもあるまい。

加ふるに、第三には、かうした英米的勢力は、極力、日本の發展を阻害するために、經濟的、政治的に、あらゆる策謀を行ひ、新興國日本の抑壓に懸命の努力を拂つてゐる。九ケ國條約その他支那をめぐる一聯の諸條約、ワシントン條約、ロンドン條約等はもちろんのこと、南方各地域における日本に對するあらゆる禁制的措置は、これが有力なる證據である。

そこで、日本は、何よりも、東亞ブロックを結成する必要を痛感してゐるのであるが、その上に、このブロックの結成は、ブロックに含まるべき各國と本來的には何らの衝突をも來すものではないのである。たゞそこに巢食ふ英米的勢力とは、どうしても衝突せざるをえない。いな、その方法、形式はともあれ、上述の關係から見れば、英米勢力を後退せしめることなくしては、東亞ブロックの建設は、完全には不可能なる立場におかれてゐる。言ひかへれば、東亞ブロックは、發展的にして新興國家日本を指導者として、今後結成されんとするところに、その歷史的なる進歩の意味があり、西歐帝國主義の抑壓から、東亞諸民族を解放して、東亞民族の獨自的な共存共榮を圖る新秩序を確立するところにその崇高なる道義的意味がある。もちろん、更に進んで見れば、この東亞ブロックの結成は、指導者たる日本國家が、肇國以來有する八紘一宇の精神に基くものであり、各國をして、よくその所をえしめるところに、究極の意義はある。が、同時に、この日本の國民的信仰が、具體的に貫徹される過程において、東亞民族の英米的隷屬からの解放が行はれることは、嚴肅なる進歩と道義の表徵であらう。

新秩序を意味するブロックの結成は、主として歐洲において、獨

伊を中心に結成されつつあることは周知の通りであるが、それは、いはば歐洲內部の問題である。これに對し、わが東亞ブロックの使命は、歐米勢力によつて抑壓された東洋民族の覺醒、解放であり、世界歷史において、西洋と對立しての東洋の新たなる登場と見られる。その世界史的意義は、絕大であらう。

かうした東亞ブロックは、日本を指導者としてのみ結成されなければならないことは、前述の通りである。このことは、もちろん、日本が、東亞ブロックを、舊英米流に支配することを意味しない。しかし、たゞ、單に、烏合の衆の漫然たる集りが、自覺ある結合體に組織されえないことは自明である。特に、東亞諸地域は、長く英米に抑壓されてゐただけに、未だに獨自的な自覺さへ持たない民族もあり、まして、近代國家としての、經濟的、政治的、軍事的力を有する國家は、日本をおいて存在しない實情にある。激烈なる英米的勢力の侵攻に對抗しつゝこの東亞諸民族をもつて一體的關係を結成し、もつて、東亞ブロックを建設するには、强固にして卓越せる指導が必要であり。この指導は、實に、日本のみのなしうる、またなさねばならない光榮ある權利にして義務である。

(三) 東亞ブロックの內容・特徵

東亞ブロックの結成過程、その現在の實情等については、自然的、政治的、經濟的、文化的の諸點において、以下に述べられてゐる。ここでは、それらを要約して、東亞ブロックの內容はどうか、いかなる特徵を有するか、の點について、概括的に、摘記して見よう。

先づ、東亞ブロックを、東亞新秩序、更に、近くは、大東亞共榮圈と理解したる場合、そこには、いかなる國家、地域が包含されるであらうか。元來、東亞といふ語が、いかなる地域を指稱するかについても、何ら明確なる定義がない以上、東亞ブロックの範圍を從らに、詮議することは無意味であらう。そこで、これを、我々の常識から見て、一應、漠然と、東南洋一帶を含意するものとした。そして、その限り、滿洲も、印度も、包含されると見ることも可能であると思ふが、こゝでは、一應それを制限して、南方では、滿洲、ニュージーランドを域外とし、西方では、印度を同樣域外とすることとした。

のみならず、我々は、以下において地理的、文化的に見たる基本的立場において、さう取扱つたのであるが、現實の政治的情勢に顧みて、政治的、經濟的構成について見る場合には、日滿支以外は、今日すでに、東亞ブロックの一環としての關係を生じてゐる、佛印、蘭印、泰の問題に限定しておいた。すべて、上述の如く、一應の便宜上の立場からである。

東亞ブロックをそのやうに理解するとして、その廣大なる地域において、實際に、東亞ブロック結成の動向は、いかなる實情、動向を示してゐるかについては後述の通りであるが、さうした事態のうちにおいて、我々は、東亞ブロックの內容的な特徵としていかなる點を見出すであらうか。

東亞ブロックの根本的特徵は、すでに述べた如く、何よりも、それが、進歩と道義のための、要するに、世界新秩序の獨特の一環た

る點に存するであらう。しかし、この點については、すでに述べられてゐるから、もつと、その內容に卽して見れば、先づ、政治的には、先にも一言したやうに、東亞ブロックには、本來の意味における獨立國が極めて乏しい、といふことが指摘される。日本、滿洲國を別にすれば、そこには、支那、泰以外に、獨立國はないが、それさへも、その獨立性には問題がある程である。しかも、この地域は、多年、英、米、佛、蘭の植民地的支配下におかれ、政治的、經濟的、文化的に、抑壓されてゐる。この點は、例へば、獨伊ブロック、アメリカ・ブロック等と比較して、いかに著しく異つてゐるかは、いふまでもあるまい。

かうした諸國をブロックに參加せしめ、ブロック全體の向上を圖ることが、人類生活の進步發達、道義の向上に稗益すること大なることは明かであるが、しかし、他方では、多年の隸屬に慣れた諸民族を覺醒せしめ、自らブロック結成の意義を自覺させ、そのために活動しうるように誘導することの困難なることも、また、自明であらう。

この問題は、今日、日滿ないし、日滿支の關係においては問題はないが、蘭印、佛印との間には、現實に見られる。すなはち、佛印特に、蘭印は、その背後勢力に策動、操縱されて、ともすれば東亞ブロックの指導者としての日本の、ブロック結成の努力に、背反するかの如き傾向さへ看取される狀態なのである。

第二に、經濟的に見れば、上述の政治的特徵に相應して、東亞ブロックの諸國は、日本を除けば、すべて著しき後進國である。近代的な工業國といふが如きは、一國もない。したがつて、この間において、近代國家として、有無相通の關係を作らうとすれば、どうしても、これら諸國に、工鑛業の發展を促進することが必要であり、日本としては、それから原料、食糧等もうる他方において、その必要なる資財、資本、技術を供給しなければならない。この意味において、東亞ブロックは、日本も、他の諸國も、今後、劃期的な發展を遂げることによつて、眞に、經濟的にも、確立されるものといふべきである。これは、もちろん、將來における東亞ブロックの輝ける前途を約束するものであるが、それだけに、當面の情勢においては、多大の困難を伴ふものである。まして、これを單に、自己の私的利益のために開發するのでなく、各國家の共存共榮を目指しての新秩序として發展せしめようとすれば、その困難は一層大であらう。

なほ、これに關聯して、東亞ブロックを資源的に見れば、後述の如く、ゴム、錫、キニーネ等、他のブロックにない、特殊の重要なる資源を包藏する點に特徵がある。これは、東亞ブロックの大なる强味であると共に、東亞ブロックが、他のブロックに貢獻しうる長所でもある。今日では、それはその支配者たる英米資本のために、徒らに、英米列强の私的利益に濫用されてをり、東亞のために、活用されてゐない。東亞ブロックは、決して、資源の獨占をはかるべきではないが、しかし、自らの健全なる發展が、進步と道義に適ふ所以であり、それによつてのみ、世界に貢獻すべき立場にあることを自覺しなければならない。そして、日滿支の關係はもちろん、日

佛印、日蘭印等の通商交涉は、さうした根本的觀念に立つて見る時、單に、日本が必要なる物資を獲得するといふ如きこと以上に、遠大なる意義を有してゐるのである。

第三に、文化的に見ても、現在、東亞ブロックは、一般的には、明かに後進的であり、立ちおくれてゐる。しかし、それは、全然未開といふのではなく、日本を別としても、支那、印度の文化等、古き傳統を有するものがあり、東亞民族の本來的な非文化性を示すものではない。

東洋文化本來の傳統の上に、泰西の近代文化をとり入れて、今後世界獨自の東亞文化を建設することは、我々の文化的課題でなければならない。日滿支の文化的協力はもちろんであるが、わが通信、新聞の東亞における活躍は、大なる意味を持つてゐる。また宗教において、西歐のキリスト敎とは異るにせよ、佛敎が廣範圍に有してゐる支配力は、東亞の特徵的事實として、注目さるべきであらう。

以上を通覽して、東亞ブロックが、未だ建設の端緖についたばかりであることは、銘記さるべきである。日滿更に、日滿支の關係においては、正式の確乎たる基本が築かれたとはいへ、他地方との關係は、未だ結合の初期の段階にあり、全體として、統一的に、東亞ブロックとしての體系は、成立するにいたらないのである。後述の如く、自然的、文化的に見れば、當然、東亞ブロックに構成さるべき地域が、政治的、經濟的に見たる場合、なほ、さう結合するにいたつてゐないことは、何よりも、よく、これを證據だてゝゐる。のみならず、政治的、經濟的にブロック的關聯を有する地方間においても、その關係は、必ずしも、ブロックとして、當然要請される程度、性質にまで進まないものがある。極言すれば、東亞ブロックの樞軸たる日滿、日滿支の關係においてさへ、一應、正式に基本的關係が確立された狀態であつて、これを現實に具體化し、進んで、一體的なブロック關係を樹立するまでには、いたつてゐないとさへ、見られる。まして、ブロックの完成と見られる文化的な融合一體化の如きは、今後多年の發展にまたなければならないであらう。

このことは、上にも述べた如く、東亞ブロックの比類のない、今後の發展を約束するものである。特に、それが、新興的であるだけに、將來の遲しき生長は、當然に期待さるべきであり、この意味において、東亞ブロックは、獨自的存在である。

しかし、同時に、他方では、このことは、ブロックの建設が、容易ならざる、絕大なる努力を必要とすることを意味してゐる。しかも、それは、專らわが大日本帝國の双肩にかかつてゐるとすれば、吾人は、確乎たる見透しの下に、堅牢なる覺悟、强靱なる意志、徹底的なる行爲をもつて、邁進しなければならない。

第二章　自然的構成

東亞ブロックの政治的、經濟的、文化的問題に入る前に、先づ、その基礎的條件である自然的構成として、その位置、面積、人口等について簡單に述べることにしよう。

東亞ブロックとして、いかなる地域を指稱するかについては、明確なる限界を附することは困難であるが、一應自然的に見れば、東南洋一帶を概稱することは、必ずしも不當ではあるまい。この自然的な條件と、他方、現實の政治的、經濟的な條件とは、現在においては、一致しないこと前にも述べた通りであつて、そこに、東亞ブロックの建設は、なほ、多く、今後の發展に俟たねばならないのであるが、ここでは、さうした點を考慮して、自然的構成としても、東南洋一帶と見なさず、それに若干の制限を附することにする。すなはち、一應、東亞ブロックを形成する地域は日本を中心とし滿洲國、支那、佛印、泰、ビルマ、マレー聯邦、海峽植民地、蘭印、フイリッピンとして見よう。この地域は、北は樺太より南は蘭印に跨り、西北は滿洲をもつてシベリアならびにソ聯に接し、西南は、マレーあるひはビルマをもつて印度と境し、東は太平洋を隔てて北米、南米と相對し、蘭印の彼方には濠洲およびニュー・ジーランドがある。これを精密にいへば、その位置は、東經一五六度三〇分より同七三度、北緯七度より南緯一〇度と、實に赤道の兩側にわたつてゐる。

總人口は六八七、二〇四千人ないし六九七、二〇四千人といはれ、總面積は一一、三〇六、一一五平方キロである。

これを先づ、盟主日本から見れば、日本は、太平洋の北西隅に位する日本列島とアジア大陸の一部をなす朝鮮半島よりなり、日本列島は千島、樺太、北海道、本州、四國、九州、琉球、臺灣の諸島に分れ、南支那海中の新南群島は臺灣高雄市の管轄下に屬してゐる。

この日本の位置は東經一五六度三〇分より同一一一度三〇分、北緯七度から同五〇度五五分を占めてゐる。

日本は、かくてオホーツク海および日本海を隔ててソ聯と對し、朝鮮において滿洲國に接し、東支那海を隔てて支那に、新南群島においては南支那海を隔てて佛印、マレー聯邦、ボルネオ、フイリッピンに相對し、太平洋の彼方に米國を控へてゐるわけで、その面積は約六七五千平方キロ、人口は約九〇百萬人である。

次に、日滿一體關係にある滿洲國はアジア大陸の東北に位し、西部は支那の察哈爾省および外蒙古に連り、北部および東部は黑龍江並に烏蘇里江を隔ててシベリアに對し、南部は黃海および物海灣に臨み、西南は萬里の長城を境として中華民國河北省に接してゐる。東經一一五度二〇分より同一三五度二〇分、北緯三八度四〇分より同五三度五〇分に亘つてをり、面積は一、三〇三、一四三平方キロ、人口は三六、六七二、七〇五人と推定されてゐる。

日滿支と、東亞ブロックの一方の中心をなす支那は、アジア大陸の東部より中部にわたり、北から西にかけてはソ聯領のシベリアおよび中央アジアに接し、南は印度および印度支那に境し、東は黃海、

東支那海、南支那海に面し、北東は滿洲國に接してゐる。東經一二二度五一分より同七三度、北緯一八度より同五三度四〇分におよぶ。面積については正確な調査はないが、約六八〇萬平方キロ、また人口も正確なる數字はないが、大體、四二〇百萬人より四三〇百萬人とみられてゐる。

佛印は印度支那半島の東半を南北に長く占め、北回歸線から北緯八度、東經一〇〇度から同一〇九度の間を占め、南は雲南、廣西、廣東の三省、西は泰、ビルマに境し、東より南は南支那海に面してゐる。面積は約四七七、七〇〇平方キロ、人口は二三、八五〇千人である。

泰は印度支那の中央部に位し、東は佛印に對してメコン河を境とし、西はビルマに接し、マレー半島ではマレー聯邦と接してゐる。東經一〇五度一七分より同九七度二六分を占めてをり、面積は三四〇、三五二平方キロで、人口は約一四四〇萬人である。

ビルマは東南は泰および佛印に、東北は雲南および西康省に接し、西南および南はベンガル灣ならびにマルタバンになつてゐる。東經一〇一度より同九五度、北緯一〇度より同二八度に跨り、面積は六七、六〇〇平方キロ、人口は一四百萬人とみられる。

海峽植民地はシンガポール、ピナン、マラッカ、ラブアン島その他の小島よりなり、面積は二六、〇三平方キロ、人口は一、一一四千人。

マレー聯邦は英領の中央に位し、北は泰、北西はケダーに境し、マラッカ海峽に臨んでゐる。面積は四六、八一八平方キロ、人口は一、九六〇千人。

英領マレーには五土侯國があるが、總面積は三八、四五四平方キロ、總人口は二一九萬人に過ぎない。

蘭領東印度は北はアジア大陸、南は濠洲大陸に接し、このうちボルネオの北の一部が英國に、チモール島がポルトガルに屬する外はすべてオランダ領で、マレー半島の西南から斜に細長く濠洲の北東に、赤道の南北にかけて散在してゐる。大スンダ列島、ボルネオ、セレベス、モルッカ群島よりなり、東經九五度より同一三五度、北緯五度から南緯一〇度にわたつてゐる。面積は一、三三四、九五四平方キロ、人口は約六〇、九五〇千人である。

フイリッピンは元來マレー群島の一部として、北はバシー海峽を隔てて臺灣、西は南支那海を挾んで南支那ならびに佛印、南西はスールー海を隔てて英領ボルネオに對し、その間南北一、五〇〇哩、東西五九〇哩にわたつて散布してゐる。東經一二六度三四分から同一一六度四〇分、北緯二一度一〇分から同四度四〇分におよぶ。フイリッピン群島は七〇八三の島よりなり、その全面積は二九六、二九四平方キロ、人口は一三、二六七千人といはれる。

第三章　政治的構成

（一）　ブロック成立の過程

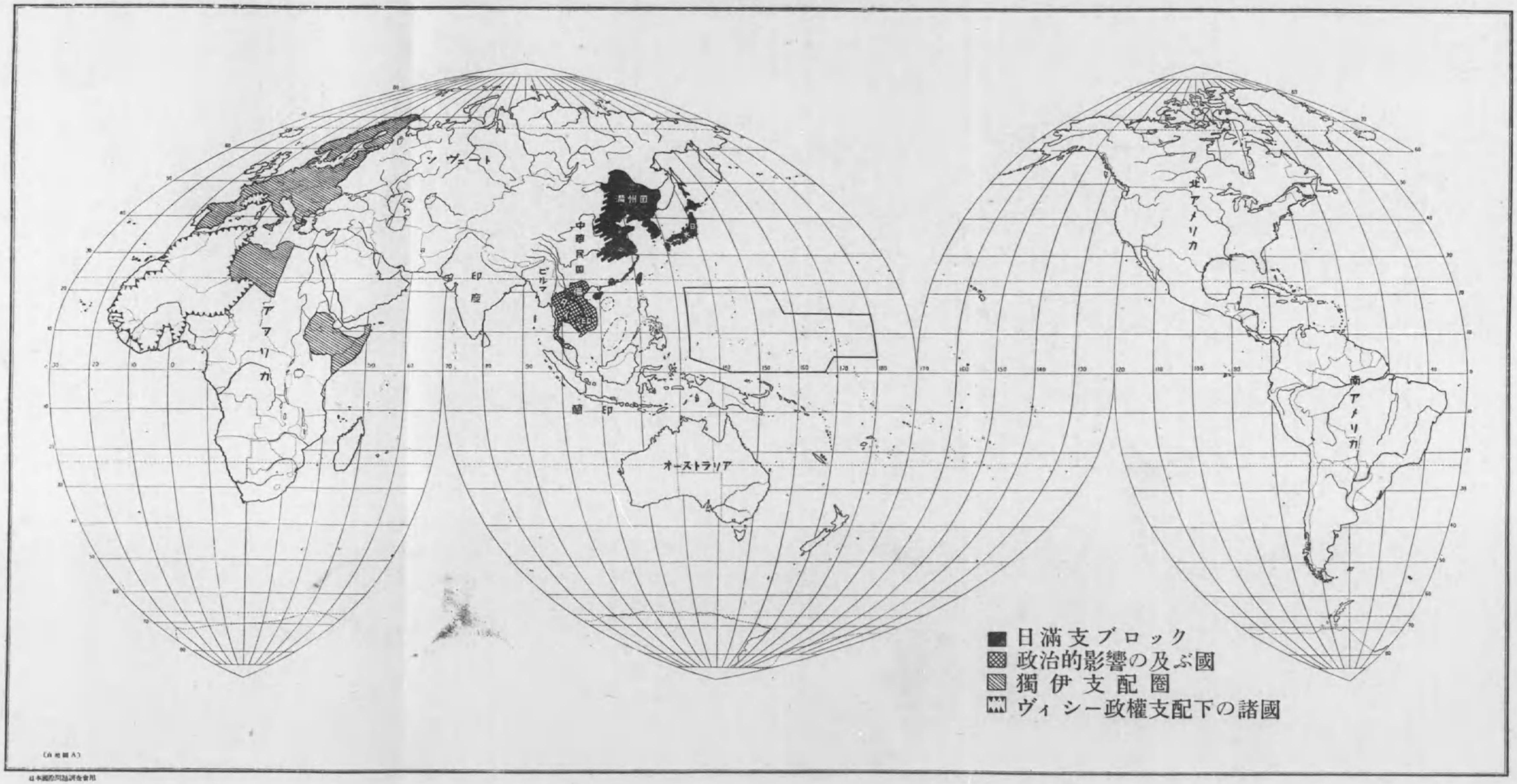
東亞ブロックは、概觀において述べた如く、具體的には、今日、成立の過程にあるが、その端緒は、一應、滿洲事變前に遡つて、考へらるべきである。すなはち、當時は一九二九年に勃發した世界恐慌の時期に當り、各國はこれが對策として、關稅障壁をはじめ種々なる防衛的措置をとつたため貿易は著しく阻害され、資本の輸出入も杜絶し、世界經濟は一路ブロック化の方向を辿つた。わが國もこの世界恐慌の波に洗はれ、その結果として、生產の減退、貿易の不振、失業の增加等恐慌的狀態を招き、特に農業方面は大きな打擊を蒙つた。ために、都會においては勞働爭議、農村においては小作爭議が頻發し、社會不安も增大した。滿洲事變はこの國內情勢を背景として、昭和六年勃發し、これが具體的には、わが東亞ブロック結成の口火となつたのである。すなはち、事變を契機として、世界經濟のブロック化に對抗するため日滿經濟ブロックが叫ばれ、特に滿洲資源の開發による日滿經濟ブロックは昭和八年の滿洲經濟建設要綱によつて、正式にその第一歩を踏み出し、（一）、日滿經濟共同委員會の設置、（二）、幣制の統一、（三）、日滿通貨統制、（四）、產業統制法の實施、等によつて基礎工作を一應完了し、その結果、開發を擔當する各種の特殊會社が相次いで設立されたのである。

しかるに、國際情勢は、その後ますます緊迫し、日本に對する歐米諸國の壓迫が加重されたため、これに對應して、日滿の國防經濟體制を强化するには、在來の如き滿洲開發の速度では、不十分となり、滿洲開發の根本的建直しを行ふと同時に、更に進んで、地理的、經濟的、歷史的に、日滿と特殊の關係にある北支の資源開發にも、重大なる關心が集注されるにいたつた。

かくて、昭和九年頃から北支經濟開發、日支經濟提携、日滿支經濟ブロック結成の聲が强くなり、興中公司の設立、邦人紡績、電力事業の北支進出、冀東特殊貿易の發展等が見られて、わが經濟力は著しく大陸に進出した。しかも、他方、滿洲國の經濟開發は、昭和十二年からいよいよ五ケ年計畫の實行期に入り、日滿支に亙つて、日本を中心としたブロック的結成の過程は著しく進展せんとする形成を示したが、時あたかも昭和一二年七月、日支事變の勃發を見た。

日支事變の勃發は、日支の間に大規模の戰鬪が行はれてゐる限りにおいて、ブロック結成に障害をなしたことは疑ひないが、より根本的に見れば、東亞ブロックの結成は、これにより、東亞新秩序の建設として、劃期的意義を附與されて、進展せしめられることとなつたのである。すなはち、皇軍の進むに敵なき威武の前に、北支はもちろん、上海、南京、漢口、廣東、海南島と、支那の要衝が次々に、陷落すると共に、新たなる基礎の下に、經濟建設が始められるにいたつたのである。すなはち、わが方では、對支政策のために、興亞院を創設し、その指導の下に、北支開發、中支振興の兩會社を設立、それを中心に大陸開發を進めたのであるが、これに對し、支

東亞共榮圏の構成



(A地圖A)

日本國際問題研究會用

那側も、一三年三月には北支に聯合準備銀行を設置し、聯銀券を圓貨にリンクすることとなり、中支における軍票の流通、華興商業銀行の設立等、通貨の發達と共に、日滿支經濟は圓ブロックとして、緊密なる連繫の下に發展することとなつたのである。

かくして、日滿支はいはゆる圓ブロックとして共通の利害關係に立ち、滿支の資源開發は日本の戰時經濟に重大なる意味を有するのみならず、日滿支は一體となつて劃期的發達を遂げることとなつたが、昭和一三年一二月二二日に發表されたいはゆる近衞聲明は、かうした新たなる事態の理想を東亞新秩序の建設として中外に宣言した。そして、昭和一五年三月三〇日には、この近衞聲明に呼應して、南京に新國民政府が成立し、更に同年一一月三十日に締結された日華基本條約、日滿華共同宣言によつてここに正式に、日滿支のブロックは確立したのである。

この間、昭和一四年秋には歐洲戰爭が勃發し、わが國歷代內閣はこれに對し不介入の方針を堅持して來たが、事變處理遂行上、英米等の現狀維持國家群との摩擦多く、この場合、わが戰時經濟を從來のままの英米依存狀態を放置するにおいては重大なる缺陷を露呈せざるをえないので、わが國としては、ますます東亞ブロックの結成を促進し、アウタルキーの確立を圖らねばならなくなつた。

時あたかも、歐洲において、ドイツは着々成果を收め、昭和一五年春には、オランダ、フランス、ベルギー等を相ついで倒すにいたり、東亞の地域にも、その餘波が及ばんとし、政治的不安が擡頭したので、東亞の指導國をもつて任ずる日本としては、これを座視することを能はず、日本にとつて死活的問題である東亞安定のために、東亞ブロックの範圍を、日滿支から進んで南方諸地域に擴大し、いはゆる大東亞共榮圈の確立を、根本國策としなければならなくなつた。

他方、これを經濟的に見れば、この新たなる南方地域には、周知の如く、石油、ゴム、錫、鐵鑛等、ブロック經濟確立のために不可缺の重要資源を有するので、東亞ブロックの將來の嘱望は、これにより、一段と强固になつて來た。

かくして、昭和一五年八月一日、近衞內閣は重要國策要綱の一として、大東亞共榮圈確立の聲明を發表したのであるが、次いで、昭和一五年九月二七日には日獨伊三國同盟が締結され、英米等現狀維持國家群と對して、大東亞共榮圈の確立をますます急務たらしめるにいたつたのである。

新たなる意味を持つ大東亞共榮圈の確立は、單なる日本の希望、ないし政策ではない。すでに、その結成過程が、始まつてゐるのである。すなはち、南方諸地域のうち、特に、蘭印、佛印については歐洲情勢の推移如何によつて、その地位に重大なる影響の生ずる恐れあり、帝國政府は深甚なる注意を拂つてゐたが、獨軍のオランダ侵入の機運が漸次濃厚となつたので、これが蘭印に及ぼす影響を考慮し、昭和一五年四月一五日、有田外相は新聞通信記者團との會見の質問に答へる形式をもつて、蘭印の現狀維持に關する帝國政府の態度を左の如く表明した。すなはち、

「日本は南洋諸地方、なかんづく、蘭印と經濟的に有無相通の緊

密なる關係にあり、他方これら諸地方と他の東亞諸國との間の經濟關係もまた相當密接なるものがある。

要するに日本およびこれら諸國ならびに諸地方は何れも相寄り相援けて、共に東亞の繁榮に寄與しつつある次第であるが、もし歐洲の戰禍がオランダにまで波及し、諸君の言ふが如く蘭印がその影響を受けることとなれば、有無相通、共存共榮の維持增進に支障を來すのみならず、東亞の平和および安定の上よりも好ましからざる事態となるであらう。如上の見地より帝國政府は歐洲戰爭の激化に伴ひ、蘭印の現狀に何らかの變更を來すが如き事態の發生については深甚の關心を有するものである。」

といふのであつた。

これより一ヶ月足らずの五月一〇日、獨軍は遂に白蘭兩國に進入し、歐洲戰禍の東洋波及の危險が增大したので、有田外相は閣議決定に基き、同一一日、日英・獨・佛・蘭等の交戰國の在京使臣を招き、四月一五日の有田外相談話の趣旨と同じく、「蘭印が歐洲戰禍の波及を蒙るときは帝國との間の共存共榮の維持增進に支障を來すのみならず、東亞の平和および安定の上よりも好ましからざることなるをもつて、帝國としては蘭印の現狀に何らかの變更を來すが如き事態の發生については深甚の關心を有するものである」、との帝國政府の態度および決意を表明せる重大なる申し入れを行ふと共に、當時の中立國たるイタリー、米國にも各交戰國に右申し入れを行つた旨通知したのである。これに對し、駐日オランダ公使バプストー氏は同月一五日、「オランダ本國政府の訓命に基き、オランダ政府は蘭領東印度に關し、英米佛三國が何ら干涉の意圖を有せざるものと信ずる」旨を回答し來つた。

その後、帝國政府は蘭印政廳側と在京バプスト公使を通じて通商交涉を行ふこととなり、蘭印特派使節として小林商相を任命し小林商相は各方面と協議の末、九月二日門司出發の日昌丸で蘭印に向ひ同一二日バダヴィア到着、一三日より蘭印側のチャルダ蘭印總督、ファン・モーク經濟長官と交涉を開始した。ところが會談の途中、九月二七日、日獨伊三國條約が締結された結果、蘭印側の對日空氣は俄然惡化し、交涉は一時行き惱みの形となつたが、日蘭印共同聲明を行つて再び交涉を續けた。わが方の特派使節は、その後更迭して元外相貴族院議員芳澤謙吉氏に決定し、芳澤代表は向井忠晴氏の後任となつた三井物產常務伊藤與三郎氏等と共に一二月一二日神戸出帆の日昌丸で赴任し、目下バタヴィアに於て蘭印側と折衝を續けつつある。

一方日佛印交涉については、昭和一五年八月末の松岡、アンリー會談の結果、原則的一致を見、次いで同年九月二三日、皇軍が佛印に平和的進駐をなした後、松宮大使以下經濟使節團が佛印に赴きドクター佛印總督以下佛印代表と交涉を開始したが、一一月末に至り日佛印經濟交涉を東京に移すことに決定、一二月中旬、佛本國よりの代表ならびに佛印よりの代表が東京に到着、一二月三一日第一回の顏合せをなし、昭和一六年初頭より交涉を繼續し目下具體的問題に入つてゐる。

更に、昭和一五年一二月には、泰、佛印の間に、衝突事件が起つ

たので、帝國政府は、東亞共榮圈の指導者として、これが調停に乘出すこととなり、一月末の停戰協定に調印を見、更に二月に入り、東京において、講和協定について居中斡旋した結果、佛印側にかなりの難色があつたが、帝國の威力により、妥結され、帝國の大東亞共榮圈結成の傾向は、ますます、强力となりつつある。

たゞ、この結成の過程は、決して、平坦ではありえない。その過程が進めば進むほど、多かれ少かれ、經濟的、政治的に、從來、この地方に支配的地位を占めてゐた英、蘭、米等の立場に對立せざるをえず、これらの諸國との摩擦が生ずるので、その結果、果して如何なる事態が生ずるか、そこに、大なる問題を藏してゐる。

(二) 政治的諸關係

a 日滿關係

東亞ブロックは、上述の如く、東亞新秩序として、更に新らしくは、大東亞共榮圈として、目下結成の過程にある。したがつて、その間における諸國の政治的關係も、未だ、決して、確立されてゐるといふことはできないが、その大綱的な骨組ともいふべき基本的な關係は、すでに、構築されてゐる。

その第一は、日滿の關係である。『一德一心』をもつて現はされる日滿兩國の關係はこれを歷史的に見れば千餘年前に溯るが、最近三十年にわたる滿洲開發に對する日本の努力は、滿洲建國によつて漸く結實し、三千萬民衆は始めて近代國家の一員としての文化を享受するに至つたのである。すなはち、日本は明治二七、八年の戰役によつて一度、遼東半島を領有することとなつたが、三國干涉の結果、これを支那に返還し、更に明治三七、八年の日露戰役により、當時の露國が滿洲において獲得してゐた關東州の租借權、南滿洲鐵道およびこれに附帶する諸權益の讓渡を受け、次いで大正四年の日支條約によつて、南滿洲地方における土地商租權、居住往來權、營業權、東部內蒙古に於ける合辦事業の權利その他の特殊權益を得、滿洲開發の歩を進めた。

しかるに、張家二代の統治下においては自己本位の搾取政治を强行し、民衆の怨嗟の的となると同時に滿洲開發、樂土建設を目標とせる日本の對滿政策と鋭く對立し、つひに滿洲事變の機緣となつた。すなはち、張政權下においては、日支二一ヶ條約による土地商租權ならびに鐵道敷設權の拒否、間島における朝鮮人の壓迫、全滿に亘る企業妨害、排日教育、滿鐵線包圍等をなし、萬寶山事件（昭和六年）中村大尉殺害事件（昭和六年）等があつて、滿洲事變の勃發となつたのであるが、この結果、張政權は沒落し、支那軍閥は掃蕩された。

ここにおいて從來、眞の樂土建設を高唱して來た文治派ならびに舊軍閥に憚たらざりし者が立つて新國家創建の運動を開始し、各省の獨立に次いで、昭和七年二月一六日より奉天において新國家建設會議を開催、更に、同月二九日奉天省城において全滿建國促進聯合大會を開催、各地代表參集して宣言および決議文を可決し、傅儀氏を元首に推戴すべき議案を滿場一致可決した。ついで、同二九日政

府組織法ならびに人權保障令を決定、新國家の基礎は確立した。よつて、東北行政委員會委員長張景惠は三月一日、(大同元年)滿洲國政府の名をもつて建國宣言を公布し、ここに順天安民、民族協和、共存共榮を理想とする滿洲國が成立した。

これに對し、わが國は、昭和七年、第二次臨時議會(第六二議會)において滿洲國承認決議案を可決し、同年九月一五日新京執政府において鄭國務總理と武藤全權大使との間に、左の如き日滿議定書の調印を行ひ、東洋永遠の平和を確保する日滿兩國相互共同防衛の盟約を堅く締結したのである。

日滿議定書

日本國ハ滿洲國カ其ノ住民ノ意思ニ基キテ成立シ　獨立ノ一國家ヲ成スニ至リタル事實ヲ確認シタルニ因リ　滿洲國ハ中華民國ノ有スル國際約定ハ滿洲國ニ適用シ得ベキ限リ　之ヲ尊重スヘキコトヲ宣言セルニ因リ日本國政府滿洲國政府ハ日滿兩國間ノ善隣ノ關係ヲ永遠ニ鞏固ニシ其ノ領土權ヲ尊重シ東洋ノ平和ヲ確立センカタメ左ノ如ク協定セリ

一、滿洲國ハ將來日滿兩國間ニ別段ノ約定ヲ締結セサル限リ　滿洲國領域內ニ於テ日本國又ハ日本國臣民カ從來ノ日支間ノ條約協定其ノ他ノ取極及公私ノ契約ニ依リ有スル一切ノ權利利益ヲ確認尊重スヘシ

二、日本國及滿洲國ハ締約國ノ一方ノ領土及治安ニ對スル脅威ハ同時ニ締約國ノ他方ノ安寧及存立ニ對スル脅威タルノ事實ヲ確認シ兩國共同シテ國家ノ防衛ニ當ルヘキコトヲ約ス

之カ爲日本國軍ハ滿洲國內ニ駐屯スルモノトス

本議定書ハ署名ノ日ヨリ効力ヲ生スヘシ

日滿議定書は日滿の特殊不可分の關係を法定した最初のものであり、東亞における國際關係の根幹をなすもので、世界の劃期的事實として重大なる意義を持つてゐる。この日滿議定書の精神は、同書に明示されてある通り、日滿兩國の善隣の關係を永遠に鞏固にし、互にその領土權を尊重し、東洋の平和を確保せんがために外ならず、更に、同書に明示されてゐる日滿共同防衛は、國際法上先例はないが、兩國の地理的、歷史的關係より見て蓋し當然の歸結である。なほ、日滿議定書中「日本國及滿洲國は締結國の一方の領土及治安に對する一切の脅威は同時に締約國の他方の安寧及存立に對する脅威たる事實を確認し、兩國共同して國家の防衛に當るべきことを約す」とあるに徵して、日本の牢固たる決意、すなはち國運を賭しても、第三國の侵略的脅威を排除する決意を披瀝したものである。

爾來、日滿の提携はあらゆる部門に滲透し、昭和一〇年、日滿貨通貨統制が確立され、同年七月一五日、日滿經濟共同委員會設置に關する協定が成立し、日滿經濟ブロックはいよいよ堅きを加ふるにいたつた。

また同年には、日本は滿洲國において有してゐた治外法權および滿鐵附屬地行政權が、滿洲國の健全なる發達を阻害し、かつ日滿兩民族の融和を圖り日滿善隣不可分關係を永遠に鞏固ならしむるに支障があるといふので、これを撤廢移讓することに決定した。なほ昭和一二年一二月三一日をもつて、滿洲國領域內における行政警察が撤廢された。

かくして、日滿一體化は着々として確立されつゝあるのである。

b　日支關係

日滿の關係についで、日支ないし日滿支の關係は、東亞ブロックの樞軸をなす基本的なものである。

日支の關係もまた、極めて古き歷史を有すること、周知の通りであるが、こゝでは簡單に日支事變後における更生支那の誕生、それによつて生じた東亞ブロックの基底としての新たなる日支の關係を見るに止めよう。

今次事變發生以來、皇軍の進出に伴ひ、支那各地に治安維持會の發生を見たが、これらは北支における臨時政府、中支における維新政府に吸集され、新中國建設の機運を著しく醸成したが、更に汪精衛を中心とする和平救國運動の抬頭を見るにいたつて一段とこの機運は高まり、幾多の曲折を經て、昭和一五年三月三〇日、新生中國國民政府が樹立された。

汪精衛氏の和平救國運動は、日本と提携して新東亞を建設するを目的とし、これがために共產主義及び抗日運動を排除し、日華提携の更生國民黨政權を樹立せんとするもので、昭和一三年一二月一八日、汪精衛の重慶脫出をもつて始まつた。汪氏はついで同年一二月二二日の近衛首相談話に對し一二月三〇日に和平反共宣言をなし、昭和一四年五月八日には河內より上海に到着し、同地に和平運動の根據地を置いた。續いて同年五月三一日、汪氏は東京を訪問し、平沼首相及び近衛前首相と會見した結果、いよいよ本格的な運動を開始するにいたつた。すなはち同年八月二八日には中國國民黨第六次全國代表大會を上海に招集し、日支關係を根本的に調整し國交を恢復することおよび國民黨の機構を改正して汪氏を黨中央委員會主席とすること等を可決し、三民主義に對する純正なる解釋を行つたのである。

こゝにおいて和平救國運動は和平建國運動に發展し、純正國民黨は從來の以黨治國を拋棄し各黨各派、無黨無派の人士と協力して新中央政府樹立の工作に乘り出した。すなはち同年九月一九日より三日間開催された汪精衛、王克敏、梁鴻志の三巨頭會談、昭和一五年一月二三日の汪、王、梁の三巨頭の青島會談等により、汪氏は中央政府樹立大綱及び政綱等について意見の一致を見たので、三月二〇日より五日間新中央政府樹立の根本を定める中央政治會議を開催し日華關係調整案、中央政府樹立大綱案等の重要案件を可決し、同三月三〇日には南京において國民政府遷都式典を擧行、こゝに東亞新秩序を目指しての新生國民政府が樹立されたのである。

他方では、この中央政府樹立工作と併行して、日支の國交調整交渉が行はれた。それは、昭和一四年八月末の六全大會以後は善隣友好、共同防共、經濟提携の三大原則を基調として發展し、同年一二月三〇日、上海において兩國の當事者間に、國交調整に關する基本觀念について意見の一致を見るにいたつたのである。

ついで昭和一五年三月三〇日新中央政府樹立直後の四月一日、日本政府は阿部信行前首相を特命全權大使として南京に特派し兩國國交の再交渉を行ふことに決定した。同大使は四月二三日南京に着任し七月五日汪首席代理との間に第一回の正式會談を開催し、爾後、正式會談を重ねること一五回、一〇月中旬にいたつて交渉は全面的に妥結した。同條約案は、日本においては一一月二七日の樞密院本

會議において可決され、一一月三〇日南京において阿部大使と汪精衛主席との間に別項の如き、日華兩國間の基本關係に關する條約、同附屬諸取極が正式に調印され、ついで阿部大使、汪首席、滿洲國全權との間に日滿華共同宣言の調印が行はれた。かくて日滿支三國は東亞ブロックの樞軸として、東亞新秩序建設の完遂を目指して亘歩を踏み出したのである。

（一）日本國中華民國間基本關係に關する條約

大日本帝國政府及
中華民國國民政府ハ

兩國相互ニ其ノ本然ノ特質ヲ尊重シ　東亞ニ於テ道義ニ基ク新秩序ヲ建設スルノ共同理想ノ下ニ善隣トシテ緊密ニ相提携シ　以テ東亞ニ於ケル恒久的平和ヲ確立シ　之ヲ核心トシテ世界全般ノ平和ニ貢獻センコトヲ希望シ之カ爲兩國間ノ關係ヲ律スル基本的原則ヲ訂立セント欲シ左ノ通協定セリ

第一條　兩國政府ハ兩國間ニ永久ニ善隣友好ノ關係ヲ維持スル爲相互ニ其ノ主權及領土ヲ尊重シツツ政治、經濟、文化等各般ニ亙リ互助敦睦ノ手段ヲ講スヘシ

兩國政府ハ政治、外交、教育、宣傳、交易等諸般ニ亙リ相互ニ兩國間ノ好誼ヲ破壞スルカ如キ措置及原因ヲ撤廢シ　且將來ニ亙リ之ヲ禁ス

第二條　兩國政府ハ文化ノ融合、創造及發展ニ付緊密ニ協力スヘシ

第三條　兩國政府ハ兩國ノ安寧及福祉ヲ危殆ナラシムル一切ノ共產主義的破壞工作ニ對シ共同シテ防衛ニ當ルコトヲ約ス

兩國政府ハ前項ノ目的ヲ達成スル爲　各其ノ領域ニ於ケル共產分子及組織ヲ芟除スルト共ニ防共ニ關スル情報、宣傳等ニ付緊密ニ協力スヘシ

日本國ハ兩國共同シテ前項ノ目的ヲ達成スル爲所要期間中兩國間ニ別ニ協議決定セラルル所ニ從ヒ所要ノ軍隊ヲ蒙疆及華北ノ一定地域ニ駐屯セシムヘシ

第四條　兩國政府ハ中華民國ニ派遣セラレタル日本國軍隊カ別ニ定ムル所ニ依リ撤去ヲ完了スルニ至ル迄共通ノ治安維持ニ付緊密ニ協力スルコトヲ約ス

共通ノ治安維持ヲ必要トスル間ニ於ケル日本國軍隊ノ駐屯地域其ノ他ニ關シテハ兩國間ニ別ニ協議決定セラルル所ニ據ル

第五條　中華民國政府ハ日本國カ從前ノ慣例ニ基キ又ハ兩國共通ノ利益ヲ擁護スルタメ所要期間中兩國間ニ別ニ協議決定セラルル所ニ從ヒ其ノ艦船部隊ヲ中華民國領域內ニ於ケル特定地域ニ駐留セシメ得ルコトヲ承認スヘシ

第六條　兩國政府ハ長短相補ヒ有無相通スルノ趣旨ニ基キ且平等互惠ノ原則ニ依リ兩國間ノ緊切ナル經濟提携ヲ行フヘシ

中華民國政府ハ華北及蒙疆ニ於ケル特定資源就中國防上必要ナル埋藏資源ニ關シ兩國緊密ニ協力シテ之ヲ開發スルコトヲ約諾ス　中華民國政府ハ其ノ他ノ地域ニ於ケル國防上必要ナル特定資源ノ開發ニ關シ日本國及日本國臣民ニ對シ必要ナル便宜ヲ提供スヘシ

前項ノ資源ノ利用ニ關シテハ中華民國ノ需要ヲ考慮シ　中華民國政府ハ日本國及日本國臣民ニ對シ積極的ニ充分ナル便宜ヲ提供スルモノトス

兩國政府ハ一般通商ヲ振興シ及兩國間ノ物資需給ヲ便宜且合理ナラシムルタメ必要ナル措置ヲ講スヘシ　兩國政府ハ揚子江下流地域ニ於ケル通商交易ノ增進竝ニ日本國ト華北及蒙疆トノ間ニ於ケル物資需給ノ合理化ニ付テハ特ニ緊密ニ協力スヘシ

日本國政府ハ中華民國ニ於ケル產業、金融、交通、通信等ノ復興發達ニ付兩國間ノ協議ニ依リ中華民國ニ對シ必要ナル援助乃至協力ヲナスヘシ

第七條　本條約ニ基ク日華新關係ノ發展ニ照應シ日本國政府ハ中華民國ニ於テ日本國ノ有スル治外法權ヲ撤廢シ及其ノ權益ヲ還付スヘク　中華民國政府ハ自國領域ヲ日本國臣民ノ居住營業ノ爲開放スヘシ

第八條　兩國政府ハ本條約ノ目的ヲ達成スルタメ必要ナル具體的事項ニ關シ更ニ約定ヲ締結スルモノトス

第九條　本條約ハ署名ノ日ヨリ實施セラルヘシ

（二）附屬議定書

本日日本國中華民國基本關係ニ關スル條約ニ署名スルニ當リ兩國全權委員ハ左ノ通協定セリ

第一條　中華民國政府ハ日本國カ中華民國領域內ニ於テ現ニ遂行シツツアル戰爭行爲ヲ繼續スル期間中右戰爭行爲遂行ニ伴フ特殊事態ノ存在スルコト及日本國カ右戰爭行爲ノ目的達成上必要ナル措置ヲ執ルコトヲ諒解シ之ニ應シ必要ナル措置ヲ講スルモノトス

前項ノ特殊事態ハ戰爭行爲繼續中ト雖戰爭行爲ノ目的達成上支障ナキ限リ情勢ノ推移ニ應シ條約及附屬文書ノ趣旨ニ準據シテ調整セラルヘキモノトス

第二條　從前　中華民國臨時政府、中華民國維新政府等ノ辦シタル事項ハ中華民國政府ニ依リ繼承セラレ差當リ現狀ヲ維持セラレタルモノナルニ依リ右事項ノ中調整ヲ要スルモノニシテ未タ調整セラレサルモノハ事態之ヲ許スニ伴ヒ兩國間ノ協議ニ依リ條約及附屬文書ノ趣旨ニ準據シテ速ニ調整セラルヘキモノトス

第三條　兩國間ノ全般的平和克服シ戰爭狀態終了シタルトキハ日本國軍隊ハ本日署名セラレタル日本國中華民國間基本關係ニ關スル條約及兩國間ノ現行約定ニ基キ駐屯スルモノヲ除キ撤去ヲ開始シ治安確立ト共ニ二年以內ニ之ヲ完了スヘク中華民國政府ハ本期間ニ於テ治安ノ確立ヲ保障スルモノトス

第四條　中華民國政府ハ事變發生以來中華民國ニ於テ事變ニ因リ日本國臣民ノ蒙リタル權利利益ノ損害ヲ補償スヘシ

日本國政府ハ事變ノ爲生シタル中華民國難民ノ救濟ニ付中華民國政府ニ協力スヘシ

第五條　本議定書ハ條約ト同時ニ實施セラルヘシ

（一）附屬議定書ニ關スル日華兩國全權委員間了解事項

本日日本國中華民國間基本關係ニ關スル條約ニ署名スルニ當リ右條約附屬議定書第一條及第二條ノ規定ニ關聯シ兩國全權委員間ニ左ノ了解成立セリ

第一　中華民國ニ於ケル各種徵稅機關ニシテ目下軍事上ノ必要ニ依リ　特異ナル狀態ニ在ルモノニツイテハ中華民國ノ財政獨立自主ノ趣旨ニ基キ速ニ之カ調整ヲ計ルモノトス

第二　目下日本國軍ニ於テ管理中ノ公營、私營ノ工場、鑛山及商店ハ敵性ヲ有スルモノ及軍事上ノ必要等已ムヲ得サル特殊ノ事情ニ在ルモノヲ除キ合理的方法ニ依リ速ニ之ヲ中華民國ニ移管スルタメ必要ナル措置ヲ講スルモノトス

第三　日華合辦事業ニシテ固有資產ノ評價、出資比率其ノ他ニ付修正ヲ要スルモノアルニ於テハ兩國間ニ別ニ協議決定セラルル所ニ從ヒ之カ是正ノ措置ヲ講スルモノトス

第四　中華民國政府ハ對外貿易ニ關シ統制ヲ必要トスル場合ハ自主的ニ之ヲ行フモノトス

但シ條約第六條ニ掲ケラレタル日華經濟提携ノ原則ト抵觸スルコトヲ得ス　又事變繼續中ニ於テハ右統制ニ付日本國側ト協議スヘキモノトス

第五　中華民國ニ於ケル交通、通信ニ關スル事項ニシテ調整ヲ要スルモノニ付テハ兩國間ニ別ニ協議決定セラルル所ニ從ヒ　事態之ヲ許ス限リ　速ニ之カ調整ヲ計ルモノトス

（二）日滿華共同宣言

大日本帝國政府及
滿洲帝國政府及
中華民國國民政府ハ

三國相互ニ其ノ本然ノ特質ヲ尊重シ東亞ニ於テ道義ニ基ク新秩序ヲ建設スルノ理想ノ下ニ善隣トシテ緊密ニ相提携シ以テ東亞ニ於ケル恒久的平和ノ樞軸ヲ形成シ之ヲ核心トシテ世界全般ノ平和ニ貢獻センコトヲ希望シ左ノ通宣言ス

一、日本國、滿洲國及中華民國ハ相互ニ其ノ主權及領土ヲ尊重ス

二、日本國、滿洲國及中華民國ハ互惠ヲ基調トスル三國間ノ一般提携　就中善隣友好、共同防共、經濟提携ノ實ヲ擧クヘク之カ爲各般ニ亙リ必要ナル一切ノ手段ヲ講ス

三、日本國、滿洲國及中華民國ハ本宣言ノ趣旨ニ基キ速ニ約定ヲ締結ス

以上のうち、基本條約は日支兩國間の基本關係を規定したものであり、同附屬議定書ならびに日華兩國全權間の了解事項は、支那事變處理遂行中の過渡的期間における便法を定めたものである。

日華兩國基本條約締結により、日本政府は、南京政府を中華民國における唯一の正統政府として承認し、兩國政府間の關係は正常に復し、國民政府の基礎も全面和平の進展により、ますます强化されることとなつた。なほ、日滿華共同宣言によつて、滿洲國と國民政府は正式に相互に承認したが、これらの約定によつて、日滿支三國の恒久的平和を核心として、東亞ブロックを大東亞共榮圏の確立まで發展せしめ、世界人類の進歩向上に資せんとする礎石が築かれた。

日華基本條約の基礎的觀念は、根本的には、昭和一三年一二月末のいはゆる近衞聲明の八紘一宇の精神であり、更に、善隣友好、共同防共、經濟提携の三原則である。すなはち、これにより日滿支三國は東亞に於いてすでに道義に基く新秩序建設に巨歩を踏み出し、その具體方策を着々進めつゝあるのである。

c 南方關係

東亞ブロックは、日滿支の關係を基底としてはじめて成立するが、ブロック自體は、いふまでもなく、より廣汎なる範圍、南方諸地域を含んでゐる。かうした南方地方との關係については、すでに、ブロック結成の過程においてふれた通りで、佛印との間には、東京において、通商交渉が進められ、蘭印との間にも、バタヴィヤにおいて通商交渉が行はれてゐる。すなはち、これらの地方との關係は、なほ、一般的には、經濟關係の緊密化の域に止まつてゐる。が、かうした事態が進めば、政治的關係においても、一段と緊密になるべきことは、疑ひない。特に、東亞として地理的に近接してゐる以上、今日の國際情勢の緊迫は、否應なしに、この傾向を押し進めるであらう。

更に大東亞における獨立國泰國との間には、昭和一四年九月末、日泰友好和親條約締結について交渉が進められて來たが、昭和一五年六月にいたり、兩國の諒解が成立し、同月一二日、東京においてわが有田外相とセナ駐日泰國公使との間に調印が行はれた。

日泰友好和親條約

一、締約國相互の領土並重畳に平和及び友好關係の確認

二、兩國共通の利害問題に關する情報交換および協議

三、締結國の一方が第三國より攻擊せらるる場合における該第三國不援助義務の規定

等で五ヶ年の有效期間を有し、昭和一五年一二月御批准を了した。

元來、日泰兩國は共に東亞に國をなす東洋民族の國家として、極めて友好親善の關係にあることは周知の事實であるが、殊に滿洲事變の當時、泰國が日本に示した好意は絶大であつた。他方、わが國は泰國の最近における民族意識の興隆、國民運動の勃興には大なる支持を與へ、その國際的不平等地位を脱却するための努力にも衷心協力して、すでに昭和一二年には泰國と完全なる平等の立場において、通商航海條約を締結してゐる。

日泰友好和親條約締結の經緯は、當初、泰國側は不可侵條約締結

を希望したが、日本としては從來の兩國の親善關係に鑑み、必ずしも適當でないので、むしろ、相互協力を內容とする友好和親條約を締結するにいたつたのである。

泰國は他方、英佛兩國とも昭和一五年六月一二日バンコックにおいて不可侵條約を締結したが、佛印に對する泰國の失地回復要求は佛國の容るゝところとならず、つひに實力行使に出でて、昭和一五年一一月佛泰不可侵條約は批准されずして、泰側から破棄されるにいたつた。

この泰、佛印との衝突については、帝國政府が調停に立つたことは、上述せる通りであるが、この結果は、帝國とこれらの地方との關係を緊密ならしめ、東亞ブロックの結成を、一段と促進するであらう。

(三) 民族的諸關係

民族的關係について見るには、先づ、民族とは、何かといふことが當然に問題にならざるをえないが、こゝでは、民族についてのいはば學術的論議を止めて、極めて、平板に、東亞の諸民族が、東亞民族として、成立する所以を述べるに止めよう。

東亞の諸民族はそれぞれ一の民族をなすと共に、それが相合して廣義における一民族、すなはち東亞民族を作つてゐる。これは單なる思想の假稱ではなくて、現前の事實である。先づ、それは生命共同社會とも稱すべきものであり、身體的、生理的に、すなはち、人種的に相近似してゐる。その間に種々なる分派はあるが、これを白人に比較すれば、全く同一の種に屬するものとして差支へがない。この意味において、淡いといつても、それは、血によつて結ばれてゐるのであるが、その上に、各民族が、國を建てて幾千年を經てゐるにせよ、その間、近隣の地域に住み、共通の地緣によつて、共同的な社會としての結束をいよいよ親密ならしめてゐる。もちろん、言語は同一ではない。けれどもすくなくとも、日滿支はその思想の內容、風俗、信仰、習慣等を通じて相似てゐるのは事實である。南方地方との間にもかうした親近性はある。文化の共通は、自ら一種の共同的な社會を作り上げる有力な素因である。

しかしながら、東亞民族は、單なる事實として認められるだけではなく、同時に將來において發展し、完成されるものである。

今日の世界情勢は、東亞の民族に對し、この自然的な超民族的結合を各民族の自覺に上せ、それを强化し發展せしめ、もつて、東亞民族の結合が現實に支配的となり、東亞の政治と經濟と文化がすべてこれを樞軸として動き、これを目標として進むことを强ひつゝある。東亞が幾百年間の白人の壓迫の對象であつたことは今更いふまでもない。この意味の被壓迫者の解放は、人類の大義であり、かかる人類平等の原則を實現することは東亞民族に課せられた一の歷史的義務であり、運命的な責任である。しかも、緊迫せる國際情勢下にあつては、充分に自己の存立を主張するには、ある程度の力を有することは絶對必要である。

したがつて、東亞の各民族は區々に孤立してゐては、現狀からの解放、地位の向上を果し得ない。いはんや、一の民族が他民族を排

傷し、共同の壓迫者とも見られるものと結ぶが如きは全くその民族の歴史的使命を無視するものといふべきである。

四百年間の雌伏から立ち上り、人類の種々なる部分が壓迫せらるることなき平等の地盤を作るためには、何よりも先づ東亞の諸民族が結束して自己を防衛する他はない。東亞諸民族の共同防衛は各民族の崇高なる義務である。それによつてのみ、超民族的團結が、自覺され、實現される。かうした、いはば東亞民族の組織化の使命は、日本民族にかゝつてゐる。日本は西歐の壓迫に對して、出來るなら、單獨の力をもつてその民族的生命を衛りつゞけようとした。しかしその人口をもつて、その資源をもつて、その富力をもつてこれを成し遂げることは必ずしも容易でない。

のみならず、將來の協力の相手である近隣の諸民族が日本に對する壓迫者と手を連ねようとする、したがつて、日本は自衛と正當なる協力とのために手を近隣に伸ばさざるを得ない。もし拒絶せらるるならばこれを强ひざるを得ない。かくして、自衛のための活動は、東亞に新なる組織を生むべき情勢を招來したのである。

有色人のうち自ら起つて白人に抗し得るものは抗しなければならぬ。同様に東亞民族のうち自ら自己を主張し得るものは徹底的に自己を主張すべきである。したがつて他の東亞諸民族が完全に日本民族と一心同體的なる協力をなす保障を得るまでは、日本民族は獨力をもつて資本主義先進國に對して自己を主張することが他の諸民族を救ふ所以なのである。

すでに東亞新秩序建設は、發展して、大東亞共榮圏確立となつた。日本はこれを目標として、新たなる東亞民族の結束を出來るだけ急速に、自發的ならしむる方向に向けねばならない。

いかなる形式の政治的連絡がつけられようとも、それは東亞民族の自らの共同防衛のための組織でなければならない。しかも、この防衛の責任は、少くとも當分の間は、日本民族にあることは上にも一言した通りであるが、これは、外部に對する防衛、對内防衛としての治安維持において日本民族は歴史的に見ても特別に優秀なる能力を示してゐること、現在東亞民族の内部においても民族的對立が全く解消されず、そこに弱點を有してゐること、にも基因する。けだし、この對立によつて全東亞の對外的自衛能力が減殺せられる危險がある以上、一應自己の勢力をもつて統一を實現しうる民族が前述の機能を負擔するのは自然の成行だからである。

要するに東亞民族の有力構成分子は、簡單には、日本民族（朝鮮民族を含む）、滿洲民族、西藏民族、印度支那民族、蒙古民族、南洋民族等であり、『民族』をば、同血、同文、同域を根本紐帶として結ばれ、共同の自我を有する集團といふ程の意味に理解すれば前述の諸民族が一箇の東亞民族を形作つてゐるといふことは、そのまま文字通りには、言ひえない點があるけれども、性質においてはこれと同じ紐帶が、その强さにおいては異つてもここに作用してゐると、見うることは、前述の如くである。東亞民族は、未だ明確なる集團的自我の要求を作り上げるまでにいたつてゐないが、漸次、東亞における民族が、西洋の民族に對するのとは全く質を異にした、漠然ながらも『我等』の意識によつて結ばれつつある。したがつて、こ

の意識が反省によつて强化せられるに從つて、共同的である自我の要求が成り立ち、これによつて一層結束が强められるであらう。かうした動的な廣い意味において、東亞の民族を總括して、東亞民族といふことは不當ではない。南北兩系統の混和といはれてゐる日本民族と他の東亞諸民族間の身體的、生理的類似は、東亞諸民族間における血緣の如何に爭ひ難いものであるかを表示してゐる。日本民族と滿洲民族、支那民族の肉體的、文化的の類似、支那民族と印度支那民族の肉體的、文化的類似、印度支那民族とマレー人種を包含する南洋民族の肉體的、文化的類似等々、これら諸民族は、濃淡の差こそあれ、類似的ないし親近的な關係を持つてゐることは、歴史、文化、言語、風俗、習慣等の實例に徴して明白である。

たゞ、現在までのところは、この同血、同文、同域の紐帶に基く親和は、地下水の如く東亞民族の底を流れてゐる如き狀態にある。接觸によつてそれは掘り出され、意識に上らなければならない。そして、それから『我等』といふ意識が生れるためには政治的、經濟的な連絡ないし交渉によつて接觸を組織的なものにすることが必要である。この意味において、東亞民族は、今後更に、組織されねばならないのである。

東亞民族のうち、滿洲民族は、現在の日滿兩國の政治的、軍事的、經濟的その他あらゆる部面における相互扶助の關係から、最も緊密であり、續いて漢民族、西藏民族、蒙古民族を含む支那民族の一部は、昨年十一月日華基本條約の締結により新段階に入り、日滿華共同宣言に依つて日滿支は宛ら一體となつたことは前述の通りである。

更に日、蘭印交渉、日、佛印交渉によつてあるひは今回の佛印、泰間の紛爭調停によつて、東亞民族が漸次、日本民族を要とする東亞民族化、すなはち『我等』の意識への一段階に進みつつあることは、當然に、理解されるのであらう。

第四章　經濟的構成

（一）資　源

東亞共榮圏内における資源分布の狀態は、極めて豐富である。殊に他の經濟圏内において絶對に賦存しない熱帶資源、すなはちゴム、錫等を有することは、東亞共榮圏經濟資源の最大の强味である。試みに、共榮圏内において生産される重要金屬鑛産物の世界總生産高中に占める割合を示せば、左表の如くである。

No. 1　東亞共榮圏内における鑛産物生産高の世界總生産高に對する割合

品　目	世界産額中に占める割合
アンチモニー	36.9%
クローム鑛	8.4〃
銅　鑛	4.0〃
鉛　鑛	1.1〃
鉄　鑛	3.8〃
マンガン	2.6〃
錫　鑛	62.3〃
タングステン	57.6〃
亞鉛鑛	1.6〃

備考：一別記諸國の外マレー・フィリッピンの分も含む。次表も同じ。

しかも、このほか鑛物資源として注目すべきものに、マグネサイト（世界總産出高の一三・五%）、黄鐵鑛（同上一七・二%）、石炭（同上六・三%）、石油（同上三・一%）等があり、これらは、共榮圏資源の根幹をなすものと見られる。

次には農産物資源の内容を見るに同樣世界全體の總生産高に對する割合は、下の如くである。

No. 2　東亞共榮圏農産物生産高の世界總生産高に對する割合

品　目	世界産額中に占める割合
ゴム	88.2%
生糸	88.9〃
米	41.9〃
茶	32.6〃
砂糖	21.7〃
コプラ	42.3〃
落花生	12.8〃
椰子油	25.8〃
大豆	80.3〃

すなはち以上の二表の示すところによれば、共榮圏の經濟的、とくに資源的構成は、重工業原料品においても重要ではあるが、農産物原料品の供給圏として大なる重要性を持つものといふことが出來よう。次に共榮圏を結成する諸國、滿洲國、支那、佛領印度、蘭領印度、泰國の資源埋藏量を詳述する。

a　滿洲國

1　鑛業資源

石　炭——滿洲國の石炭資源中無煙炭は本溪湖、復州、煙臺等にあり、亞無煙炭または有煙炭は鶴岡、密山、西安、阜新、地藁、八道壕等に存する。炭礦類は七十餘に達し、埋藏量はもちろん、正確には分らないが、普通二〇、〇〇〇百萬瓲と概算され、鐵鑛とともに滿洲における鑛業資源の大宗をなしてゐる。このうち、比較的大なる炭礦は撫順炭礦（埋藏量九五〇百萬瓲）、阜新炭田（埋藏量四、〇〇〇百萬瓲）、鶴岡炭礦（埋藏量五、〇〇〇百萬瓲）、札賚諾爾炭礦（埋藏量三、九八〇百萬瓲）、恒山炭礦（埋藏量六五五百萬瓲）等である。

鐵　鑛——鐵鑛資源は現在までに發見されたものが總計二、五〇〇百萬瓲に上る。このうち、主なるものは奉天省の鞍山、廟兒溝、弓張嶺で、南滿洲を中心に廣く分布し朝鮮北部にあるものと同樣のいはゆる縞狀鐵鑛と稱する赤鐵鑛および磁鐵鑛であり、前者は品位三五——四〇%位、後者には時に六〇%のものがある。

No. 3　鐵鋼埋藏量

（單位 100 萬瓲）

	富鑛（30—60%）	貧鑛（35%）
鞍　山	1.3	457
廟兒溝	3.0	230
弓張嶺	3.0	380
その他合計	10.0	2,500

その他非鐵金屬——先づ滿洲における採金事業についてみるに、事業方法がいはゆる大法稼行といはれる原始的な生産方法によつてゐるため、大體において不振である。しかし、分布狀態は砂金および山金とも、全滿にわたつてかなりに多く、なかんづく、北滿の砂金は各河流域の廣い地域にわたつて豐富な採金場を有し、その他熱河省、間島省、奉天省には山金の鑛産地帶が相當廣く分布してゐる。滿洲における採金事業を最も獨占的に經營してゐる滿洲産金會社の産金額をみると、康德元年の〇・五四一百萬圓から、同四年には一二百萬圓と二倍半程度に急激に增加してゐる。

次はマグネサイトで推定埋藏量は約五、〇〇〇百萬瓲と稱され、奉天省營口縣から海城縣一帶の東方地區、轉山子、牛心臺、白虎山附近を主要産地とする。品位は極めて高位で、良質のものはマグネシア含有率四五%ないし四七%におよんでゐる。

第三はオイル・シエールである。オイル・シエールは撫順が最もよく知られ、松花江三姓にもあるが、後者は殆んど問題にならない。撫順における埋藏量は約四、四〇〇百萬瓲といはれてゐるが、滿鐵では十六年度末年産百萬瓲を目標に粗油の生産に努力してゐる。

2　農業資源

大　豆——滿洲は大豆の世界最大の生産地で、大豆の輸出は同國の國際收支上受取勘定の大宗をなすものである。最優良品は主に南滿から産する。品種は二百餘種に達するが大別すれば黄豆、青豆、黑豆である。このうち普通は、いはゆる黄豆であり、含油量きはめて豐富で、食用、搾油用に使用されてゐる。生産額は年額四百萬瓲ないし、六百萬瓲に達し、全世界大豆生産額の六〇%を占め、だいたい生産額の二〇%程度が國内消費に向けられ、殘りの八〇%のうち約六〇%を海外に輸出し、殘餘を搾油用に向けてゐる。

高　粱——平均年産額五百萬瓲で、滿洲農家の主要食糧として重要であり、また飼料としてもよく、稈は燃料、アンペラ、建築材料に使用される。

玉　蜀　黍——主として南滿南部に産し、高粱、粟につぐ重要食糧であるほか、好適な飼料であり、康德六年度（昭和一四年）の收穫高二・四七八百萬瓲である。なほ本品は高粱とともに、飼料原料として一年間合計〇・四百萬瓲を日本に供給する。滿洲重要農産物生産額の概數は次表の如くである。

No. 4 主要農産物生産高

（單位百萬瓲）

	大豆	玉蜀黍	高粱	その他合計
大同元年	4.2	3.7	1.6	15
2年	4.6	4.0	1.6	16
康德元年	3.5	3.5	1.6	13
2年	3.8	3.8	1.8	15
3年	4.1	3.9	2.0	16
4年	4.1	4.0	2.1	16
5年	4.3	4.5	2.4	18
6年	4.0	4.2	2.4	18

No. 5 北支石炭埋藏量

（單位 100 萬瓲）

省別	埋藏量	對全支合計割合
河北省	3,071	1.3
山東省	1,639	0.7
山西省	127,127	53.2
察哈爾省	504	0.2
綏遠省	476	0.2
合計	132,817	55.6

b 北支那

1 鑛業資源

石炭——北支の石炭は棉花とともに北支資源の大宗であつて、その埋藏量は二三九、〇五九百萬瓲といふ天文學的數字に達するといはれてゐる。このうち、もつとも大なる炭礦は、山西省大同炭礦で、埋藏量一二七、一二七百萬瓲に上り、全支總埋藏量中五三・二%を占めてゐる。これにつぐものは河北省井陘を中心とする埋藏量三、〇七一百萬瓲で、全支に對する割合は一・三%にあたる。かくて北支五省に賦存する埋藏量の總計は一三二・八一七百萬瓲と見積られ、全支に對する割合は五五・六%に達すると稱されてゐる。しかしかかる尨大な資源は、いまだ實際には生産されるにいたらず、北支全體を通じての生産高は事變前において約七・二百萬瓲見當にしか達してゐない。右の諸炭礦のうち、中興炭は强粘結性でコークスに適し、大同炭は不粘結性ではあるが、發熱量はきはめて高い。

鐵鑛——北支における鐵鑛の埋藏量は約一六八百萬瓲とみられ、これを滿洲の鐵鑛埋藏量一二、二二一百萬瓲と比較すると非常に少い。主なる鐵山は、察哈爾省の龍烟鐵鑛（埋藏量九一百萬瓲、品位五〇ないし六〇%）である。

2 農業資源

棉花——北支農業資源のうち最も注目さるべきは棉花である。一九三四年中における北支五省の棉花生産狀況は左の如くで、作付面積においては河北省の九・一百萬畝を筆頭に、合計二五百萬畝に達し、生産高では合計六・七百萬擔に達してゐる。

No. 6 棉花作付面積及び生産高

（作付面積單位100萬畝 生産高單位100萬擔）

省別	作付面積	生産高
河北省	9.1	2.8
山東省	5.1	1.3
山西省	2.7	0.6
河南省	4.0	1.0
陝西省	3.7	1.0
合計	25.1	6.7

羊毛——北支の羊毛は緬羊毛の輸出が第一位を占め、一九三六年には一三百萬元に上つてゐる。第二位は豚毛で約九百萬元に達し、外國貿易上重要な地位

を占めてゐる。たゞし北支の羊毛類は緬羊毛、山羊毛ともに粗剛であり、多く絨氈用としてのみ使用されてゐる。

その他の資源——以上の鑛業資源、農業資源についで、北支における重要資源は鹽である。この北支の鹽は長蘆鹽、山東鹽であり、事變前において、長蘆鹽は一ケ年〇・四百萬瓲、山東鹽は同じく〇・三百萬瓲前後を生産してゐた。

c 中南支

1 鑛業資源

鐵鑛——中南支にいにおける鐵鑛埋藏量は僅かに六五百萬瓲で、揚子江流域主として湖北、安徽兩省にあるといはれてゐる。うち主要鐵山は大冶で、一九三六年に〇・五百萬瓲を生産した。

アンチモニー——支那、とくに中南支は、世界における最も重要なアンチモニーの産出地であり、世界總産額の七〇%を占めてゐる。主要産地は湖南省新化縣で、最近の年産額は約一萬瓲といはれる。

タングステン——タングステンの世界總産出量一・五萬瓲の八〇%は支那およびビルマより産する。支那はこのうち約四〇%を産出し、主として江西省を中心に尨大な資源を有してゐる。

2 農業資源

茶——茶は古來支那の名産として世界各國に輸出されてゐたが、近來漸減の傾向を示してゐる。一九三六年の生産は〇・三七二百萬擔であつたが、この輸出は約三〇百萬元の外貨獲得となり、蔣介石政府も茶業の保護育成に意を注いでゐた。

煙草——煙草の栽培は、最近一〇ケ年間に急速に增加し、河南省許昌では一九三六年には一、五七五百萬元を生産する程である。

棉花——一九三六年における支那棉花總産額八百萬擔のうち、揚子江下流デルタ地帶二五%、揚子江中流の平野二〇%で、上海を中心とする紡績業の決定的なセンター・ランドとして知られてゐる。

蠶繭——一九三六年における支那生糸の輸出額は四三百萬元であるが、この生糸生産地は中、南支で、前者では江蘇、浙江合計一百萬瓲が代表的である。

d 佛領印度支那

1 鑛業資源

石炭——佛印における地下資源の主たるものはトンキン地方の石炭である。これはいはゆる鴻基炭と稱する無煙炭で、一九三五年における生産高は一・七百萬瓲であつた。

錫——佛印における錫の生産額は一九三六年〇・三萬瓲に達し、石炭につぐ重要鑛物資源になつてゐる。鑛床の主要なるものはトンキン、老撾にあり、何れも佛國人の經營にかかる。なほ、このほかに地下資源として亞鉛、鉛等があるが、いづれも生産額は少ない。鐵鑛も多數存在してゐると傳へられるが、未だ開發されてはゐない。燐鑛石も僅かながら産出する。

2 農業資源

米――佛印の米は、トンキン米および西貢米に大別されるが、品質數量の點からみて、西貢米が代表的である。この米の輸出は佛印貿易上重要であり、一九三三年には四七百萬フランに達してゐる。

ゴム――佛印のゴムは、交趾支那を中心として東埔寨、安南等にわたる南部印度支那地方に產し、一九三八年の生產豫想額によれば約六萬瓲と見積られてゐるが、一九三四年の輸出實績は二萬瓲で、米と共に佛印農業資源の双璧である。

e 蘭領東印度

1 鑛業資源

石油――蘭印の石油は、スマトラ油田、ジャヴァ油田、ボルネオ油田、セレベス油田から生產されてゐる。その採掘狀況は、スマトラ島の油田は南、北部に分れ、南部の中心はパレンバンならびにヂャムビ兩油田で、一九三四年以來、當州の產油量がボルネオを凌駕するにいたつたのは一にこの兩油田の產油增加による。

No. 7 蘭印石油產高

(單位．印100萬瓲)

年別	生產高
1936	6,437
1937	7,260
1938	7,397
1939	7,943

ボルネオ島の油田は、南東部州の東海岸一帶であり、現在サンガ・サンガが中心地として採掘されてゐる。さらに、ジャヴァにおいては、ブロラ地方を中心として採油されてゐるが、スマトラ島ほどではない。以上蘭印全部を通じての全產油量は一九三九年七・九百萬瓲である。

錫――蘭印の錫は埋藏量〇・九百萬瓲のバンカ島を始めビリトン島の〇・一一四百萬瓲を主產地として、その他リンガ群島、スマトラ島のリマ・コタ等、蘭印は錫生產國として世界第三位である。のみならずバンカ島の官營錫鑛等は蘭印財政の有力な財源であり、かつては國庫收入のうち關稅、所得稅について多額に上つてゐた。なほ一九三九年における生產額は〇・〇二八百萬瓲、輸出額は三一萬瓲である。

鐵鑛――蘭印の鐵鑛埋藏量はボルネオ島のセブク、三〇〇百萬瓲を筆頭に、スンゲイドウワ、一七〇百萬瓲、ジャヴァケゾーの三五百萬瓲、セレベス島ラロナ鑛床三七〇百萬瓲、ニューギニアのルーイヴ、五〇百萬瓲等、合計一、〇〇〇百萬瓲に達してゐるが、生產高は極めて僅少である。なほ、その他マンガン、アスファルト、ボーキサイト等も蘭印鑛業資源の重要部分を占めてゐる。

2 農業資源

砂糖――蘭印における甘蔗の栽培はジャヴァのみに限られてゐる。この糖業は蘭印におけるもつとも重要な產業の一つで、蘭印經濟の鍵であると稱されてゐる。しかし、かかる重要な糖業も、歐洲における甜菜糖の發達、あるひは世界不況によつて、近年は生產制限を餘儀なくされ、一九三〇年における生產高二九一百萬瓲から漸減して、一九三五年には五〇百萬瓲になつた。したがつて一九三一

年の輸出額一二六百萬盾が一九三六年には三三百萬ギルダーに慘落し、蘭印經濟に重大なる打擊を與へた。

ゴム――蘭印におけるゴム栽培業は最近に發達したが、その輸出額は近來砂糖の輸出額を遙かに凌駕してゐる。すなはち、一九三一年のゴム輸出額八二百萬ギルダーは一九三五年には七〇百萬ギルダーと、一二百萬ギルダー減少したものの、同年における砂糖輸出額三五百萬ギルダーの倍額に當つてゐるのである。

なほ以上のほかに世界的獨占商品である規那があり、その產額は世界產額の九〇%を占めてゐる。規那の輸出額は一九三五年において七百萬ギルダーに達し、茶は一九三六年に四二百萬ギルダー、煙草も一九三五年には二九百萬ギルダーに上つてゐる。

f 泰國

1 鑛業資源

錫――泰國における地下資源は非常に貧弱で、僅かに錫、ウオルフラム等を產するのみである。このうち、錫は約四萬瓲を產し、二三百萬チカルを輸出してゐる（以上いづれも一九三五――三六年）。ほ、北部ビルマとの國境附近に油田が發見されたと傳へられるが、埋藏量その他詳細は不明である。

2 農業資源

米――泰國は本來農業國であり、特に米產國である。泰の國家財政はほとんど米に依存してをり、輸出貿易の大宗も米である。一九三五――三六年における米の輸出額二五百萬チカルは、同年度における輸出總額一五八百萬チカルの約一六%を占めてゐる。

チーク材――これは最も重要なる泰國の林產で、ビルマとならび質量ともに世界一と稱されてゐる。一九三五――三六年における輸出額は約五百萬チカルで、主として日本、香港、南阿等に輸出されてゐる。

(二) 生產

生產は資源とまつたく密接な關係にある。前項の『資源』において略述した內容は、上に見たるやうに、多かれ少かれ生產とも關聯してゐたのである。ただ資源は潛在的な富であつて、これに資本、技術、勞力を施さなければ、現實の生產とはならない。東亞共榮圈內における實際の生產は、日本を除外すれば、大體において未だ十分開發されず、世界水準よりも頗る低位にある。潛在的な資源の尨大さに比較して、現實の生產が幼弱であることは、本論の冒頭にも述べた如く、いはゞ、東亞共榮圈の本質的な特徵であり、そこに、偉大なる發展の輝かしい將來が約束されてゐる。

a 滿洲國

1 鑛業生產

滿洲國における重工業生產は、昭和一二年の產業開發五ケ年計畫により、石炭、鐵等の重工業原料の增產が努力されてゐる。五ケ年